

各時代の希望

上 卷

エレン・G・ホワイ特著

福 音 社

THE DESIRE OF AGES
by
ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan

まえがき

人種や社会的な地位にかかわりなく、全人類の心の中には、自分自身が現在所有していないある何ものかに対する言うに言われぬあこがれがある。このあこがれは、人間が、悪いものであるとよいものであるとあるいはもつとよいものであらうと、ともかく現在の状態や現在の業績に満足しないように、あわれみ深い神が人間の本質にうえつけられたものである。神は、人類が最上のものを求めてこれを見だし、それが人間の魂の永遠の祝福となるように望んでおられる。

サタンは、陰險な計略と悪知恵によつて人間の心の中にあるこうしたあこがれを悪用してきた。彼は人々に、この願望が快樂、富、安樂、名声、あるいは権力によつて満足させられるのではないかと信じさせる。だがサタンによつてこのようにあざむかれた人々は、（その数はかぞえきれないほどであるが）こうしたもののどれにも飽きを感じて、魂は依然として欠乏をおぼえ、満足させられないままであることに気がつく。

人間のこのあこがれを満足させることがおできになるただひとりのおかたにみちびくことが、神のみこころで

ある。この願望は、そのおかたから出来たもので、それはこの願望の完全な成就であられるおかたのもとへみちびかれる。「神は御旨によつて、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ」、「キリストにこそ満ちみちている」いっさいの神の徳が、かたちをとつて宿つて(いる)(「コロサイ」一、二、九)。また、神がうえつけられた正常に追求されるあらゆる願望について、「あなたがたはキリストのうちにあつてまつとうされる」ことも事実である。

ハガイはキリストを「万国の願うところ」と呼んでいる(ハガイ二、七文語訳)。われわれもまた、キリストが各時代の王であられるから、「すべての時代の願望」と呼んでもよいであらう。

あらゆるあこがれを満ち足らせてくださるおかたとして、イエス・キリストを示すことが本書の目的である。「キリストの一生」については、すぐれた本、豊富な資料、年代記や同時代の歴史、習慣、出来事、ナザレのイエスの多くの教えやその側面的な生活についての、いろいろな点についての綿密な随筆などが書かれている。しかし「半面しか語られていない」ということもまた事実である。

しかしながら、四福音書の調和を示したり、キリストの一生における重要な出来事とすばらしい教訓とを厳密に年代順に書き並べたりすることは本書の目的ではない。本書の目的は、み子のうちにあらわされた神の愛、キリストの一生にみられる天来の美しさで、だれにでもわけ与えられるものを示すことであつて単なる好奇心を満足させたり批評的な質問に答えたりすることではない。ちょうどイエスがご自身の恵み深いご生活の魅力によつて弟子たちをご自分にひきよせられたように、またご自身の存在によつて、彼らの弱さと必要を感じとり

同情をもってこれに触れることによって、彼らの品性を地上のものから天上のものへ、利己的なものから犠牲的なものへ、小心な無知と偏見から、度量の大きい知識とすべての国民すべての人種の魂に対する深い愛へ変えられたように、本書の目的は、読者がイエスに顔と顔、心と心を合わせて向かい、昔の弟子たちと同じように、イエスが「彼によって神に来る人々を、いつも救」って、ご自身の神のみかたちに变えてくださるおかたであることを知るように、恵み深い救い主を示すことにある（ヘブル七ノ二五）。それにしても、イエスの一生を明らかにすることは何と不可能なことであろう。それは本物のにじを画布に示そうとしたり、美しい音楽を活字にしようとするようなものである。

神のことについて広く深く長い経験のある婦人である著者は、本書の中に、イエスのご生涯からの新しい美しさを示している。著者は宝石箱からたくさんの新しい宝石をとり出している。彼女は、この無限の宝庫から読者の前に夢にも思わなかった富をとり出してみせる。読者がもうとつくに深くまで考察したと考えている多くのよく知っている聖句から、新しい、すばらしい光が輝き出ている。要するに、イエス・キリストが、神の満ちみちた徳、限りなくあわれみ深い大祭司、すべての人間の病気をいやしてくださるおかた、やさしく、同情深い友、いつもそばにいて助けてくださる友、ダビデの家の君、ご自分の民のため、平和の君、きたるべき王、永遠の父すべての時代の願望と希望の頂点また結果としてここに示されている。

神の恵みによって、あこがれと願望とをまだ満足させられていない多くの魂のために、主がそのみたまによって本書のことばをいのちのことばとし、彼らが「キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかり」、つい

には永遠にわたってイエスの右にあつて、イエスがすべての中のすべて、「万人にぬきんで」たおかた、「ことごとく麗しい」おかたであることを知るすべての人の熟した実である「満ちあふれる喜び、」「とこしえにもろもろの楽しみ」にあずかるようにとの祈りをもって、この書を世におくるものである(ピリピ三ノ一〇、詩篇一六ノ一一、雅歌五ノ一〇、一六)。

発行者

目次

第一章	「神われらと共にいます」	1
第二章	選民	14
第三章	「時の満ちるに及んで」	21
第四章	あなたがたのために救い主が	29
第五章	献納	37
第六章	わたしたちはその星を見た	48
第七章	子供として	59

第八章	過越のおまいり	70
第九章	戦いの日々	81
第一〇章	荒野の声	95
第十一章	バプテスマ	112
第十二章	試み	120
第十三章	勝利	137
第十四章	「わたしたちはメシヤ（訳せばキリスト）にいま出会った」	147
第十五章	婚宴の席で	165
第十六章	神の宮で	180
第十七章	ニコデモ	197
第十八章	「彼は必ず栄える」	210
第十九章	ヤコブの井戸で	217
第二〇章	「あなたがたはしるしと奇跡を見ないかぎり」	235
第二十一章	ベテスダとサンヒドリン	242

[illegible]

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、
キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするた
めに、わたしたちの心を照して下さったのである。

コリント人への第二の手紙四ノ六

「神われらと共にいます」

「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。神われらと共にいますという意味である」(マタイ一ノ二三)。

「神の栄光を知る知識」は「イエス・キリストの顔」にみられる(コリント第二・四ノ六)。永遠の昔から、主イエス・キリストは天父と一つであられた。キリストは、「神のみかたち」、神の偉大さと尊厳のみかたち、「神の栄光のかがやき」であられた。キリストがこの世にこられたのは、この栄光をあらわすためであった。神の愛の光をあらわすために、すなわち「われらと共にいます」神となるために、キリストは、罪のために暗くなったこの地上においでになった。だから、「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」とイエスについて預言された。イエスは、われわれのうちに住むためにおいでになることによって、人類にも天使にも神を示されるのであった。イエスは神のみことば——きこえるようにされた神の思想であった。キリストは、弟子たちのための祈りの中に、「わたしは彼らにみ名を知らせました。……それは、あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、またわたしも彼らのうちにあるためであります」と言っておられる(ヨハネ一七ノ二六)。そのみ名は、

「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみとまこと」意味している(出エジプト記三四ノ六)。

だがこの啓示は、この地上に生れた子らにだけ与えられたものではなかった。われわれの小さな世界は、宇宙の教科書である。神のすばらしい恵みの目的、すなわちあがないの愛の奥義は、「御使いたちも、うかがい見たいと願っている」テーマであって、それは永遠にわたって彼らの研究となるであろう(ペテロ第一・一ノ一二)。あがなわれた者も、墮落しなかった者も、キリストの十字架に彼らの科学と彼らの歌をみいだすであろう。イエスのみ顔にかがやいている栄光は自己犠牲の愛の栄光であることがわかるであろう。カルバリーの光に照してみても、おのれを捨てる愛の法則が天と地の生命の法則であること、「自分の利益を求め」ない愛はそのみなもとが神の心にあること、柔和で心のへりくだったおかたのうちに、だれも近づぐことのできない光のうちに住んでおられる神のご品性があらわれていることなどがわかるであろう(コリント第一・一三ノ五)。

この世の初めに、神はすべての創造のみわざのうちにご自分をあらわされた。天をのべ、地の基をおかれたのはキリストであつた。もろもろの世界を空間にかけ、野の花をよそおわれたのはキリストのみ手であつた。神は「そのみちからによって、もろもろの山を堅く立たせられる。」「海は主のもの、主はこれを作られた」(詩篇六五ノ六、九五ノ五)。地を美しさでみだし、空中を歌でみだされたのはキリストであつた。地と空中と空のすべてのものの上に、キリストは天父の愛のことばをお書きになった。

いまは罪のために神の完全なみわざが傷つけられているが、それでも神の筆跡は残っている。いまでもすべての被造物は、神の完全さについて栄光を告げている。人間の利己心よりほかには、自分だけのために生きている

ものは何もない。空中を飛ぶ鳥も、地上を動きまわる動物も、すべて何かほかの生命のために奉仕している。どんな森の木の葉もどんな小さな草の葉も、それぞれ奉仕している。どの木もどの植木もどの葉も、人間や動物が生存するのになくはない生命の要素を出している。そしてこんどは人間と動物が、木や植木や葉の生命に奉仕するのである。花はかおりを放ち、その美しさをあらわして世の人々の祝福となる。太陽は光を放つのもろの世界をよこばせる。海はすべての泉のみなもとであるとともにまたすべての土地の水の流れを受け入れるが、それは与えるために受けるのである。海面から立ちのぼる霧は、地から芽が出るように、土地をうるおすために雨となってくだる。

栄光の天使たちは、与えること——墮落してきよくない魂に愛としんぼうづよい見守りを与えることによるこびを感じる。天使たちは人々の心に愛をささやく。彼らはこの暗い世に天の宮廷から光を持って来る。やさしく忍耐強い奉仕によって、彼らは失われた魂を、彼ら自身が知ることができるよりもっと密接なキリストとのまじわりにはいらせるために、人の心に働きかける。

しかしこのような比較的小さな描写は別として、われわれは、イエスのうちに神を見るのである。イエスを見るとき、われわれは、与えることがわれらの神の栄光であることがわかる。「わたしは自分からは何もせず」、「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きている」。「わたしは自分の栄光を求めてはいない」。「自分をつかわされた方の栄光を求める」とキリストは言われた(ヨハネ八ノ二八、六ノ五七、八ノ五〇、七ノ一八)。これらのことばの中に、宇宙の生命の法則である大原則が示されている。すべてのものをキリストは神か

らお受けになったが、彼は与えるためにお受けになったのである。天の宮廷ですべての被造物のために奉仕しておられるときもそうである。愛するみ子を通して、天父の生命はすべてのものに向かって流れ出る。み子を通して、それは賛美とよろこびの奉仕のうちに、愛の潮流となって、すべてのものの根源である神へもどって行く。このようにキリストを通して愛の循環が完成され、それは偉大な賦与者であられる神のご品性——生命の法則を象徴している。

この法則が実に天において破られたのである。罪は利己心から起った。蔽(おお)うことをなす天使ルシファールが天の第一位を望んだ。彼は天使たちを支配し、彼らを創造主からひき離して、自分に忠誠を誓わせようと試みた。そこで彼は神について悪宣伝し、神にはいばりたいという野心があるのだと言った。彼は自分自身の邪惡な特徴を愛の神におしつけようとした。こうして彼は、天使たちをあざむいた。こうして彼は人類をだました。サタンは彼らに神のみことばを疑わせ、神の恵みを信じさせないようにした。神は正義と恐るべき威光の神であるので、サタンは、神がゆるすことのないきびしい神であると彼らに考えさせた。こうして彼は人々をひっぱって神への反逆に加わらせ、わざわざいの夜がこの世にやってきた。

神を曲解したために、この地上は暗くなった。暗黒の影を照し、世の人々を神に呼びもどすためには、サタンの欺瞞(ぎまん)的な力をうち破らねばならなかった。このことは、暴力によってなすことはできないのであった。暴力の行使は神の統治の原則に反する。神は愛の奉仕だけを望まれる。愛を命令することはできない。暴力や権威によって愛を手に入れることはできない。愛は愛によってのみめざめさせられる。神を知れば神を愛するよう

になる。神のご品性がサタンの品性と対照的に示されねばならない。この働きは全宇宙でただひとりのおかただけができた。神の愛の高さと深さを知っておられるおかただけが、その愛を知らせることがおできになった。世の暗い夜に、義の太陽キリストが「翼には、いやす力をそなえて」昇られねばならない(マラキ書四ノ二)。われわれをあがなう計画は、あとで考え出されたもの、すなわちアダムの墮落後に定められた計画ではなかった。それは、「長き世々にわたって、かくされていた奥義」のあらわれであった(ローマー六ノ二五)。それは永遠の昔から神の統治の根本となってきた原則のあらわれであった。初めから、神とキリストは、サタンの背信と、この反逆者の欺瞞的な力によって人類が墮落することを知っておられた。神は罪が存在するように定められたのではなく、その存在を予見し、その恐るべき危機に応ずる備えをされたのであった。世に対する神の愛はまことに大きかったので、神は、「み子を信じるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得る」ために、そのひとり子を与えることを約束された(ヨハネ三ノ一六)。

ルシファーは、「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき……いと高き者のようになる」と言った(イザヤ書一四ノ一二、一四)。しかし「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえっておのれをおなしうして、しもべのかたちをとり、人間の姿になられた」(ピリピ二ノ六、七)。

これは自発的な犠牲であった。イエスは天父のそばにとどまることもおできになった。イエスは天の栄光を保ち、天使からあがめられていることもおできになった。だがイエスは、暗黒のうちにある者に光を与え、滅

びる者にいのちを与えるために、王権を天父のみにかえし、宇宙の王座からおりることを望まれた。

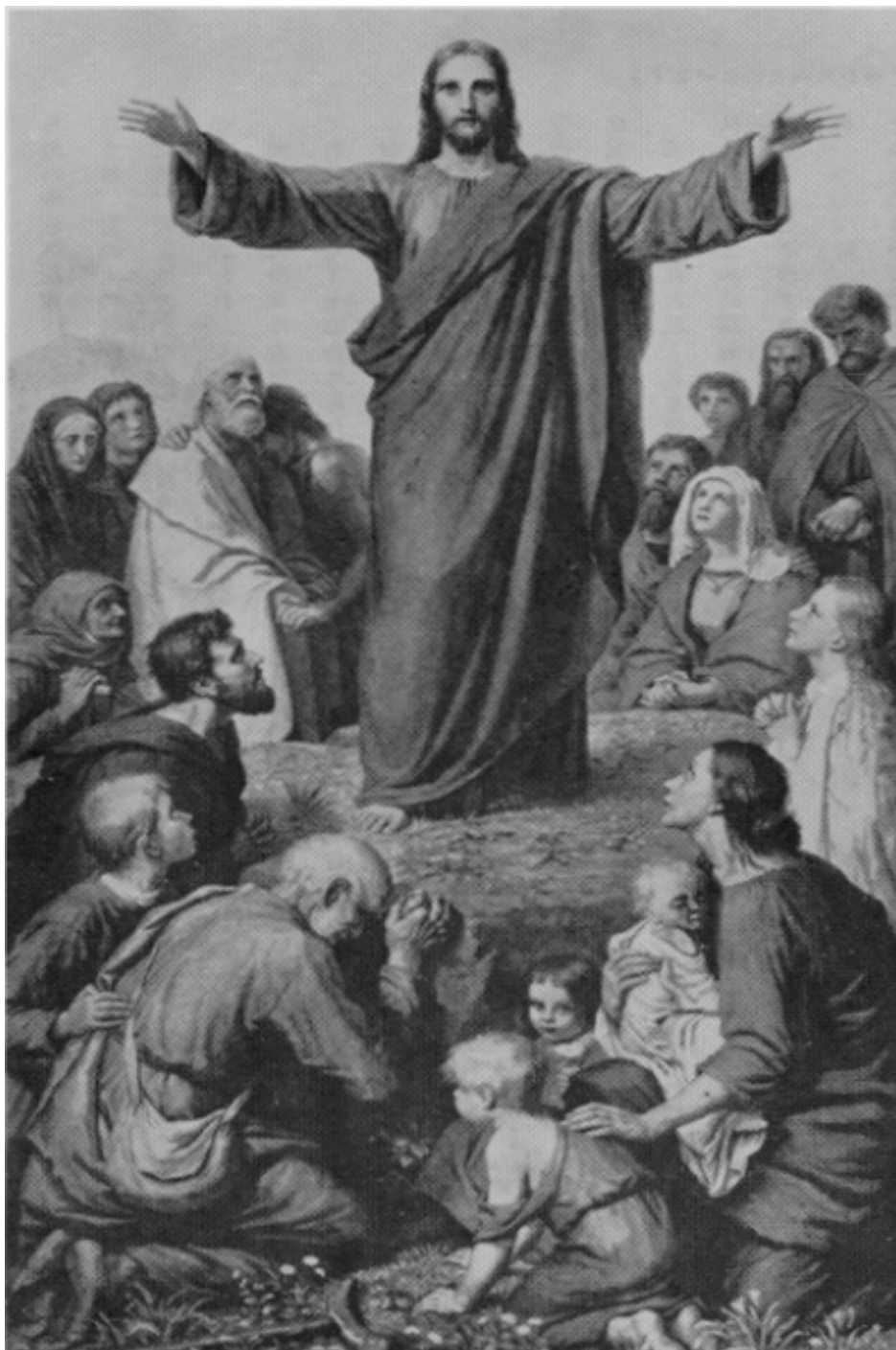
およそ二千年前に、「見よ、わたしはまいりました」という神秘的な意味のことばが、天で神のみ座から出るのぎかれた。「あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えてくださった。……『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、み旨を行うためにまいりました』」（ヘブル一〇ノ五―七）。このことばのうちに、永遠の昔からかくされていたみこころの成就が告げられている。キリストは人の肉体をとってこの地上においでになるうとしていた。彼は、「わたしのために、からだを備えてくださった」と言われる（ヘブル一〇ノ五）。もしキリストが世のある前から天父とともに持ってあられた栄光のままおいでになったら、われわれはその臨在の光に耐えることができなかった。われわれがその栄光を見て滅びることがないように、キリストの栄光のあらわれはおおわれた。キリストの神性は人性によっておおわれ、目に見えない栄光が目に見える人間の姿によっておおわれた。

この大いなるみこころは型と象徴をとおして予表されていた。キリストがご自分をモーセにあらわされたときの燃えるしはは神をあらわした。神をあらわすためにえられた象徴は、見たところ何の美しさもないつまらないやぶだった。ここに無限の神が宿られた。あわれみに富まれる神は、モーセが見ても生きられるように、その栄光をぐくつまらない象徴の中におおいかくされた。そのように神は、昼は雲の柱、夜は火の柱の中にあって、イスラエル人と語り、彼らにご自分のみこころを明らかにし、恵みをお与えになった。有限な人間の弱い目で見ることができるよう、神の栄光がやわらげられ、その威光がおおわれた。このように、キリストは「わたしは

ちのいやしいからだ」「人間の姿に」なってこの世においてになるのであった(ピリピ三ノ二、一ノ七)。キリストは、世の人の目からみれば、慕うべき美しさをもっておられなかった。しかしキリストは、人の肉体をとられた神、天と地の光であった。キリストが、悲嘆にくれ、誘惑されている人間に近づくことができるように、その栄光はおわれ、その偉大さと威光はかくされた。

神は、イスラエル人について、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」とモーセに命じられた(出エジプト記二五ノ八)。そして神は聖所の中に、すなわちご自分の民のまん中にお住みになった。イスラエル人が疲れはてて荒野をさまよい歩いていた間じゅう、神の臨在の象徴は彼らとともにあった。そのように、キリストはわれわれ人間の陣營のまん中にご自分の幕屋をお建てになった。キリストはわれわれのうちに住み、ご自分のきよい品性と生活とをわれわれにあらわすために、人間の天幕のそばにご自分の天幕を張られた。「ことは肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた」(ヨハネ一ノ一四)。

イエスがわれわれとともに住むためになったので、われわれは、神がわれわれの試練をよく知り、われわれの悲しみに同情してくださるということがわかる。アダムのおすこ娘はみな創造主が罪人の友であることをさることができる。なぜなら、救い主の地上生活にあらわされた恵みの教理の一つ一つに、よろこびの約束の一つ一つに、愛の行為の一つ一つに、きよい美しさの一つ一つに、われわれは神がわれらとともにいますことをみとめるからである。



イエス・キリストは、人類を罪と永遠の死から救うためにこの地上においでになった。神のみ子は、われわれをあがなうために、自ら進んでわれわれの性質をとり、われわれの経験を味わわれた。

サタンは神の愛の律法を利己主義の律法であると言う。彼はわれわれがその戒めに従うことは不可能だと宣言する。人類の始祖アダムとエバが墮落してあらゆるわざわいが生じたことを、彼は創造主の責任にし、人々に神が罪と苦難と死の張本人であるかのように考えさせる。イエスはこの欺瞞をばくろされるのであった。イエスはわれわれ人間の一人として服従の模範を示されるのであった。このためにイエスはみずから人間の性質をとり、われわれと同じ経験をされた。「イエスは……あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった」(ヘブル二ノ一七)。もしわれわれが、イエスの耐えられなかったことを耐えねばならないとしたら、サタンは、この点で、神の力はわれわれにとって十分ではないと言うだろう。そこでイエスは、「すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」(ヘブル四ノ一五)。イエスはわれわれの会うあらゆる試みに耐えられた。しかも彼はわれわれに自由に与えられていない力をご自分のためにお用いにならなかった。人間としてイエスは試みに会い、神から与えられた力で勝利された。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と、主は言われる(詩篇四〇ノ八)。イエスが、よい働きをし、サタンに苦しめられているすべての者をいやしながらお歩きになったとき、彼は神の律法の性格と神への奉仕の本質とを人々に明らかにされた。イエスの一生は、われわれもまた神の律法に従うことができることを証明している。

キリストはご自分の人性によって人類に接し、ご自分の神性によって神のみ座をとらえてあられた。人の子としてイエスは服従の模範をわれわれに示された。神のみ子としてイエスは服従する力をわれわれに与えてくださ

る。ホレブ山のやぶの中から「わたしは、有って有る者。……イスラエルの人々にこう言いなさい、『**わたしは有る**』』というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわれました。』とモーセに語られたのはキリストであった(出エジプト記三ノ一四)。これはイスラエルの救済についての保証であった。だからキリストは、「しもべのかたち」をとっておいでになったとき、ご自分を「**わたしは有るという者**」として宣言された。ベツレヘムの子、柔和で心のへりくだった救い主は、「肉において現れ」た神であった。(テモテ第一・三ノ一六)。イエスはまたわれわれにこう言われる、「**わたしはよい羊飼いだ**」「**わたしは生きたパンである**」「**わたしは道であり真理であり、命である**」「**わたしは天においても地においてもいっさいの權威を授けられた**」(ヨハネ一〇ノ一、六ノ五一、一四ノ六、マタイ二八ノ一八)。わたしはすべての約束の保証である。わたしは**実在する**、恐れることはない。「神われらと共にいます」ということは、われわれが罪から救われることについての保証であり、われわれが天の律法に従う力についての保証である。

身をひくして人性をとることによって、キリストはサタンの品性と反対の品性をあらわされた。しかし主は屈辱の道をもっと低いところへくだられた。「おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」(ピリピ二ノ八)。大祭司が豪華な祭司服をぬいで、一般の祭司と同じ白い麻の衣を着て式をとり行うように、キリストはしもべのかたちをとり、みずから祭司となり、またみずからいけにえとなって、いけにえをささげられた。「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずからこらしめをうけて、われわれに平安を与え」られた(イザヤ書五三ノ五)。

当然キリストが受けられるべきとり扱いをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれが当然受けるべきとり扱いを受けられた。われわれのものではなかったキリストの義によってわれわれが義とされるように、キリストはご自分のものではなかったわれわれの罪の宣告を受けられた。キリストのものであるいのちをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれのものである死を受けられた。「その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ書五三ノ五)。

キリストは、ご自分の生涯と死によって、罪のために生じた破滅から回復するよりもっと大きなことをなしとげられた。神と人とを永遠にひき離すことがサタンの目的であった。しかしキリストのうちにあるときに、われわれは墮落しなかった場合よりもっと密接に神につながるようになるのである。救い主は、われわれの性質をおとりになることによって、決してたちきれることのないきずなでご自分を人類におすびつけられた。永遠にわたって、キリストはわれわれとつながっておられる。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。」(ヨハネ三ノ一六)。われわれの罪を負い、われわれのいけにえとして死ぬために、神はみ子をお与えになっただけではない。神はみ子を墮落した人類にお与えになったのである。神は不変の平和のはからいを保証するために、ご自分のひとり子を与えて人類家族の一人とならせ、永遠に人間の性質をみ子のうちに保たせられた。これこそ神がご自分のみことを成就される保証である。「ひとりのみどり子がわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり」(イザヤ書九ノ六)。神はみ子自身のうちに人間の性質をとり入れ、これを一番高い天にまで持ちつつづけさせられた。神とともに宇宙のみ座を占めてあら

れるのは「人の子」である。その名を「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられるのは「人の子」である(イザヤ書九ノ六)。「有つて有る者」は神と人類の間にあつて、両方に手を置いておられる仲保者である。「聖にして、悪もけがれもなく、罪人とは區別され」るおかたは、われわれを「兄弟と呼ぶことを恥じ」たまわない(ヘブル七ノ二六、二ノ一二)。キリストのうちに、天の家族と地の家族が一つにおすばれている。栄光をお受けになつたキリストは、われわれの兄弟である。天は人間のうちに宿り、人間は限りない愛の神の胸にいだかれている。

神はご自分の民について、「彼らは冠の玉のよつに、その地に輝く。そのさいわい、そのうるわしさはいかばかりであろう」と言われる(ゼカリヤ書九ノ一六、一七)。あがなわれた者が高められることは、神のいつくしみについて永遠のあかしとなる。神は、「キリスト・イエスにあつてわたしたちに賜わつた慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示」される。「天上にあるもろもろの支配や権威が、教会を通して、神の多種多様な知恵を知るに至るためであつて、わたしたちの主キリスト・イエスにあつて実現された神の永遠の目的にそつものである」(エペソ二ノ七、三ノ一〇、一一)。

キリストのあがないの働きによつて神の統治の正しいことが証明される。全能者は愛の神として知らされる。サタンの非難は反ばくされ、その性格がばくろされる。反逆はふたたび起ることができない。罪は二度とこの宇宙にはいることができない。永遠にわたつて、だれも背信の心配がない。愛の自己犠牲によつて、天と地の住民は決してきれることのないきずなで創造主にむすびつけられる。

あがないの働きは完成される。罪の充滿していたところに神の恵みがもつと充滿する。サタンが自分の働き場所として主張していたこの地上そのものも、ただあがなわれるばかりでなく、また高められるのである。罪のろいのために神の輝かしい創造における一つの汚点となっていたわれわれのこの小さな世界が、神の宇宙のどんな他世界にもまさってあがめられる。神のみ子が人のかたちをとり、栄光の王が生活し、苦難を受け、死なれたこの地上——ここに神が万物を新たにされる時、「神の幕屋が人とともにあり、神が人とともに住み、人は神の民となり、神みずから人とともにいま」すのである（黙示録二ノ三）。そして永遠にわたって、あがなわれた者は、神の光の中を歩むとき、言いあらわしようのない神の賜物であられるインマヌエル——**神われらと共にいます**——について神を賛美するのである。

第 2 章

選 民

一千年以上もの間、ユダヤ民族は、救い主の来臨を待っていた。この出来事に彼らの最も輝かしい望みがかけられていた。歌に預言に、神殿の儀式に家庭の祈りに、彼らは救い主のみ名をあがめてきた。それなのに、キリストがおいでになったとき、彼らはキリストを知らなかった。天の愛されたおかたは、彼らには「かわいた土から出る根のよう」であった。彼には「見るべき姿」がなかった。彼らはキリストのうちに慕うべき美しさを見なかった(イザヤ書五三ノ二)。「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった」(ヨハネ一ノ一一)。

しかし神はイスラエルをえられたのだった。神は人々の間に、神の律法について、また救い主をさし示している象徴と預言とについて知識を残すために、イスラエルを召されたのだった。神は、イスラエルが世に対して救いの井戸となるように望まれた。アブラハムがその滞在した土地で、ヨセフがエジプトで、ダニエルがバビロンの宮廷でそれぞれ果たした役割を、ヘブル人は諸国民の中で果すのであった。彼らは人々に神をあらわすのであ

った。

主は、アブラハムを召されたとき、「わたしはあなたを祝福し、……あなたは祝福の基となるであろう。……地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」と言われた(創世記一二ノ二、三)。この同じ教えが預言者たちを通してくりかえされた。イスラエルが戦争と捕囚のために荒廃したあとでさえも、「ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること……主からくだる露のごとく、青草の上に降る夕立のようである」との約束が彼らのものであった(ミカ書五ノ七)。エルサレムの神殿について、主はイザヤを通して「わが家はすべての民の祈りの家となえられる」と宣言された(イザヤ書五六ノ七)。

だがイスラエル人は、彼らの望みを世俗的な偉大さにおいた。カナンの地にはいった時から、彼らは神の戒めから離れ、異教徒の風習に従った。神が預言者たちを通して彼らに警告を送られてもむだだった。彼らは異教徒からの圧迫というこらしめを受けてもむだだった。改革のたびに、もっと深い背信がそのあとにつづいた。

イスラエルが神に忠実であつたら、神は彼らに栄えとほまれとを与えることによって、みこころをなしとげることがあできになったのである。もし彼らが服従の道を歩いたら、神は彼らに「ほまれと良き名と栄えとを与えるて、主の造られたすべての国民にまさるものとされ」たのである。「そつすれば地のすべての民は皆あなたが主の名をもって唱えられるのを見てあなたをおそれるであろう」「彼らはこのもろもろの定めをきいて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある国民である』と言うであろう」とモーセは言った(申命記二六ノ一九、二八ノ一〇、四ノ六)。しかしイスラエルが不忠実であつたために、神のみこころはうちつづく逆境と屈辱を通して

てのみ達成されるよりほかなかった。

イスラエルはバビロンに屈服し、異教徒の地に離散させられた。苦悩のうちにあって、多くの者が神の契約への忠誠を新たにした。彼らは柳の木にたてごとをかけて、荒れはたままになっている聖なる宮のことを嘆き悲しんだが、一方また真理の光が彼らを通して照りわたり、神の知識が諸国民の間にひろがった。異教の犠牲制度は、神がお定めになった制度の悪用であった。異教の儀式を守っているまじめな多くの人々が、神のお定めになった儀式の意味をヘブル人から学び、信仰をもって、あがない主についての約束をとらえた。

流浪のユダヤ人の多くは迫害を受けた。安息日を無視したり異教の祭典を守ったりすることをこばんだために、生命を失った者が少なくなかった。偶像礼拝者たちが怒って真理を滅ぼそうとしたとき、主はご自分のしもべを王たちや統治者たちに面会させ、彼らとその民が光を受けるようにされた。最も偉大な君主たちが、ヘブル人の捕虜たちがあがんでいる神の主権を宣言させられたことがたびたびあった。

イスラエル人は、バビロンにとらわれの身となったことによって、きざんだ像の礼拝が効果的になおった。その後何百年もの間、彼らは異教の敵の圧迫に苦しんだために、自分たちの繁栄は神の律法に従うことにかかっていることを固く確信するようになった。しかし民の多くは、愛にうながされて服従したのではなかった。その動機は利己的であった。彼らは国家的な偉大さに到達するための手段として、神に外面的な奉仕をささげた。彼らは世の光とならないで、偶像礼拝の誘惑からのがれるために世から離れた。モーセを通して与えられた教えの中で、神はイスラエル人が偶像礼拝者とまじわることを制限されたが、この教えはまちがって解釈されていた。そ

れはイスラエル人が異教徒の習慣に従わないようにするためであった。ところがこの教えは、イスラエル人と他国民との間をへだてる壁をつくりあげるために用いられた。ユダヤ人はエルサレムを彼らの天とみなし、神が異邦人に恵みを示されはしないかと実際に嫉妬(しつと)した。

バビロンから帰ってからは、宗教的な教えに十分な注意が払われた。全国に会堂が建てられ、そこで祭司や律法学者たちが律法を講義した。また学校が設立され、そこは、文学や科学とともに、義の原則を教えるところといわれた。だがこうした会堂も学校も墮落したものとなった。捕囚の間に、民の多くは異教的な思想と風習を受け入れていたので、そうしたものが彼らの宗教的な行事にとり入れられた。多くのことにおいて、彼らは偶像礼拝者たちの習慣に従った。

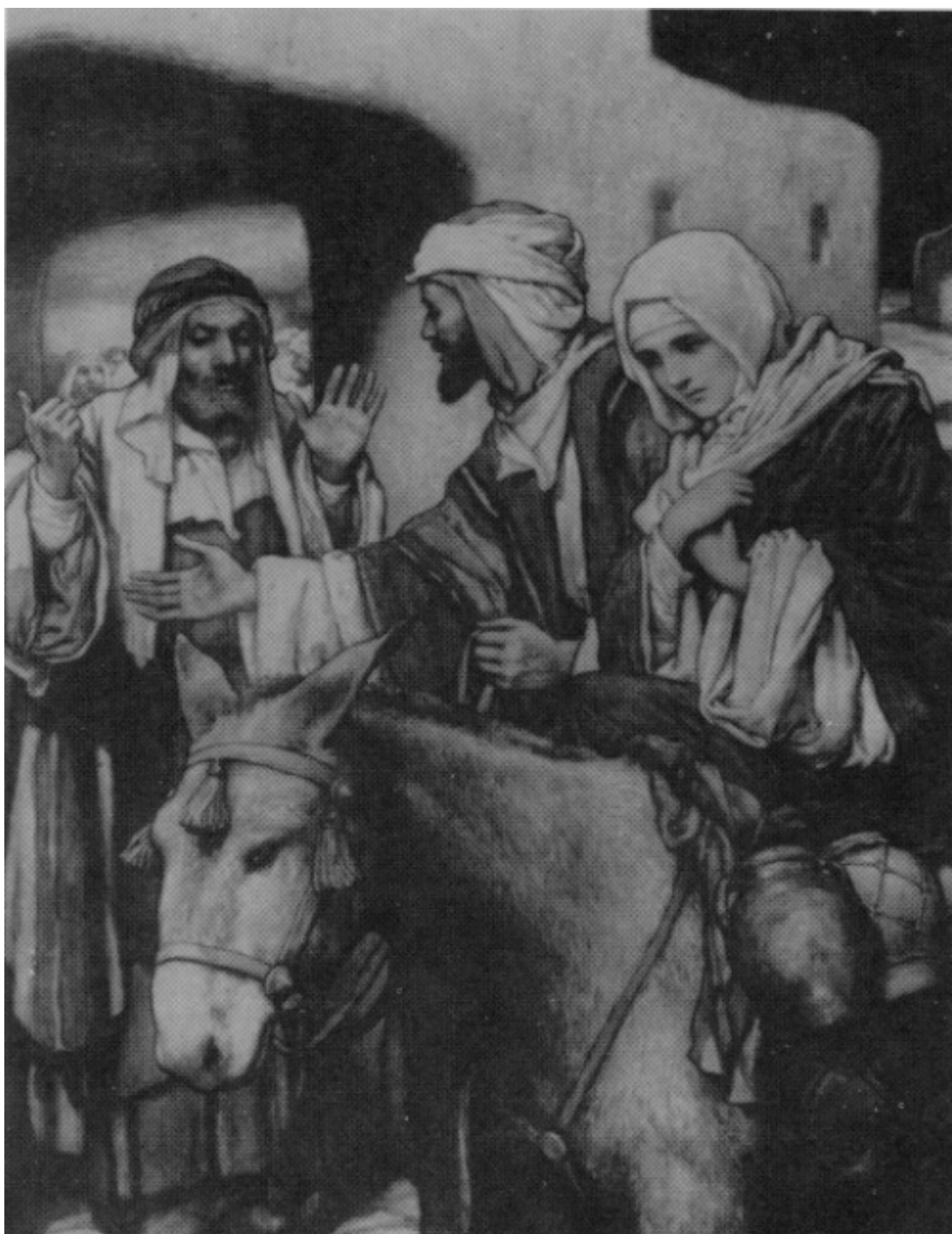
ユダヤ人は、神から離れるにしたがって、儀式的な行事に教えられている意味を大部分見失った。その儀式はキリストご自身によって制定されたものだった。儀式のどの部分もキリストを象徴していて、生命力と霊的な美しさに満ちていた。ところがユダヤ人はその儀式から霊的生命を失い、そのおなしい形式を固守した。彼らはいけにえと儀式そのものにたよって、そこにさし示されているキリストにたよらなかった。祭司たちとラビたちは、彼らの失っていたものを補うために、彼ら自身の要求を増し加えた。こうして要求が厳格になればなるほど、神の愛のあらわれがますますみられなくなった。彼らは儀式の数が多ければ多いほど、それだけきよい者になれると思っていたが、その心は高慢と偽善に満たされていた。

どんなにこまかく面倒な戒めをつくってみても、律法を守ることは不可能だった。神に仕えようと望む者やラ

ビの戒めを守ろうとする者は、重荷の下に苦しんだ。彼らは不安な良心の責めに気持の休まることがなかった。こうしてサタンは民を落胆させ、神のご品性について彼らの観念を低下させ、イスラエルの信仰が軽蔑(けいべつ)されるようになるために働いた。彼は天で反逆したときに主張したこと、すなわち神の要求は不公平で従うことのできないものだという主張を立証しようと望んだ。イスラエルでさえ律法を守っていないと、彼は宣言した。ユダヤ人はメシヤの来臨を望んでいながら、メシヤの使命について正しい観念を持っていなかった。彼らは罪からのあがないを求めずに、ローマ人から救われることを望んでいた。彼らは、メシヤが征服者としておいでになり、圧制者の権力を破り、イスラエルを世界帝国の地位に高めてくださるのを待望した。こうして彼らが救い主をこぼ道が備えられた。

キリストがお生れになった時、ユダヤ国民は外国の支配者たちの統治にいらだち、内部の争いに苦しめられていた。ユダヤ人は別の政治形態を維持することをゆるされていた。しかしどんなことによっても、彼らがローマ人の支配下にあるという事実をかくすことも、あるいは彼らを権力の制限に甘んじさせることもできなかった。大祭司の任免権はローマ人の手ににぎられていて、この地位を獲得するためには詐欺、買収、あるいは殺人さえ行われた。こうして祭司職はますます堕落した。それでも祭司たちはなお強大な権力を持ち、彼らはその権力を利己的金銭的な目的のために利用した。民衆は祭司たちの無慈悲な要求のままになり、一方ローマ人からも重い税をかけられた。このような情勢のために、不満がひろがった。民衆の暴動がしきりに起った。貪(どん)欲と暴力、不信と霊的無感覚が国民の生命をむしろんでいた。

ユダヤ人は、ローマ人への憎悪と、国民的また靈的な誇りから、いぜんとして自分たちの礼拝形式を厳格に守っていた。祭司たちは宗教的儀式に細心の注意を払うことによって聖潔の評判を維持しようとした。民は暗黒と圧制のうちにあって、役人たちは権力への野心から、彼らの敵を征服しイスラエルに王国を回復されるおかたの来臨を待ちこがれた。彼らは預言を調べたが、靈的な目を持たなかった。こうして彼らは、キリストの初臨に伴う屈辱をさし示している聖句を見落して、キリスト再臨の栄光についていわれている聖句をまちがって適用した。高慢のために彼らの目はくもったのである。彼らは預言を自分たちの利己的な欲望にしたがって解釈した。



人口調査の勅令が出たために、ヨセフとマリヤはナザレからベツレヘムへ行った。
ふたりは雑踏した町に着いたが、宿屋には彼らの泊まる部屋がなかった。

「時の満ちるに及んで」

「時の満ちるに及んで、神はみ子を……おつかわしになった。それは、律法の下にあるものをあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった」(ガラテヤ四ノ四、五)。

救い主の来臨はエデンで予告された。アダムとエバが初めてこの約束をきいたとき、彼らはそれがすぐに成就されるものと期待した。彼らは最初に生れたおすこをよろこんで歓迎し、その子が救い主であるようにと望んだ。しかし約束の成就是遅れた。この約束を最初に受けた人々はその実現をみないで死んだ。エノクの時代から、この約束は父祖たちと預言者たちを通してくりかえされ、救い主来臨の望みを生かしつつづけたが、それでも救い主はおいでにならなかった。ダニエルの預言にメシヤ来臨の時期が示されたが、だれもがそのことばを正しく解釈したわけではなかった。一世紀また一世紀と過ぎて行き、預言者たちの声はやんだ。圧制者の手はイスラエルに重く、多くの者は「日は延び、すべての幻はおなしくなった」といまにも叫ぶばかりであった(エゼキエル書一二ノ二二)。

だが定められた広大な軌道にある星のように、神の目的は急ぐことも遅れることもない。大いなる暗黒とけむるかまどの象徴を通して、神はアブラハムに、イスラエルがエジプトで奴隷生活を送ることを示し、その滞在期間は四百年であると宣言された。「その後かれらは多くの財産を携えて出てくるでしょう」と神は言われた(創世記一五ノ一四)。このことばに対して、パロが誇りとする帝国は、全力をあげて戦ったがむだだった。神の約束に定められていた「その日に、主の全軍はエジプトの国を出た」(出エジプト記一二ノ四一)。同じように、天の会議では、キリスト来臨の時が決定されていた。時という大時計がその時間をさし示すと、イエスはベツレヘムにお生れになった。

「時の満ちるに及んで、神はみ子を……おつかわしになった」(ガラテヤ四ノ四)。摂理の神は、この世界に救い主来臨の機が熟するまで、国々の動きと、人間の衝動や影響力の流れとをみちびいておられた。国々は一つの政府の下に統合されていた。一つの国語が広く話され、いたるところで文学の言語としてみとめられていた。離散しているユダヤ人は年ごとの大祭のために全地からエルサレムに集まった。彼らは、その居留地へもどると、メシヤの来臨についてのおとずれを世界じゅうにひろめることができた。

そのころ、異教の制度はだんだん人々の信頼を失っていた。人々はきらびやかな外観や作り話に飽いていた。彼らは心を満たすことのできる宗教を熱望した。真理の光は人々から離れてしまったようにみえたが、その一方では光を求めている魂や、困惑と悲しみに満たされている魂があった。彼らは、生ける神についての知識、また死のかなたにあるいのちについて保証してくれる何ものかを飢えかわくように求めていた。

ユダヤ人が神から離れた時、信仰は暗くなり、望みの光はほとんど前途を照らさなくなった。預言者たちのことは理解されなかった。一般の民衆にとって、死は恐るべき神秘であり、死のあなたは不安と暗黒であった。幾世紀も昔に、預言者エレミヤにきこえた声、「叫び泣く大いなる悲しみの声がラマで聞えた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、慰められることさえ願わなかった」とあるその声は、ベツレヘムの母親たちの泣き叫ぶ声であつたばかりでなく、人類の大きな心から出る叫びでもあつた(マタイ二一―八)。人々は「死の地、死のかけ」に、慰められることもなくすわっていた(マタイ四一―六)。彼らは、救い主がおいでになって、暗黒がはらいのけられ、未来の神秘が明らかにされる時を、あこがれの目をもって待ち望んでいた。ユダヤ国民以外にも、天来の教師の出現を予告した人々がいた。この人たちは真理を求めていたので、彼らに靈感のみたまがさずけられた。暗くなった空の星のように、このような教師たちが次々と現われていた。彼らの預言のことは異邦人の世界の幾千の人々の心に望みの火をともしていた。

幾百年も前から、聖書は、当時ローマ帝国のいたるところで広く話されていたギリシヤ語に翻訳されていた。ユダヤ人がいたるところにちらばっていたので、異邦人もある程度メシヤの来臨を期待していた。ユダヤ人が異教徒と呼んでいた人々の中には、メシヤについての聖書の預言をイスラエルの教師たちよりもっとよく理解している人たちがいた。彼らの中には、罪からの救済者としてメシヤの来臨を待ち望んでいる人たちがいた。哲学者たちは、ヘブライ制度の奥義の研究に努力した。しかしユダヤ人の偏狭さのために光が伝わるのがまたげられた。彼らは、自分たちと他国民との間のへだてを維持することに熱心で、象徴的奉仕について彼らがまだ持つ

ていた知識をわけ与えようとしなかった。真の解釈者がおいでにならねばならない。これらのすべての型に予表されているおかたが、それらの型の意義を説明されなければならぬ。

自然を通し、型と象徴とを通し、また父祖たちと預言者たちとを通して、神は世の人々に語っておられた。教訓は人間のことで人間に与えられねばならない。契約の使者であられるキリストがお語りにならねばならない。彼の声が彼ご自身の宮でしかかれねばならない。キリストが、はっきりと明確に理解されることばを語るためにおいでにならねばならない。真理の創始者であられるキリストが、真理を力のないものにしていた人間のことはとうもみがらの中から真理をとりわけたまわねばならない。神の統治とあがないの計画の原則が明示されねばならない。旧約の教えが十分に人々の前に示されねばならない。

しかしユダヤ人の中には、信念の固い人々、すなわち神の知識を保存してきたきよい家系の子孫がいた。これらの人々は、父祖たちに与えられた約束の望みについてまだ期待していた。彼らはモーセを通して、「主なる神は、わたしをおたてになつたように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をあ立てになるであろう。その預言者があなたがたに語ることは、ことごとくききたがいなさい」と保証されたことばを心に思いめぐらし、その信仰を強めた（使徒行伝三ノ二二）。また彼らは、神が、「貧しい者に福音を宣べ伝え……心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ……主の恵みの年」を告げるおかたにあぶらをそそがれるということを読んだ（イザヤ書六一ノ一、二）。彼らは神が「道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望み、異邦人は神の光にきたり、王たちは照りいでる神の光のかがやきにくることを讀んだ（イザヤ書四二ノ四、六〇ノ三）。

ヤコブが死の床にあって、「つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までには及ぶであろう」と語ったことは、彼らの心を望みで満たした（創世記四九ノ一〇）。イスラエルの衰えて行く勢力はメシヤの来臨が近づいている証拠だった。ダニエルの預言には、地上のすべての王国のちにキリストが一つの王国を栄光のうちに統治されることへがえがかれていた。そして、「この国は立って永遠にいたるのです」とダニエルは言った（ダニエル書二ノ四四）。キリストの使命の本質を理解している人は少なかったが、その一方では、イスラエルに王国をたて、救済者として諸国民にのぞまれる偉大な君に対する期待が一般にひろがっていた。

時は満ちていた。人類は罪とがの幾時代を経てますます墮落し、あがない主の来臨が必要であった。サタンは、天と地との間に越えることのできない深いみぞをつくるために働いてきた。彼は人々をだまして大胆に罪を犯させてきた。神の寛容を尽きさせ、人類に対する神の愛を失わせて、神がこの世をサタンの支配するまに見捨てられるようにしようとするのがサタンの目的であった。

サタンは人々から神の知識をしめ出し、人々の注意を神の宮からひき離し、彼自身の王国をつちたてようとしていた。主権をにぎろうとするサタンの戦いはほとんど完全に成功したようにみえていた。なるほど神は各時代にご自分の代理者を持っておられた。異教徒の中にさえ、キリストが人々を罪と墮落の中からひきあげるために働かれるのにそのうつわとなる人々がいた。しかしこれらの人々は、あざけられ、憎まれた。彼らの多くは非業の死をとげた。サタンが世に投げかけていた暗黒の影はますます深くなった。

異教制度を通して、サタンは長年の間人々を神からひき離してきた。だがサタンの勝ちとった大勝利は、イスラエルの信仰を墮落させたことだった。異教徒は自分たちが考え出したものに心をよせ、そしてこれをおがむことによって、神についての知識を失い、ますます墮落していた。イスラエルもこれと同じだった。人は自らのわざによって自分自身を救うことができるという原則が異教のすべての宗教の根底にあった。この原則がこんどはユダヤ人の宗教の原則となっていた。サタンがこの原則をうえつけたのであった。この原則を信じているところではどこでも、人は罪に対する防壁がない。

救いのメッセージは人間のうつわを通して人々に伝えられる。だがユダヤ人は、永遠のいのちであるこの真理を独占しようとした。彼らは生きたマナをしまっておいたが、それは腐敗してしまった。彼らが自分たちの中にとじこめておこうとした宗教はつまずきとなった。彼らは神からその栄光を奪い、福音のにせもので世の人々をあざむいた。彼らは世の救いのために神に献身しようとしなくて、世を滅ぼすサタンのうつわとなった。

神が真理の土台と柱にするために召された民はサタンの代表者となっていた。彼らは神のご品性について誤った印象を与え、世の人々に神を暴君としてみさせるような行動をとって、サタンの望み通りに働いていた。宮で奉仕している祭司たちでさえ自分たちのとり行なっている儀式の意義を見落していた。彼らは、象徴を通してそこに示されているものを見なくなっていた。いけにえの献(ささ)げ物をささげるときに、彼らは芝居の中の役者と同じだった。神ご自身がお定めになった儀式は心をめくらにし、感情をかたくなにする手段とされた。神はこのような方法を通してもうこれ以上人類のためにつくすことがおできにならなかった。制度全体が一掃されねば

ならない。

罪の欺瞞は絶頂に達していた。人々の魂を墮落させるあらゆる手段が実行されていた。神のみ子は、この世をながめて、苦難と不幸とをごらんになった。キリストは、人間がサタンの残酷な行為の犠牲となっているのを、あわれみをもってごらんになった。墮落し、殺され、失われつつある人々を、キリストは同情の思いをもってごらんになった。彼らのえらんだ支配者は彼らを捕虜として車につないだ。あざむかれ、途方に暮れながら、彼らは暗い行列をつくって永遠の滅亡——生きる望みのない死、朝のおとずれることのない夜へ向かって歩きつづけていた。悪霊が人間と一体となっていた。神の住居としてつくられた人間のからだは悪霊の住居となっていた。人間の感覚、神経、欲望、器官は、超自然の力によって、最もいやしい情欲をほしきままにするために働かされた。悪霊の印そのものが人間の顔つきにおされた。人間の顔は、その身を占領している大勢の悪霊の表情を反映した。世のあがない主がごらんになったのはこのような光景だった。限りなく純潔なおかたの目に、それは何という光景だったことだろう。

罪は科学となり、悪徳は宗教の一部分として神聖なものにされていた。反逆は人間の心の奥深くにこみ、人は天に向かってはげしい敵意をいだいていた。人間は神を離れては向上できないことが宇宙の前に実例として示された。世界をおつくりになったおかたによって、生命と力の新しい要素がさづけられねばならなかった。

他世界は、エホバ神が立ちあがって地の住民を一掃されるのを見ようと、強い関心をもって見守っていた。もし神がそうなさら、サタンは、天使たちの忠誠を自分に向けさせようとする計画を実行しよう待ちかまえ

ていた。彼は神の統治の原則ではゆるすということが絶対にないと断言していた。もしこの世界が滅ぼされたら、彼は自分の非難が事実であったと主張しただろう。彼は神を非難し、反逆を他世界にまでひろげようと待ちかまえていた。ところが神は、この世を滅ぼすどころか、かえってこの世を救うためにみ子をつかわされた。神にそむいた世界のいたるところに墮落と反抗がみられたが、その回復の道が備えられた。サタンがまさに勝利しようとするかのようにみえたその危機に、神のみ子が神の恵みという大使の印を帯びてこられた。どの時代にも、どの時間にも、神の愛は墮落した人類に向かってそそがれていた。人間の強情さにもかかわらず、たえずあわれみのしるしが示されていた。こうして時が満ちたときに、神は、救いの計画が達成されるまでさまたげられることも取り去られることもないやしの恵みを、あふれるばかりに世にそそぐことによって栄えを受けられた。

サタンは、人間のうちにある神のみかたちをいやしいものにすることに成功したと狂喜していた。その時イエスが、人間のうちに創造主のみかたちを回復するためになったのである。罪のために墮落した品性を新しく形づくることができるのはキリストよりほかはない。主は人間の意思を支配していた悪霊を追いつくためにあいでになった。主はわれわれを塵(ちり)の中から起し、けがれた品性をご自分のきよい品性に型どってつくり直し、ご自身の栄光をもってそれを美しいものとするためにあいでになった。

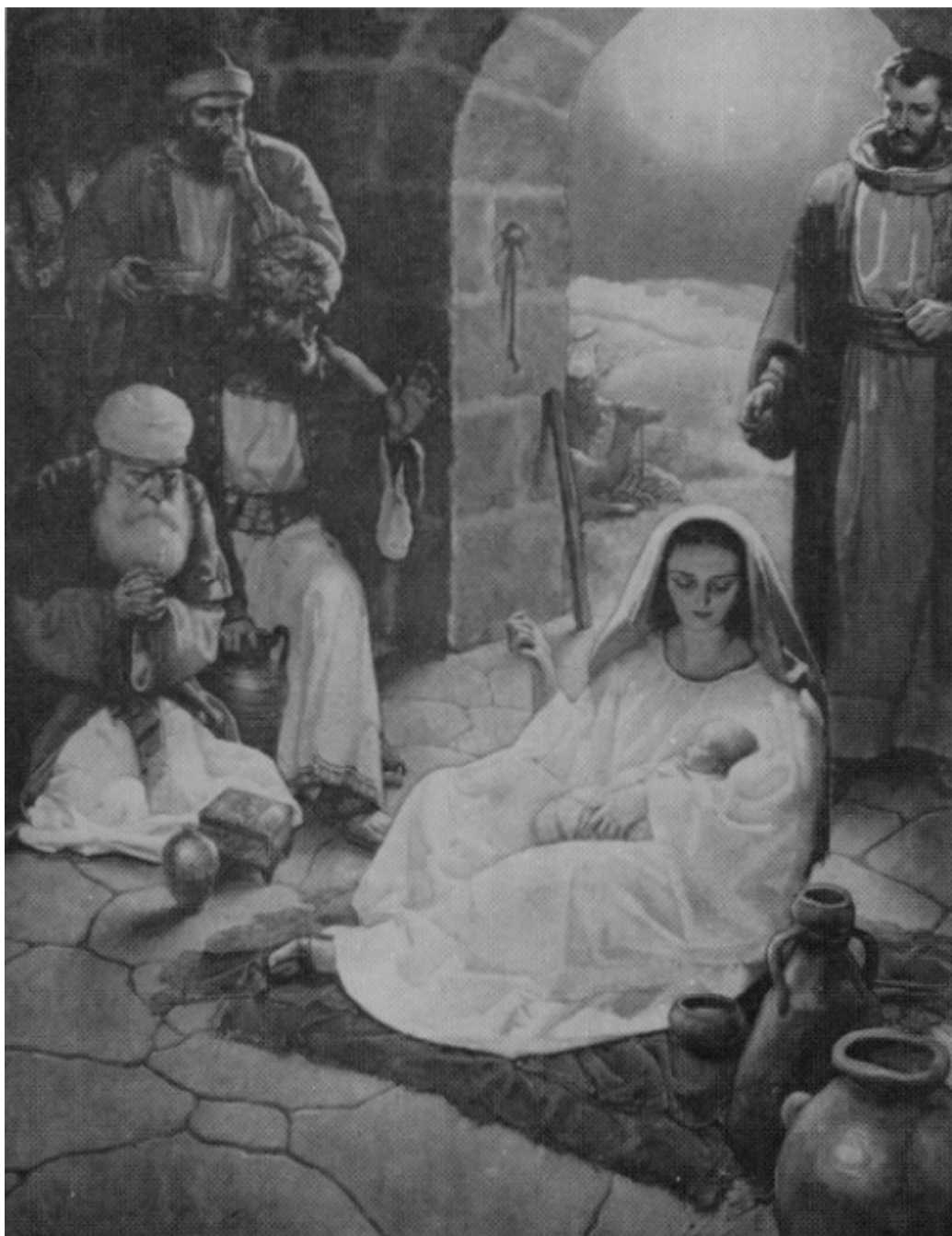
第4章

あなたがたのために救い主が

本章はルカ二ノ一二のにもとづく

栄光の王キリストはいやしい身となって人性をおとりになった。地上における主の環境はみすばらしくて、見込みがなかった。外観の威光が人をひきつける対象となることがないように、キリストの栄光はおあわれた。主は外面的な見せびらかしをいっさい避けられた。富や世俗的な栄誉や人間的な偉大さは決して魂を死から救うことができない。イエスは現世的な性質を持った引力によつて人々を自分の側にひきよせることがないようにと意図された。天の真理の美しさだけが、イエスに従おうと思う者をひきつけなければならない。メシヤの性格は長い間預言を通して予告されていたので、キリストは人々が神のみことばのあかしにもとづいてキリストを受け入れるようにお望みになった。

天使たちは、あがないのすばらしい計画に驚嘆した。彼らは人性という衣を着られたみ子を神の民がどのように受け入れるかを見ようとして見守っていた。天使たちは選民の地へやってきた。他の国々では作り話が教えられ、偽りの神々が礼拝されていた。神の栄光があらわされ、預言の光が輝いている国へ天使たちはきた。彼らは



博士たちは故国からエルサレムまで道しるべとなった星にみちびかれてベツレヘムへきた。そこで彼らは、生れたばかりの王なるイエスを拝して、黄金、乳香、没薬などの贈り物をささげた。

エルサレムへ、神のみことばの解説者として任命されている人々のもとへ、神の家に仕えている人々のもとへと、人目につかないでやってきた。すでに祭司のザカリヤには、彼が祭壇の前で奉仕していた時、キリストの来臨が間近に迫っていることが知らされていた。すでに先駆者が生れ、その使命は、奇跡と預言とによって証明されていた。この先駆者が生れたという知らせと、彼の使命のすばらしい意義が広く伝えられていた。しかしエルサレムは救い主を迎える備えをしていなかった。

天の使者たちは、神が聖なる真理の光を世に伝えるために召された民の無関心を驚いて見た。ユダヤ国民はキリストがアブラハムの後裔(こうえい)としてダビデの家系からお生れになることの証人としてとっておかれたのであった。それなのに彼らはキリストの来臨が間近に迫っていることを知らなかった。宮では、朝夕のいけにえによつて毎日神の子羊キリストがさし示されていた。しかしそこでさえキリストを迎える備えができていなかった。祭司たちも国民の教師たちも、各時代を通じて最大の事件がまさに起ろうとしていることを知らなかった。彼らは、無意味な祈りをとнаえ、人々にみせるために礼拝の儀式をとり行なっていたが、富と世俗的なほまれを求めることにはばかりあくせくとしていて、メシヤの出現に対する準備ができていなかった。同じような無関心がイスラエルの国じゅうにみなぎっていた。俗事に没頭している利己的な心は、全天を感動させているよろこびを感じることができなかった。ほんのわずかな人たちだけが目に見えないおかたにお目にかかるのを待ちこがれていた。この人たちのもとへ天の使者が送られた。

天使たちは、ヨセフとマリヤがナザレの家からダビデの町へ旅をしているのにつきそっている。ローマ帝国の

広大な領土の民族を登録する法令がガリラヤの山間の住民たちにまで及んだ。昔イスラエル人の捕虜を解放するためにクロスが世界帝国の王位に召されたように、シーザー・オーガスタスは、イエスの母をベツレヘムに行かせることによって、神の御目的を成就する代理人とされる。マリヤはダビデの家系なので、ダビデの子はダビデの町で生れねばならない。ベツレヘムから「イスラエルを治める者が……出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである」と預言者は言った(ミカ書五ノ二)。しかしこのダビデ王の家系の町で、ヨセフとマリヤはみとめられなければならない。とうとばれもしない。疲れはてて家もなく、彼らはその晩休おところを求めて、都の門から町の東端まで、せまい通りをむなく歩きつくす。満員の宿屋には彼らを泊める部屋がない。彼らはついに動物を入れてあるそまつな小屋の中に宿る場所を見だし、ここで世の救い主がお生れになる。

人々はそのことを知らないが、天はこの知らせを聞いてよろこびに満たされる。光の世界の天使たちは一層深くやさしい関心をもって地にひきつけられる。全世界はイエスがおいでになることによって輝きを増す。ベツレヘムの丘の上空には無数の天使の群れが集っている。彼らはよろこびのおとずれを世に宣伝してもよいとの合図を待っている。もしイスラエルの指導者たちが義務に忠実だったら、イエスの誕生を布告するよろこびにあずかることができたのである。しかしいま彼らは無視される。

神は「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」、「光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる」と宣言される(イザヤ書四四ノ三、詩篇一一一ノ四)。光を求めている者に、そしてそれをよるこんで受け入れる者に、神のみ座からの輝かしい光が照りかがやくのである。

ダビデがかつて羊の群れをつれて歩いた野で、羊飼たちはまだ夜の見張りをつづけていた。その静かな時間に、彼らは約束の救い主について語り合い、ダビデの王座に王なるキリストがおいでになるように祈っていた。すると見よ、「主のみ使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照らしたので、彼らは非常に恐れた。み使は言った、『恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである』」（ルカ二ノ九―一二）。

このことばに、栄光の光景が、聞いている羊飼たちの心を満たす。イスラエルに救い主がおいでになったのだ。権力と栄誉と勝利が主の来臨に連想されている。しかし天使は、彼らが貧しさとはずかしのうちにあられる救い主をみとめるように彼らを準備させねばならない。「あなたがたは、幼な子が布にくるまってかいばおけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたにあたえられるしるしである」と天使は言う（ルカ二ノ一二）。天の使者は彼らの恐れを静めた。彼はどうしたらイエスに会えるかを教えた。人間の弱さに対する思いやりから、彼は羊飼たちが天来の輝く光になれるように間をおいた。それから歓喜と栄光はもうかくしきれなかった。平原全体が神の軍勢の輝く光に照らされた。地は静まり、天は低くたれて歌をきいた。――

「いと高きところでは、神に栄光があるように、

地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」

（ルカ二ノ一四）

ああ、今日、人類家族がその歌をみとめることができるように。その時なされた布告、その時うたわれた歌の調べは、世の終りまで高まり、地のはてまでひびき渡るのである。義の太陽キリストが、翼にいやしの力をそなえて昇られるとき、その歌は、大水のひびきのように、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる」と声をあげる大群衆によつてふたたびうたわれるのである（黙示録一九ノ六）。

天使たちが姿を消すにつれて光はうすれ、夜の影がもう一度ベツレヘムの丘に落ちた。しかし人間の目がかつて見た最も輝かしい光景は羊飼たちの記憶に残った。「み使たちが彼らをはなれて天に帰ったとき、羊飼たちは『さあ、ベツレヘムへ行つて、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか』と、互に語り合つた。そして急いで行つて、マリヤとヨセフ、またかいばおけに寝かしてある幼な子をさがしあてた」（ルカ二ノ一五、一六）。

羊飼たちは、非常によろこんで出かけ、自分たちの見たり聞いたことを告げ知らせた。「人々はみな、羊飼たちが話してくれたことをきいて、不思議に思った。しかし、マリヤはこれらのことをことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとありであつたので、神をあがめ、またさんびしながら帰つていった」（ルカ二ノ一八―二〇）。

今日、天と地は、羊飼たちが天使たちの歌をきいた時よりも広いへだたりがあるのではない。人類はいまもお、普通の職業についている普通の人たちが昼間天使たちと会い、ぶどう園と畑で天の使者たちと語った時と同じに、天の関心のまとである。人生の平凡な世渡りをしているわれわれにとって天は非常に近いことがある。天

の宮廷からの天使たちは、神が命じられるままに動きまわる人たちの歩みにつきそうであろう。

ベツレヘムの物語はつきない話題である。その中に、深い「神の知恵と知識との富」がかくされている(ローマーノ三三)。天の王座をうまぶねと、敬いしたう天使たちを畜舎の動物たちととりかえられた救い主の犠牲にわれわれは驚くのである。この救い主の前に出ると、人間の誇りと自己満足が責められる。しかもこの犠牲は、救い主の驚くべきへりくだりのはじまりにすぎなかった。アダムがエデンで罪を知らなかったときでさえ、神のみ子が人の性質をおとりになることは無限の屈辱に近かった。ところがイエスは、人類が四千年にわたる罪によって弱くなっていた時に人性をおとりになったのである。アダムの子らと同じように、イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった。そのような結果がどういうものであるかは、イエスのこの世の先祖たちの歴史に示されている。主は、われわれの苦悩と試みにあずかり、罪のない生活の模範をわれわれに示すために、このような遺伝をもっておいでになったのである。

サタンは天にいたとき、神の宮廷におけるキリストの地位のことでキリストを憎んでいた。彼は自分自身がその地位から退けられると、ますますキリストを憎んだ。彼は罪人である人類を救うことを誓われたあかたを憎んだ。それでも神は、サタンが主権を主張しているこの世へ、み子イエスが人間の弱さを受けつく無力な赤ん坊としておいでになることをお許しになった。神はイエスが、すべての人と同じように人生の危険に会い、すべての人間と同じに失敗と永遠の損失をかけて戦いをたたかわれることをお許しになった。

人間の父親の心は自分の子供の上にそそがれる。彼は幼い子供の顔に見入り、人生の危険を思ってふるえる。

彼は自分のかわいい子をサタンの力から守り、誘惑と戦いに会わせたくないと熱望する。神は、われわれの幼な子たちのために、人生の道を安全にするために、ご分のひとり子を、もつとはげしい戦いと、もつと恐ろしい危険に会わせるためにお与えになった。ここにこそ愛がある。ああ、もろもろの天よ、驚嘆せよ。ああ、地よ、おどろけ。

第5章

献納

本章はルカ二ノ二一―三八にもとづく

キリストがお生れになって四十日ばかりたつと、ヨセフとマリヤは、イエスを神にささげ、またいけにえをささげるために、イエスをエルサレムにつれて行った。このことはユダヤ人の律法に定めてあるのに従ったもので、キリストは、人間の身代りとして、こまかい点まで律法に従われねばならない。律法に従っているしとして、キリストはすでに割礼の式をお受けになっていた。

律法によれば、母親の献げ物として燔祭(はんさい)のために一才の小羊、罪祭のために若い家ばとまたは山ばとをささげるように要求されていた。しかしもし両親が貧しくて小羊をささげることができなければ、一つがいの山ばともしくは二羽の若い家ばとを、一羽は燔祭のために、一羽は罪祭のためにささげても受け入れられることが律法に定められていた。

神にささげる献げ物はきずのないものでなければならなかった。こうした献げ物はキリストを表わしていた。このことからイエスご自身が肉体的に欠点のないおかたであることが明らかである。キリストは、「きずも、し

みもない小羊」であつた(ペテロ第一・一ノ一九)。キリストのおからだにはどんな欠点によるきずもなく、その肉体は強く健康であつた。そしてキリストは一生の間自然の法則に従つた生活を送られた。靈的ばかりでなく肉体的にも、キリストは、神の法則に従うことによつて神がすべての人間をこのようなものにしたいとご計画になつたものの見本であられた。

長子を神にささげることは、最も古い時代から始まつていた。神は天の長子であられるキリストを罪人の救いのために与えると約束された。この賜物(たまもの)をみとめるしとして、どの家庭においても、長男が神にささげられた。長男は、人々の中におけるキリストの代表者として、祭司職にささげられるのであつた。

イスラエルがエジプトから救われた時、長子をささげることがふたたび命じられた。イスラエルの民がエジプト人の奴隷となつていたとき、神はモーセに、エジプトの王パロのところへ行つてこう言いなさいと命令された。「『主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせなさい。もし彼を去らせるのを拒むならば、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺すであろう』と」(出エジプト記四ノ二二、二三)。

モーセはこのことを伝えたが、高慢な王はこう答えた。「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従つてイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」(出エジプト記五ノ二)。神はご自分の民のためにしるしとふしぎを通して働き、パロの上に恐るべき刑罰をお送りになつた。ついに、滅びをもたらす天使が、エジプト人の中の長子と獣の初子(ういご)を殺すように命じられた。

イスラエル人が救われるためには、殺した小羊の血を門口に塗るように命じられた。天使が死の使いにやってきたとき、イスラエル人の家々を過ぎ去るように、どの家にも目印がつけられるのであった。

この刑罰をエジプトに送られてから、神はモーセにこう言われた。「イスラエルの人々のうちで、すべてのういご、すなわちすべてはじめに胎を開いたものを、人であれ、獣であれ、みな、わたしのために聖別しなければならぬ。それはわたしのものである。」「ういごはすべてわたしのものだからである。わたしは、エジプトの国において、すべてのういごを撃ち殺した日に、イスラエルのういごを、人も獣も、ことごとく聖別して、わたしに帰せしめた。彼らはわたしのものとなるであろう。わたしは主である」(出エジプト記一三ノ二、民数記三ノ一三)。幕屋の奉仕が制定されてからは、神は、聖所で奉仕するために、全イスラエルの長子の代りにレビ族を選びになった。しかし長子はやはり神のものとみなされ、あがないの金で買ひもどされるのであった。

このように、長子をささげる律法は特に意義のあるものとされていた。それは神がイスラエルの民を救済されたいしぎなみわざの記念であると同時に、また神のひとり子イエスによってなしとげられるさらに大いなる救済を予表していた。門口に塗られた血によってイスラエルの長子が救われたように、キリストの血には世の人々を救う力がある。

だからキリストの献納には何という深い意味があつたことだろう。だが祭司はそのヴェールの中まで見なかった。彼はその奥にある神秘を読まなかった。幼子をささげることはよく見られる光景であつた。来る日も来る日も、祭司は赤ん坊を神にささげるたびにあがないの金を受け取った。毎日毎日、彼はこのきまりきった日課をく

りかえし、両親が金持ちだとか身分が高いなどという何らかのしるしを見ること以外には、親や子供たちにほとんど注意を払わなかった。ヨセフとマリヤは貧しかった。彼らが子供をつれてきたとき、祭司たちはそこにガラヤ人のみなりをして最も粗末な服を着た一組の男女を見たにすぎなかった。彼らの様子には人の注意をひくようなものは何もなかった。彼らは貧しい階級の人々のために定められた献げ物しかささげなかった。

祭司は職務通りに式をとり行なった。彼は子供を腕に受け取ると、その子を祭壇の前にさし出した。それからまた母親の手にもどして、長子の名簿に「イエス」という名前を書き入れた。赤ん坊を腕にだいていたとき、彼はその子が天の大君、栄光の王であるなどとは思ひもなかった。祭司はこの赤ん坊が、モーセによって「主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。その預言者があなたがたに語ることに、ことごとく聞きしたがいないさい」と書かれていたおかたであるとは思ひもかけなかった(使徒行伝三ノ一二)。彼はこの赤ん坊こそモーセがその栄光を見たいと願ったおかたであるとは、思ひもしなかった。ところが、モーセより偉大なおかたがこの祭司の腕にだかれておられたのである。祭司がこの子供の名前を名簿に記入したとき、彼はユダヤ人の制度全体の土台であるおかたの名前を書き入れていたのだった。その名はユダヤ人の制度を廃止する宣告となるのだった。いけにえと献げ物の制度はだんだん古くなっていたからである。型は本体に、影は実物にほとんど合っていた。

シカイナ(注・贖「しよく」罪所のエホバの栄光)はすでに聖所からとり去られていたが、栄光はベツレヘムの幼子イエスのうちにおおいかくされ、その前に天使たちは頭をたれるのであった。何も知らないこの幼子は、約束



ヨセフとマリヤは、幼子を神にささげるためにエルサレムの宮へつれて行った。彼らがまだそこにいたとき、シメオンとアンナがやってきて、幼子を見、メシヤについて預言した。

の後裔で、エデンの門の最初の祭壇はこのおかたをさしていた。この幼子こそ平和を与えるおかた、シロであった。「われはありてある者なり」とモーセにご自身を宣告されたのはこのおかたであった。雲と火の柱の中にあつてイスラエルをみちびかれたのはこのおかたであった。これこそ預言者たちが長い間預言してきたおかたであった。彼は万国の民の願望であり、ダビデの祖先でありまた子孫であり、輝くあけの明星であった。イスラエルの名簿に書きこまれ、われわれの兄弟たることを宣告されたこの無力な小さな赤ん坊の名前こそ、墮落した人類の望みであった。あがないの金を払ってもらつたこの子供が、全世界の罪のためにあがないの金を払われるおかたであった。彼は、「神の家を治める大いなる祭司」であり、「変らない祭司の務」の長であり、「高き所にいます大能者の右に、座につかれた」仲保者であつた（ヘブル一〇ノ二、七ノ二四、一ノ三）。

靈的な事物は靈的に見られる。宮の中で、神のみ子は、ご自分がそのためにおいでになつた働きのためにささげられた。祭司はイエスをほかの子供と同じようにみなした。彼は普通と変つたものを何も見たり感じたりしなかつたが、み子をこの世にお与えになつた神の行為はみとめられた。この機会は、キリストがみとめられないままに過ぎ去りはしなかつた。「そのとき、エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。そして主のつかわす救い主に会うまでは死ぬことはない」と、聖霊の示しを受けていた（ルカ二ノ二五、二六）。

シメオンが宮にはいつてくると、彼はそこに長子を祭司の前にさし出している家族を見る。彼らの身なりは貧しさを物語っている。だがシメオンは聖霊のお告げがわかる。彼は神にささげられている幼子が、イスラエルの

慰め主、長い間待ちこがれていたおかたであるとの印象を強く受ける。驚いた祭司の目には、シメオンが狂喜した人間のように見える。子供はマリヤの手にかえされていたが、彼はそれを自分の腕に受けとって神にささげる。すると彼の心にかつて経験したことのない歓喜がわき起る。彼は幼子の救い主を天の方へ高く持ちあげて、「主よ、いまこそ、あなたはみ言葉のとおりにこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」と言う（ルカ二ノ二九―三二）。

預言の霊がこの神のしもべの上にくだった。ヨセフとマリヤが彼のことばをあやしみながら立っていると、シメオンは彼らを祝福し、マリヤに向かって、「ごらんなさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしとして、定められています。――そしてあなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。――それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」と言った（ルカ二ノ三四、三五）。

女預言者アンナもはいってきて、キリストについてシメオンのあかしを確認した。シメオンが語ると、アンナの顔は神の栄光に輝き、彼女は主なるキリストを見ることがゆるされたことに心から感謝のことばを出した。

こつした謙虚な礼拝者たちが預言を研究していたことはむだではなかった。だがイスラエルの役人や祭司として地位を占めていた人たちは、同じように預言のとうといことばを目の前にしながら、主の道に歩まず、その目はいのちの光であられるキリストを見るために開かれていなかった。

いまでも同じである。宗教界の指導者たち、神の家の礼拝者たちは、全天の注意が集中されている諸事件をみわけることができず、そのような事件が起ったことさえ気がつかない。人は歴史上のキリストをみとめるが、生きておられるキリストからは離れ去っている。自己犠牲を呼びかけているみことばの中のキリスト、助けを訴えている貧しい人々や苦しんでいる人々の中におられるキリスト、貧しさと骨折りと恥を伴う義の働きの中におられるキリストは、千八百年前と同じように今もまた容易に人々に受け入れられないのである。

マリヤは、シメオンの深遠な預言を心に思いめぐらした。自分の腕にだかれている子供をながめ、ベツレヘムの羊飼たちが語ったことばを心に思い浮べて、マリヤは感謝のよろこびと輝かしい望みに満たされた。シメオンのことばは彼女の心にイザヤが預言したことばを思い起させた。「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。……正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる。」「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。……ひとりのみどりごがわれわれのために生れた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる」(イザヤ書一一五、九二—一六)。

しかし、マリヤはキリストの使命を理解しなかった。シメオンは、キリストのことをイスラエルの栄光であるばかりでなく、異邦人を照す光であると預言した。同じように天使たちは、救い主の誕生を全人類へのよろこびのおとずれとして告げ知らせた。神はメシヤの働きについてユダヤ人の狭い考え方を直そうとしておられた。神

は、人々がキリストをイスラエルの救済者としてばかりでなく、また世のあがない主として見るように望まれた。だがイエスの母マリヤでさえイエスの使命を理解するのに長年かからねばならない。

マリヤは、メシヤがダビデの位にあって統治されるのを待ち望んだが、それが苦難のバプテスマによって獲得されなければならないことには気がつかなかった。メシヤがこの世で歩まれる道は平坦（へいたん）な道ではないことが、シメオンを通して明らかにされている。「あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう」とマリヤに言われたことばの中に、やさしいあわれみのある神は、イエスの母の苦悩を暗示されたが、彼女はイエスのためにすでにその苦悩を負い始めていた（ルカ二ノ三五）。

シメオンは、「ごらんなさい。この幼な子は、イスラエルの多くの人々を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています」と言った（ルカ二ノ三四）。もう一度立ちあがりたいた者は倒れねばならない。キリストのうちにあって高められるには、その前に岩なるキリストの上に落ちてくだかれねばならない。霊的王国の栄光を知りたければ自我を心の王座から退け、高慢な心がへりくだらねばならない。ユダヤ人は、屈辱を通して到達される栄光を受けようとしなかった。したがって、彼らは彼らの救い主を受け入れようとしなかった。彼は、「反対を受けるしるし」であった（ルカ二ノ三四）。

「多くの人の心にある思いが現れるようになるためです」（ルカ二ノ三五）。救い主の生涯の光の中には、創造主から暗黒の君にいたるまで、すべての人の心があらわされている。サタンは神のことを、利己的で圧制的なおかた、すべてを要求されるが、何一つお与えにならないおかた、自分自身の榮譽のために被造物の奉仕を要求され

るおかた、被造物のために何の犠牲も払わないおかたであるなどと言いふらしてきた。だがキリストという賜物が天父のみこころをあらわしている。それは、われわれに対する神のみこころが「わざわいを与えようというのではなく、平安を与えよう」との思いであるという証拠である（エシミヤ書一九ノ一二）。それは神が罪を憎まれることは死のように強く、罪人に対する神の愛は死よりも強いことを宣言している。神は、われわれのあがないを引き受けられたからには、その働きの完成に必要なものは、それがどんなに大事なものであろうと、何一つ惜しまれないのである。われわれの救いに必要な真理は何一つ与えられないものではなく、どんな恵みの奇跡もあるそかにされず、どんな天来の方法も用いられないものはない。恵みに恵みが、賜物に賜物が加えられる。神が救おうとしておられる人々のために天の倉庫は全部開かれている。神は宇宙の富を集め、無限な力のみなもとを開いて、それらを全部キリストの手にお与えになり、これは全部人類のためだと言われる。天にも地にもわたしの愛より大きな愛はないことを人々にわからせるためにこれらの賜物を用いなさい。人の最大の幸福は、わたしを愛することにあるのだ。

カルバリーの十字架に、愛と利己心が向かい合って立った。ここにこの両者の最高のあらわれがあった。キリストは慰め、祝福するためだけに生活された。ところがサタンはキリストを死なせることによって神に対する憎悪という悪意をあらわした。サタンは彼の反逆の真の目的が神をみ座から退けることと、神の愛を現わされたキリストを滅ぼすことにあることを明らかにした。

キリストの一生と死によって人の思いもまた明るみに出た。うまぶねから十字架にいたるまで、キリストの一

生は克己への呼びかけであり、苦難を共にするようにとの呼びかけであった。それは人々の意図をあらわした。イエスは天の真理をもっておいでになったが、聖霊の声をきいていた者はみなキリストにひきつけられた。自我をおがんでいた者はサタンの王国に属した。キリストに対する態度を通してみな自分がどちらの側に立っているかをあらわした。このようにして人はみな自分で自分に宣告をくだすのである。

最後の審判の日に、失われた魂はみな自分が真理をこぼんだことがどういうことであつたかをさとる。十字架が示されると、罪とがのために心がめくらになっていた者がみな十字架の真の意義をさとる。神秘的な犠牲者イエスのカルバリーの光景を前にして、罪人は有罪の宣告を受ける。あらゆるいつわりの口実は一掃される。人類の背信はその憎むべき性格のままにあらわされる。人々は自分たちの選択がどんなものであつたかを知る。長年の争闘における真理と誤謬(ごびゅう)の問題がその時明らかにされる。宇宙のさばきにおいて、神には罪の存在や罪の継続にすこしも責任のないことがわかる。神の律法は罪の幫助(ほうじょ)ではないことが実際に示される。神の統治には欠点がなく、不満の原因はなかった。すべての人の心の思いが明らかにされるとき、神の忠実な者たちも反逆した者たちも声をそろえて、「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。主よ、あなたをおそれず、み名をほめたたえない者が、ありましようか。……あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからであります」と宣言する(黙示録一五ノ三、四)。

第 6 章

わたしたちはその星を見た

本章はマタイ二章にもとづく

「イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、『ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました』」（マタイ二ノ一、二）。

東の博士たちは哲学者であつた。彼らは貴族を含む有力な大階級に属し、国民の富と学問の大部分を占めていた。これらの人々の中には民衆の信じやすい心につけこむ者が多かつた。しかし自然界における神のしるしを調べ、その高潔さと知恵を尊敬されている人々もいた。イエスのところへやってきた博士たちはこの種類の人たちであつた。

神の光はいつも異教の暗黒の中に輝いている。これらの東の博士たちが星空を調べ、星の光る道にかくされている神秘をさぐっていたとき、彼らは創造主の栄光を見た。もつとはっきりした知識を求めて、彼らはヘブライの聖書を調べた。彼ら自身の国には、天来の教師が現われることを予告した預言者の書が秘蔵されていた。バラ

ムは一時は神の預言者だったが、魔術士に属していた。聖霊によって彼はイスラエルの繁栄とメシヤの現われを預言したことがあって、その預言が言い伝えによって世紀から世紀へ伝えられていた。しかし旧約聖書の中には、救い主の来臨がもつとはつきり啓示されていた。博士たちは、キリストの来臨が近いことと、全世界が神の栄光についての知識で満たされることを知ってよろこんだ。

ベツレヘムの丘に神の栄光が満ちあふれたその夜、この博士たちは天に一つの神秘的な光を見た。その光が消えると、一つの光り輝く星があらわれ、空にとどまった。それは恒星でも遊星でもなかったで、この現象は最も深い興味をそそった。この星は遠くに輝く一群の天使たちだったが、博士たちはそのことを知らなかった。だが彼らは、その星が自分たちにとって特別な意味があるという感銘を受けた。彼らは祭司たちや哲学者たちの意見をきき、古代の記録の巻物を調べた。バラムの預言には、「ヤコブから一つの星が出、イスラエルから一本のつえがおこり」とあった(民数記二四ノ一七)。このふしぎな星は約束されたおかたの前ぶれとしてつかわれたのではないだろうか。博士たちは天来の真理の光をよるこんで受け入れていた。いまその光は一層明るい光で彼らを照らした。彼らは夢を通して、こんどお生れになった君をさがしに行くようにとのお告げを受けた。

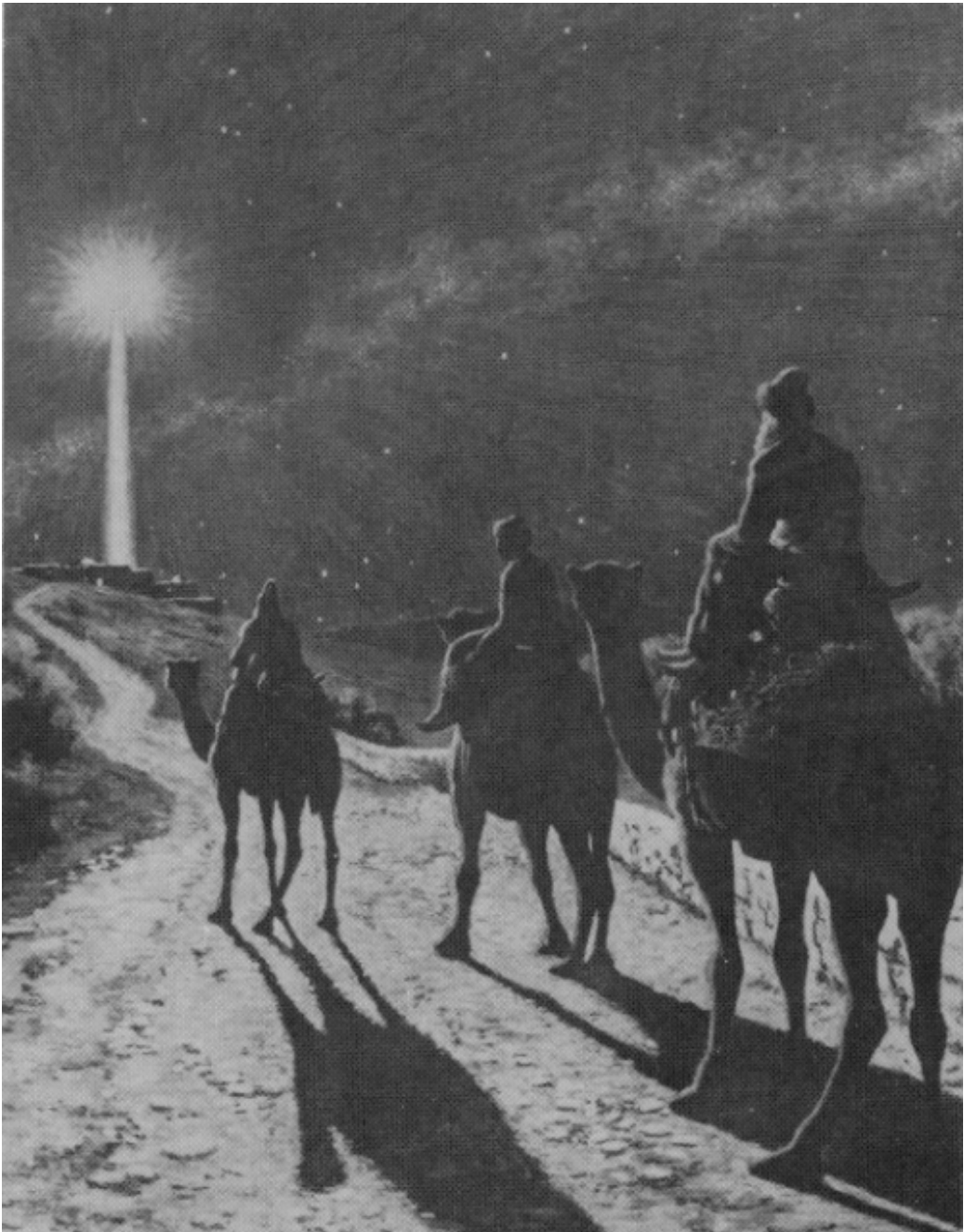
アブラハムが神の召しを受けて、「その行く所を知らないで」信仰によって出て行ったように(ヘブル一ノ八)、またイスラエル人が信仰により雲の柱のあとについて約束の地へ行ったように、この異邦人たちは約束の救い主をみつけるために出かけて行った。東の国には宝がたくさんあったので、博士たちはからてでは出発しなかった。王子たちや身分の高い人たちに敬意を表わす行為として贈り物をささげるのが習慣だったので、地上の全人類の

祝福となつてくださるおかたにささげる贈り物として、彼らは国にある最高の贈り物をたずさえて行つた。星を目当てに行くには夜間に旅をしなければならなかつた。だが旅人たちは、さがし求めているおかたについての言い伝えや預言のことはをくりかえして時間をまぎらした。休息のために立ちどまるたびに、彼らは預言を調べた。すると、自分たちは神にみちびかれているのだという確信が強くなった。彼らの前には外面的な星があつたが、同時にまた聖霊による内面的な証拠があたえられ、それが彼らの心に語り、望みを起させるのだつた。旅は長かつたが、彼らにとって楽しい旅であつた。

博士たちは、イスラエルの国に到着し、エルサレムを見おろしながらオリブ山をくだっている。するとその時、見よ、疲れた旅路をずっとみちびいてきた星が宮の上にとまり、しばらくすると、彼らの視界から消える。彼らは、人々がみなメシヤの誕生を□々に語り合つてよろこんでいるにちがいないと確信して、元気な足どりで進んで行く。だが彼らの質問はむだである。聖都にはいると、彼らは宮へ行く。驚いたことに、生れたばかりの王について知っているらしい者はひとりもない。彼らにたずねられて人々の顔にはよろこびの色が浮かないで、むしろ驚きと恐れがみられ、軽蔑さえまじつていないとはいえない。

祭司たちは言い伝えをくりかえしている。彼らは自分たちの宗教と自分自身の敬虔さを称賛するが、その一方ではギリシヤ人やローマ人を異教徒として攻撃し、まただれよりも罪人を責める。博士たちは偶像礼拝者ではなく、神の御目には、神の礼拝者であることを自称しているこれらの人たちよりもずっと高い立場にあるが、ユダヤ人からは異教徒としてみられている。神のみことばの保護者として任命されている人たちの中にあつてさえ、

第6章 わたしたちはその星を見た



東方の国から、博士たちがイスラエルの新しい王にすばらしい贈り物をたずさえてやってきた。彼らをついにはベツレヘムへみちびいた星に従うために、彼らは夜間に旅をつづけた。

博士たちの熱心な質問は共感をよび起さない。

博士たちの到着はたちまちエルサレムじゅうに言いふらされた。彼らのふしぎな使命は民衆の間にさわぎをひき起し、それはヘロデ王の宮殿の中にまで伝わった。ずるいエドム人であるヘロデは、競争者があらわれるかもしれないという暗示に感情を刺激された。彼の王位への道は、かぞえきれない殺人の血にそまっていた。異なった人種の血をひいていたために、彼は統治している人民から憎まれていた。彼の唯一の安全保障はローマのひいきであつた。しかしこの新しい君は、ヘロデよりも高い権利を持つておられた。彼はこの王国を継ぐ者としてお生れになつたのである。

ヘロデは、祭司たちがこの旅人たちとはかりごとをめぐらして、民衆の暴動をひき起し、自分を王位から追ひ出そうとしているのではないかと疑つた。しかし彼は、もつとすぐれた巧妙さで彼らのくわだての裏をかいてやろうと決心し、彼らに対する疑惑をかくした。彼は祭司長たちと律法学者たちとを召し集めると、メシヤ生誕の場所について聖書には何と教えられているかとたずねた。

王位を奪つた者の口から、しかも旅人たちの願いによつてなされたこの質問は、ユダヤの教師たちの誇りを傷つけた。預言の書に対する彼らの無関心な態度はこのねたみ深い暴君を怒らせた。王は彼らがその問題について知っているのをかくそうとしているのだと思つた。王はあえて無視できないような權威をもって、彼らの期待している王の生誕地をよく調べて返答するように命じた。「彼らは王に言った、『それはユダヤのベツレヘムです。預言者がこうしてしています、

「ユダの地、ベツレヘムよ、

おまえはユダの君たちの中で、

決して最も小さいものではない。

おまえの中からひとりの君が出て、

わが民イスラエルの牧者となるであろう」』

(マタイ二ノ五、六)

そこでヘロデは、博士たちを招いて個人的に面会した。彼の心には怒りと恐れ(の嵐(あらし))がたけり狂っていたが、外観は平静をよそあって、旅人たちにいんぎんに応対した。王はいつ星が現われたかをたずね、キリストがお生れになったらしいという知らせをよるこんで歓迎するような口をきいた。彼は来訪者たちに、「行って、その幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてくれ。わたしも拝みに行くから」と告げた(マタイ二ノ八)。そう言って王は、ベツレヘムへの道をつづけさせるために彼らを去らせた。

エルサレムの祭司たちと長老たちは、知らないふりをしていたが、しかし実際にキリストの生誕について知っていなかったのではなかった。天使たちが羊飼たちのところへやってきたといううわさはエルサレムに伝わっていたが、ラビたちはそれを注目に値しないものとみなしていた。ラビたち自身がイエスをさがし出して、博士たちをその誕生の場所に案内するのならまだしも、そうではなくて、博士たちがメシヤの誕生について彼らの注意

をよび起すためにやってきたのである。「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにあられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拜みにきました」と博士たちは言った(マタイ二二)。

そこで、高慢とねたみのために、光に対してとびらがとざされた。羊飼たちと博士たちによって伝えられたうわさがもし信用されたら、祭司たちとラビたちの立場ははなはだおもしろくないものになり、自分たちが神の真理の解説者であるという彼らの主張はくつがえされることになる。この学識のある教師たちは、自分たちが異教徒と呼んでいる人々の前に身を低くして教えを受けようとはしなかった。神が自分たちをみすごして、無知な羊飼たちや割礼を受けていない異邦人たちにお知らせになるはずがないと、彼らは言った。彼らはヘロデ王やエルサレムじゅうをわきたさせているうわさに軽蔑を示そうと決心した。彼らはそうしたことがほんとうかどうかを確かめるためにベツレヘムに行ってみようとさえしなかった。そしてイエスについての関心を狂信的な騒ぎだと人々に考えさせた。祭司たちとラビたちからキリストが捨てられることはここにはじまった。ここから彼らの高慢と頑迷さが、救い主に対するかわらない憎しみへと発展していった。神が異邦人に門戸をお開きになっているのに、ユダヤ人の指導者たちは彼ら自身の門戸をとざしていた。

博士たちは彼らだけでエルサレムを出発した。町の門を出ると夜の影がおりてきたが、彼らはふたたびあの星をみつけて非常によろこび、ベツレヘムへみちびかれた。博士たちは、イエスのいやしい身分について羊飼たちが受けたような知らせを受けていなかった。長い旅のうちに、彼らはユダヤ人の指導者たちの無関心に失望し、エルサレムを出るときには町へはいってきた時ほどの確信がなかった。ベツレヘムでは生れたばかりの王を護衛

するために駐在している親衛隊はみられなかった。世の高位高官の人たちはだれもつきそっていないかった。イエスはうまぶねをゆりかごとしておられた。無教育でないなか者である両親が、イエスの唯一の保護者であった。これがほんとうに、「ヤコブのもろもろの部族をおこし、イスラエルのうちの残った者を帰らせる……もろもろの国びとの光となして、わが救いを地の果にまでいたらせよう」と書かれているおかただろうか(イザヤ書四九ノ六)。

「(彼らは)家にはいつて、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝」んだ(マタイ二ノ一二)。イエスのみすばらしい身なりの下に、彼らは神の臨在をみとめた。彼らはイエスを救い主として愛し、それから「黄金・乳香・没薬(もつやく)」などの贈り物をさし出した(マタイ二ノ一二)。彼らの信仰は何というりっぱな信仰だったことだろう。のちにローマの百卒長に、「イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない」と言われたことは、この東の博士たちについても言えたであろう(マタイ八ノ一〇)。

博士たちはイエスに対するヘロデの計略を見破っていなかった。旅の目的を果たすと、彼らはその成功をヘロデに知らせるつもりで、エルサレムへ引き返すしたくをした。ところが彼らは夢の中で、もうヘロデと連絡してはならないという神のお告げを受けた。彼らはエルサレムをさけて、別な道から自分たちの国へ向かって出発した。同じようにヨセフは、マリヤと子供をつれてエジプトへのがれるようにとの警告を受けた。天使は、「あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子をさがし出して、殺そうとしている」と言った(マタイ二ノ一三)。ヨセフはすぐにそのことばに従い、もっと安全なところを求めて夜のあいだに旅立った。

博士たちを通して、神はユダヤ国民の注意をみ子の誕生に向けられたのだった。彼らがエルサレムでたずね、民衆の関心がそられ、ヘ□デのねたみまでひきおこし、否応なしに祭司たちとラビたちとの注意がよび起され、こうしたことのために人々の心は、メシヤに関する預言と、いま起ったばかりの大事事件に向けられた。

サタンは世から神の光をしめ出すことに力を尽し、救い主を滅ぼすためにあらゆる悪知恵を用いた。しかしまどろむことも眠ることもなさらない神は、いと子イエスを見守っておられた。イスラエルのために天からマナをふらせ、飢饉(ききん)の時にエリヤを養われた神は、マリヤとみ子イエスのために異教の土地に避難所をお備えになった。また異教の国の博士たちの贈り物によって、神は、エジプトへの旅と異国における滞在の費用をお与えになった。

博士たちはあがない主をよろこび迎えた最初の人々の仲間だった。彼らの贈り物はイエスの足もとにささげられた最初の贈り物だった。その贈り物によって、彼らは何というとうとい奉仕の特権をわがものとしたことだろう。神は愛の心から出た贈り物をよろこんでとうとび、神への奉仕にそれを最も効果的にお用いになる。心をイエスにささげたなら、われわれもまた贈り物をイエスのもとに持参するであろう。われわれの金も銀も、われわれのどんなに貴重なこの世の財産も、またわれわれの最高の知的靈的才能もみな、われわれを愛し、われわれのためにご自身をお与えになったイエスに惜しみなくささげられるであろう。

エルサレムではヘ□デが博士たちの帰りをいらいらしながら待っていた。時がたっても彼らが現われないので、ヘ□デは疑いを起した。ラビたちがメシヤの生誕地を明示したがいなかったことは、彼らが自分の計画を見抜い

ていて、博士たちがわざと自分を避けた証拠のように思われた。そう思うと彼ははげしい怒りを感じた。計略は失敗したが、力に訴える方法が残っていた。彼はこの王となるべき子供を見せしめにしようと思った。君主を王座につけようとすればどんな目に会わねばならないかを、この高慢なユダヤ人らに思い知らせねばならない。

二才以下の子供を全部殺せという命令をもって、ただちに兵士たちがベツレヘムへつかわされた。ダビデの町の静かな家々に、六百年前預言者エシミヤに示された恐怖の光景がみられた。「叫び泣く大いなる悲しみの声がラマで聞えた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、慰められることさえ願わなかった」(マタイ二一八)。

この災難はユダヤ人が自ら招いたものだった。もし彼らが神の前に忠実に、へりくだって歩んでいたら、神はヘロデ王の怒りを特殊な方法で彼らに害のないものとされたのである。だが彼らは罪のために神から離れ、唯一の守りである聖霊をこぼんでいた。彼らは神のみこころに従いたいとの思いをもって聖書を学んでいなかった。彼らは、自分たちがえらい国民になるとか、神は自分たち以外の国民をみな軽んじておられるというふうに解釈されるような預言ばかりをさがしていた。メシヤが王として現われて、敵を征服し、怒りをもって異教徒をふみつけるということが彼らの自慢であった。こうしてユダヤ人は統治者たちの憎しみを刺激していた。キリストの使命について誤った考えをユダヤ人にいだかせることによって、サタンは救い主の破滅をたくらんでいた。だがその目的はとげられず、破滅はかえってユダヤ人自身の頭上にはねかえってきた。

これはヘロデの治世を暗くした最後の残虐行為の一つであった。罪とがのない子供たちを殺害してまもなく、

彼自身、だれも避けることのできない運命に屈伏させられた。彼は恐ろしい死に方をした。

ヨセフはまだエジプトにいたが、いま神の天使からイスラエルの国へ帰るように命じられた。イエスがダビデの王位の後継者であることを考えて、ヨセフはベツレヘムに家庭を持ちたいと望んだ。だがアケラオが父に代ってユダヤを治めていることを知って、彼はこの息子(おすこ)がキリストに対する父ヘロデの計略を実行しはすまいかと恐れた。ヘロデの息子たちの中で、アケラオが父親の性格に一番よく似ていた。彼が統治の位を継いだためにすでにエルサレムでは暴動がみられ、ローマの守備兵によって幾千のユダヤ人が殺害されていた。

ふたたびヨセフは安全な場所へみちびかれた。彼は以前の故郷であるナザレにもどり、ここにイエスはおよそ三十年間お住みになった。「これは預言者たちによって、『彼はナザレ人と呼ばれるであろう』と言われたことが、成就するためである」(マタイ二二三)。ガリラヤはヘロデの息子の一人によって支配されていたが、ここにはユダヤよりもっと多くの外国人がまじって住んでいた。したがって、特にユダヤ人に関係のある問題については比較的関心が薄く、イエスの主張はそれほど権力者たちのねたみをひき起しそうになかった。

救い主がこの世においでになったとき、世はこのような迎え方をした。あがない主であられる幼な子には、休息や安全な場所はないようにみえた。神が人類の救いのために働きをつづけておられる時でさえ、神はいとし子を人間の手にまかせることがあできにならなかった。キリストがこの地上における使命を達成して、救うためにおいでになったその人々の手にかかってなくなれるまで、神は天使たちに命じてイエスにつきそわせ、イエスを守らせられた。

第 7 章

子供として

本章はルカ二ノ三九、四〇にもとづく

イエスは少年時代と青年時代を小さな山村ですごされた。この地上のどんな場所もキリストがお住みになればとつといところとなるのであった。王の宮殿がイエスを客として迎える特権を持つこともできたであろう。だがイエスは金持ちの家庭や、王宮や、有名な学問の中心地をみすごして、人々にあなごられた片いなかのナザレを故郷とされた。

イエスの少年時代についての短い記録にはすばらしい意味がある。「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった」(ルカ二ノ四〇)。イエスは、天父の愛情にはぐくまれて「ますます知恵が加わり、背だけも伸び、そして神と人から愛された」(ルカ二ノ五二)。イエスの知能は活発で鋭く、年令以上に思慮と知恵があった。しかしその品性は均整がとれて美しかった。心とからだの能力は、幼年時の法則に調和してだんだんに発達した。

子供としてイエスは、特にやさしい性質をあらわされた。彼はいつでも人に仕えるためによるこんで手をかさ

れた。イエスは何ものにもさまたげられない忍耐力と、決して正直さを犠牲にするようなことのない真実さをあらわされた。主義においては岩のように固かったが、その生活には無我の親切心という美德があらわれていた。

イエスの母は、深い関心をもってイエスの能力のあらわれを見守り、イエスの品性に完全の刻印を見た。彼女はよろこんで、このりこうなもののわかりのよい頭脳を力づけようとした。彼女は、神だけをわが父と呼ぶことができるこの子供の発達に、天と協力する知恵を、聖霊を通して受けた。

遠い昔の時代から、イスラエルの忠実な人々は、青少年の教育に非常な注意を払ってきた。主は、子供たちに、赤ん坊の時からさえ、神の恵みと大いなる力について、特に神の律法にあらわされまたイスラエルの歴史に示されている神の恵みと大いなる力について教えるように命じておられた。歌と祈りと聖書の教訓が、成長する心に適用されるのであった。神の律法は神のご品性のあらわれであって、その律法の原則を心に受け入れるときに、心と魂には神のみかたちが書き写されるということを、父母たちは子供たちに教えるのであった。教える多くは口頭でなされたが、青年たちはヘブル語の書物を読むことも学び、旧約聖書の羊皮紙の巻物を開いて学んだ。

キリストの時代には、青少年の宗教教育のために方法を講じない町や市は、神にのろわれるものとみなされた。しかし教育は形式的になっていた。大部分言い伝えが聖書と入れ代っていた。真の教育は、青少年が「熱心に追いつめて捜しさえすれば、神を見い出せるように」することであった(使徒行伝一七ノ二七)。ところがユダヤ人の教師たちは儀式のことにばかり注意を払った。学ぶ者にとって無価値で、天の上級学校ではみとめられないような材料で頭がいっぱいになった。神のみことばを個人的に受け入れることによって得られる経験は教育制度の

中に立場を与えられていなかった。外面的なことのくりかえしにばかり没頭していて、学生たちは神とともにすごす静かな時間がなかった。彼らは神のみ声が心に語りかけるのをきかなかった。彼らは知識を求めて、知恵のみなもとであられる神から離れた。神への奉仕にどうしてもなくてはならないものがかえりみられなかった。律法の原則はおおいかくされた。すぐれた教育と考えられたものが、真の発達にとって最も大きなさまたげとなった。ラビたちの教育の下にあつて、青少年たちの能力は抑制された。彼らの頭は固く、狭くなった。

子供のイエスは会堂の学校で教えを受けられなかった。イエスの母が、イエスの最初の人間教師であつた。彼女の口と預言者たちの巻物から、イエスは天の事物について学ばれた。イスラエルのためにご自身がモーセにお語りになったことは、イエスはこんどは母のひざもとで教えられた。子供から青年へ進まれるときも、イエスはラビの学校を求められなかった。イエスはこのような学校から得られる教育を必要とされなかった。なぜなら神がイエスの教師であられたからである。

救い主の公生涯の間にたずねられた質問、「この人は学問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだらう」ということは、イエスが読み書きがおできにならなかったということではなくて、ただラビの教育をお受けにならなかったということである(ヨハネ七ノ一五)。イエスは、われわれと同じようにして知識を得られたのだから、彼が聖書に精通しておられたということは、少年時代にどんなにまじめに神のみことを学ばれたかを示している。イエスの前には、神の創造のみわざというすばらしい書庫がくりひろげられていた。万物をおつくりになったおかたが、ご自分の手で地と海と空とにお書きになった教えを学ばれたのである。この世



イエスはいなかの家庭で成長され、ご自分にわりあてられた働きを忠実に快活にされた。イエスは大工仕事を習いおぼえて、おとなになるまでヨセフの仕事場で働かれた。

のきよくない方法から離れて、イエスは自然から多くの科学的な知識を集められた。イエスは植物や動物の生活、また人間の生活を研究された。イエスは幼い時から一つの目的を持っておられた。それは他人を祝福するために生きるということだった。このためにイエスは自然界にその方法をみいだされた。植物の生活と動物の生活を研究されると、そこから方法や手段についての新しい考えが頭にひらめいた。イエスは目に見えるものの中から、神の生きたみことばを示す実例をたえずひき出そうとしておられた。キリストが、公生涯中に、譬(たとえ)をもつて真理についての教訓を教えることを好まれたことは、その心が自然の影響力に向かって開かれていたことと、彼が日常生活の環境から霊的な教えを集められたことを示している。

このように、物事の理由をさとうとつとめられたとき、神のみことばとみわざの意味がイエスに示された。天使たちがイエスのそばにつきそっていたので、聖なる思想と霊的なまじわりという教養がイエスのものとなった。知性が芽ばえはじめてから、イエスはたえず霊的な恵みと真理の知識に成長しておられた。

どの子供もイエスと同じように知識を得ることができる。われわれがみことばを通して天父をよく知ろうとつとめるとき、天使たちがそばにきて、われわれの知能が強められ、われわれの品性が高められ、洗練される。われわれはますます救い主に似る者となる。またわれわれが自然の美しさと雄大さをながめるとき、われわれの愛情は神のもとへひきよせられる。みわざを通して無限なる神と接触することによって、心はおそれに満たされ、魂は活気づけられる。祈りを通して神とまじわるることによって知的道德的能力が発達し、霊的な事物について思想を養うときに霊的な能力が強められる。

イエスの一生は神と調和した生涯であつた。子供の時分には子供のように考え、子供のように語られた。しかしイエスのうちにある神のみかたちを傷つける罪のあとではなかつた。それでも彼は試みからまめかれてはあらなかつた。ナザレの住民は悪いことで有名だつた。彼らが一般からどんなに低く見さげられていたかは、ナタナエルが、「ナザレから、なんのよい者が出ようか」と質問したことばにあらわれている(ヨハネ一ノ四六)。イエスはその品性を試みられるような場所におかれた。イエスはご自分の純潔を保つためにたえず警戒してあられる必要があつた。イエスは子供の時にも青年の時にもおとなになつてからも、われわれの模範となるために、われわれが出会わねばならないあらゆる戦いに会われた。

サタンはナザレの子イエスを征服しようとして根気よく努力した。イエスは幼い時から天使たちに守られておられたが、それでも彼の一生は暗黒の勢力との長い戦いであつた。この地上に悪のけがれにそまらない人間がいるということが、暗黒の君サタンにとっては不快であり、困つたことであつた。サタンは、イエスをわなにかけるためにあらゆる手段をあますところなく用いた。どんな人間も、救い主が試みとのほげしい戦いのさなかで送られたようなきよい生活を送るようには求められることはないであらう。

イエスの両親は貧しくて、毎日の骨折り仕事で生計をたてていた。イエスは貧乏や自制や不自由の味をよく知つておられた。この経験がイエスを保護した。イエスの勤勉な生活には、試みを招くようなひまな時間がなかつた。墮落的な交際のために道を開くような無意味な時間がなかつた。イエスはできるだけ誘惑者に対して戸をとざしておられた。利益も楽しみも、あるいは称賛も非難も、イエスを悪い行為にさそうことができなかった。イ

イエスは悪を賢明に見わけて、それに強く抵抗された。

キリストは、この地上においてただひとり罪のないおかたであつた。しかしイエスはおよそ三十年の間、ナザレの悪い住民の中でお暮しになつた。この事實は、罪とがのない生活を送るには、場所や幸運や繁栄次第であると考えている人々にとって一つの譴責である。試み、貧乏、逆境は純潔と堅固な志を発達させるために必要な訓練である。

イエスはいなかの家に住んで、家庭の重荷を負うために、ご自分の立場を忠実に快活に果された。イエスは天の司令官で、天使たちはそのみことばによるこんで従っていたのだが、いまは自発的なしもべであり、従順な愛らしい息子であつた。イエスは手仕事をあばえ、ご自分の腕でヨセフといっしょに大工の仕事をされた。彼は一般の労働者と同じ粗末な服を着て、小さな町の通りを歩いて、そのいやしい仕事に往復された。イエスはご自分の重荷をへらしたり、骨折りを軽くしたりするために天来の力をお用いにならなかつた。

イエスが子供と青年の時代に働かれたとき、その心と体が発達した。イエスは体力を向こうみずに用いないで、どの方面でも一番よい仕事ができるように、体力を健康に保つような方法で働かれた。イエスは道具のとり扱いでさえ不完全であることを好まれなかつた。彼は品性において完全であられたように、職人として完全であられた。イエスは、ご自身の模範を通して、勤勉であることはわれわれの義務であること、われわれの働きは正確に徹底的にしなければならないこと、またこのような労働はとうといものであることをお教えになつた。手を役立たせることを教え、生活の重荷の自分のわけ前を負うように青年たちを訓練する実際の働きによって、肉体的な

力が与えられ、あらゆる能力が発達させられる。人はみな自分自身にとって益となり、また他人に役立つことを何かみつけ出してしなければならない。神は働くことを祝福としてお命じになったのであって、勤勉に働く者だけが人生の真の栄光とよるこびをみいだすのである。家庭の中で自分の義務を快活に果し、父母の重荷を分担する子供や青年を、神はやさしい保証をもって受け入れてくださる。このような子供たちは、社会の役に立つ人間として家庭から出て行くのである。

イエスは、地上生涯の間じゅう、熱心にたえずお働きになった。彼は多くのことを期待された。だから多くのことを試みられた。公生涯におはいりになつてから、彼は、「わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だれも働けなくなる」と言われた(ヨハネ九ノ四)。キリストの弟子(で)であると自称している多くの人々がするように、イエスは、骨折りや責任を避けるようなことをされなかった。多くの人々が弱くて無能であるのは、この訓練を避けようとするからである。彼らにはとつとい愛すべき性質があるかもしれないが、困難に出会ったり、障害をのりこえたりしなければならないときになると、無気力でほとんど役に立たない。キリストのうちにみられる積極性と行動力、堅固で強力な品性は、イエスが受けられたのと同じ訓練によってわれわれのうちに発達させられるのである。しかもイエスの受けられた恵みはわれわれのためである。

救い主は、人々の中に暮しておられた間ずっと、貧しい人たちと同じ身分になられた。彼はご自分の経験から、貧しい人たちの心配や苦勞をご存じだったので、いやしい労働者たちをみな慰められますことがあできになった。

イエスの一生の教えをほんとうに理解している者は、階級差をつけたり、お金持が、貧しくてもりっぱな人たちよりとうとばれるようなことがあったりしてはならないと考える。

イエスはご自分の労働に快活さと気転とを持ち込まれた。家庭生活と職場に聖書の宗教をとり入れ、世の中の仕事の重荷を負いながらなお神の栄光に対して目が澄んでいるためには(マタイ六ノ二一参照)、非常な忍耐と靈性が必要である。この点においてイエスは人々の助けとなられた。彼は天の事物のために時間を費したり考えたりする余裕がないほどのこの世の苦労を一ぱいかかえておられなかった。たびたびイエスは詩篇や天の歌をうたって心のよこびを表明された。ナザレの住民たちはイエスが神への賛美と感謝をささげられる声をたびたびきいた。イエスは歌を通して天とまじわられた。仲間の者たちは、働きに疲れて不平を言うと、イエスの口から出る美しい歌の調べに元気づけられるのだった。イエスの賛美は悪天使を追い払い、香煙のようにその場をかおりで満たすように思われた。きいている者たちの心は、この地上の放浪から天の家郷へとほばれて行つた。

イエスは世の人にとっていやしの恵みの泉であつた。ナザレで人目につかず暮しておられた年月の間、イエスのいのちは同情とやさしさという流れとなつて人々にそそがれた。老人たちも、悲嘆にくれている者たちも、罪の重荷を負っている者たちも、無邪気によるこんで遊んでいる子供たちも、森の小さな動物たちも、荷物をつけた忍耐強い動物たちも、イエスがいらっしやればみなもつと幸福になつた。権威のことばをもつてもるもの世界をささえられたおかたが、身をかがめて、傷ついた小鳥を救つておやりになるのだった。イエスの目にとまらないものは何もなく、イエスが奉仕する価値がないと思われるものは何もなかった。

こうしてイエスは、知恵と身のだけが成長されるにつれて、ますます神と人とに愛された。イエスはすべての人に同情することがおできになることを自ら示すことによって、すべての人の心から同情をひき出された。イエスのまわりには望みと勇気の雰囲気がつりまいていたので、彼はどの家庭においても祝福となられた。イエスはまたたびたび安息日に、会堂で、預言者の書から教訓を読むようにたのまれた。そしてよく知られている聖書のことはから新しい光が輝き出ると、聴衆の心は感動した。

しかしイエスは見せびらかしを避けられた。ナザレに住んでおられた間じゅう、イエスはご自分の奇跡の力を人の前にお示しにならなかった。彼は高い地位を求めず、何の肩書も持っておられなかった。イエスの静かで単純な生活、またイエスの幼いころについて聖書に何も書かれていないことさえ、大切な教訓を教えている。子供の生活が静かで単純であればあるほど、すなわち不自然な刺激が少なく、自然との調和が多ければ多いほど、その生活は肉体と知能の活力ならびに霊的な力にとって一層有利である。

イエスはわれわれの模範である。イエスの公生涯の期間については興味をもって論ずる人が多いが、イエスの幼いころの教訓に注目する人は少ない。しかしイエスが子供や青年たちの模範であったのは、その家庭生活においてであった。救い主は、われわれがいやしい身分であっても、神とともに親しく歩むことができることを教えるために、おそれ多くも自ら貧しい者となられた。イエスは日常の平凡なことにおいて天父をよるこばせ、あがめ、そのみ栄えをあらわすために生活された。イエスの働きは、日々の食物のために骨折って働く職人のいやしい手仕事を神聖にすることから始められた。彼は大工の仕事台で働いておられるときも、群衆のために奇跡を行なって

おられる時と同じに、神への奉仕をしておられた。キリストがそのいやしい家庭において示された忠実と従順の模範にならう青年はだれでも、天父がイエスについて聖霊を通してお語りになった次のことばを自分のものとすることができる。「わたしの支持するわがしもべ、わたしのよろこぶわが選り手を見よ」(イザヤ書四二ノ二)。

第 8 章

過越のおまいり

本章はルカ二ノ四一―五一にもとづく

ユダヤ人の間では、十二才という年令が子供時代と青年との境界線だった。この年令が終ると、ヘブルの少年は律法の子また神の子と呼ばれた。彼は宗教的な教えを受ける特別な機会が与えられ、宗教上の祝祭や儀式に参加することが期待された。イエスが少年時代に過越(すぎこし)の祭りに参加するためにエルサレムにのぼられたのは、この慣例に従ってであった。すべての信心深いイスラエル人と同じように、ヨセフとマリヤは毎年過越に参加するためにエルサレムへのぼった。そこでイエスが定められた年令になると、彼らはイエスをいっしょにおつれした。

年ごとの祭礼には、過越の祭りと五旬節(ペンテコステ)とかりいおずまいの祝の三つがあって、その時にはイスラエル人の男子はみなエルサレムで神の前に出るように命じられていた。この三つの祭礼の中で、過越の祭りにおまいりする人が一番多かった。ユダヤ人が離散していたすべての国々からも多くの者がおまいりした。パレスチナの各地からたいへんな数の参拝者たちがやってきた。ガリラヤからの旅には数日かかるので、旅人たちは

交友と安全のために大ぜいで隊を組んでやってきた。女や老人たちは、けわしい岩だらけの道は牛やろばに乗った。強い男や若者たちは徒歩で旅をした。過越の祭りの時期は三月の終りか四月の上旬に当たっていたので、国じゅうが花で輝き、小鳥の歌声が楽しかった。道中ずっとイスラエルの歴史上記念すべき場所があつて、父や母たちは、昔神がご自分の民のためになしてくださったいろいろなふしぎを子供たちに語りきかせた。彼らは歌と音楽で旅の疲れを忘れた。そしていよいよエルサレムの高い建物が見えてくると、どの人も誇らしい歌声に和した――

「エルサレムよ、われらの足は

あなたの門のうちに立っている。

その城壁のうちに平安があり、

もろもろの殿のうちに安全があるように。」

(詩篇一二二ノ二―七)

過越を守ることは、ヘブル国民の誕生とともに始まった。エジプトの奴隷生活の最後の晩、救出のしるしが何もみえなかった時に、神は彼らに、ただちに解放されるから用意をするようにとお命じになった。神はエジプト人にのぞお最後の刑罰についてパロに警告し、ヘブル人に、家族を自分の家に集めるようにと指示された。ヘブル人はほふられた小羊の血を門柱に塗ると、焼いた小羊の肉を酵母のはいっていないパンや苦菜(にがな)といっしょに食べるのであった。「あなたがたは、こうして、それを食べなければならない。すなわち腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならない。これは主の過越である」(出エジプト

記一二ノ一一）。夜中にエジプト人の長子は全部殺された。「そこでパロは夜のうちにモーセとアロンを呼び寄せて言った、『あなたがたとイスラエルの人々は立って、わたしの民の中から出て行くがよい。そしてあなたがたの言うように、行って主に仕えなさい』（出エジプト記一二ノ三二）。ヘブル人は自由な国民としてエジプトから出て行った。神は毎年過越を守るようにお命じになったのだった。「もし、あなたがたの子供たちが『この儀式はどんな意味ですか』と問うならば、あなたがたは言いなさい、『これは主の過越の犠牲である。エジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越して、われわれの家を救われたのである』（出エジプト記一二ノ二六、二七）。こうしてこのふしぎな救済の物語は代々くりかえされるのであった。

過越の祭りのあと、たね入れぬパンの祭礼が七日間つづいた。この祭の二日目に、その年の収穫の初穂である大麦の束が神の前にささげられた。祭の儀式はすべてキリストの働きの型であった。イスラエルがエジプトから救われたことはあがないについての実物教訓で、過越の祭りはそのことをおぼえておくためであった。ほふられた小羊、たね入れぬパン、初穂の束は、救い主を表わした。

キリスト時代の民の大部分にとって、この祭の守りかたは形式的なものに堕落していた。しかし神のみ子キリストには、この祭がどんなにか深い意義をもっていたことだろう。

子供のイエスは初めて宮をぐらんになった。彼は白い衣を身にまとった祭司が厳粛な儀式をとり行なっているのをぐらんになった。彼はまた、いけにえの祭壇の上の血を流している動物に目をとめられた。香煙が神の前に立ちのぼる中で、イエスは参拝者と共に頭をたれて祈りをささげられた。彼は過越の儀式の印象的な行事をまの

あたりにごらんになった。一日ごとに、イエスはそれらの意味をだんだんはつきりさとられた。どの行為も自身の生涯に結びつけられているように思われた。新しい衝動がイエスのうちに起りつつあった。だまって一心に、イエスは大問題を解いておられるようにみえた。ご自分の使命の奥義がだんだん救い主に開かれた。

こうした光景について瞑想(めいそう)にふけておられたので、イエスは両親のそばにおられなかった。彼はひとりになりたいとお思になった。過越の祭りの行事が終ってもイエスはまだ宮の庭にとどまっておられた。そして参拝者たちがエルサレムを出発したとき、イエスはあとにお残りになった。

このエルサレムまいりのときに、イエスの両親は彼をイスラエルのえらい教師たちと接触させたいと望んだ。イエスはこまかい点まで神のみことばに従われたが、ラビの儀式や慣例には従われなかった。ヨセフとマリヤはイエスが学問のあるラビたちを敬い、彼らの要求をもっと忠実に心にとめるようになられることを望んだ。しかし宮でのイエスは神から教えられたのだった。イエスはお受けになったものをすぐに与えはじめられた。

当時、宮に接続している一室が、預言者の学校の様式にならって、神学校として用いられていた。ここに指導的なラビたちが生徒たちと集まっているところへ子供のイエスがあいでになった。学問のあるこれらのいかめしい人たちの足もとにすわって、イエスは彼らの教えを聞かれた。知恵を求める者として、イエスは預言について、またメシヤの来臨をさし示すものとして当時起りつつあった諸事件について、この教師たちに質問された。

イエスはお自身が神の知識を熱望しておられる方であることを示された。イエスの質問は、これまではつきりしていなかったがしかし魂の救いにとって不可欠な深遠な真理を暗示していた。イエスの質問はどれも、この学者た

ちの知恵がどんなに狭くて浅薄なものであるかを示すとともに、彼らの前に天来の教訓を示し、真理について新しい見方をさせた。ラビたちは、メシヤの来臨によってユダヤ国民がすばらしい地位にまで高められると語った。しかしイエスはイザヤの預言を示して、神の小羊の苦難と死とを示している聖句の意味を彼らにおたずねになった。

博士たちはイエスに向き直って質問し、その答えに驚いた。イエスは子供らしい謙遜(けんそん)さをもって、聖書のことをくりかえし、学者たちがこれまで考えつきもしなかった深い意味をお示しになった。イエスの示された真理の教えに従っていたら、当時の宗教に改革が行われていたであろう。霊的な事柄に対する深い興味ため、イエスが公生涯をお始めになった時には多くの者がイエスを受け入れる備えができていたであろう。

ラビたちは、イエスがラビの学校で教育を受けたことがないのを知っていた。だが預言についてイエスの理解はラビたちよりもはるかにすぐれていた。ラビたちはこの考え深いガリラヤの少年は非常に有望だと思った。彼らはイエスがイスラエルの教師となれるように、自分たちの生徒にしたいと希望した。彼らはこのような独創的な頭脳は自分たちが教育すべきだと感じ、イエスの教育を引受けたいと望んだ。

イエスのことは、これまで人間の口から出ることばによって動かされたことのない彼らの心を感動させた。神はこれらのイスラエルの指導者たちに光を与えようとして、彼らの心を動かすことのできるただ一つの手段をお用いになった。彼らは高慢だったので、人から教えを受けるなどということは冷笑して受けつけなかったであろう。もしイエスが彼らに教えるような態度をされたら、彼らは軽蔑して耳をかたむけなかったであろう。自分たちはイエスに教えているのだ、すくなくともイエスの聖書についての知識をためているのだと、彼らはい

ぼれていた。イエスの少年らしいつつしみとしとやかさは彼らの偏見をとり除いた。無意識のうちに彼らの心は神のみことばに向かって開かれ、聖霊が彼らの心に語りかけた。

彼らは、メシヤに関する自分たちの期待が、預言の裏づけのないものであることをみとめないわけにいかなかった。それでもなお彼らは、彼らの野心をよろこばせていた説を捨てようとしなかった。彼らは自分たちが教えるのだと主張していた聖書についてまちがった解釈をしていたことをみとめようとしなかった。この少年は学んだことがないのにどうしてこんな知識があるのだろうと、彼らは口々にたずねた。光は暗黒の中に輝いていた。「そして、やみはこれに勝たなかった」(ヨハネ一ノ五)。

そのあいだヨセフとマリヤは非常に当惑し、困っていた。彼らはエルサレムを出るときにすでにイエスの姿を見失っていたが、イエスがあとに残っておられるとは知らなかった。当時ユダヤの国は人口が多く、ガリラヤからの旅の団体は大変な人数であった。彼らがエルサレムの町を出たときはひどい混雑だった。ヨセフとマリヤは、道中、友だちや知人たちと旅をする楽しさに心を奪われていたので、夜になるまでイエスのおられないことに気がつかなかった。さて休みのために立ちどまって、彼らは子供の手伝いが無いのに気がついたが、たぶん友だちと一しよにいるのだろうと思って、何の心配も感じなかった。彼らはイエスのことを、若くても絶対的に信頼していた。そして必要な時には、イエスがいつものように彼らが困っているのを予期して手伝われるものと思っていた。だがこんどは心配になってきた。彼らは道づれの人たちの中をさがしまわったが、イエスはみつからなかった。彼らは、ヘロデがイエスを赤ん坊の時分に殺そうとしたことを思い出して身ぶるいした。彼らの心は暗い

予感に満たされた。彼らははげしく自分たちを責めた。

彼らはエルサレムへ引き返して、さがしつづけた。その翌日、宮の参拝者の中にまじっていると、ききなれた声が彼らの注意をとらえた。それはまぎれもなくイエスの声だった。まじめで、熱心で、しかも美しいひびきをもったのはイエスの声よりほかになかった。

ラビの学校の中で、彼らはイエスをみつけた。大よろこびはしたものの、彼らは今までの悲しみと心配とを忘れることができなかった。イエスをそばにつれもどすと、母親は、非難のこもったことばで、「どうしてこんなことをしてくれたのです。ごらんなさい。おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」と言った（ルカ二ノ四八）。

イエスは、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」と答えられた。彼らがそのことばをわかりかねるふうだったので、イエスは天の方を指さされた。その顔には光があつて、彼らは驚嘆した。神性が人性を通して輝いているのであった。宮の中にイエスをみつけ出したとき、彼らはイエスとラビたちとの間にかわされていることばをきいて、イエスの質問と答えに驚いた。イエスのことばは決して忘れられない思想を次々と芽ばえさせた。

また彼らに対するイエスの質問には一つの教訓があつた。「わたしが自分の父の家にいるはずのことをご存じなかったのですか」とイエスは言われた。イエスはご自分がこの世においてなすためにおいでになったその働きに従事されたが、しかしヨセフとマリヤは彼らのつとめをおろそかにしたのだった。神はそのみ子を彼らに委託

されたことによって彼らに高い栄誉をお与えになっていた。聖天使たちはイエスの生命を保つためにヨセフのとるべき道を示した。ところが彼らは、一瞬間も忘れるべきではなかったイエスを、まる一日見失っていたのである。そうしてこの心配から救われると、彼らは自分自身を責めないで、イエスを非難したのであった。

イエスの両親がイエスを自分自身の子供としてみたのは当然であった。イエスは毎日両親といっしょにあられて、その生活は多くの点でほかの子供たちと同じであったから、両親がイエスを神のみ子としてみとめることは困難だった。彼らは世のあがない主があられることによって自分たちに与えられる祝福を認めない恐れがあった。イエスから離れた悲しみと、イエスのことばにこめられていたやさしい譴責とは、彼らにその責任の神聖さを自覚させるためであった。

母親への答えの中で、イエスは神に対するご自分の関係を理解しておられることを初めて表明された。イエスがお生れになる前に、天使はマリヤにこう言った、「彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」(ルカ一ノ二三、二三)。マリヤはこのことばを心に思いめぐらした。彼女は自分の子供がイスラエルのメシヤになられるおかただと信じてはいたが、メシヤの使命を理解していなかった。いま彼女はイエスのことばを理解できなかったが、イエスがヨセフとの血縁関係を否認し、ご自分が神のみ子であることを宣言なさったことを知った。

イエスは、この世の両親との関係を無視されたのではなかった。彼は両親といっしょにエルサレムから帰って、

骨折って働く彼らの生活を手伝われた。イエスはご自分の使命の奥義を自分自身の心にかくし、ご自分の働きを始めるべき定まった時のくるのをおとなしく待たれた。ご自分が神のみ子であることをみとめてから十八年の間、イエスはナザレの家庭につながるご自分のきずなをみとめ、息子として、兄弟として、友人として、市民として、その義務をつくされた。

宮でご自分の使命が示されたとき、イエスは群衆に接触することをちゅうちよされた。彼はご自分の一生の奥義を知っている人々といっしょにエルサレムからだまって帰りたいと望まれた。神は、過越の祭を通して、民を世俗の心づかいから解放し、エジプトからの救出に示された神のくすしいみわさを彼らに思い出させようとしてあられた。神は彼らがこのみわざの中に罪からの救いについての約束をみとめるように望まれた。ほふられた小羊の血によってイスラエルの家が守られたように、彼らの魂はキリストの血によって救われるのであった。信仰によってキリストのいのちを自分自身のものとすることによってのみ、彼らはキリストによって救われるのであった。象徴的な儀式は、礼拝者にキリストを個人的な救い主としてさし示すときにのみ価値があるのであった。神は彼らがキリストの使命について、祈りのうちに研究し瞑想するように望まれた。しかし民衆は、エルサレムを出ると、旅と社交の興奮に心を奪われて、目に見てきた儀式を忘れてしまうことがあまりにも多かった。救い主はこうした人たちと道づれになることに心をひかれなかった。

イエスは、エルサレムからヨセフとマリヤたちとだけいっしょに帰りながら、彼らの心を苦難の救い主に関する預言に向けさせたいとお望みになった。カルバリーで、イエスは母の悲嘆を軽くしようとされた。イエスはいま、彼

女のことを考えておられた。マリヤはイエスの最後の苦悶(くもん)を目に見るのであった。そこでイエスは、剣が彼女の魂をさし通した時に彼女がそれに耐えられるように強くするため、彼女にご自分の使命を理解させたいと望まれた。イエスが母から離れ、彼女が悲しみながら三日間イエスをさがしたように、イエスが世の罪のためにさげられるとき、彼女はもう一度三日間イエスを失うのである。そしてイエスが墓から出てこられるとき、彼女の悲しみはふたたびよろこびに変わるのである。だがイエスがいま彼女の思いを向けさせようとしておられた聖句を彼女が理解していたら、彼女は、イエスの死についての苦しみにどんなにか強く耐えることができたであろう。

ヨセフとマリヤが瞑想と祈りによって心を神にそそいでいたら、彼らは自分たちの責任の神聖さをみとめ、イエスを見失うようなことはなかったであろう。一日の怠慢によって彼らは救い主を見失った。そして彼を見つけて出すために三日も心配しながらさがさねばならなかった。われわれもこれと同じである。われわれはむだ話や、悪口や、祈りを怠ることによって、救い主のご臨在を一日失うかもしれない。すると救い主をみつけ出し、失った平安をとりもどすのに何日間も悲しみながらさがさねばならないかも知れないのである。

人々との交際において、われわれはイエスを忘れて、イエスがわれわれといっしょにあられないことに気がつかずに時をすごしたりすることのないように注意しなければならない。世俗的な事物に心を奪われて、われわれの永遠のいのちの望みの中心であるイエスを心に思わなくなれば、われわれはイエスと天使たちから離れてしまつのである。救い主にいていただきたいと思わなかったり、救い主のあられないことに気がつかないようなところに、聖天使たちはとどまることができない。クリスチャンと自称している人々の中にしばしば落胆がみられ

るのはこのためである。

多くの者は宗教的な礼拝に出席し、神のみことばによって生気をとりもどし、慰められる。だが瞑想と目をさまして祈ることを怠るために、彼らはその祝福を失ってしまい、それを受けた前よりもっと欠乏を感じる。しばしば彼らは神が自分に対して冷酷であると考え、彼らは過失が自分自身にあるとは思えない。イエスから離れることによって、彼らはイエスの臨在の光をしめ出してしまったのである。

われわれは、キリストの一生について毎日瞑想する時間を持つがよい。イエスの一生の要点を一つ一つとらえ、各場面ごとに最後の場面を想像のうちにとらえるべきである。このようにして、われわれのために払われたイエスの大犠牲を心に思いめぐらすとき、キリストに対するわれわれの信頼はもっと堅固になり、われわれの愛はめざめさせられ、われわれはもっと深くキリストの精神を吹きこまれる。もし最後に救われなければ、われわれは十字架のもとで悔い改め、心がくだかれることについて教訓を学ばねばならない。

人々とまじわるときに、われわれはお互いに対して祝福とすることができる。もしわれわれがキリストのものなら、キリストについて思うことが一ばん楽しい思いである。われわれはキリストについて語ることが好む。そしてお互いにキリストの愛について語るとき、われわれの心は天来の感化によってやわらげられる。キリストの品性の美しさをみつめることによって、われわれは、「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」のである(コリント第二・三ノ一八)。

戦いの日々

ユダヤ人の子供は幼い時からラビの要求にとりかこまれていた。生活のこまかい点まで、一つ一つの行為が厳格な規則によって規定されていた。青少年たちは、会堂の教師たちの下で、伝統的なイスラエル人として当然守るものとされているかぞえきれないほどの規則によって教育を受けた。しかしイエスはそうした事から関係されなかった。イエスは、子供の時からラビの律法にとらわれないで行動された。イエスはいつも旧約聖書を研究され、「主はこう言われる」ということはがいつも彼の口からきかれた。

イスラエルの民の状態がイエスの心にわかり始めると、彼は社会の要求と神のご要求とがたえずぶつかり合っているのをごらんになった。人々はだんだん神のみことばから離れ、自分自身が考え出した説を重んじていた。彼らは何の効力もない伝統的な儀式を守っていた。彼らの奉仕は儀式のくりかえしにすぎなかった。その奉仕を通して教えられるはずの聖なる真理は礼拝者たちにかくされていた。イエスは、彼らが、信仰を伴わない奉仕に平安をみいだしていないのをごらんになった。彼らは、まことをもって神に仕えるときに与えられる精神の自由

を知らなかった。イエスは神の礼拝についてその意味を教えるためにおいてだったので、神の戒めに人間の規則をまぜることを是認なさることができなかった。イエスは学問のある教師たちの教えや行為を攻撃されなかったが、ご自身の簡素な習慣を非難されると、神のみことばを示してご自分の行為の正しいことを証明された。イエスは、いつもやさしくおとなしい態度で、ご自分の接触される人々をよるこばせようとされた。イエスが非常にやさしく慎しみ深かったので、律法学者たちや長老たちは、イエスが彼らの教えにたやすく感化されるだろうと思った。彼らは古代のラビから伝えられてきた格言や言い伝えをイエスが受け入れられるようにすすめたが、イエスはそうしたものの権威が聖書にもとづいているかどうかをおたずねになった。イエスは神のみ口から出ていることばならどんなことでも聞き従われたが、人間が考え出したものに従うことはおできにならなかった。イエスは聖書を初めから終りまで知っておられたようで、その真の意味を彼らにお示しになった。ラビたちは子供から教えられることを恥じた。彼らは、聖書を説明するのは自分たちの役目で、イエスの立場は彼らの解釈を受け入れることにあるのだと主張した。彼らはイエスが自分たちのことばに反対の立場をとられることを怒った。彼らは、自分たちの言い伝えに聖書上の権威がないことを知っていた。彼らは、イエスが霊的な理解力において、自分たちよりもはるかに進んでおられることをみとめた。だが彼らは、イエスが彼らの命令に従われないで怒った。イエスを説き伏せることができないので、彼らはヨセフとマリヤに会って、イエスの不服従の態度を並べたてた。こうしてイエスは、非難とがめを受けられた。

ごく幼い時から、イエスはご自分から品性を築き始められ、両親への尊敬と愛もイエスを神のみことばに従う



イエスは子供時代に、沈黙と忍耐について教訓を学ばれた。ヨセフの子ら
すなわちイエスの兄弟たちは、時々イエスをおどかしたり、からかったりした。
しかしイエスはそうしたことのすべてに、愛の心をもって応じられた。

ことから離れさせることができなかった。家庭の習慣とちがった行為をなさるたびに、その理由は「聖書にこう書いてある」ということであつた。しかしラビたちの圧力はイエスの一生を苦しいものにした。少年時代においてさえ彼は沈黙としんぼうづよい忍耐について教訓を学ばねばならなかつた。

ヨセフの息子たちはイエスの兄弟と呼ばれていたが、彼らはラビたちの味方であつた。彼らは、言い伝えがあたかも神の規則でもあるかのように、これに注意すべきであると言い張つた。彼らはまた人の教えを神のみことばよりもとうといものにみなすことさえし、イエスが虚偽と真実との区別をはつきりと見とおされるのにいらだつた。彼らは、イエスが神の律法に厳格に従われるのを頑固(がんこ)だと言つて非難した。彼らはイエスがラビたちに答えておられるときに示された知識と知恵に驚いた。彼らはイエスが博士たちから教育を受けられたことがないことを知っていた。それなのに、かえつてイエスが博士たちを教えておられるのに気づかないわけにゆかなかつた。彼らはイエスの教育が彼ら自身の教育よりも程度の高い型のものであることをみとめた。しかし彼はイエスがいのちの木、すなわち彼らの知らない知識のみなもとに近づいておられることを認識しなかつた。

キリストは排他的でなかつたので、この点において、キリストがパリサイ人の厳格な規則からはずれておられることが、特にパリサイ人たちを不快にしていた。イエスは、宗教の領域が日常生活にとってはあまりに神聖すぎるものとして隔離の高い壁にかこまれているのをごらんになつた。この仕切りの壁をイエスはうちこわされた。人々と接触して、イエスは、あなたの信条は何ですか、あなたはどの教会に属していますかなどとおたずねにならなかつた。彼はだれでも助けの必要な者のために助けの力をお用いになつた。イエスはご自分の天来の品性を

示すために世捨て人の小屋にこもるようなことをなさらず、熱心に人類のために働かれた。聖書の宗教は肉体の苦行にあるのではないという原則を、イエスはこんこんとお教えになった。イエスは、純潔でけがれない宗教は一定の時間や特別な場合にだけ限られるものではないことをお教えになった。いつでもどんな場所でも、彼は人々へのやさしい関心をあらわし、まわりに快活な信仰の光を放たれた。こうしたことがすべてパリサイ人たちにとっては譴責(けんせき)であつた。それは宗教が利己主義にあるものではないことと、彼らが自分自身の利益に病的なまでに熱中していることは真の敬虔(けいけん)さに全く相反するものであることを示した。このことがイエスに対する彼らの敵意をひき起したので、彼らはイエスを強制的に自分たちの規則に従わせようと試みた。

イエスは苦しんでいる人々をござんになるたびに彼らを救うために働かれた。イエスはお与えになるお金はほとんどなかったが、ご自分よりも困っているようにみえる人々を救うためにたびたびご自分の食事をめかれた。イエスの兄弟たちはイエスの感化力が自分たちの勢力のさまたげとなつていふと思つた。イエスは人の気持を察する能力をもつてあられたが、それは彼らのうちのだれも持つていないし、また持とうとも思わないものだった。彼らがあわれな墮落した人々に荒々しいことばを投げかけると、イエスはその人たちのそばに行つて励ましのことばを語られた。イエスは困っている人々に一杯の冷たい水を与え、ご自分の食物を静かに彼らの手におかれるのだった。イエスが彼らの苦しみをやわらげておやりになると、イエスのお教えになつた真理はその情け深い行為とおすびつき、人々の記憶にきざみこまれた。

こういうことがすべてイエスの兄弟たちを不快にした。彼らはイエスよりも年上だったので、イエスが彼らの

さしずに従うべきだと考えた。彼らはイエスが彼らに対して優越感を持っておられると言って非難し、また民の教師たち、祭司たち、役人たちよりもお高いといつて責めた。たびたび彼らはイエスをおどし、脅迫しようとした。だがイエスは聖書を道案内として進んで行かれた。

イエスはご自分の兄弟たちを愛し、いつも変らない親切な態度をとられたが、彼らはイエスをねたみ、はつきりした不信と軽蔑とを示した。彼らはイエスの行為を理解することができなかった。イエスのうちには全然正反對なものがみえた。イエスは神のみ子であつたが同時にまた無力な子供であつた。イエスはもるもるの世界の創造者であられたから、地はイエスの所有であつた。それなのにイエスの一生の生活にはその一步一步に貧困がついてまわつた。イエスは世の誇りや高慢とはまったく異なつた威厳と個性とを備えておられた。イエスは世俗的な偉大さを求めようとされず、どんな低い身分にも満足しておられた。このことがイエスの兄弟たちを怒らせた。彼らはイエスが試練と欠乏の中にあつていつも平靜にしておられることについて説明ができなかった。われわれが「彼の貧しさによつて富む者となるため」に、イエスはわれわれのために貧しくなれたことを彼らは知らなかった(コリント第二・八ノ九)。ヨブの友人たちがヨブの屈辱と苦難とを理解できなかったように、彼らはキリストの使命の奥義を理解できなかった。

イエスは兄弟たちのようではなかつたので、彼らから誤解された。イエスの標準は彼らの標準ではなかつた。人を見ているうちに彼らは神から離れてしまい、その生活のうちに神の力がなかつた。彼らが守っていた宗教の形式は品性を変えることができなかった。彼らは、「はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を宮に納め」

だが、「律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のが」した(マタイ二三ノ二三)。イエスの模範はいつも彼らをいらだたせた。イエスが憎まれたものがこの世にただ一つあった。それは罪だった。イエスはまちがった行為を見るとかならず苦痛を感じられ、それをかくすことがおできにならなかった。見せかけの聖潔によって罪への愛着をおおいかくしている形式主義者たちと、神の栄光をあらわそうとする熱意がいつも心の最高位を占めている人物との間にはまちがう余地がないまでにはつきりした相違があった。イエスの生活が悪を責めたので、彼は家の中でも外でも反対された。イエスの無我と誠実な心は嘲笑(ちようしょう)的に批評された。イエスの寛容と親切とは臆病(おくびょう)と呼ばわりされた。

人の運命にふりかかる苦しみの中で、キリストの味わわれなかったものは一つもない。イエスの生れについて彼を軽蔑しようとする人々がいたので、イエスは子供の時でさえもそうした人々のあざけりの目つきや悪口のさやきに会われねばならなかった。もしイエスが彼らに気短かなことばや顔つきで応じたり、あるいは兄弟たちに負けて、たった一つの悪い行為でもされたら、彼は完全な模範ではなくなったであろう。そうしたらイエスはわれわれのあがないのための計画を実行することがおできにならなかったであろう。イエスが罪について言いわけができることをみとめられただけでも、サタンは勝利し、この世界は失われたであろう。誘惑者サタンがイエスに罪を犯させるように、その生活をできるだけつらいものにしうとして働いたのはこのためである。

だがイエスはどんな試みにも、「聖書にはこう書かれている」という一つの答で応じられた。イエスはご自分の兄弟たちの悪い行為を責めるようなことはめったになさらず、神のみことばを彼らにお語りになった。兄弟たち

が何か禁じられた行為をするとき、イエスがその仲間にはいるのを拒絶されると、彼らはよくイエスを臆病者だといって責めた。しかしイエスは、「主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである」としてとらえられているとお答えになった（ヨブ記二八ノ二八）。

イエスの前にいることに平安を感じて、イエスとのまじわりを求める者もあったが、多くの者は、イエスのけがれない生活に責められるので、彼を避けた。若い友だちはイエスに自分たちと同じことをするようにすすめた。イエスは明るく快活なおかただった。彼らはイエスといっしょにいることをよろこび、イエスの即座の思いつきを歓迎した。だが彼らはイエスの用心深さにがまんがならず、彼を狭量で固苦しい人間だと言明した。イエスは、「若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません……わたしはあなたに向かつて罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」としてとらえられているとお答えになった（詩篇一一九ノ九、一一）。

イエスはよく、「なぜあなたはそんなに変わっていて、われわれみんなとちがっていようと心にきめているのですか」とたずねられた。するとイエスは、「おのが道を全くして、主のおきてに歩む者はさいわいです。主のもろものあかしを守り心をつくして主を尋ね求め、また悪を行わず、主の道に歩む者はさいわいです」と書かれていると言われた（詩篇一一九ノ一一三）。

イエスはなぜナザレの若者たちといっしょにばかさわぎをしないのかとたずねられると、「わたしは、もろものだから喜びように、あなたのおかしの道を喜びます。わたしは、あなたのさとしを思い、あなたの道に目を

とめます。わたしはあなたの定めを喜び、あなたのみことばを忘れません」と書かれていると言われた(詩篇一九ノ一四―一六)。

イエスはご自分の権利を主張されなかった。イエスは不平を言わずによるこんでなさるので、必要なまでに過重な働きをさせられることがよくあった。しかしイエスは弱ったり、落胆したりならなかった。彼はこうした困難に超然として、神の笑顔の光のうちにあるかのように生活された。イエスは荒々しいとり扱いを受けても仕返しをされず、じっと侮辱に耐えられた。

イエスは、どうして自分の兄弟たちからさえこんな意地の悪い仕打ちをされるのですかと何べんもたずねられた。するとイエスは、「わが子よ、わたしの教えを忘れず、わたしの戒めを心にとめよ。そうすれば、これはあなたの日を長くし、命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。いつくしみと、まことを捨ててはならない。それをあなたの首に結び、心の碑にしるせ。そうすれば、あなたは神と人との前に恵みと、誉とを得る」と書かれていると言われた(箴言三ノ一―四)。

両親がイエスを宮の中でみつけた時から、イエスの行動は彼らにとって一つの神秘であった。イエスは論争しようにとならず、その模範がたえず教訓となった。イエスは別にされている人のようであった。イエスの幸福な時間は自然とともに、また神とともにただひとりおられる時であった。そういう特権が与えられる時にはいつでも、イエスは働きの場所から退いて野原にはいつて行かれ、緑の谷間で瞑想したり、山腹や森の木蔭で神とまじわられた。朝早く、どこか人里離れた静かな場所で、瞑想するか、聖書を調べるか、祈っておられるかするイエ

スのお姿がよくみられた。こうした静かな時間からイエスは家へもどって、なすべき仕事をふたたびとりあげ、忍耐強い骨折り仕事の模範を示された。

キリストの一生には母への尊敬と愛情とが目立っていた。マリヤは、心の中では自分の生んだ聖なるみ子が長年約束されていたメシヤであることを信じていたが、その信仰をあえて表明しようとはしなかった。イエスの地上生涯の間じゅう、彼女はイエスと苦難を共にした。彼女はイエスが子供時代と青年時代に受けられた試練を、心を痛めながら目に見た。イエスの行為について、正しいとわかっていることを弁護したために彼女自身もつらい立場に立たされた。彼女は、家庭内のまじわりと子供たちに対する母親のやさしい見守りこそ品性の形成にきわめて重要なものであると考えた。ヨセフの息子と娘たちはそのことを知っていたので、母親の心配に訴えることによって、イエスの行為を自分たちの標準に従って改めようと試みた。

マリヤはたびたびイエスに忠告して、ラビの慣習に従うようにすすめた。だがどんなにイエスを説得しても、神のみわざについて瞑想すること、人間の苦しみやもの言わぬ動物の苦しみさえやわらげようとなさるイエスの習慣とを変えることはできなかった。祭司たちと教師たちがイエスを制御することにマリヤの協力を求めると、彼女はひどく当惑した。しかしイエスがご自分の行為を正当づける聖書のことばをお示しになると、彼女は心に平安が与えられた。

イエスの兄弟たちはイエスが神からつかわれたおかたであると信じなかったので、マリヤは時々イエスと兄弟たちの間にあって迷うことがあった。しかしイエスが神のみ子であるという証拠は十分にあった。彼女はイエ

すが他人の幸福のためにご自分を犠牲になさるのを見た。イエスがいらつしやると家庭の中には一段ときよい雰囲気(ふんいき)が生じ、イエスの生活は社会の各階級に働くパンだねのようであつた。イエスは、何の害もけがれも受けないで、無思慮な人々や粗暴な人々や礼儀知らずな人々の中に、また不正な税吏たちやでたらめな放蕩(ほうとう)者たちや不義なサマリヤ人たちや異教の兵士たちや荒くれた農夫たちやその他のいろいろな人間のまじった群衆の中に生活された。疲れはてもなお重荷を負わねばならない人々をござんになるたびに、イエスは同情のことはをここで一ことあちらで一こととお語りになった。イエスは彼らの重荷を共に負い、神の愛とあわれみと恵みについて自然から学ばれた教訓を彼らにくりかえされた。

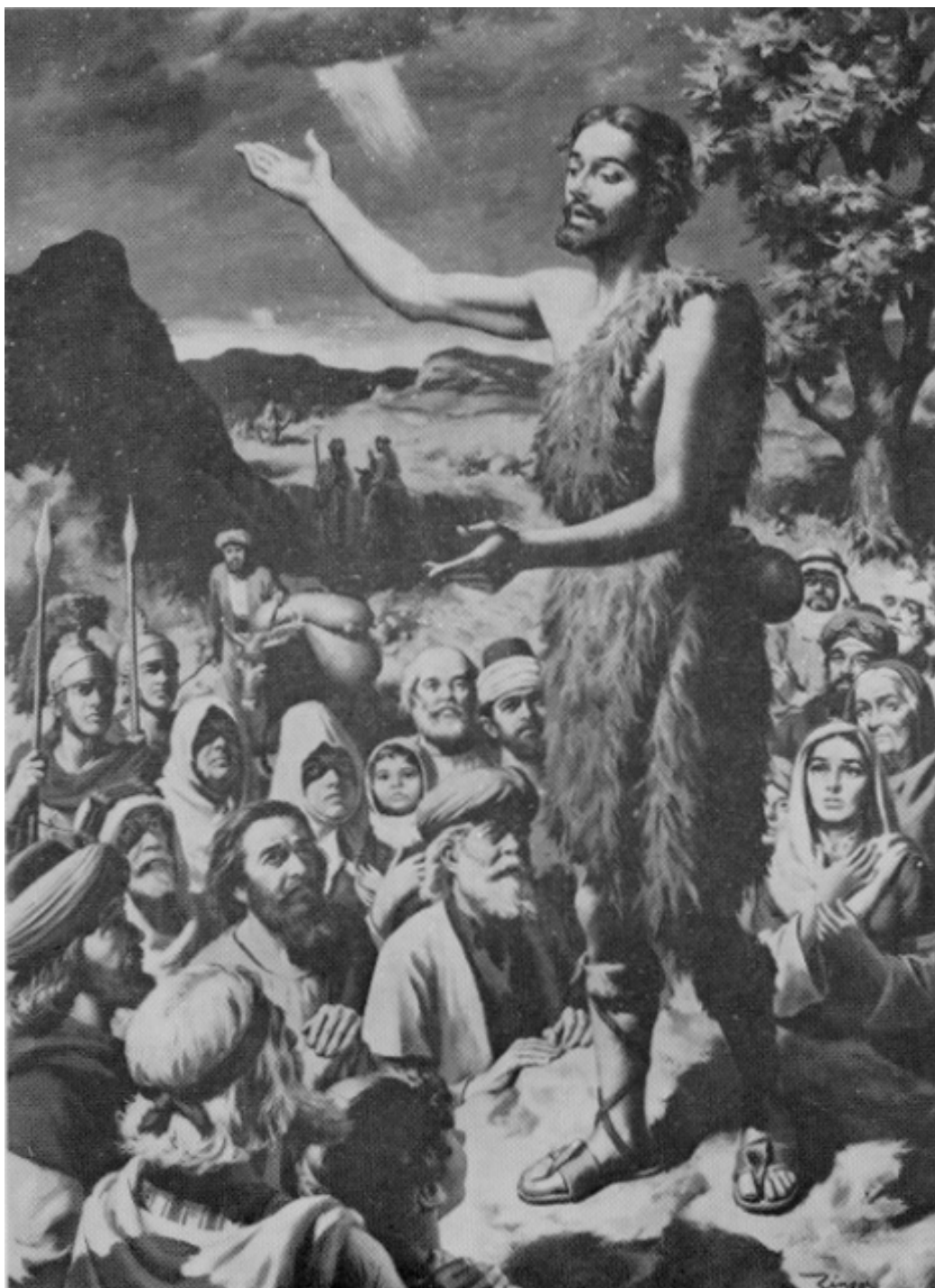
イエスは、すべての人が自分にはとうといタラントが与えられていると考えるように、そしてそのタラントを正しく用いるならば永遠の富が得られるのだということをお教えになった。彼は生活からすべての虚栄をとり除き、ご自身の模範によつて、一刻一刻が永遠の結果を伴っていること、したがつてその一刻一刻は宝として大切にし、聖なる目的のために用いなければならぬことをお教えになった。イエスはどんな人間も無価値な者としてみすごすようなことをなさらず、ひとりびとりに救いの療法を試みられた。どんな種類の人々の中におられても、イエスはその時と事情にふさわしい教訓をお与えになった。どんなに乱暴な、見込みのない人でも、責むべき点もなければ、害を与えることもない者となり、神の子たることをはつきりあらわすような品性の持ち主になることができるという保証を示すことによつて、イエスは彼らのうちに望みを起そうとされた。イエスは、サタンの支配下におし流されて、そのわなを破る力のない人たちをしばしばござんになった。落胆したり、病氣だっ

たり、試みられたり、墮落したりなどしているこれらの人々に、イエスは最もあわれみ深いことば——彼らが必要とし、理解のできることをお語りになるのだった。イエスはまた魂の敵とはげしい戦いをたたかっている者にも出会われた。これらの人々をイエスは耐え忍ぶように励まし、神の天使たちが彼らの側について勝利を与えてくれるから、勝てるのだと保証された。このようにイエスから助けられた人々は、ここに自分たちが絶対の信頼をもってよりのたのむことのできるおかたがいられることを確信した。彼らが同情をもってきいてくださるイエスの耳に入れた秘密をイエスはほかへもらそうとされなかった。

イエスは魂をいやされるばかりでなく肉体もいやしになった。彼は気がつくかぎりどんな種類の苦しみにも関心を持って、苦しんでいるひとりびとりを救っておやりになった。彼のやさしいことばには苦しみをやわげる香油があつたのである。だれもイエスが奇跡を行われたと言うことはできなかった。ただ恵み、すなわち愛のいやしの力が病人や困っている人たちに向かってイエスからそそがれたのだった。このように彼は子供の時からつつしみ深い態度で人々のためにお働きになった。キリストの公生涯が始まってから、多くの人々がよるこんで彼のことばをきいた理由はここにあつた。

だがイエスは、子供のときも、青年時代も、大人になられてからもひとりで歩まれた。彼は純潔と忠誠のうちにただひとりでさかぶねを踏まれ、もろもろの民のなかに彼と事を共にする者はなかった。彼は人類の救いのためにおそるべき重い責任を負われた。人類の主義と目的とに決定的な変化がなければ、みな滅びてしまうことを、イエスはご存じだった。これがイエスの魂の重荷だったが、だれも彼の上におかれてはこの重荷を理解できな

かった。真剣な目的に燃えて、イエスは、ご自分が人類の光になるという一生の計画を実行された。



さびしい荒野で、ヨハネは単純な生活を送ってきた。いま彼は、エルサレムからやってきた群衆に、天国は近づいたから罪を悔い改めるようにと呼びかけた。

荒野の声

本章はルカーノ五―二三、五七―八〇、三ノ―一八
マタイ三ノ―一二、マルコノ―一八にもとづく

イスラエルの忠実な人たちは、長い間メシヤの来臨を待望していたが、その人たちの中からキリストの先駆者が起った。年老いた祭司のザカリヤと妻のエリサベツは「ふたりとも神のみまえに正し」かった（ルカーノ六）。そして彼らのきよい静かな生活から、当時の邪悪な暗黒のさなかに信仰の光が星のように輝きわたっていた。この敬虔な夫婦に、「主のみまえに先立つて行き、その道を備え」る息子についての約束が与えられた（ルカーノ七六）。

ザカリヤは「ユダヤの山里」に住んでいたが、聖所で一週間奉仕をするためにエルサレムにのぼっていた。その奉仕には各組の祭司が年に二回当たらねばならないのであった。「さてザカリヤは、その組が当番になり神のみ前に祭司の務をしていたとき、祭司職の慣例にしたがってくじを引いたところ、主の聖所にはいつて香をたぐることになった」（ルカーノ八、九）。

ザカリヤは聖所の中の金の香壇の前に立っていた。香煙は、イスラエルの民の祈りとともに神のみ前にのぼっ

ていた。突然彼は聖なるものの臨在を意識した。主のみ使が「香壇の右に立つ」ているのだった（ルカーノ一）。天使の位置は恩恵を示していたが、ザカリヤはそのことに気がつかなかった。彼は長年の間あがない主の来臨を祈ってきた。いま彼の祈りが答えられようとしていることを告げるために、天から使者が送られたのだった。だが神の恵みが余りに大きすぎて、彼には信じられないように思えた。彼は恐れと自責の念に満たされた。

だが彼はうれしい保証のことばでこうあいさつされた。『恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞きいれたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい。彼はあなたに喜びと楽しみをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、……聖霊に満たされており、そして、イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立つて行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう』。するとザカリヤは御使に言った、『どうしてそんな事が、わたしにわかるでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています』（ルカーノ一三一―一八）。

ザカリヤは年老いたアブラハムに子供が与えられたのは、アブラハムが約束に対して忠実であられる主を信じただからであったことをよく知っている。だが一瞬間この年老いた祭司は人間の弱さに心を向ける。神はその約束されたことをなしとげることがおできになることを、彼は忘れる。この不信仰と、ナザレのおとめマリヤの子供のような美しい信仰との間には何というちがひがあることだろう。マリヤは天使のすばらしい知らせに、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と答えた（ルカーノ三八）。

ザカリヤに息子が生れることによって、アブラハムの子の誕生やマリヤの子の場合と同じように、とうとい霊的な真理、すなわちわれわれが学ぶのに手間どり、また学んでもすぐ忘れがちな真理が教えられるのであった。われわれは自分自身では何もよいことをすることができない。しかしわれわれのできないことが、神の力によって、すなわち信ずる魂のうちになされるのである。約束の子が与えられたのは信仰によってであった。霊的生命が生まれ、われわれが義のわざをすることができるのは信仰によってである。

ザカリヤの質問に、天使は、「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである」と答えた(ルカ一ノ一九)。これより五百年前、ガブリエルはキリストの来臨の時にまで及ぶ預言の期間をダニエルに知らせた。ザカリヤはこの期間が終りに近づいたことを知って心を動かされ、メシヤの来臨を祈っていた。この預言を伝えたその天使が、いまその成就を告げにやってきたのである。

「わたしは神のみまえに立つガブリエルである」という天使のことばは、彼が天の宮廷において高い栄誉の地位を占めていることを示している。ダニエルにメッセージをたずさえてきたとき、彼は「わたしを助けて、彼らと戦う者は、あなたがたの君ミカエル(キリスト)のほかにはありません」と言った(ダニエル書一〇ノ一二)。ガブリエルについて、救い主は黙示録の中に、「キリストが、御使をつかわして、僕(しもべ)ヨハネに伝えられたものである」と語っておられる(黙示録一ノ二)。その天使はヨハネに、「わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者……と、同じ僕仲間である」と言明した(黙示録二二ノ九)。神のみ子に次ぐ栄誉の地位を保っている天

使が罪深い人間に神のみこころを解き明かすためにえらばれたとは驚嘆すべき思想である。

ザカリヤは天使のことばに疑いを表明した。そのため彼は天使の語ったことばが実現するまでしゃべることができないことになった。「時が来れば成就するわたしの言葉を信じなかったから、あなたはおしになり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる」と、天使は言った(ルカ一ノ二〇)。聖所の奉仕においては、国民一般と国家の罪についてゆるしを祈り、またメシヤの来臨について祈ることが祭司のつとめであつた。しかしザカリヤがそのつとめを果そうとしたとき、彼は「ことも口をきくことができなかった。

民を祝福するために出てきたザカリヤは「彼らに合図をするだけで、引きつづき、おしのみまでいた」(ルカ一ノ二二)。民衆は長い間待つていて、ザカリヤが神のさばきを受けて倒れたのではないかと心配しはじめていた。だが彼が聖所から出てくると、その顔は神の栄光に輝いていた。「人々は彼が聖所内でまぼろしを見たのだと悟った」(ルカ一ノ二三)。ザカリヤは自分の見たことと聞いたことを彼らに伝えた。「それから務の期日が終わったので、家に帰った」(ルカ一ノ二三)。

約束の子が生れると、「立ちどころにザカリヤの口が開けて舌がゆるみ、語り出して神をほめたたえた。近所の人々はみな恐れをいだき、またユダヤの山里の至るところに、これらの事がことごとく語り伝えられたので、聞く者たちは皆それを、心に留めて『この子は、いったい、どんな者になるだろう』と語り合った」(ルカ一ノ六四―六六)。これらのことは、ヨハネが道を備えることになっているメシヤの来臨に人々の注意をひくのに役立った。聖霊がザカリヤの上にのぞんだので、彼は次のような美しいことばで、息子の使命を預言した。

「幼な子よ、あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであろう。

主のみまえに先立つて行き、その道を備え、

罪のゆるしによる救いを、その民に知らせるのであるから。

これはわたしたちの神のあわれみ深いみこころによる。

また、そのあわれみによって、日の光が上からわたしたちに臨み、

暗黒と死の陰とに住む者を照し、

わたしたちの足を平和の道へ導くであろう」(ルカーノ七六―七九)。

「幼な子は成長し、その霊も強くなり、そしてイスラエルに現れる日まで、荒野にいた」(ルカーノ八〇)。ヨハネが生れる前に、天使は、「彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、……聖霊に満たされて」と言った(ルカーノ一五)。神はザカリヤの子をとうとい働き、人間にゆだねられた最高の働きに召されたのであった。この働きをなしとげるために、彼は神にいっしょに働いていただかねばならない。もし彼がこの天使の教えに留意するなら、神のみたまが共にいてくださるのであった。

ヨハネは人々に神の光を伝えるためにエホバの使者として出て行くのであった。彼は人々の考えに新しい方向を与えねばならない。彼は人々に神のご要求の神聖なことと、神の完全な義の必要とを印象づけねばならない。このような使者は聖なる者でなければならない。彼は神のみたまの内住する宮とならねばならない。この使命を

達成するために、彼は健全な肉体と知的靈的な力を持たねばならない。そこで彼は食欲と情欲とを抑制する必要がある。彼は人々の中にあつて、荒野の岩や山のように、周囲の環境に動かされることがないように、自分のすべての力を支配することができなければならない。

バプテスマのヨハネの時代には、富に対する強い欲望とぜいたくと見せびらかしを愛する思いが一般にひろがっていた。官能的な享樂や飲み食いによつて、肉体の病氣と墮落が生じ、靈的な知覚はにぶり、罪に対する感覚が低下していた。ヨハネは改革者として立つのであつた。彼は節制の生活と質素な衣服とによつて、当時の放縱を責めるのであつた。だから天のみ座からの天使によつて、ヨハネの両親に、さしず、すなわち節制についての教訓が与えられた。

子供の時と青年時代には、品性は非常に影響を受けやすい。自制力はこの時代に身につけねばならない。家庭の炉辺や食卓で永遠につづく結果をもたらす影響が及ぼされる。生れつきの能力よりも、幼いころ身についた習慣が人生の戦いに勝つか負けるかを決定する。青少年時代は種まきの時代である。それはこの世と来世のために収穫の種類を決定する。

ヨハネは、預言者として、「父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備える」のであつた（ルカーノ一七）。彼は、キリストの初臨に道を備えたことにおいて、主の再臨に民を備えさせる人々を代表していた。世は放縱に陥っている。誤謬と作り話があふれている。魂を滅ぼそうとするサタンのわながふえている。「神をおそれて全く清く」なりたい人はみな節制と自制について教訓を学ばねばならない（コ

リント第二・七ノ一。食欲と情欲はもっと高い知能に服従させられねばならない。この自己訓練は、われわれに神のみことばの聖なる真理を理解し実行する力を与えてくれる知能の力と霊的な洞察（どうさつ）力とによって欠くことのできないものである。この理由から、節制はキリスト再臨に備える働きの一部である。

物事の順序からいえば、ザカリヤの息子は祭司職のために教育されるのが当然だった。しかしラビの学校の訓練は彼をその働きにふさわしくない者にしただろう。神は、聖書の解釈を学ばせるために彼を神学の教師たちのもとにお送りにならなかった。神は彼が自然と自然の神から学ぶように、彼を荒野へ召された。

ヨハネが住居としたところは、さびしい地域で、荒れた丘や人の住まない谷間や岩のほら穴などのまん中だった。しかし彼は自ら進んで人生の享樂とぜいたくを捨ててこのきびしい荒野の訓練をえらんだ。ここでは彼の環境は質素と克己の習慣にとって都合がよかった。うるさい世間にじゃまされないで、彼はここで自然と啓示と神について教訓を学ぶことができた。ザカリヤに言われた天使のことは、神をおそれる両親から幾度となくヨハネにくりかえされていた。子供の時からヨハネの使命は彼の目の前におかれ、彼はその聖なる責任を引き受けていた。彼にとって荒野の孤独は、疑いと不信と不潔がほとんどすみずみまで行き渡っている社会からのありがたい逃避だった。彼は試みに抵抗する自分の力を信用しなかった。そして深い罪悪感が失われるのを恐れて、罪とのふだんの接触を避けた。

ヨハネは、生れた時からナジルびととして神にささげられていたので、その誓願を守って一生の間献身した。彼は、らくだの毛皮の衣を着、皮の帯をしめて、古代の預言者の服装をしていた。彼は荒野の「いなごと野蜜」

を食べ、山の清い水を飲んだ。

だがヨハネの生活は、何もしないで、苦行者のように陰気にあるいは利己的に孤立して送られたのではなかった。彼は時々出かけて行つては人々の中にまじつた。彼は世の中で起つてゐることをいつも興味をもって観察していた。その静かな隠れ家から、彼は諸事件の発展を見守つていた。天来のメッセージをもつて人々の心を動かすにはどうしたらよいかを理解できるように、彼は神のたまに照された目をもつて人々の性格を研究した。使命の重荷が彼の上にあつた。孤独の中にあつて、瞑想と祈りによつて、彼は目の前にある一生の働きのために、自分の魂を準備することにつとめた。

荒野にいたるとはいつても、彼は試みからまぬかれなかつた。彼はできるだけサタンがいつて来るこのできる道はどれもとざしたが、それでもまだ彼は誘惑者から攻撃された。だが彼の霊的な知覚力はつきりしていた。彼は品性の力と決断力とを発達させていた。だから聖霊の助けによつて、彼はサタンの接近を探知してその力に抵抗することができた。

ヨハネにとって荒野は学校であり、聖所であつた。ミデアンの山のまん中におかれたモーセのように、彼は神のご臨在の中にとじこめられ、神の全能の証拠にとりかこまれた。イスラエルの大指導者モーセのように、静寂な山の壮厳さの中に住みつくことが、ヨハネの運命ではなかつた。しかし彼の前にはヨルダンの向こうのモアブの高い山々があつて、山を固く立たせて力を帯びさせられた神について語つていた。この荒野の住居における自然の陰気で恐ろしい様相は、イスラエルの状態をまざまざとえがいていた。実り豊かな神のぶどう園は荒れ果てて

いた。だが荒野の上方には美しく明るいつががかった。嵐をはらんで現われた黒雲には約束の虹(にじ)が弧をえがいていた。そのように、イスラエルの墮落の上方にはメシヤの統治について約束の栄光が輝いていた。怒りの雲には神の恵みの契約の虹がかかっていた。

静かな夜ただひとりで、ヨハネは、星のように子孫がふえるというアブラハムに与えられた神の約束を読んだ。モアブの山々を金色に光らせる夜明けの光は「朝の光のように、雲のない朝に、輝きでる太陽のよう」であられるおかたについて語った(サムエル記下二三ノ四)。また真昼の輝きの中には、「こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る」時に主の現われに伴う光輝がみられた(イザヤ書四〇ノ五)。

おそれとよるこびの気持とをもって、ヨハネは預言の巻物の中にメシヤの来臨についての啓示をさがした。これこそ蛇の頭をくだく約束の後裔、王がダビデの王座にあつて統治するのをやめる前に現われるシロ——平和を与える者——であつた。いまその時はきていた。支配者ローマ人がシオン山の宮殿にすわっていた。神の確かなみことばによつて、すでにキリストはお生れになつた。

ヨハネは、イザヤがメシヤの栄光を歡喜のうちに描写しているところを昼も夜も研究した。メシヤはエッサイの根から出た一つの若枝、義をもって治め、「公平をもって国のうちの柔和な者のために」さばきをなす王、「暴風雨をのがれる所……疲れた地にある大きな岩の陰」であつた。イスラエルはもはや「捨てられた者」と呼ばれず、その地は「荒れた者」と言われず、神から「わが喜びは彼女にある」と呼ばれ、地は「配偶ある者」といわれるのであつた(イザヤ書一一ノ四、三二ノ二、六二ノ四)。このさびしいさすらい人の心はかがやかしいまぼろ

しに満たされた。

ヨハネは王の美しさをながめて、自分を忘れた。彼は尊厳な聖潔を見て、自分が無能力で無価値なことを感じた。彼は神を仰ぎ見ていたので、人をおそれることなく、天の使者として出て行く用意ができた。彼は王の王であられる神の前に低く腰をかがめていたので、地上の君主たちの面前に恐れることなくまっすぐに立つことができた。

ヨハネはメシヤの王国の性質を十分には理解しなかった。彼はイスラエルが国家の敵から救われるのを望んだ。しかし王なるキリストが義のうちにおいになり、イスラエルが聖なる国家として建国されることが彼の望みの大目的であった。自分の誕生の時に与えられた預言、すなわち、

「神は……その聖なる契約（をおぼえて）、……

わたしたちを敵の手から救い出し、

生きている限り、きよく正しく、

みまえに恐れなく仕えさせてくださるのである」

この預言は、このようにして成就されるのであると彼は信じた（ルカーノ七一―七五）。

ヨハネはユダヤ国民があざむかれ、自己満足に陥り、罪の中に眠っているのを見た。彼は彼らをもっときよい生活にめざめさせたいと願った。神がヨハネに伝えさせられたメッセージは、国民を惰眠からびっくりしてめざ

めさせ、自分たちの大きな悪におそれおのかせるためであった。福音の種が足場を得ることができるようになる前に心の土がくだかれねばならない。イエスのいやしを求める前に罪の傷からの危険についてめざめなければならない。

神は罪人を甘やかすために使者をお送りにならない。神はきよめられていない者をだまして致命的な安全感を持たせるために平和のメッセージをお送りにならない。神は悪を行う者の良心に重荷をおき、その魂を罪の自覚という矢で刺し通される。奉仕の天使たちは、彼らの必要感を深め、「わたしは救われるために何をすべきでしょうか」という叫びを促すために、神の恐るべきさを罪人の前に示す。それから、屈辱を与えたみ手は、悔いた者を起す。罪を責め、高慢で野心的な者を恥じさせた声は、最もやさしい同情をもつて、「わたしにどうしてほしいか」とたずねられる。

ヨハネの伝道が始まった時、ユダヤ国民は、革命の一手手前の興奮と不満の状態のうちにあった。アケラオが退けられてから、ユダヤは直接ローマの支配下に入れられた。ローマ総督たちの圧政と搾取、また異教の象徴や慣習をユダヤに持ち込もうとする彼らの断固たる努力などのために、反乱がひき起され、それはイスラエルの最も勇敢な幾千の人々の血を流して静められた。こうしたことがみなローマに対する国民的な憎悪心を深め、ローマの権力から自由になりたいとの願いをますます強めた。

不和と争いのさなかに、一つの声が荒野からきこえてきた。それは、「悔い改めよ、天国は近づいた」という、人々を驚かせるようなきびしい、しかし望みに満ちた声であった(マタイ三ノ二)。新しいふしぎな力をもってそれは人々を動かした。預言者たちは、キリストの来臨をはるか将来の出来事として預言していた。ところがいま

それが近づいたと叫ばれているのであった。ヨハネの奇妙な恰好(かつこう)は聴衆の心に古代の預言者たちを思わせた。彼の態度と服装は預言者エリヤに似ていた。彼はエリヤの霊と力をもって、国をあげての墮落を攻撃し、みなぎっている罪を責めた。彼のことは率直で鋭く、罪をさとらせる力があつた。多くの者は彼が死からよみがえった預言者の一人であると信じた。全国民はわきたつた。群衆が荒野へむらがり集まつた。

ヨハネはメシヤの来臨をのべ伝え、人々に悔い改めを呼びかけた。罪からのきよめのしるしとして、彼はヨルダン川の流れで人々にバプテスマを施した。このようにして彼は、意味深い実物教訓によって、神の選民であることを自称している人々が罪にけがれていること、また心と生活がきよめられなければメシヤの王国にはいることができないことを宣言した。

君たちもラビたちも、兵卒たちも、取税人たちも、百姓たちも、預言者のことばを聞くためにやってきた。一時は神からの厳粛な警告が彼らを驚かせた。多くの人々が悔い改めにみちびかれ、バプテスマを受けた。あらゆる階級の人々が、バプテスマのヨハネの宣言する王国にはいるために、彼の要求に服従した。

多くの律法学者たちとパリサイ人たちがやってきて、罪を告白し、バプテスマを願つた。彼らは自分たちがほかの人たちよりもすぐれた人間であることをいばり、自分たちの敬虔さについて深い尊敬心を国民にいだかせていた。いま彼らの生活の不義の秘密がばくろされた。しかしヨハネはこれらの人々の多くが罪について真の自覚を持っていないことを、聖霊によって印象づけられた。彼らは日和見(ひよりみ)主義者だった。彼らは預言者の友人となつて、きたるべき王から恩恵を得ようと望んだ。そしてこの人気のある若い教師の手からバプテスマを

受けることによって、民に対する自分たちの影響力を強めようと考えた。

ヨハネは、彼らに会うと、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれると、だれが教えたのか。だから、悔改めにふさわしい実を結べ。自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。おまえたちに言っておく、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起すことができるのだ」との痛烈な質問をあげた(マタイ三ノ七―九)。

ユダヤ人はイスラエルに対する永遠の恩恵についての神の約束を誤解していた。「主はこう言われる、すなわち太陽を与えて昼の光とし、月と星とを定めて夜の光とし、海をかき立てて、その波を鳴りとどろかせる者——その名は万軍の主という。主は言われる、『もしこの定めがわたしの前ですたれてしまうなら、イスラエルの子孫もすたつて、永久にわたしの前で民であることはできない。』主はこう言われる、『もし上の天を量ることができ、下の地の基を探ることができたら、そのとき、わたしはイスラエルのすべての子孫をそのもろもろの行いのために捨て去ると主は言われる』(エレミヤ書三一ノ三五―三七)。ユダヤ人は、自分たちがアブラハムの直系の子孫であるということがこの約束を受けられる資格であると考えていた。しかし彼らは神が明示された条件を見落していた。この約束をお与えになる前に、神は、「わたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。……わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」と仰せになっていた(エレミヤ書三一ノ三三、三四)。

心に神の律法をしるされる民に、神の恩恵が保証されている。彼らは神と一つである。ところがユダヤ人は神

から離れていた。罪のために、彼らは神の刑罰の下に苦しんでいた。彼らが異教国家の支配下にある原因はここにあった。彼らの心は罪とがのために暗くなっていたが、昔神が非常に大きな恩恵をお与えになったので、彼らは自分たちの罪を大目にみていた。彼らは自分たちが他国民よりもすぐれていて、神の祝福を受ける資格があるとうめばれていた。

こうしたことは、「世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである」(コリント第一・一〇ノ一二)。われわれは、どんなにかたびたび神の祝福を誤解し、自分たちのうちに何かよいところがあるから恵まれるのだとうめばれることだろう。神はわれわれのためにしたいとお思になることをなさることができない。神の賜物は、われわれの自己満足を増長させ、われわれの心を不信と罪の中にかたくなにするために用いられる。

ヨハネは、イスラエルの教師たちの高慢心と利己心と残酷さは、彼らが正しい従順なアブラハムの子らであるよりはむしろまゐしの子ら、民にとって致命的なわざわいである証拠だと彼らに宣言した。彼らは自分たちが異教徒よりもずっとすぐれていると思っていたが、彼らが神から光を受けていたことを考えてみると、彼らはその異教徒よりも悪いのであった。彼らは自分たちが切り出された岩と掘り出された穴とを忘れていた(イザヤ書五一ノ一参照)。神はみこころを成就されるのに彼らをあてにしてあらなかった。神は、アブラハムを異教の民の中から呼び出されたように、他の人々を神の奉仕に召すこともあできになる。彼らの心はいまは砂漠(さばく)の石のようにいのちのないものにみえるかもしれないが、神のみたまは彼らをめざめさせてみこころを行わせ、神の約束の成就を受けさせることができるのである。

「斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ」と預言者は言った(マタイ三ノ一〇)。木の価値は、その名によってではなく、その実によってきまる。もし実が無価値なら、名はその木が減じるのを救うことができない。ヨハネは、神の前におけるユダヤ人の立場は、彼らの品性と生活によって決定されるのだと宣言した。□に言うだけでは無価値である。もしユダヤ人の品性と生活が神の律法に一致していなければ、彼らは神の民ではない。

心をさぐるヨハネのことばに、聴衆は罪をさとった。彼らは、やってきて、「それでは、わたしたちは何をすればよいのですか」とたずねた。ヨハネは答えて、「下着を二枚もっている者は、持たない者に分けてやりなさい。食物を持っている者も同様にしなさい」と言った(ルカ三ノ一〇、一一)。彼はまた取税人たちには不正について、兵卒たちには暴力について警告した。

キリストの王国の民となった者はみな信仰と悔い改めとの証拠を示すであろうと、ヨハネは言った。彼らの生活には親切と正直と忠誠がみられるであろう。彼らは困っている人たちに奉仕し、神に献げ物を持参するであろう。彼らは家のない者を宿らせ、美德とあわれみの模範を示すであろう。そのように、キリストに従う者たちは、人を生れ変らせる聖霊の力の証拠を示すであろう。毎日の生活に神の正義とあわれみと愛がみられるであろう。そうでなければ、彼らは火に投げ入れられるもみがらのようなものである。

「わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火によ

っておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」とヨハネは言った(マタイ三ノ一)。預言者イザヤは、神が「審判の霊と滅亡の霊をもつて」ご自分の民を不義からきよめられると宣言した。イスラエルに対する神のみことは、「わたしはまた、わが手をあなたに向け、あなたのかすを灰汁(あく)で溶かすように溶かし去り、あなたの混ざり物をすべて取り除く」であつた(イザヤ書四ノ四、一ノ二五)。罪にとって、それがどこにみいだされようと、「わたしたちの神は、実に、焼きつくす火である」(ヘブル書一二ノ二九)。神のみたまは、その力に服するすべての者のうちにあつて、罪を焼きつくす。しかしもし人が罪に執着するなら、その人は罪と一体となる。そのとき罪を滅ぼす神の栄光は、当然その人も滅ぼしてしまうのである。ヤコブは、天使と一晩格闘したあとで、「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」と叫んだ(創世記三二ノ三〇)。ヤコブはエサウに対する行為において大きな罪を犯した。だが彼は悔い改めていた。彼の罪とがはゆるされ、その罪はきよめられた。だから彼は神のご臨在のあらわれに耐えることができたのである。しかし人が故意に罪を心に宿していながら神の前に出たとき、その人はかならず滅ぼされた。キリスト再臨のときに、悪人は主イエスの「口の息をもつて」殺され、「来臨の輝きによつて」滅ぼされる(テサロニケ第二・一二ノ八)。神の栄光の光は、義人にはいのちを与えるが、悪人は滅ぼすのである。

バプテスマのヨハネの時代に、キリストは神の品性をあらわすおかたとして現われようとしてあられた。人々はイエスの前に出ると自分の罪が明らかにされるのであつた。罪からきよめられたいと願ったときにのみ彼らはイエスとのまじわりにはいることができたのであつた。心のきよい者だけがイエスの前に立つことができるので

あつた。

このようにバプテスマのヨハネは、神のメッセージをイスラエルに宣告した。多くの者が彼の教えに注意した。多くの者が、従うために一切を犠牲にした。群衆はここかしこへとこの新しい教師について行き、彼がメシヤであるかも知れないという望みをいだいている者が少なくなかった。しかしヨハネは、人々が自分に心を向けるのを見ると、あらゆる機会をとらえて彼らの信仰をきたるべきおかたに向けようとつとめた。

第 11 章

バプテスマ

本章は、マタイ三ノ一三―一七、マルコノ
九―一二、ルカ三ノ二一、二三にもとづく

荒野の預言者とその驚くべき布告についての知らせは、ガリラヤじゅうにひろがった。彼の叫びは、どんな遠い山村の百姓にも、海辺の漁師たちにも伝わり、単純で熱心なこれらの人々の心の中に最も真実な反響がみられた。ナザレでもヨセフのものであった大工の仕事場にこの話がつたえられ、イエスは神の召しを認められた。イエスの時がきていた。毎日の労働から離れて、イエスは母に別れを告げ、ヨルダン川に集まって行く同胞の足跡に従われた。

イエスとバプテスマのヨハネは従兄弟(いとこ)で、ふたりは誕生の事情によって密接な関係があった。だがふたりともまだ互いに面識はなかった。イエスはガリラヤのナザレで生活され、ヨハネはユダヤの荒野で生活していた。まったく異なった環境の中にあつて、彼らは世間から遠ざかつて生活し、お互いの連絡はなかった。このことは摂理のうちに定められていた。ふたりがお互いの主張を支持するために互いにしめし合わせたとは非難される根拠は何もないようにされた。

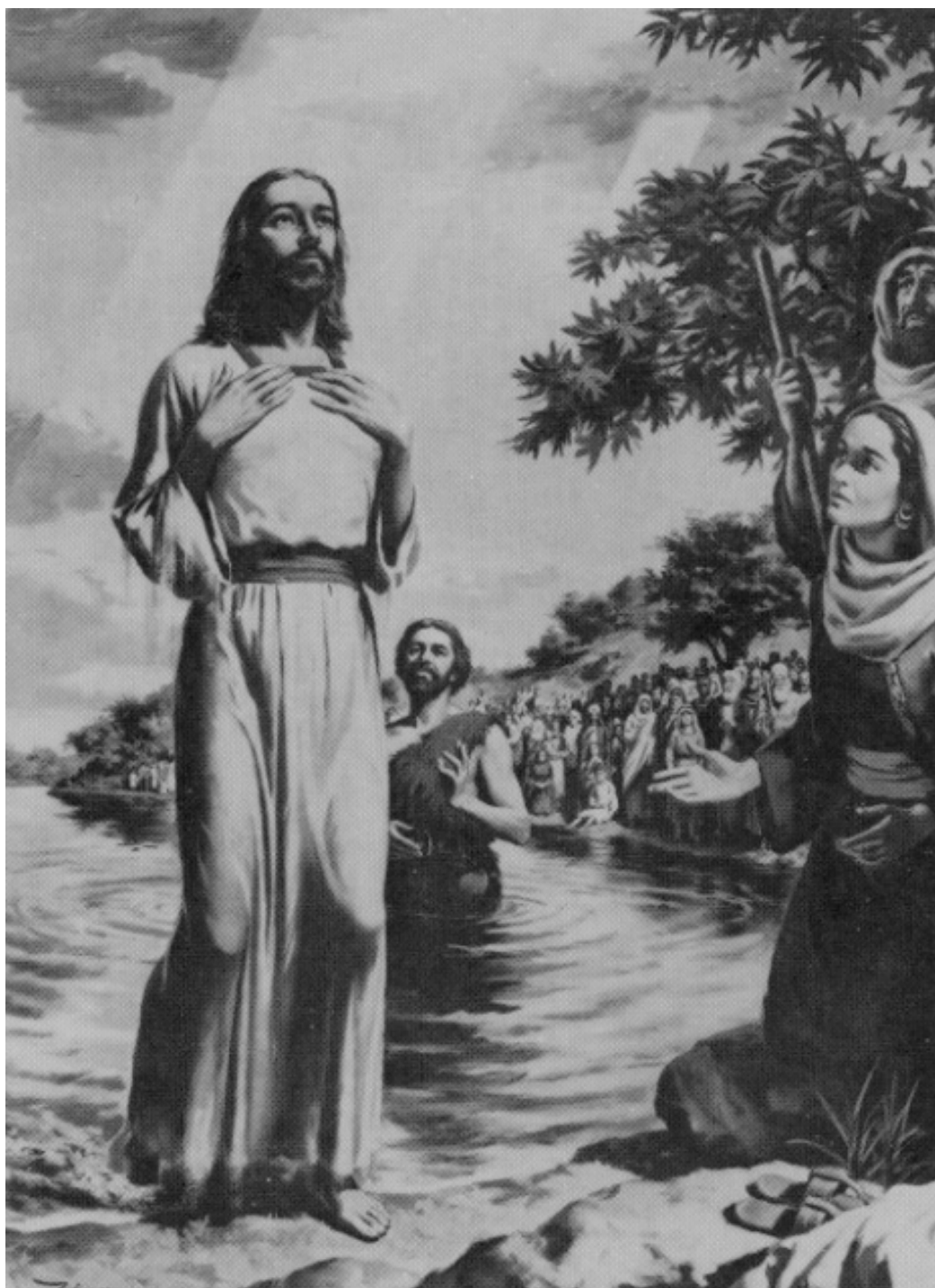
ヨハネは、イエスの誕生をさし示したいろいろな出来事をよく知っていた。彼は、イエスが子供のころエルサレムにおいてになったことや、その時ラビの学校で起ったことをきいていた。彼はイエスの罪のない生活を知り、イエスがメシヤであると信じていたが、イエスがメシヤであることについて、絶対的な確証を持っていたわけはなかった。イエスが長年人目につかずにすごされ、ご自分の使命について特別な証拠をお示しにならなかったことが、彼は本当に約束されたおかただろうかという疑問の根拠となった。しかしバプテスマのヨハネは、神がすべてを明らかにされる時があることを信じ、信仰をもって待った。メシヤがヨハネの手でバプテスマを受けることを求められ、その時彼が神であられる証拠が与えられるということが、ヨハネに示されていた。このようにしてヨハネはメシヤを民の前に示すことができたのであった。

イエスがバプテスマを受けにいった時、ヨハネはイエスのうちにこれまでどんな人にもみたことのない純潔な品性をみとめた。イエスのご臨在の雰囲気そのものが神聖でおそれ多い気持を感じさせた。ヨルダン川のヨハネのまわりに集まってきた多くの人々の中に、彼は暗い罪悪の話をきき、数知れない罪の重荷におしつけられている魂を見た。しかしこんなに神聖な雰囲気をただよわせている人にはこれまで会ったことがなかった。こうしたことはすべてメシヤについてヨハネに示されていたところと一致していた。しかしヨハネはイエスのたのみに応ずることをちゅうちょした。罪人である自分がどうして罪のないおかたにバプテスマを施すことができるのか。悔い改める必要のないおかたが、不義を告白して洗いきよめる儀式をどうしてお受けになることがあるのか。

イエスがバプテスマをたのまれると、ヨハネはおしとどめて「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたがわたしのところにおいでになるのですか」と叫んだ(マタイ三ノ一四)。イエスは、きつぱりとしかしやさしい威厳をもつて、「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」と答えられた(マタイ三ノ一五)。そこでヨハネは譲歩して、救い主をヨルダン川にみちびき、水の下に沈めた。「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がった。すると、見よ、天が開け、神の御霊(みたま)がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった」(マタイ三ノ一六)。

イエスは、ご自分のために、罪の告白としてバプテスマをお受けになったのではなかった。イエスはご自分を罪人と同じにごらんになって、われわれのとるべき手段をとられ、われわれのなすべきわざをされたのであった。バプテスマ後のイエスの苦難と忍耐の一生もまたわれわれの模範であった。

水からあがってこられると、イエスは祈りのために川の岸にひざまずかれた。一つの新しい重要な時代がイエスの前に開かれようとしていた。イエスはいまもっと広い舞台に立って、ご自分の生涯の戦いにはいるうとしておられた。イエスは平和の君であったが、彼がこられたことは宣戦布告のようなものであったにちがいない。イエスが建設するためにおいでになった王国は、ユダヤ人が望んでいた王国とは正反対であった。イスラエルの儀式と制度の基であられたおかたが、その敵また破壊者としてみられるようになるのである。シナイ山で律法を布告されたおかたが、違反者として宣告されるのである。サタンの力をうち破るためにおいでになったおかたが、ベルゼブルと非難されるのである。地上ではだれひとりイエスを理解した者がなく、公生涯の間もなおひとりで



バプテスマのヨハネは、イエスをヨルダン川の水にしづめてバプテスマをさずけた。神のみ子イエスが水からあがられると、聖霊がその上にくだり、天から声がきこえた。

歩まれねばならない。イエスの一生の間、その母と兄弟たちは彼の使命を理解しなかった。弟子たちさえ、イエスを理解しなかった。イエスは、神と一つのおかたとして、永遠の光のうちに住んでおられたが、地上の生涯は孤独のうちに送られねばならない。

イエスは、われわれと一つになって、われわれの不義と苦悩の重荷を負われねばならない。罪のないおかたが罪の屈辱を感じられねばならない。平和を愛されるおかたが争いと共に住み、真実が虚偽と、純潔が邪悪と共に住まねばならない。律法を犯したために生じたあらゆる罪、あらゆる不和、あらゆるけがれた欲がイエスの心を苦しめた。

イエスはひとりで道を歩み、ひとりで重荷を負われねばならない。栄光をぬいで、人間の弱さを着られたイエスの上にこの世のあがないがおかれねばならない。イエスはすべてそうしたことを見、また感じられたが、彼の決意は固かった。墮落した人類の救いがイエスの腕にかかっていたので、彼は手をさしのべて大能なる愛の神のみ手をにぎられた。

救い主が魂をそいで祈られる時、その目は天を見通しておられるようにみえる。罪が人々の心を固くしたことも、彼らがイエスの使命をみとめて救いの賜物を受けることが困難なこともイエスはよくご存じである。彼らの不信にうち勝ち、サタンが彼らをとりこにしている鎖をたち切り、彼らのために破壊者を征服する力を、イエスは天父に懇願される。み子イエスのうちにある人性を神が受け入れられるという証拠を、イエスはお求めになる。天使たちはこのような祈りをこれまできいたことがなかった。彼らは、愛する指揮官イエスに、保証と慰めの

メッセージを伝えたいと熱望する。だがそれはできない。天父がご自身でみ子の祈願に答えられるのである。み座から直接に神の栄光が輝き出る。天が開け、いとも清い光がはどのような形をなして、救い主の頭上にくだる。それは柔和で心のへりくだったおかたであるイエスにふさわしい象徴である。

ヨルダン川のおびただしい群衆の中で、ヨハネ以外にはこの天の光景をみとめた者は、ほとんどなかった。しかし神のご臨在の荘厳さが会衆の上にとどまった。人々はだまってキリストをみつめていた。そのお姿は神のみ座をいつもとりまいている光を浴びていた。上を向かれたイエスのお顔は、これまで人の顔にみられたことのない栄光に輝いた。開かれた天から、一つの声がくだって、「これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である」と言うのがきこえた(マタイ三ノ一七)。

この確認のことは、その光景を見た人々のうちに信仰心を起し、また使命のために救い主を力づけるために与えられたのであった。不義の世の罪がキリストの上におかれたにもかかわらず、また屈辱をしのんでわれわれの墮落した性質をおとりになったにもかかわらず、天からの声は、イエスを永遠なる神のみ子と宣言した。

イエスが嘆願者としてひざまずき、涙ながらに天父の是認を懇願しておられるのを見て、ヨハネは深く感動した。神の栄光がイエスをと리카こみ、天からの声がきこえた時、ヨハネは神が約束しておられたしをみとめた。自分がバプテスマをさずけたおかたが世のあがない主であることを彼は知った。聖霊がヨハネの上にくだった。彼は手をさしのべてイエスを指さし、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と叫んだ(ヨハネ一ノ二九)。聴衆の中のだれも、またこのことばを語った彼自身さえ、「神の小羊」というこのことばの重大な意味をみとめ

ていなかった。モリア山上で、アブラハムは息子から、「燔祭の小羊はどこにありますか」ときかれた。父は「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と答えた(創世記二二ノ七、八)。そして、イサクの代りに天から備えられた牡(お)羊に、アブラハムは人類の罪のために死なれるおかたの象徴を見た。聖霊はイザヤを通し、例を用いて、救い主のことを、「ほふり場にひかれて行く小羊のように」「主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた」と預言した(イザヤ書五三ノ七、六)。しかしイスラエルの民はこの教訓を理解していなかった。彼らの多くは、いけにえの献げ物について、異教徒たちがいけにえについて考えているのとまったく同じように、神をなだめるための献げ物という考え方をしていた。神は、人々を神とやわらがせる賜物が神ご自身の愛から与えられることを彼らに教えたいと望まれた。

ヨルダン川で、イエスに「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言われたことは、全人類を含んでいる(マタイ三ノ一七)。神はわれわれの代表者としてのイエスに語られた。どんなに罪や欠点をもっている、われわれは無価値なものとして捨てられることはない。「神は愛するみ子によってわたしたちを受け入れてくださった」(エペソーノ六英語訳聖書)。キリストの上にくだった栄光は、われわれに対する神の愛の保証である。それは祈りの力について、すなわち人間の声が神の御耳にとどくことと、われわれの祈願が天の宮廷に受け入れられることを告げている。罪によって、地は天から切り離され、天とのまじわりから遠ざけられた。だがイエスは地をもう一度栄光の天とむすびつけられた。イエスの愛は人類をとりまき、最高の天に達した。開かれた門から救い主の頭上にさした光が、試みに抵抗するために助けを祈るとき、われわれの上にさすのであ

る。イエスに語られたみ声が、信じているひとりびとりにおかつて「これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である」と言われるのである。

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」(ヨハネ第一・三ノ二)。われらのあがない主が道をお開きになったので、どんなに罪深い者も、どんなに困っている者も、またどんなにしいたげられ、あなどられている者も、天父に近づくことができる。だれでもみな、イエスが備えに行かれた住居をわが家とすることができる。「聖なる者、まことなる者、ダビデの力を持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。……見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」(黙示録三ノ七、八)。

第 12 章

試
み

本章はマタイ四ノ二―一、マルコ二ノ二、一三、ルカ四ノ二―一三にもとづく

「さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダン川から帰り、荒野を……御霊にひきまわされ」た（ルカ四ノ一、二）。

マルコのことばはもっと意味が深い。「それからすぐに、御霊がイエスを荒野に追いやった。イエスは四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた。そして獣もそこにいたが、御使たちはイエスに仕えていた」「そのあいだ何も食べ」られなかった（マルコ二ノ一三、一三、ルカ四ノ二）。

イエスが試みられるために荒野へみちびかれた時、彼は神のみたまによってみちびかれたのであった。イエスはご自分から試みを招かれなかった。イエスが荒野へ行かれたのは、ひとりになって、ご自分の使命と働きとを熟考するためであった。断食と祈りによって、イエスはご自分がたどらねばならない血みどろの道のために、準備されるのであった。しかしサタンは、救い主が荒野へ行かれたことを知って、これこそイエスに近づく最上の時だと思った。

世の重大な形勢は、光の君と暗黒の王国の指導者との争闘にかかっていた。人を罪に誘惑してから、サタンは

この地上を自分のものとして主張し、自らこの世の君と称した。彼は人類の父母を自分の性質に従わせたので、ここに自分の王国を築こうと考えた。彼は、人類が彼を自分たちの君主にえらんだと宣言した。人類を支配することによって、彼はこの世の主権を保った。キリストはサタンの主張が誤りであることを証明するためにおいでになった。人の子として、キリストは神に対する忠誠を保たれるのであった。そのことによって、サタンは人類を完全に支配していないこと、世に対する彼の主張はうそであることが示されるのであった。サタンの権力から救われたいと望む者はみな自由にされるのであった。罪のためにアダムが失った主権は回復されるのであった。

エデンで、蛇に向かって、「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と宣告されて以来、サタンは世に対する絶対的な支配力を持つことができないことを知っていた(創世記三ノ一五)。人類の中には、サタンの主権に抵抗する一つの力が働いているのがみられた。非常な興味をもってサタンは、アダムとその息子たちがささげるいけにえを見守った。このような儀式の中に、彼は地と天との間のまじわりの象徴をみとめた。彼はこのまじわりを打ち切ることにとりかかった。サタンは神の悪口を言い、救い主をさし示している儀式を曲解させた。人類は、自分たちが滅びるのをよろこぶおかたとして神を恐れるようになった。神の愛をあらわすはずだったいけにえが、神の怒りをなだめるためにささげられた。サタンは自分の支配を人々におしつけるために、人々の悪い欲望をかきたてた。書かれた神のみことばが与えられたとき、サタンは救い主の来臨についての預言を研究した。サタンは、キリストがこられたとき、人々がキリストをこばむように、これらの預言について人々を盲目にするため

に、各時代にわたって働いた。

イエスがお生れになったとき、サタンは彼の主権について反論するために神から任命されたおかたがこられたことを知った。生れたての王の権威について証言した天使たちのことばに、サタンはふるえた。サタンは、キリストが天父のいとし子として天で占めておられた立場をよく知っていた。神のみ子が人としてこの世においでになったということが、彼の心に驚きと不安とを満たした。彼はこの大きな犠牲の奥義をはかり知ることができなかった。彼の利己的な魂はあざむかれた人類へのこのような愛を理解することができなかった。天の栄光と平和、神とのまじわりのよろこびは、人間にはかすかにしか理解されていなかったが、おおうことをなすケルビムであったルシファーにはよくわかっていた。天を追われてから、サタンは、ほかの者たちを自分と同じように墮落させることによって報復しようと決心していた。人々に天の事物を軽視させ、心を地上のものに向けさせることによって、彼はこのことをするのであった。

天の司令官が人々の魂をご自分の王国にみちびかれるには妨害がないわけではなかった。彼は、ベツレヘムで赤ん坊だった時から、たえずサタンに攻撃された。神のみかたちは、キリストのうちにはつきりとあらわれていたので、キリストを征服することが、サタンの会議できまった。どんな人間もこの世に生れて、欺瞞者の力からのがれることはできなかった。悪の同盟勢力はイエスとの戦いに従事し、できるならばイエスにうち勝とうとして、イエスの道に殺到した。

救い主のバプテスマのとき、サタンはその目撃者たちの中にいた。サタンは天父の栄光がみ子をおおっている

のを見た。彼はエホバのみ声がイエスの神性を証明するのをきいた。アダムが罪を犯して以来、人類は神との直接のまじわりから断たれ、天と地とのまじわりはキリストを通して行なわれていた。しかしいまイエスが「罪の肉の様」をとっておいでになったので、天父は自らお語りになった（ローマ八ノ三）。神は、以前にはキリストを通して人類とまじわられたが、こんどはキリストのうちにあって人類とまじわられた。サタンは、神が罪を憎まれるあまり、天と地が永遠に隔離されるように望んでいた。だがいま神と人との間のつながりが回復されたことが明らかになった。

サタンは自分が征服するか征服されるかのどちらかであることをさとした。戦いの形勢は味方の天使たちにまかせておけないほど重大であつた。彼が自ら戦いを指揮しなければならない。背信の



サタンは神のみことばの預言を研究していた。そして、イエスがこの地上におくだりになる前に、欺瞞者サタンは人々を真理に対してめくらにし、メシヤをこばませようとした。

全精力が神のみに向かって集中された。キリストは地獄のあらゆる武器のまとなられた。

キリストとサタンとのこの戦いを、自分自身の生活に特別な関係がないもののようにみている人が多い。彼らにとってこの戦いは興味がない。だがどの人の心の領分でもこの争闘がくりかえされているのである。人は、悪の隊列から離れて、神の奉仕に加わりうるとき、必ずサタンの攻撃に遭遇する。キリストが抵抗された試みは、われわれが抵抗するには非常に困難にみえる試みである。キリストの品性がわれわれの品性にまさっているだけ余計にキリストに対する試みは強かった。世の罪という恐るべき重さを身に負って、キリストは、食欲について、世への愛着について、知りながら罪を犯すようになる自己表示への愛着について、試みに耐えられた。これはアダムとエバを敗北させた試みであり、また容易にわれわれをうち負かす試みである。

サタンは、神の律法が不正で従うことのできないものであるという証拠として、アダムの罪を指摘していた。キリストは、われわれの人性をもつて、アダムの失敗をあがなわれるのであった。しかし、アダムが誘惑者から攻撃されたときには、彼には罪の影響がすこしもなかった。彼は完全な人間としての力をもっていて、心もからだも活力に満ちていた。彼はエデンの栄光にとりかこまれ、天使たちと毎日まじわっていた。イエスがサタンと争うために荒野へはいつて行かれた時には、アダムの時のようではなかった。四千年間にわたって、人類は体力も知力も道德価値も低下していた。しかもキリストは退歩した人類の弱さを身につけられた。こうすることによってのみキリストは人類を墮落の一番深い底から救うことがおできになるのであった。

キリストが試みに負けることは不可能だったのだと主張する人が多い。もしそうなら、キリストはアダムの立

場に置かれることはできなかったし、アダムが得られなかった勝利を得ることもおできにならなかったであろう。もしわれわれが何らかの意味でキリストよりもきびしい戦いをたたかねばならないとしたら、キリストはわれわれを救うことがおできにならないであろう。だが救い主は、罪の負債ごと人性をおとりになった。彼は試みに負ける可能性のまま人間の性質をおとりになった。キリストが耐えられなかったことで、われわれの耐えねばならないことは何一つない。

エデンのアダム、エバと同じように、キリストにとっても、食欲が最初の大きな試みの基盤であった。堕落がはじまったちようどその点から、われわれのあがないの働きは始められねばならない。アダムが食欲をほしいままにして墮落したように、キリストは食欲を制することによって勝利なさねばならない。「四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。すると試みる者がきて言った、『もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらん下さい。』イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』(マタイ四ノ二―四)。

アダムの中からキリストの時まで、放縦のために食欲と情欲の力が増大し、ついにはそつした欲がほとんど無制限な支配力を持つまでになっていた。こうして人々は、品性が低下し、病気にかかり、独力で勝利することは不可能だった。キリストは、人のために最もはげしい試みに耐えて勝利された。彼は、われわれのために、飢えや死よりも強い自制心を働かせられた。そしてこの最初の勝利の中に、暗黒の勢力とわれわれとのすべての戦いにみられるいろいろなほかの問題が含まれていた。

イエスが荒野へはいって行かれたとき、彼は天父の栄光につつまれた。神とのまじわりに心を奪われておられたので、イエスは人間の弱さから高められた。しかし栄光が去ると、彼は試みと戦うために残された。試みは刻にイエスに迫っていた。イエスの人間としての性質は、彼を待ち受けている戦いにしりごみした。四十日の間、彼は断食し、祈られた。飢えのために弱くなり、衰え、精神的苦悩のために疲れ、やつれはてて、「彼の顔だけは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていた」（イザヤ書五二ノ一四）。いまこそサタンの機会であった。いまこそキリストにうち勝てると、サタンは想像した。

救い主の祈りに答えるかのように、天からきた天使の姿をした者が救い主のもとにやってきた。彼は、キリストの断食が終ったことを宣言するようにと神から任務をさづけられてきたと主張した。アブラハムがイサクをさげようとした時、神が天使を送ってその手をとどめられたように、天父はキリストが自ら進んで血染めの道にいられたことに満足されて、キリストを救うために天使をおつかわしになったというのが、イエスにもたらされたことばであった。救い主は飢えのために弱り、食物を切望しておられた。その時突然にサタンがイエスを襲ったのである。荒野に点々と横たわって、あたかもパンのようにみえる石を指さして、誘惑者は、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらん下さい」と言った（マタイ四ノ三）。

彼は光の天使をよそおっているが、「もしあなたが神の子であるなら」というこの最初のことばにその本性があらわれている。ここに信用しない気持がほめかされている。もしイエスがサタンの言う通りのことをされたら、それは疑いの気持をみとめたことになる。誘惑者は世の初めに人類をうまく堕落させたのと同じ手段でキリスト

を倒そうとはかる。エデンの園でサタンは何と巧妙にエバに近づいたことだろう。「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」(創世記三ノ一)。ここまでは、誘惑者のことばは本当であった。しかしこのことばを語る彼の調子の中に、神のみことばに対する軽蔑がかくされていた。かくされた否定、神の真実への疑いがあった。サタンは、神がみことば通りにはなさらないだろう、こんな美しい果実を与えないでおくことは人に対する神の愛とあわれみに反することだという考え方を、エバの心に吹きこもうとした。同じようにいま誘惑者は、彼自身の感情をキリストに吹きこもうとする。「もしあなたが神の子であるなら」。このことばはサタンの心に苦痛を与えた。彼の声の調子には強い懷疑心があらわされている。神がご自分の子をこんな目にあわされるだろうか。神はみ子を食物もなく、友もなく、慰めもないままに野獣といっしょに荒野に放り出したままであかれるだろうか。神はみ子をこんな目にあわせるつもりではなかったのだと、サタンはほのめかす。「もしあなたが神の子であるなら」このさし迫った飢えからまぬかれることによって、あなたの力を示しなさい。この石がパンとなるように命じなさい。

「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」との天の声はまだサタンの耳になりひびいている(マタイ三ノ一七)。しかし彼は、キリストにこのあかしを信じさせまいと決心していた。神のこのみことばは、キリストにとってご自分の聖なる使命についての保証であった。キリストはひとりの人間として人々の中に住むためにおいでになったが、キリストが天とのつながりをもっておられることを宣言したのはこのことばであった。キリストにこのことばを疑わせようとするのがサタンの目的だった。もし神に対するキリストの確信を動揺させ

ることができれば、争闘の全体を通じて勝利は自分のものになるということをサタンは知っていた。そうしたら、サタンはイエスにうち勝つことができるのである。サタンは、キリストが落胆と極度の空腹に迫られて、天父への信仰を失い、ご自分のために奇跡を行われるように望んだ。もしキリストがそうされたら、救いの計画はこわれてしまったのである。

サタンと神のみ子が争闘において初めて顔を合わせた時、キリストは天使軍の司令官であった。そして天の反乱の指導者サタンは追い出された。いまふたりの立場は反対になっているようにみえ、サタンは有利に見える自分の立場を利用しようとする。天の最も有力な天使のひとりから追放されたと、彼は言う。イエスの様子は、神から見放され、人から見捨てられたその墮落天使であることを示しているというのである。もしイエスが神のみ子なら、「これらの石がパンになるように命じてごらんさい」とのサタンの主張を、奇跡を行うことによって証明することができるよう(マタイ四ノ三)。このような創造力の行為は神性についての決定的な証拠となり、争闘を終らせるであろうと、誘惑者は主張する。

イエスは心の戦いなしにはこの大欺瞞者のことばをだまってくることがおできにならなかった。しかし神のみ子はご自分の神性をサタンに証明したり、ご自分の屈辱の理由を説明したりなさらないのであった。反逆者の要求に応じてても、人類のためにも、あるいは神のみ栄えのためにも、何の益も得られない。もしキリストが敵のそそのかしに応じられたら、サタンはさらに、あなたが神のみ子であると信じられる証拠を示せと言っただろう。証拠はサタンの心の中にある反逆の力をうち破るのに役立たなかったであろう。だからキリストはご自分の

利益のために神の力をお用いにならないのであった。キリストはわれわれが試みに会わねばならないのと同じように試みに会い、信仰と服従の模範を示すために、おいでになったのである。この荒野においても、またその後の地上生活のどんな時にも、キリストはご自分のために奇跡を行われなかった。イエスのすばらしいみわざはみな他人の益のためであった。イエスは初めからサタンをみとめておられたが、挑発されて彼と論争するようなことをなさらなかった。天からの声の記憶に力づけられて、キリストは天父の愛に信頼しておられた。彼は試みにかわり合おうとなさらなかった。

イエスは聖書のみことばをもってサタンに応じられた。「こう書かれている」と、イエスは言われた。試みのたびに、イエスの戦いの武器は神のみことばであった。サタンはキリストに神性の証拠として奇跡を求めた。しかしどんな奇跡よりも力のあるもの、すなわち「主はこう言われる」ということばに対する固い信頼こそ反論できない証拠であった。キリストがこの立場を持続されるかぎり、誘惑者は勝つことができなかった。

キリストが最もはげしい試みに攻められたのは、最も弱っておられた時であった。こうしてサタンは、勝とうと思った。この方法によって、彼は人類に勝利してきた。体力が衰え、意志力が弱り、信仰が神のうちに安住しなくなったとき、正しいことのために長い間勇敢に戦ってきた人々が征服された。モーセはイスラエルの四十年間の放浪に疲れはてていた。その時、彼の信仰は、一瞬間無限の力を手放した。彼はちょうど約束の地の境界で失敗した。エリヤもそうだった。彼はかつてアハブ王の前に恐れるところなく立ち、四百五十人のバアルの預言者たちを先頭にしたイスラエルの全国民を前にして立った。偽預言者たちが殺され、民が神への忠誠を宣言した

あのカルメル山上の恐ろしい日の後に、エリヤは偶像礼拝者のイゼベルにおどかされていのちから逃げた。このようにサタンは人間の弱味につけこんできた。今後も彼は同じ方法で働くであろう。雲におおわれ、周囲の事情に困惑し、あるいは貧乏や困苦に苦しめられている時にはいつでも、サタンは試み、困らせようと待ちかまえている。彼はわれわれの品性の弱点を攻撃する。彼は、神がそのような物事の状態が存在することをおゆるしになったことについて、神に対するわれわれの信頼心を動揺させようとする。われわれは神を信頼しないように、神の愛を疑うように誘惑される。サタンは、キリストのところへやってきたように、しばしばわれわれのところへやってきて、われわれの欠点や弱さを目の前に並べたてる。彼は、魂を落胆させ、神に対するわれわれの信頼心を滅ぼそうと望んでいる。そうすれば確実に魂を餌食とすることができるのである。もしわれわれがイエスと同じようにサタンに対するならば、われわれは多くの敗北からまぬかれるのである。敵とかかわり合うことによって、われわれは相手に有利な立場を与えるのである。

キリストは誘惑者に、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と言われたが、それは、それより千四百年前にキリストがイスラエルに語られたことばのくりかえしであった（マタイ四ノ四）。「あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを導かれた……主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口からでるすべてのことばによって生きることあなたに知らせるためであった」（申命記八ノ二、三）。荒野で食物を得る方法が全くなかったとき、神はご自分の民に天からマナをお送りになった。



イエスが弱り、飢えておられたとき、悪魔がきてイエスに石をパンに変えるように奇跡を行ないなさいとそそのかした。イエスは悪に抵抗し、人はパンだけで生きることはできないと言われた。

そしてたえず十分な食物が与えられた。このような食物が与えられたのは、人々が神によりたのみ、神の道を歩むかぎり、神は彼らを見捨てられないということを教えるためであった。救い主は、ご自分がイスラエルにお教えになった教訓をいま実行された。神のみことばによって、助けがヘブルの軍勢に与えられたが、同じみことばによってイエスにも助けが与えられるのであった。イエスは救いをもたらされる神の時を待たれた。彼は神に従って荒野におられたので、サタンのことばに従って食物を得ようとされなかった。宇宙の注視の中で、イエスは神のみこころからすしでも離れるよりは、どんな目にも会う方がわざわざいいないということを証明された。

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ四ノ四）。キリストに従う者にとって、神に仕えることと世俗の事業を進めることが両立しない場合がしばしばある。おそらく神のあるはつきりした戒めに従えば生活の手段がたれるようにみえるであろう。サタンは、その人に良心的な確信を犠牲にしなければならないと信じこませようとするであろう。だがこの世において信頼できる唯一のものは神のみことばである。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ六ノ三三）。この世においてさえ、天の父なる神のみこころから離れることはわれわれのためにならない。神のみことばの力を知るとき、われわれは食物を手に入れたり、自分のいのちを救ったりするためにサタンのそのかしに従うようなことをしない。われわれの唯一の質問は、神のご命令は何か、神の約束は何かということである。これがわかれば、われわれはそのご命令に従い、その約束に信頼するのである。

サタンとの最後の対戦において、神に忠実な者は、この世の一切の支持がたれるのを見る。彼らは地上の

権力に従うために神の律法を破ろうとしないので、売ることも買うことも禁じられる。ついには、彼らを殺せとの布告が出される(黙示録一三ノ一一七参照)。しかし忠実な者には、「このような人は高い所に住み、堅い岩はそのとりでとなり、そのパンは与えられ、その水は絶えることがない」との約束が与えられている(イザヤ書三三ノ一六)。この約束によって神の子らは生きるのである。この地上がききに荒らされるとき、彼らは養われる。「彼らは災の時に恥をこうむらず、ききの日にも飽き足りる」(詩篇三七ノ一九)。預言者ハバクは、その艱難の日を予期したが、彼のことは教会の信仰を表わしている。「いちじくの木は花咲かず、ぶどうの木は実らず、オリブの木は産はむなくなり、田畑は食物を生ぜず、おりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ」(ハバク書三ノ一七、一八)。

主の最初の大きな試みから学ぶべきすべての教訓の中で、食欲と情欲との抑制に関係のあるものほど重要なものはない。各時代を通じて、肉の性質に訴える試みは、人類を腐敗させ墮落させるのに非常に効果的であった。サタンは、はかり知れない賜物として神が人間にお与えになった知的道德的能力を減ぼすために、不節制を通して働く。こうして人間は永遠の価値をもった事物を認識することができなくなる。肉欲の放縱を通して、サタンは魂から神のみかたちの面影をすっかり消し去ろうとする。

キリストの初臨のとき存在していた無制限な放縱と、その結果である病氣と墮落とは、キリストの再臨前にはなほだしい悪とともにもう一度みられる。キリストは、世の状態がノアの洪水(こゝろづい)前の時代や、ソドム、ゴモラの時代と同じようになると断言しておられる。心の中に思うこと考えることはみないつも悪いことばかり

である。われわれはいまその恐るべき時のまぢかに生きているので、救い主の教訓をしつかり心にきざまねばならない。キリストが耐えられた言いようのない苦悩によってのみ、われわれはでたらめな放縱の悪を評価できるのである。キリストの模範は、食欲と情欲とを神のみこころに従わせることによってのみわれわれは永遠のいのちの望みを持つことができるということを明らかにしている。

自分自身の力では、われわれの墮落した性質のやかましい要求をこばむことができない。この道から、サタンは試みをもってやってくる。キリストは敵が、遺伝的な弱点に乗り、神に信頼を置いていない人々をいつわりのほめかしによって、わなにおとし入れるためにどの人のところにもやってくることをご存じであつた。そこで主は、人の通らねばならない道を自らお通りになって、われわれが勝利する道をお備えになった。サタンとの戦いにわれわれが不利な立場に立つことは主のみこころではない。主はわれわれが蛇の攻撃におびえたり落胆したりすることを望まれない。「勇氣を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」と主は言われる(ヨハネ一六ノ三三)。

食欲の力と戦っている者は試みの荒野における救い主を見なさい。「わたしは、かわく」と叫んで、十字架上に苦しまれたイエスを見なさい(ヨハネ一九ノ二八)。彼はわれわれが耐えることのできるすべてのことに耐えられた。彼の勝利はわれわれのものである。

イエスは天父の知恵と力にたよられた。彼は、「主なる神はわたしを助けられる。それゆえ、わたしは恥じることがなかった。……わたしは決してはずかしめられないことを知る。……見よ、主なる神はわたしを助けられる」

と断言しておられる。イエスはまたご自身の模範をさし示して、われわれにこう言われる、「あなたがたのうち主を恐れ、そのしもべの声に聞き従い、暗い中を歩いて光を得なくても、なお主の名を頼み、おのれの神にたよる者はだれか」(イザヤ書五〇ノ七一〇)。

「この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」とイエスは言われた(ヨハネ一四ノ三〇)。イエスの中にはサタンの詭弁(ぎべん)に応ずるものは何もなくあった。イエスは罪に同意されなかった。一つの思いにおいてさえ、彼は試みに負けたまわなかった。われわれもそうなのである。キリストの人性は神性と結合していた。イエスは聖霊の内住によって戦いに備えられた。しかもイエスはわれわれを神のご性質にあずかる者とするためになったのである。われわれが信仰によってキリストにつながっているかぎり、罪はわれらの上に権をとることはできない。神はわれわれが品性の完全に到達できるように、われらの中にある信仰の手を求め、それをみちびいてキリストの神性をしっかりと把握(はあく)させてくださるのである。

しかもキリストは、これが達成される方法をわれわれにお示しになった。イエスはサタンとの戦いにどんな手段で勝利されただろうか。神のみことばによってである。みことばによってのみ彼は試みに抵抗することがおできになった。「こう書かれている」とイエスは言われた。「尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである」(ペテロ第二・一ノ四)。神のみことばの中にある約束はどれもみなわれわれのものである。「神の口から出る一つ一つの言」によってわれわれは生きるのである(マタイ四ノ四)。試みに攻撃された時には、周囲を見たり、自

己の弱さを見たりしないで、みことばの力を見なさい。その力はすべてあなたのものである。詩篇記者はこう言っている、「わたしはあなたにむかつて罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」「あなたのくちびるの言葉によって、わたしは不法な者の道を避けました」(詩篇一一九ノ一一、一七ノ四)。

第13章

勝利

本章はマタイ四ノ五一一、マルコ一ノ二二、一三、
ルカ四ノ五一一三にもとづく

「それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、『もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんさい。』

「神はあなたのために御使たちにお命じになると、

あなたの足が石に打ちつけられないように、

彼らはあなたを手でささえるであろう」

と書いてありますから」(マタイ四ノ五、六)。

サタンはいま自分がイエスご自身の立場に立ってイエスに対しているつもりである。ずるい敵は神の口からでたみことばを自分から持ち出す。彼はまだ光の天使の様子をしていて、自分が聖書に通じ、そこに書かれていることの意味を理解していることを明らかにする。前にイエスがご自分の信仰を裏づけるために神のみことばを用いられたように、いま誘惑者サタンは自分の欺瞞を有利にするために神のみことばを用いる。サタンは、これま

でイエスの忠誠をためしたにすぎないのだと主張し、いまイエスのしっかりした態度をほめる。救い主が神への信頼を示されたので、サタンはイエスがご自分の信仰についてさらにほかの証拠を示されるようにすすめる。

しかしふたたびその試みには、「もしあなたが神の子であるなら」という不信のほめかしが前置きされている。キリストは、この「もし」に答えるように誘惑されたが、この疑いをほんの少しでも受け入れようとはされなかった。イエスは、サタンに証拠をみせるためにご自分のいのちを危険にさらそうとはされなかった。

誘惑者サタンはキリストの人性につけこんで、キリストに故意の罪を犯させようと考えた。だが、サタンは誘惑することはできても、罪を犯すように強制することはできない。サタンはイエスに「下に飛びおりてごらんさい」と言ったが、自分ではイエスを投げ落とすことができないことを知っていた。なぜなら神がイエスを救い出すために手をお出しになるからである。サタンはまたイエスに飛び下りるように強制できなかった。キリストが試みに同意されない限り、彼を敗北させることはできなかった。この世のどんな力も、あるいはよみのどんな力も、キリストを天父のみこころからすこしでも離れさせるように強制することはできなかった。

誘惑者サタンはわれわれに悪をなすように強制することはできない。心がサタンの支配に屈しないかぎり、サタンはそれを支配することができない。サタンがわれわれの上に彼の力を働かせることができる前に、意志が同意し、信仰の手がキリストから離れねばならない。しかしわれわれの心のうちに宿っているあらゆる罪の思いはサタンに足場を与える。われわれが神の標準に達していない点はどれもみな開かれた戸であって、サタンはそこからはいってきてわれわれを誘惑し、破滅させるのである。われわれの側で失敗したり、敗北したりするたびに、

われわれはサタンがキリストを非難する機会を与えるのである。

サタンが、「あなたのために御使たちにお命じになる」との約束を引用したとき、彼は「あなたの歩むすべての道」すなわち神のえらばれるすべての道において、「あなたを守らせられるからである」ということばをばいいた（マタイ四ノ六、詩篇九一ノ一二）。イエスは服従の道からはずれることをこばまれた。イエスは、天父に対する絶対の信頼を表明される一方では、天父がイエスを死から救うために手をお出しにならねばならないような立場に自分からとびこもうとはされなかった。イエスはご自分の救助に神がおいでにならねばならないようなことになって、信頼と服従の模範を人に示すことに失敗するようなことは望まれなかった。

イエスはサタンに、『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」と断言された（マタイ四ノ七）。このことは、イスラエルの民が荒野でのどがかわいて、モーセに水を要求し、「主はわたしたちのうちにあられるかどうか」と叫んだときに語られたことばである（出エジプト記一七ノ七）。神はそれまでイスラエル人のためにふしぎな方法で働かれたにもかかわらず、困難な時になると彼らは神を疑い、神が自分たちと共にあられる証拠を要求した。彼らは不信のあまり神を試みようとした。サタンは、これと同じことをするようにキリストに強要していた。神はすでにイエスが神のみ子であることを証明された。それなのにいままたイエスが神のみ子である証拠を求めることは、神のみことばを試みる、すなわち神を試みることになる。また神が約束されなかったものを求めることもこれと同じである。それは明らかな不信であり、事実上神を試みていることになる。われわれは、神がみことばをなしとげてくださるかどうかをためすために祈願をささげるべきではなく、神がみこと



イエスが三度目の激しい試みに勝利されると、悪魔は逃げ去り、天使がイエスを慰めるためにやってきた。この世にいる間には、われわれは救いの価値を理解することができない。

ばをなしとげてくださるから、また神がわれわれを愛されるかどうかをためすためではなく、神がわれわれを愛されるから、祈願をささぐべきである。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることを、必ず信じるはずだからである」(ヘブル一ノ六)。

だが信仰は決して独断的な信仰と関係がない。真の信仰を持っている者だけが独断的な信仰に対して安全である。なぜなら独断的な信仰はサタンから出た信仰のにせものだからである。信仰は神の約束をわがものとし、従順という実をむすぶ。独断的な信仰もまた約束をわがものにするが、サタンと同じように、これを罪とがの言い訳に使う。信仰があつたら、アダムとエバは神の愛に信頼し、神の戒めに従つたのである。ところが独断的な信仰のために、彼らは神の律法を犯し、神の大きな愛によつて自分の罪の結果から救われると信じた。あわれみが与えられる条件に従わないで天の神の恵みを要求するのは信仰ではない。真正の信仰は聖書の約束と条件とを土台にしている。

サタンは、不信の念をひき起すことに失敗したとき、われわれを独断的な信仰におちいらせることに成功することがたびたびある。サタンは、われわれが不必要に誘惑の道に身をおくようにさせることができれば、勝利は自分のものであることを知っている。神は服従の道を歩む者はだれでも守つてくださるが、その道から離れることはあえてサタンの側にはいつて行くことである。そこではわれわれは必ずつまづいてしまふのである。救い主は、「誘惑に陥らないように、目をさまして祈つていなさい」とお命じになった(マルコ一四ノ三八)。瞑想と祈り

とは、われわれが自分から危険の道にとびこまないようにする。こうしてわれわれは多くの敗北から救われるのである。

しかし試みに攻められても、勇気を失ってはならない。困難な立場におかれると、われわれは神のみたまがみちびいておられるのだろうかと疑うことがたびたびある。だがサタンの試みを受けるためにイエスを荒野へみちびいたのは神のみたまであつた。神がわれわれを試みに会わせられるとき、神はわれわれの益のために達成すべきある目的を持っておられる。イエスは神の約束につけあがつて自分から試みの中にとびこんだり、あるいは試みがやってきたとき落胆してあきらめたりされなかった。われわれもまたそうでなければならぬ。「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」。神はこう言われる、「感謝のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き者に果せ。悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるである」(コリント第一・一〇ノ二三、詩篇五〇ノ一四、一五)。

イエスが第二の試みに勝利されたので、サタンはこんどは本性をあらわす。だが彼はひずめのある足とこうもりの翼をもった恐ろしい怪物として現われない。彼は、墮落しても、力のある天使である。彼は反逆の指導者、この世の神であると名のる。

サタンはイエスを高い山の上につれて行き、あらゆる栄華につつまれたこの世の王国を、パノラマの光景にしてイエスの前をすぎさせた。大殿堂のそびえる都会、大理石の宮殿、肥沃(ひよく)な畑、実り豊かなぶどう園

を太陽の光が照していた。悪の跡はかくされていた。さきほどまで陰気で荒涼とした景色をぐらんになっていたイエスの目は、いまこのくらべるものもない美しさと繁栄の光景にそそがれた。そのとき誘惑者サタンの声がきこえた、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。それで、もしあなたがわたしの前にひざまずくなら、これを全部あなたのものにしてあげましょう」(ルカ四ノ六、七)。

キリストの使命は苦難を通してのみ成就することができたのだった。イエスの前には、悲しみと困難と戦いの人生と屈辱的な死があった。イエスは全世界の罪を負われねばならない。彼は天父の愛から離れることを忍ばねばならない。いま誘惑者サタンは、自分が奪った権力を放棄しようと申し出た。キリストは、サタンの主権を承認することによって、ご自分の恐るべき将来からまぬかれることができるのだった。しかしそうすることは大争闘における勝利を放棄することであつた。サタンが天で罪を犯したのは、神のみより高い位を占めようとしたからだつた。いまサタンが勝つようなことがあれば、それは反逆が勝利することになる。

サタンが、この世の王国と栄華は自分の手に渡されているのだから、自分は望むままにだれにでもこれを与えることができるのだと宣言したとき、彼の言ったことは一部分しか真実でなく、また彼は自分自身の欺瞞の目的に役立てるためにそれを宣言したのだつた。サタンの主権はアダムから横取りしたものであつたが、アダムは創造主の代理者だつた。アダムの支配は独自の支配ではなかった。地は神のもので、神は万物をみ子におまかせになっていた。アダムはキリストの支配下にあつて統治するのであつた。アダムが統治権をサタンの手に売り渡し

たときにも、キリストは依然として正当な王であられた。だから主は、ネブカデネザル王に、「……いと高き者が、人間の国を治めて、自分の意のままにこれを人に与え」と言われた(ダニエル書四ノ一七)。サタンは神のゆるしがあるときだけ、その横取りした権威を行使することができる。

誘惑者サタンがこの世の王国と栄華とをキリストに申し出たとき、彼は、キリストがこの世の真の王であられることを放棄して、サタンの下で統治権を保たれるようにと申し出ていた。これはユダヤ人が望みを置いていたのと同じ統治権であった。彼らはこの世の王国を望んだ。もしキリストがこういう王国を彼らに与えることに同意されたら、彼らはよるこんでキリストを受け入れたのである。だが罪ののろいが、そのあらゆるわざわいとともに、この世の上にあった。キリストは誘惑者サタンに、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」と宣告された(マタイ四ノ一〇)。

天で反逆した者によって、キリストを買収して悪の原則に服従させるために、この世の王国が提供された。しかしキリストは買収されなかった。彼は義の王国を建設するためになったのであって、ご自分の目的を放棄しようとされなかった。同じ試みをもってサタンは人間に近づくが、この場合にはキリストの場合よりも成功する。サタンは人間に、サタンの主権を承認することを条件としてこの世の王国を提供する。サタンは彼らが、正直を犠牲にし、良心を無視し、利己心をほしいままにするように要求する。キリストは彼らにまず神の国と神の義とを求めるように命じられる。しかしサタンは彼らのそばを歩きながらこう言う、「永遠のいのちについてどんなことが事実であろうと、あなたがこの世で成功するには、わたしに仕えなくてはならない。あなたの幸福は

わたしの手ににぎられている。わたしはあなたに富、快樂、名譽、幸福を与えることができる。わたしのすめをききなさい。正直とか自己犠牲などという気まぐれな考えを起さないがよい。わたしがあなたの前に道を備えてあげよう。」こうして多くの者がだまされる。彼らは自我に奉仕する生活に同意する。するとサタンは満足する。サタンは彼らを世俗的な統治権の望みで誘惑する一方では、魂の支配権を手に入れる。しかし彼は自分が与える資格のないもの、まもなく彼からとりあげられるものを提供しているのである。その代りにサタンは、彼らをだまして神の子らの嗣業についての権利書をとりあげる。

サタンは、イエスが神のみ子であるかどうかを疑問にした。彼が即座に退却したことは、イエスが神のみ子であることを否定できなかった証拠である。神性が苦難の人性をとおしてひらめいた。サタンはイエスの命令に抵抗する力がなかった。屈辱と怒りに身をふるわせながら、彼は世のあがない主の前から退かねばならなかった。アダムが完全に失敗したように、キリストは完全に勝利された。

同じように、われわれも誘惑に抵抗し、サタンに離れ去れと強く言うことができる。イエスは、神への服従と信仰とによって勝利を得られた。彼は使徒を通して、われわれにこう言っておられる。「そついうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださるであろう」(ヤコブ四ノ七、八)。われわれは自身を誘惑者サタンの力から救うことはできない。サタンは人類を征服したのである。自分自身の力で立つとするとき、われわれはサタンの策略に陥るであろう。だが「主の名は堅固なやぐらのようだ、正しい者はその

中に走りこんで救を得る」(箴言一八ノ一〇)。どんなに弱い魂も、この大なるみ名をかくれ家とするとき、サタンはふるえあがってその前から逃げ出す。

敵が離れ去ってから、イエスは力がつきはてて地面に倒れ、その顔は死人のようにまっさおになられた。天使たちは、愛する司令官であられるイエスが人類のために逃れの道を備えるために言いようのない苦難を経験されるのをみつめながら、戦いを見守っていた。イエスはわれわれがいつか会わねばならない試みよりもはるかに大きな試みに耐えられた。いま天使たちは死人のように横たわっておられる神のみ子に奉仕した。イエスは食物で力づけられ、天父の愛のみことばと、全天がイエスの勝利に歡喜しているとの保証に慰められた。ふたたび生気をとりもどされると、イエスの大きなみこころは人類への同情となつてそそがれ、彼はご自分がお始めになつた働きを完成するために出て行かれる。そして敵が征服され、墮落した人類があがなわれるまではお休みにならないのである。

われわれのあがないの価は、あがなわれた者たちが救い主とともに神のみ座の前に立つまではわからない。そこで永遠のみ国の栄光が、歡喜しているわれわれの目の前に突然現われるとき、われわれはイエスがわれわれのためにそうしたすべての栄光をお捨てになったことや、また天の宮廷からのさすらい人となられたばかりでなく、われわれのために失敗と永遠の損失という危険をおかしてくださったことなどを思い出すのである。そのときわれわれは冠をイエスの足下に投げて、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」との歌声をあげるのである(黙示録五ノ一二)。

「わたしたちはメシヤ(訳せば、

キリスト)にいま出会った」

本章はヨハネ一ノ一九―五一にもとづく

ヨハネはいまヨルダンの向こうのベタニヤで説教をし、バプテスマを施していた。イスラエル人が渡ってしま
うまで、神が川の流れをとめられたのはこの地点から遠くないところだった。ここから少し離れたところにある
エリコのとりでは、天の軍勢によって倒壊させられたのだった。いまこうした事件の記憶が新たによりがえり、
バプテスマのヨハネのことばに感動的な興味が加わった。昔こんなにふしぎなみわざをされた神は、ふたたびイ
スラエルの救済のためにその力をあらわされるのではないだろうか。こうした思いが、毎日ヨルダン川の岸辺に
むらがり集まってきた人たちの心をゆり動かしていた。

ヨハネの説教は、宗教当局者たちの注意をひくほど国民の中に深く食いこんでいた。反乱の危険があつたため
に、民衆の集りはみなローマ人から疑いの目でみられ、民衆の暴動を指向するようなことは何でもユダヤ人の役
人たちの不安をかきたてた。ヨハネは、サンヒドリンの権威をみとめなかったので、自分の働きに彼らの承認を
求めようとしなかった。そして彼は役人も民衆も、パリサイ人もサドカイ人も同じように譴責した。それでも民

衆は熱心に彼に従った。彼の働きに対する関心はたえず高まっているようにみえた。ヨハネはサンヒドリンの意見に従わなかったが、サンヒドリンはヨハネが公の教師として彼らの管轄下にあるものとみなした。

サンヒドリンは祭司職や役人の長や国民の教師たちの中から選ばれた議員で構成されていた。通例大祭司が議長であつた。その議員たちはみな、老人というほどではないが、年配の人々で、またユダヤ人の宗教と歴史ばかりでなく一般の知識にも精通している学問のある人たちであつた。彼らは肉体的な欠陥のない人であり、そして結婚した人、また父親でなければならなかつた。それは彼らがほかの人たちよりも人情と思ひやりがあつたからである。サンヒドリンの会議場は、エルサレムの神殿に付属している部屋であつた。ユダヤ人の独立時代には、サンヒドリンは国家の最高裁判所として、宗教上の権威はもちろん世俗一般の事について、権威をもっていた。いまはローマ総督に従属していたが、それでもなおサンヒドリンは宗教上のことばかりでなく、民事上のことからも強い影響力を及ぼしていた。

サンヒドリンはヨハネの働きについての審問を引き延ばすことができなかった。中には、宮でザカリヤに示された啓示と、息子をメシヤの先駆者としてさし示した父親の預言とを思い起す者もあつた。三十年の混乱と移り変りの中に、こうしたことは大部分忘れられていた。ヨハネの伝道についての騒ぎからそうしたことがいま思い出されてきた。

イスラエルにはもう長い間預言者もなく、またいま進行しているような改革もみられなかつた。罪の告白を要求されるということは新しい驚くべきことにみえた。指導者たちの多くは、自分自身の生活の秘密をばくろされ

るのを恐れて、ヨハネの訴えと罪の譴責とを聞きに行こうとしなかった。だが彼の説教はメシヤについて直接の発表であった。メシヤの来臨を含むダニエルの七十週の預言がほとんど終ったことはよく知られていた。人々はみなその後期待される国家的な繁栄の時代が来るのを熱心に待っていた。民衆がこのように熱心だったために、サンヒドリンはヨハネの働きを是認するか、否定するかどちらかに迫られていた。すでに民衆に対する彼らの勢力はだんだん衰えていた。彼らの地位をどうやって維持するかが重大な問題となっていた。何らかの結論に達するだろうというので、彼らはこの新しい教師と協議するために、祭司とレビ人の代表団をヨルダン川に派遣した。

群衆が集まって、ヨハネのことばに耳をかたおけていた時、代表者たちが近づいてきた。民衆を威圧し、預言者から敬意を受けようとの意図の下に、この高慢なラビたちは威厳のある様子でやってきた。ほとんど恐れに近い尊敬の動作をもって、群衆は彼らを通すために道を開いた。豪華な衣服を身につけ、地位と権力を誇るらしい人たちが荒野の預言者の前に立った。

「あなたはどなたですか」と彼らは聞きだした。

彼らの心中を察したヨハネは、「わたしはキリストではない」と答えた。

「それでは、どなたなのですか、あなたはエリヤですか。」

「いや、そうではない。」

「では、あの預言者ですか。」

「いいえ。」



バプテスマのヨハネの時代にみられた論争と争闘のただ中であって、この使命者が罪を責める声は荒野に叫ぶ声であった。

「あなたはどなたですか。わたしたちをつかわした人々に、答を持って行けるようにしていただきたい。あなた自身をだれだと考えるのですか。」

「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばれる者の声』である」(ヨハネ一ノ一九―二三参照)。

ヨハネが引用した聖句はイザヤのあの美しい預言である。「あなたがたの神は言われる、『慰めよ、わが民を慰めよ、ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、その服役の期は終り、そのとがはすでにゆるされ……た』。呼ばれる者の声がする、『荒野に主の道を備え、さばくに、われわれの神のために、大路をまっすぐにせよ。もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともに

これを見る」(イザヤ書四〇ノ一五)。

昔、王が自分の領土のめったに訪れたことのない地方を旅行するときには、一団の人々が、王の戦車より先に
行つて、けわしい道を平らにし、穴を埋めて、王が安全に支障なく旅行できるようにした。福音の働きを例示
るために預言者イザヤはこの習慣を引用して、「もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ」
と言っている(イザヤ書四〇ノ四)。神のみたまが人をめざめさせるふしぎな力をもって魂にふれるとき、人間の
誇りは低くされる。世の楽しみ、地位、権力は無価値にみえる。「神の知恵に逆らつて立てられたあらゆる障害
物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」る(コリント第二・一〇ノ五)。その時、人
人に重んじられていない謙遜と自己犠牲の愛が唯一の価値あるものとして高められる。これが福音の働きであり、
ヨハネの使命はその一部分であつた。

ラビたちは質問をつづけた。「あなたがキリストでもエリヤでもまたあの預言者でもないのなら、なぜバプテスマを授けるのですか」(ヨハネ一ノ二五)。「あの預言者」というのは、モーセのことをさしていた。ユダヤ人は、
モーセが死人の中から甦(よみが)えらせられて天につれて行かれると信じたがつていた。彼らはモーセがすでに
甦えらせられたことを知らなかった。バプテスマのヨハネが伝道を始めた時、多くの者はヨハネのことを死から
甦えらせられた預言者モーセかも知れないと思つた。それはヨハネが預言とイスラエルの歴史についてくわしい
知識を持っているようにみえたからである。

メシヤの来臨前にはエリヤが姿をとって現われるということも信じられていた。この期待に対して、ヨハネは

自分はエリヤではないと答えた。だが彼のことはもっと深い意味があった。イエスは、のちになってヨハネのことを、「もしあなたがたが受け入れることを望めば、この人こそは、きたるべきエリヤなのである」と言われた(マタイ一ノ一四)。ヨハネは、エリヤのなしたような働きをするために、エリヤの霊と力とをもってきた。もしユダヤ人がヨハネを受け入れていたら、その働きは達成されていたのである。しかし彼らはヨハネの使命を受け入れなかった。彼らにとってヨハネはエリヤではなかった。ヨハネは、ユダヤ人のために達成するためにやってきた使命を果たすことができなかった。

ヨルダン川に集まった人々の多くは、イエスのバプテスマの時にい合わせた。しかしその時与えられたしるしは彼らの中の少数の者にしかあらわれなかった。これに先立ってバプテスマのヨハネが伝道していた何か月もの間、多くの者は悔い改めを促す声に注意しようとしなかった。こうして彼らの心はかたくなになり、理解力は暗くなっていた。イエスのバプテスマの時に天の神がイエスについてあかしをたてられたとき、彼らはそれを見とめなかった。目に見えないキリストに信仰をもって向けられたことのなかった目は、神の栄光のあらわれを見なかった。そのみ声をきいたことのなかった耳は、あかしのことをきかなかった。いまでも同じである。キリストと奉仕の天使たちが人々の集りの中におられることがはっきりしているのに、それに気づかない人が多い。彼らは普通とちがった点を何もみとめない。だがある人々には、救い主の臨在が示される。平和とよろこびが彼らの心を活気づける。彼らは慰められ、励まされ、祝福される。

エルサレムからの代表団はヨハネに、「なぜバプテスマを授けるのですか」と聞きただしてその返事を待ってい

た。すると突然、群衆を見渡したヨハネの目が輝き、その顔が明るくなり、彼の全身全霊が深い感動に動かされた。彼は両手をさしのべて叫んだ、「わたしは水でバプテスマを授けるが、あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中に立っておられる。それがわたしのあとにおいでになる方であって、わたしはその人のくつのひもを解く値うちもない」(ヨハネ一ノ二六、二七)。

このことは、明白で少しのあいまいさもなく、そのままサンヒドリンへ伝えられた。ヨハネのことは、ほかならぬ長年約束されていたおかたにあてはめることができた。メシヤが自分たちの中におられる。驚いた祭司たちと役人たちは、ヨハネの語ったおかたをみつけようと思って、まわりを見まわした。だがメシヤは群衆の中にあつて見分けがつかなかった。

イエスのバプテスマの時、ヨハネが神の小羊としてイエスを指さしたとき、新しい光がメシヤの働きを照した。預言者の心はイザヤの、「彼は……ほふり場にひかれて行く小羊のように」ということばに向けられた(イザヤ書五三ノ七)。その後幾週間にわたって、ヨハネは新しい興味をもって預言と犠牲制度の教えについて研究した。彼は、キリストの働きの二つの面、すなわち苦難のいけにえと勝利する王との両面をはっきり見分けていなかったが、キリストの来臨には祭司たちや民がみとめていたよりもっと深い意味があることを知った。荒野から帰ってこられたイエスを群衆の中にみかけたとき、ヨハネは、イエスがご自分の真の性格について何かしるしを民にお与えになるものと確信をもって期待した。待ちきれないような思いをもって、ヨハネは救い主がご自分の使命を宣言されるのを聞こうとして待った。だが一ことばも語られず、一つのしるしも与えられなかった。イエスは、

ご自分についてのヨハネの発表に答えられなかった。イエスはご自分の特別な働きについて外面的な証拠を与えたり、人々の注目をご自分にひきつけるような手段をとったりなさらず、ただヨハネの弟子たちの中にまじってあられた。

次の日、ヨハネは、イエスがおいでになるのを見る。神の栄光の光がこの預言者の上にとどまると、彼は両手をさしのべて宣言する、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。『わたしのおとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先にあられたからである』とわたしと言ったのは、この人のことである。わたしはこのかたを知らなかった。しかしこのかたがイスラエルに現れてくださるそのことのために、わたしはきて、水でバプテスマを授けているのである。……わたしは、御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである〔ヨハネ一ノ二九―三四〕。

これがキリストなのだろうか。おそれと驚きの思いをもって、人々はいま神のみ子と宣言されたあかたを見つめた。彼らはヨハネのことばに深く心を動かされていた。彼は神のみ名によって人々に語っていた。彼らはヨハネが彼らの罪を責めるのを毎日きき、彼が天からつかわされたのだという確信は日ごとに強くなっていた。しかしこのバプテスマのヨハネよりも偉大なおかたというのは一体だれなのだろう。その服装にも態度にも身分をあ

わらすようなものは何もなかった。見たところその人は彼らと同じように貧しい人々の着る粗末な衣服をまとったただの人間にすぎなかった。

群衆の中には、キリストのバプテスマの時、天来の栄光を見、神のみ声をきいた人々がいた。しかしその時から救い主の様子はすっかり変っていた。バプテスマの時にはイエスの顔は天の光に神々しくみえたが、いまは青ざめ、やつれ、衰えておられ、預言者ヨハネしかイエスをみとめることができなかった。

しかし人々がイエスを見つめたとき、彼らはそこに天来のあわれみと意識的な力とのまじりあったお顔を見た。その目付きにも、その顔付きにも、謙遜が目立っていて、言い表わしようのない愛があらわれていた。イエスは靈的感化の雰囲気につつまれておられるようにみえた。イエスの態度はやさしく気取らないものであったが、かくされていてもかくしきれない力の意識が人々を印象づけた。この人こそ、イスラエルが長年待っていたおかたなのだろうか。

イエスは、われわれのあがない主であると同時にわれらの模範となるために、貧乏と屈辱のうちにこられた。もしイエスが王者らしいきらびやかさをもって出現されたのだしたら、どうして謙遜をお教えになることができたろう。どうして山上の垂訓にみられるような鋭い真理をお示しになることができたろう。もしイエスが王として人々の中に住むためにこられたのだしたら、身分のいやしい者の望みはどこにあったらう。

しかしながら群衆にとって、ヨハネから示されたおかたは、彼らの崇高な期待とはどうしてもおすびつけられないようにみえた。こうして多くの者が失望し、大いに当惑した。

祭司たちとラビたちが非常にききたがっていたことは、すなわちイエスがいまイスラエルに王国を回復されるのだということは語られなかった。このような王を、彼らは待ち望んでいた。このような王を彼らは受け入れようとしていた。しかし彼らの心に義と平和の王国を築こうとなさるおかたを、彼らは受け入れようとしなかった。次の日、二人の弟子たちがそばに立っていた時、ヨハネはまたイエスを群衆の中にみいだした。ふたたび預言者の顔は目に見えない神の栄光に照され、彼は、「見よ、神の小羊」と叫んだ。このことは弟子たちの心を感動させた。彼らはそのことを十分に理解しなかった。ヨハネがイエスのことを「神の小羊」と呼んだその名にどういう意味があるのか、ヨハネ自身も説明することがなかった。

弟子たちは、ヨハネを残したまま、イエスを求めに行った。二人の中の一人は、シモンの兄弟アンデレだった。もう一人は伝道者ヨハネだった。この二人がキリストの最初の弟子だった。おさえきれない衝動にうごかされて、彼らは、イエスと語りたいと熱望しながらも、おそれの思いに沈黙したまま、「この方がメシヤだろうか」という重大な意味をもった思いにふけりながら、イエスのあとをついて行った。

イエスは弟子たちが自分のあとからついてきていることをご存じだった。彼らはイエスの伝道の初穂だったので、これらの魂がご自分の恵みに応じたとき、この天来の教師の心にはよろこびがわいた。だがイエスは、ふりかえって、「何か願いがあるのか」とおたずねになっただけだった。イエスは彼らがひき返そうと、あるいは彼らの望みを語ろうと、自由にさせようとお思いになった。

一つの目的だけを彼らは意識していた。一つの存在が彼らの思いを占めた。彼らは、「ラビ」訳して言えば先

生)どこにおとまりのですか」と叫んだ(ヨハネ一ノ三八)。道ばたでの短い会見では、彼らの熱望しているものは得られないのであった。彼らはイエスとだけになり、その足下にすわり、みことばをききたいと望んだ。

「イエスは彼らに言われた、『きてごらんさい。そうしたらわかるだろう』。そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった」(ヨハネ一ノ三九)。

もしヨハネとアンデレが祭司たちや役人たちのように不信な気持ちをいだいていたら、彼らはイエスの足下に学ぶ者とはならなかったであろう。彼らは批判者としてイエスのところへやってきて、そのみことばを批判したであろう。多くの者はこのようにして最もとうとい機会に対して戸をとざす。しかしこの最初の弟子たちはそうはしなかった。彼らはバプテスマのヨハネの説教のうちにあつた聖霊の召しに応じていた。いま彼らは天来の教師のみ声をみとめた。彼らにとってイエスのみことは新鮮さと真理と美しさに満ちていた。天来の光が旧約聖書の教えを照した。真理の多方面のテーマが新しい光の中にはつきりとうつし出された。

魂が天の知恵を受けることができるのは、くだけた心と信仰と愛によってである。愛によって働く信仰は知識の鍵であり、愛する者はみな、「神を知っている」(ヨハネ第一・四ノ七)。

弟子ヨハネは、まじめで深い愛情を持ち、熱烈でしかも瞑想的な人だった。彼はキリストの栄光が、これまで待望するように教えられていたような世俗的なきらびやかさと権力ではなく、「父のひとり子としての栄光であつて、めぐみとまことに満ちて」いることをみとめ始めていた(ヨハネ一ノ一四)。彼はこの驚くべきテーマについて瞑想にふけた。

アンデレは自分の心を満たしたよろこびをわけ与えようとつとめた。彼は、兄弟のシモンをさがしに行つて、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」と叫んだ（ヨハネ一ノ四一）。シモンは次の招きを待たなかった。彼もまたバプテスマのヨハネの説教をきいていたので、救い主のもとへ急いだ。キリストの目はシモンにとまり、彼の性格と経歴とを読みとられた。彼の感情的な性質、彼の同情と愛の心、彼の野心と自信、彼がつまずき、悔い改め、働き、そして殉教の死をとげる経歴——救い主はそうしたすべてを読みとつて、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」と言われた（ヨハネ一ノ四二）。

「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会つて言われた、『わたしに従つてきなさい』（ヨハネ一ノ四三）。ピリポはその命令に従い、その場で彼もまたキリストの働き人となつた。

ピリポはナタナエルを呼んだ。バプテスマのヨハネがイエスを神の小羊としてさし示した時、ナタナエルも群衆の中にいたのである。ナタナエルはイエスを見た時失望した。苦勞と貧乏のしるしのあらわれているこの人がほんとうにメシヤだろうか。それでもナタナエルはイエスをこばむ決心がでなかつた。ヨハネのことばが彼の心に確信を生じさせていたからである。

ピリポがナタナエルを呼んだ時、ナタナエルは、ヨハネの宣言とメシヤに関する預言について瞑想するために静かな森にひっこんでいた。もしヨハネによつて宣言されたおかたが救済者なら、そのことを示していただきたいと彼は祈つた。すると聖霊が彼の上にくんだり、神はその民を顧み、彼らのために救いの角をお立てになつたのだという確信が与えられた（ルカー一ノ六八、六九参照）。ピリポはこの友人が預言を調べていることを知っていた。

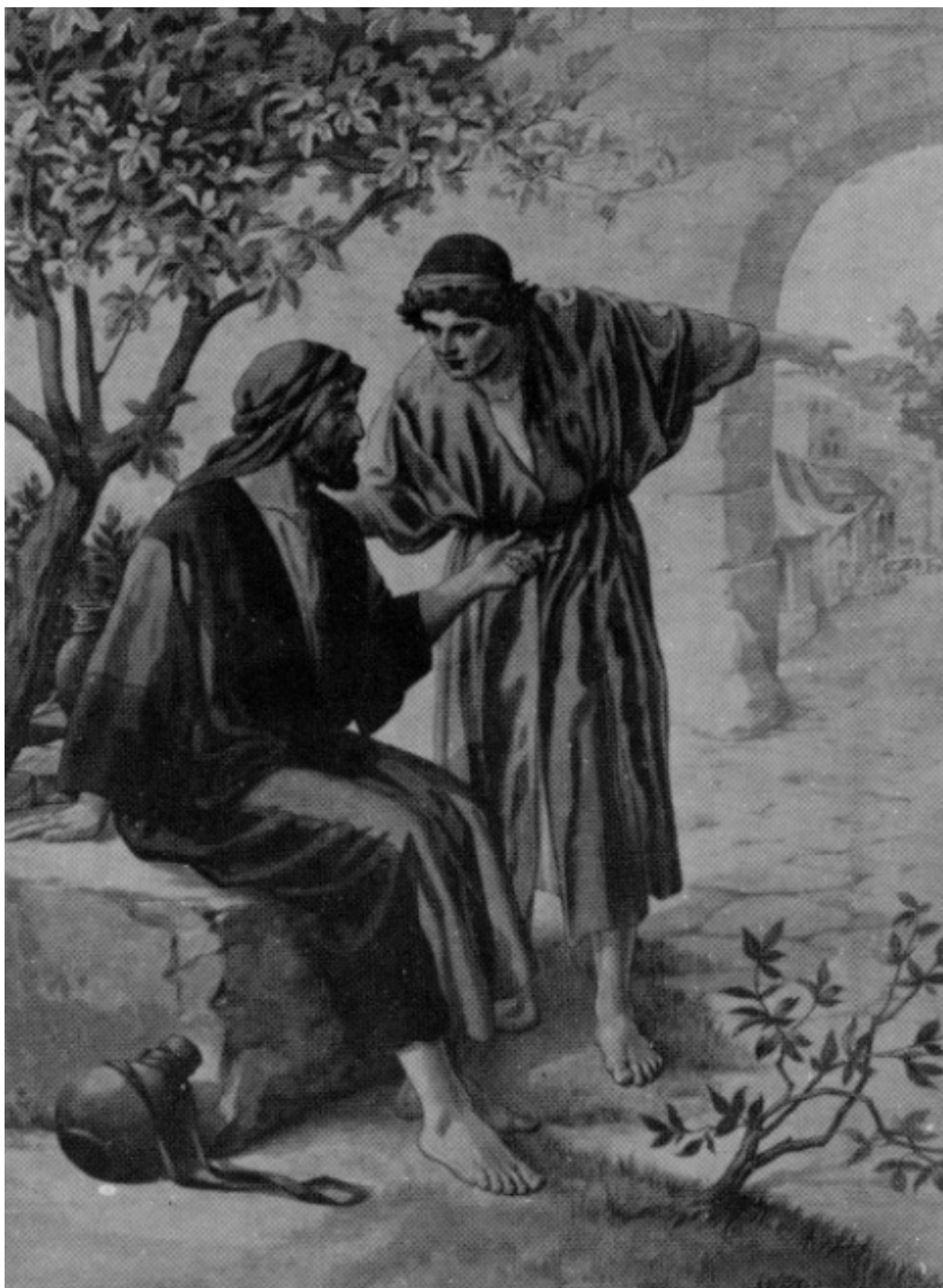
そしてナタナエルがいちじくの木の下で祈っていたとき、ピリポはそのかくれ場所をみつけた。彼らは木の葉にかくれたこの人目につかない場所でたびたびいっしょに祈ったことがあった。

「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人……にいま出会った」とのことばは、ナタナエルにとって自分の祈りに対する直接の応答のように思えた。だがピリポの信仰はまだ動揺していた。彼は疑わしそくに、「ヨセフの子、ナザレのイエス」とつけ加えた。ふたたびナタナエルの心に偏見が生じた。彼は、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」と叫んだ(ヨハネ一ノ四五、四六)。

ピリポは論争しなかった。彼は「きて見なさい」と言った。「イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた、『見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない』。ナタナエルは驚いて、『どうしてわたしをご存じなのですか』と叫んだ。「イエスは答えて言われた、『ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た』」(ヨハネ一ノ四六―四八)。

それで十分だった。いちじくの木の下でただひとり祈っていたナタナエルに証拠を示された聖霊が、こんどはイエスのみことばを通して彼に語られた。疑いと、いくらか偏見にとらわれながらも、ナタナエルは真理を求めるまじめな願いをもってキリストのところに来たのだが、いまその願いがかなえられた。彼の信仰は、彼をイエスのところへ連れていったピリポの信仰にまさった。彼は答えて、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」と言った(ヨハネ一ノ四九)。

もしナタナエルがラビの指導を信頼していたら、彼は決してイエスをみいださなかったであろう。彼は自分で



ピリポは友だちのナタナエルのところへ行って、「わたしたちは、モーセが律法の中にするしており、預言者たちがしるしていた人……にいま出会った」と言った。そして、「きてみなさい」と親切に招いた。

見、自分で判断して、弟子となった。今日偏見にとらわれて恵みから遠ざかっている多くの人々の場合も同じである。もし彼らが見て見ええしたら、その結果はどんなに異なったものになるだろう。

人間の権威による指導にたよっているかぎり、だれも救いの知識である真理に到達することができない。ナタナエルのように、われわれは神のみことを自分で研究し、聖霊の光を求めて祈る必要がある。いちじくの木の下にナタナエルをもらんになったおかたは、かくれた祈りの場所にいるわれわれをもらんになる。光の国の天使たちは、へりくだって天のみちびきを求める者の近くにいます。

ヨハネとアンデレとシモン、またピリポとナタナエルの召しによって、キリスト教会の基礎が置かれた。バプテスマのヨハネは自分の二人の弟子をキリストにみちびいた。その中の一人アンデレは自分の兄弟をみつめて救い主のもとへ呼んだ。それからピリポが呼ばれ、ピリポはナタナエルをさがしに行った。このような模範は、個人的な努力、すなわち肉親や友人や隣人に直接訴えることの重要さをわれわれに教えねばならない。一生の間、キリストを知っていると告白しながら個人的な努力によってたった一人の魂さえ救い主にみちびいたことのない人たちがいる。彼らは働きの全部を牧師にまかせている。牧師は自分の職責をりっぱに果たさるうが、しかし神が教会員におまかせになった働きまですることはできない。

愛に満ちたクリスチャンの心からの奉仕を必要としている人々がたくさんいる。もし普通の男女である隣人たちが個人的な努力をしていたら救われたかもしれない人々がたくさん滅んでしまった。多くの人々は個人的に語りかけられるのを待っている。われわれの住んでいる家庭の中に、隣り近所に、町に、キリストの伝道者として

われわれのなすべき働きがある。われわれがクリスチャンなら、この働きは楽しみとなるであらう。人は信仰を持つとすべし、自分がイエスというとうとい友をみいだしたことを他人に知らせたいという願いが心の中に生ずる。人を救いきよめる真理を、心の中にとじこめておくことはできないのである。

神に献身している者はみな、光の通路となる。神は彼らを神の恵みの富を他人に伝える代理人とされる。神はこう約束されている。「わたしは彼らおよびわが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがって雨を降らす。これは祝福の雨となる」(エゼキエル書三四ノ二六)。

ピリポはナタナエルに、「きて見なさい」と言った。彼はナタナエルに他人のあかしを信じなさいと言わないで、自分でキリストを見なさいと言った。イエスが昇天されたいまは、弟子たちが人々の中にあつてキリストの代表者である。だから魂をキリストにみちびく最も効果的な方法は、キリストの品性をわれわれの日常生活にあらわすことである。他人に及ぼすわれわれの感化は、われわれの言うことばよりはわれわれの人格次第である。人々はわれわれの訴えに抵抗するかもしれない。だが利害を超越した愛の生活は、彼らの否定できない議論である。キリストの柔和が目立っている矛盾のない生活は世における一つの力である。

キリストの教えは心の内部の自信と経験の表現であつたが、キリストについて学ぶ者はキリストのような教師となる。神のみことばが、そのみことばによつてきよめられた人によつて語られるとき、それはいのちを与える力を持っていて、聞く人をひきつけ、みことばこそ生きた現実であることを確信させる。人が真理を愛してこれを受け入れるとき、それはその人の信念のある態度と声の調子にあらわれる。彼は他の人々がキリストを知るこ

とによって彼とまじわることができるよう、いのちのみことばについて自分が見、聞き、手でさわったところを知らせる。祭壇の上から取った燃えている炭にふれた唇から出る彼のあかしは、信ずる者の心にとって真理であり、品性にきよめが行なわれる。

また他人に光を与えようとつとめる者は自分も祝福される。「これは祝福の雨となる」(エゼキエル書三四ノ二六)。「人を潤す者は自分も潤される」(箴言一一ノ二五)。神は、罪人を救うのにわれわれの助けがなくても、目的を達することがあできになったのである。だがわれわれがキリストのような品性を発達させるためには、キリストの働きにあずからねばならない。キリストのよろこびすなわちキリストの犠牲によってあがなわれた魂を見るよろこびにはいるためには、われわれは彼らをあがなうキリストの働きにあずからねばならない。

ナタナエルの信仰の最初の言いあらわしは、完全で、まじめで、誠実で、それはイエスの耳に音楽のようにきこえた。すると、「イエスは答えて言われた、『あなたが、いちじくの木の下にいるのを見た、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう』」(ヨハネ一ノ五〇)。救い主は柔和な者によきあとずれを伝え、心のいためる者をいやし、サタンのとりこに自由を宣言されるご自分の働きを、よるこんで待望された。キリストはご自分が人類にもたらされたとうい祝福を思つて、「よくよくあなたがたに言うておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」とつけ加えられた(ヨハネ一ノ五一)。

ここでキリストは事実上こう言つてあられるのである。すなわち、ヨルダン川の岸で天が開けて、みたまがは

とのようにわたしの上にくだった。その光景はわたしが神の子である証拠にすぎなかった。もしあなたがたがわたしを神の子として信ずるなら、あなたがたの信仰は活発になるであろう。あなたがたは天が開いて決してとじられないのを見せられるであろう。わたしがあなたがたに天を開いたのである。神の天使たちは、困っている人や苦しんでいる人の祈りをたずさえて天の父のもとに昇り、祝福と望みと勇気と助けといのちをたずさえて人の子らのもとにくだっているのであると。

神の天使たちはたえず地から天へ、天から地へかよっている。苦しんでいる者や悩んでいる者たちのためのキリストの奇跡は、天使たちの奉仕を通して神の力によってなされた。あらゆる祝福が神からわれわれのもとにくるのは、キリストを通して、天使たちの奉仕によってである。救い主はご自分に人性をとられることによって、ご自分の利害を墮落したアダムの息子、娘の利害と一致させ、一方またその神性によって神のみ座につながっておられる。こうしてキリストは、人が神とまじわり、神が人とまじわられる仲介である。

婚宴の席で

本章はヨハネ二ノ一章にもとづく

イエスは、エルサレムのサンヒドリンの前で何か偉大な働きをすることによってその公生涯をお始めにならなかった。ガリラヤの小さな村のある家族的な集りで、結婚の宴によるこびをまし加えることにイエスの力がそがれた。こうしてイエスは人々と思いをついにし、人々の幸福に役立ちたいという願いを示された。イエスは、試みの荒野で、ご自分から苦悩のさかずきをお飲みになった。そして、人々に祝福のさかずきを与え、ご自分の祝福によって人間生活のきずなを聖なるものにするために出ておいでになった。

イエスは、ヨルダン川からガリラヤに帰っておられた。ナザレから遠くない小さな町カナで結婚式があることになっていた。当人たちはヨセフとマリヤの親類であつた。イエスはこの家族の集りをお知りになると、カナに行き、弟子たちといっしょに婚礼に招かれた。

イエスはしばらく別れておられた母上にふたたびお会いになった。マリヤは、イエスのバプテスマの時にヨルダン川であらわされたことについて聞いていた。その知らせはナザレに伝えられ、マリヤの心に長年かくされて

いた光景を新たに思い起させた。すべてのイスラエル人と同じに、マリヤはバプテスマのヨハネの使命に深く動かされた。彼女はヨハネの誕生の時与えられた預言をよくおぼえていた。いまヨハネとイエスとのつながりが彼女の望みを新たに明るくした。しかしイエスが荒野へ去られたというふしぎな知らせがマリヤにも聞こえてきたので、彼女は心配な予感で心が重かった。

マリヤは、ナザレの家で天使のお告げをきいた日から、イエスがメシヤであるという証拠の一つ一つを心にとめていた。イエスの美しい、無私の生活は、イエスが神からつかわれたおかたにほかならないことを彼女に確信させた。それでも心に疑いや失望も起つたので、彼女はキリストの栄光があらわされるのを待ち望んでいたのだ。マリヤは、イエスの誕生の神秘についていっしょに知っていたヨセフと死に別れていた。いま自分の望みや心配を打ち明けることのできる人はだれもいなかった。過ぐる二か月の間というものは非常な悲しみだった。マリヤはイエスの同情に慰められていたのに、そのイエスと別れていたのだ。彼女は、「あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう」と言ったシメオンのことばを心に思いめぐらした（ルカ二ノ三五）。彼女はまたイエスが自分から永久に失われたと思ったあの三日間の苦悩を思い起した。そして切実な思いをもって、イエスの帰りを待っていた。

婚宴の席で、マリヤは相かわらずやさしい親孝行な息子であられるイエスに会う。しかしイエスは前のイエスではない。イエスの顔つきは変っている。その顔は荒野における戦いのあとをとどめ、威厳と力の新しい表情がイエスの天来の使命を証拠だてている。イエスといっしょに、一団の若い人たちがいて、彼らの目は尊敬をこめ

てイエスのあとを追い、イエスを先生と呼んでいる。これらの若い人たちは、バプテスマの時やその他のところで見たり聞いたりしたことを、マリヤにくわしく語ってきかせる。彼らは結論として、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」と言明する(ヨハネ一ノ四五)。

客が集まると、多くの者は何か非常に興味のある話題に心を奪われているようにみえる。抑えられた興奮が一座の人々の間にひろがる。人々の小さなかたまりが熱心ながら静かな調子でことばをかわし、ふしぎそうな目つきがマリヤの息子に向けられる。マリヤはイエスについて弟子たちのあかしを聞いて、長い間胸にいだいていた望みがむだでなかったことをよろこんでいた。彼女もまた人間である以上、そのきよいよろこびに甘い母親の自然な誇りがまじっていたとしても当然であろう。多くの人々の目がイエスの上にそがれているのを見ると、彼女は、イエスにご自分が真に神のとうといみ子であることを一座の人々に証明していただきたいと心に願った。彼女はイエスが彼らの前で奇跡を行われる機会があればよいと望んだ。

結婚の祝宴は数日間つづけられるのが当時の習慣であつた。この時、祝宴がまだ終らないうちにぶどう酒のたぐわえが切れてしまったことがわかった。それがわかると大変な困惑と失望とが生じた。祝宴をぶどう酒なしですませるということは例のないことで、ぶどう酒がないことは接待の行きとどかない証拠に思われるのだった。マリヤは当事者の親類として祝宴のしたくを手伝っていたので、その時イエスに、「ぶどう酒がなくなってしまう」と語った。このことは、イエスに彼らの必要を満たしてもらえないでしょうかという暗示だった。し



カナの町における婚宴の席で、イエスは水をぶどう酒に変えて、最初の記録された奇跡を行なわれた。この集りで、イエスはご自分の社交的性質を発揮された。

かしイエスは、「婦人よ、あなたは、わたしと、何の係わりがありますか。わたしの時は、まだきていません」と答えられた(ヨハネ二ノ三、四)。

この答は、われわれにはぶっきらぼうに思えるが、冷淡さや無礼な気持をあらわしているのではない。救い主が母親に語りかけられた形式は、東洋の習慣に従ったものであつた。それは尊敬心を示したいと望む相手の人に対して用いられた。キリストの地上生活における行為の一つ一つは、彼ご自身がお与えになったところの、「あなたの父と母を敬え」という戒めに一致していた(出エジプト記二〇ノ一二)。十字架上において、母親に対する最後のやさしい行為として、最も愛する弟子に母親の世話を託された時、イエスはふたたび同

じように母親に語りかけられた。婚宴の時でも十字架上でも、声と顔つきと態度にあらわれている愛がイエスのことばの意味を伝えた。

少年時代に宮におまいりして、ご自分の一生の働きの奥義が目の前に示された時、キリストはマリヤに「わたくしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」と言われた（ルカ二ノ四九）。このことばはイエスの一生と伝道の基調を示していた。すべてのことはイエスの働き、すなわちイエスが成就するためにこの世においてになったあがないの大いなる働きに付随させられた。いまキリストはその教訓をくりかえされた。マリヤはイエスとの親子関係から、自分はイエスに対して特別な要求を持つことができ、またある程度イエスの使命に口を出す権利があると考える危険があった。イエスは、三十年の間、マリヤにとってやさしい従順な息子であって、その愛情は変らなかった。しかしいまイエスは天父のみわざに着手なさらねばならない。いと高き神の息子として、またこの世の救い主として、イエスは、どんな地上のきずなによってもご自分の使命の達成をさまたげられたり、ご自分の行為に影響を及ぼされたりするようなことがあってはならない。彼は神のみこころをなすのに自由でなければならぬ。この教訓はまたわれわれのためでもある。神のご要求は人間の関係というきずなにさえまざるものである。どんな地上の魅力によっても、われわれは神がわれわれに歩むように命じておられる道から足をひき返してはならない。

われわれ墮落した人類のただ一つの望みはキリストのうちにある。マリヤは神の小羊イエスによつてのみ救いをみいだすことができた。彼女自身には何のいさおしもなかった。マリヤがイエスと親子関係にあるからといっ

て、彼女とイエスとの霊的な関係は他の魂の場合と異なつたものにはならない。このことが救い主のみことばの中に示されている。イエスは彼女に対して人の子としての関係と神のみ子としての関係の区別をはっきりつけておられる。ふたりの間の肉親関係は、決してマリヤをイエスと同等の立場におくものではなかった。

「わたしの時は、まだきていません」とのことは、キリストの地上生活における一つ一つの行為が、永遠の昔から存在していた計画の成就であつたという事実をさしている(ヨハネ二ノ四)。イエスが地上においでになる前に、その計画はこまかい点まで完全に彼の前に立てられた。しかし、イエスが人々の中に生活された時、彼は一步一步、天父のみこころによってみちびかれた。イエスは定められた時に行動することをちゅうちよされなかつた。同じ服従によって、彼は時がくるまで待たれた。

自分の時はまだきていないのだとマリヤに言われたことによつて、イエスはマリヤの語られない思い、すなわちイスラエルの民と同じように彼女の心の中にいだかれていた期待に答えておられた。マリヤはイエスがメシヤとしてご自分をあらわし、イスラエルの王位につかれるのを望んでいた。しかしその時はきていなかった。イエスは、王としてではなく、「悲しみの人で、病を知っていた」人として人間の運命をお受けになっていた(イザヤ書五三ノ三)。

しかしマリヤは、キリストの使命を正しく認識してはいなかったが、イエスを絶対的に信頼していた。この信仰に、イエスはお答えになった。最初の奇跡が行なわれたのはマリヤの信頼をとつとび、弟子たちの信仰を強めるためであつた。弟子たちは不信への多くの大きな試みに出会うのであつた。預言によればイエスがメシヤであ

るということは彼らにとって議論の余地がないまでに明らかであった。彼らは宗教界の指導者たちが自分たちよりもはるかに大きな確信をもってイエスを受け入れるものと期待した。彼らはキリストのふしぎなみわざを、またキリストの使命に対する自分たちの確信を人々の前に宣言したが、祭司やラビたちが示したイエスに対する不信と根強い偏見と敵意に驚き、ひどく失望した。救い主の初期の奇跡は、弟子たちがこの反対に対して強く立つように力づけた。

マリヤはイエスのことばに少しも当惑しないで、食卓に給仕している人々に、「このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい」と言った(ヨハネ二ノ五)。こうして彼女は、キリストのみわざに道を備えるためにできるだけのことをした。

戸口のそばに六つの大きな石の水がめがあった。イエスは召使いたちにその水がめに水を満たすように言いつけられた。水はいっぱいになった。次にイエスは、ぶどう酒がいますぐ入り用だということで、「さあ、くんで、料理がしらのところに持って行きなさい」と言われた(ヨハネ二ノ八)。水のいっぱい満たされた水がめからは、水ではなくてぶどう酒が流れ出た。料理がしらも一般の客もぶどう酒がきれたことには気がついていなかった。召使いたちが持ってきたぶどう酒をなめてみて、料理がしらはそれがいままで飲んだこともないほどすばらしいぶどう酒で婚宴の初めに出されたぶどう酒とちがったものであることに気がついた。彼は花婿に向かって、「どんな人でも、初めにいぶどう酒を出して、酔いがまわったところにわるいを出すものだ。それなのに、あなたはよいぶどう酒を今までとっておかれました」と言った(ヨハネ二ノ一〇)。

人は最初に一番よいぶどう酒を出し、それから後に悪いぶどう酒を出す、この世の贈物もこれと同じである。この世が与えるものは、初めは人の目をよろこばせ、感覚を魅惑するかもしれないが、結局は不満足なものである。ぶどう酒はにがくなり、はなやかさは陰気なものとなる。歌と歓楽に始まったものが疲労と不快に終る。しかしイエスの贈物はいつも新鮮で新しい。イエスが魂にお与えになるごちそうは必ず満足とよろこびとを与える。新しい賜物が与えられるたびに、それを受ける者には主の祝福を感謝し、よろこぶ能力が増し加わる。主は恵みに恵みを加えられる。恵みのたくわえがつきまわることがない。キリストのうちに住むならば、あなたがきょうゆたかな賜物を受けることは、あしたはもっとゆたかな賜物を受ける保証である。ナタナエルに対するイエスのみことは、信仰の子らに対する神の態度の原則をあらわしている。主の愛が新しくあらわされるたびに、イエスはそれを受け入れる人に向かって、あなたは「信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」と宣言される(ヨハネ一ノ五〇)。

婚宴の席へのキリストの贈物は、一つの象徴であった。水は主の死にあうバプテスマをあらわし、ぶどう酒は世の罪のために流される主の血潮をあらわしていた。水がめを満たす水は人間の手で持ってこられたが、それいのちを与える効力をさずけることができるのはキリストのみことばだけである。救い主の死をさし示す儀式も同様である。信仰を通して働くキリストの力によってのみ、それらは魂を養う効力があるのである。

キリストのみことばによって、ふるまいの席に十分な飲み物が備えられた。人の不和を消し去り、魂を新たにし、これを養う主の恵みは同じようにゆたかに用意されている。

イエスは、弟子たちといっしょに出席された最初の祝宴で、彼らの救いのためになされる働きを象徴するさかづきを彼らにお与えになった。最後のばんさんにおいて、イエスは「主がこられる時に至るまで」ご自分の死を示す聖なる儀式を制定されたことによって、もう一度そのさかづきを彼らにお与えになった(コリント第一・一ノ二六)。「わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日まで、わたしは今後決して、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」とイエスが言われた時に、主と別れる弟子たちの悲しみは再会の約束によって慰められた(マタイ二六ノ二九)。

キリストが祝宴にお備えになったぶどう酒、またご自分の血の象徴として弟子たちにお与えになったぶどう酒は、純粹のぶどう汁であった。預言者イザヤが、新しいぶどう酒について、「人がぶどうのふさの中に、ぶどうのしるのあるのを見るならば、『それを破るな、その中に祝福があるから』と言う」と言っているのは、このことである(イザヤ書六五ノ八)。

旧約聖書の中で、「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、これに迷わされる者は無知である」と、イスラエルに警告されたのはキリストであった(箴言二〇ノ一)。だからキリストはご自分からこんな飲み物を与えるようなことはなさらなかった。サタンは理性をくもらせ、霊的知覚を麻痺(まひ)させるような放縱に人を誘惑するが、キリストは下等な性情を征服するように教えておられる。キリストの一生は克己の模範であった。食欲の力をたちきるために、彼は人間が耐えることのできる最もきびしい試練を、われわれのために受けられた。バプテスマのヨハネに、ぶどう酒や濃い酒を飲まないように指示されたのはキリストであった。同じようにマノ

アの妻に禁酒を命じられたのもキリストであつた。キリストは隣人の口に酒びんをおしつける者の上にわざわざを宣告された。キリストはご自分の教えに矛盾したことをなさらなかった。主が結婚式の客のために用意された発酵しないぶどう汁は衛生的な清涼飲料水であつた。その効果は味覚を健康な食欲に調和させるのであつた。

祝宴の客たちがぶどう酒の品質について批評し、召使いたちに質問したので、奇跡の事実がわかつた。一座の人々はしばらくは驚きのあまり、そのふしぎなわざをされたおかたのことを思いつかなかつた。だがついにイエスをさがすと、イエスは弟子たちにさえも知られないように、静かに立ち去られたことがわかつた。

一座の人々の注意はこんどは弟子たちに向けられた。初めて弟子たちはイエスに対する彼らの信仰を告白する機会があつた。彼らは自分たちがヨルダン川で見たり聞いたりしたことを語つた。すると、多くの人たちの心に、神がご自分の民の救済者を起されたのだという望みの火がともされた。奇跡についての知らせはその地方全体にひろがり、エルサレムにまで伝えられた。祭司や長老たちは新たな関心をもつて、キリストの来臨をさし示している預言を調べた。こんな気取らない態度で人々の中に現われたこの新しい教師の使命を知りたいという熱心な希望が起つた。

キリストの伝道はユダヤ人の長老たちの伝道とくらべていちじるしい相違があつた。彼らは言い伝えと形式を尊重するあまり、思想や行動の真の自由をまったく殺してしまつていた。彼らはたえずけがれを恐れて生活した。「けがれた者」との接触をさけるために、彼らは異邦人ばかりでなく、自国民の大多数の者から遠ざかり、彼らに益を与えようともしなかつた。たえずこうした問題に気をとられていたので、彼ら

の心は小さくなり、生活の軌道は狭くなっていった。彼らの手本によって、民衆のあらゆる階級に独善主義と偏狹心が助長された。

イエスは人類と全く思いを一つにすることによって改革の働きをお始めになった。彼は神の律法に最高の尊敬を示される一方では、パリサイ人のうわべばかりの敬虔さを責め、人々をしばりつけている無意味な規則から彼らを解放しようとされた。イエスは、人々を一 가족の子供として一つにするために、社会の異なった階級をへだてている壁を打破しようとしておられた。イエスが婚宴の席に出られたことは、こうしたことを達成するための一歩としてくだてられたのであった。

神はバプテスマのヨハネが祭司やラビたちの影響を受けないように、そして特別な使命のために準備ができるように、彼に荒野に住むようにお命じになった。しかし彼の厳格で孤独な生活は民の手本にはならなかった。ヨハネ自身、聴衆にこれまでの仕事を捨てるようにとは命じなかった。彼は、神が彼らを召された立場において、神に忠誠をつくすことによって悔い改めの証拠を示すようにと命じた。

イエスは、あらゆる種類の放縦を責められたが、しかしその性質は社交的であられた。彼はあらゆる階級の人のもてなしに応じて、金持の家でも貧乏人の家でも、学者の家でも無知な者の家でも訪問し、彼らの思いを日常一般の問題から霊的な永遠の問題へ高めようとされた。彼は酒色をみとめられず、その行為は世俗的な軽薄の影によってくもられることがなかった。しかし主は無邪気なたのしみの光景によるこびを感じ、自ら出席なさることによって親睦(しんぼく)の集りを是認された。ユダヤ人の結婚式は印象的な光景で、そのよろこびは人の

子イエスにとって不快なものではなかった。この婚宴の席につらなることによって、イエスは結婚を天来の制度としてとうとばれた。

旧約聖書にも新約聖書にも、結婚関係はキリストとその民との間に存在するやさしく聖なる結合をあらわすのに用いられている。婚宴のよろこびは、キリストがご自分の花嫁を天父の家につれてゆかれ、あがなわれた者とあがない主とが、小羊の婚宴の席にすわるその日のよろこびをキリストの心に思わせた。キリストはこう言われる、「花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」。「あなたはもはや『捨てられた者』と言われず、……あなたは『わが喜びは彼女にある』となえられ、……主はあなたを喜ばれる」。「彼はあなたのために喜び、その愛によってあなたを新にし、祭の日のようにあなたのために喜び呼ばわれる」(イザヤ書六二ノ五、四、ゼパニヤ書三ノ一七)。使徒ヨハネは、天の事物についてのまぼろしが与えられた時、こう書いた、「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものをきいた。それはこう言った、『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつる。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである』」。「小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」(黙示録一九ノ六、七、九)。

イエスはひとりびとりの魂を、神のみ国への招待を与えられなければならない者としてごらんになった。イエスは人々の幸福を願う者として、彼らの中にはいつて行くことによって、彼らの心をとらえられた。彼は大通りで、個人の家々で、舟の上で、会堂の中で、湖の岸辺で、婚宴の席で、彼らを求められた。彼は人々が日常の働

きをしているところで彼らに会い、彼らの俗事に興味を示された。イエスはご自分の教えを家庭に持ち込み、家族をそれぞれの家庭においてイエスのきよいご臨在の感化のもとにおかれた。イエスの個人的な強い同情は人々の心をとらえる助けとなった。イエスはひとりで祈るためにたびたび山へ行かれたが、これは活動的な生活において人々のために働く準備であつた。このようなひと時を経て、イエスは、病人をいやし、無知の者に教え、サタンのとりこの鎖をたち切るために出てこられた。

イエスが弟子たちを訓練されたのは個人的な接触とまじわりによつてであつた。イエスは、ある時は山腹で彼らの中にすわつて教え、ある時は海辺で、ある時は彼らといつしよに道を歩きながら、彼らに神の国の奥義を示された。イエスは今日人々がするように説教をなさらなかつた。人々の心が天来のことばを受けようとして開かれているところではどこでも、イエスは救いの道の真理をとき明かされた。イエスは弟子たちにこれをしなさい、あれをしなさいと命令なさらず、「わたしに従つてきなさい」と言われた(ルカ九ノ五九)。彼は民にどう教えるかを弟子たちに見せるために、いなかや町を旅行される時には彼らをおつれになった。イエスは弟子たちと関心を一つにされたので、彼らは働きにおいてイエスと一体となつた。

人類と利害を一つにされたキリストの模範は、キリストのみことばをのべつたえる者やキリストの恵みの福音を受け入れた者のすべてが従わねばならない模範である。われわれは社会的なまじわりをたちきるのではない。他の人たちから孤立してはならない。あらゆる階級の人々に接するためには、われわれは彼らのいるところで彼らに会わねばならない。彼らの方からわれわれを求めてやってくることはめつたにない。講壇からだけでは人々

の心は天来の真理に動かされない。もう一つの働きの領分がある。それは目立たないかもしれないが、大いに有望である。それは身分のいやしい人々の家庭に、身分の高い人々の邸宅に、もてなしの食卓に、無邪気な親睦の集りの中にみいだされる。

キリストの弟子として、われわれは、単なる享楽心から世の人々とまじわったり、彼らといっしょになって愚かなことをするようなことはしない。こういう交際の結果はただ有害なだけである。われわれのことばやわれわれの行為やわれわれがだまっていることや、われわれがそこにい合わせるなどによって、罪を是認するようなことが決してあってはならない。どこへ行くにも、われわれはイエスをいっしょにおつれし、人々に救い主のとうとさを示すのである。しかし宗教を石の壁の中にかくして保とうとする者は、よいことをするとうとい機会を失う。社交的な関係を通して、キリスト教は世の人々と接触するようになる。天来の光を受けた者はだれでもみな、いのちの光であられるキリストを知らない人々の道を照すのである。

われわれはみなイエスの証人となるべきである。社交的な能力は、キリストの恵みにきよめられて、魂を救い主にみちびくのに活用されなければならない。われわれは自分自身の利害問題に利己的に没頭しているのではなく、われわれの祝福と特権とを他人にわけ与えようと願っているのだということを、世の人々に見せよう。われわれの宗教はわれわれを非情にしたり苛酷(かこく)にしたりしないということこそを世の人々にわからせよう。キリストをみいだしたと言っている者はみな、キリストが人々を益するために働かれたように、奉仕しよう。

われわれは、クリスチャンは暗い不幸な人たちだというまちがった印象を世の人々に与えるべきではない。も

しわれわれの目がイエスにしっかりそがれているならば、われわれはあわれみ深い救い主を見、そのみ顔の光をとらえるのである。神のみたまに支配されているところにはどこでも平安が宿る。神に対する落ち着いた、聖なる信頼があるので、そこにはまたよろこびがある。

キリストに従う者たちが、人間ではあるけれども神の性質にあずかる者であることを示すとき、キリストはおよろこびになる。彼らは像ではなく、生きた男女である。彼らの心は神の恵みの露によって生き生きとなり、義の太陽キリストに向かって開き、成長するのである。彼らは自分たちを照している光を、キリストの愛に輝いている働きを通して、他人に反射する。

第 16 章

神の宮で

本章はヨハネ二ノ一二―二三にもとづく

「そののち、イエスは、その母、兄弟たち、弟子たちと一緒に、カペナウムに下って、幾日かそこにとどまられた。さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた」(ヨハネ二ノ一二、一三)。

この旅で、イエスは首都エルサレムへ進んで行く人たちの大きな群れの一つに加わられた。イエスはご自分の使命をまだ公に発表しておられなかったので、人知れず群衆の中にまじっておられた。こういう機会には、ヨハネの伝道によって世間の注目をひくようになったメシヤの来臨ということがよく人々の話題になった。彼らは自分たちの国が偉大な国家になるのだという望みについて燃えるような熱心さで語り合った。イエスはこの望みが裏切られることを知っておられた。なぜなら、それは聖書の誤った解釈に根拠がおかれていたからである。イエスは非常に熱心に預言を説明し、神のみことばのもっと綿密な研究に人々をめざめさせようとされた。

イスラエルの民はエルサレムで神の礼拝を教えられるのだと、ユダヤ人の指導者たちは教えていた。過越節の週間になると、大ぜいの人々がパレスチナの全地から、また遠い国々からもやってきて、ここに集まった。宮の庭

は雑然とした群衆でいっぱいになった。一つの大きいいけにえであられるキリストを象徴するものとして献げられるいけにえをたずさえてくることのできない人が多かった。そうした人たちのために、動物が宮の外庭で売買された。ここにあらゆる階級の人々が彼らの献げ物を買うために集まった。ここであらゆる外国のお金が聖所の貨幣に両替された。

ユダヤ人はだれでもみな「命をあがなう」ために毎年半シケルを納めなければならなかった。このようにして集められたお金は宮を維持するために用いられた(出エジプト記三〇のノ一一―一六参照)。このほかに、多額のお金が任意の献金として持参され、宮の金庫に納められた。外国貨幣はみな聖所のシケルと呼ばれる貨幣に両替しなければならなかった。そしてその貨幣が聖所の奉仕のために受け取られた。金銭の両替は詐欺や強奪の機会となり、それはだんだん恥ずべき商売となって、祭司たちの収入源となっていた。

商人たちは動物を売るのに法外な値段をつけ、そのもうけを祭司や役人たちにわけた。こうして祭司や役人たちは民の犠牲において私腹を肥やした。礼拝者たちは、いけにえを献げなければ、彼らの子供たちや地所に神の祝福がくだらないと信じるように教えられていた。こうして動物を高い値段で売りつけることができた。人々は遠くからやってきたのだから、その目的である礼拝行為を果さないでは家へ帰ろうとしなかったからである。

過越節の時には大変な数のいけにえがさげられたので、宮での商売は非常に盛んだった。従ってそれに伴う混雑は、神の聖なる宮というよりもむしろやかましい家畜市場を思わせた。かん高い取り引きの声、牛のもうもう鳴く声などが、貨幣のじゃらじゃらという音や怒って言い争う声にまじってきこえた。その混乱があまりにひど

いために、礼拝者たちはさまたげられ、いと高き神に語りかけられることは宮をおおう騒音にかき消された。ユダヤ人は自分たちの敬虔さを非常な誇りにしていた。彼らは宮をよるこび、宮のことをよく言わないことを胃流(ほうとく)とみなした。彼らはまた宮に関係のある儀式を非常に厳格に行なった。しかし金銭欲が彼らの用心深さを圧倒していた。彼らは、自分たちが神ご自身によって定められた儀式の本来の目的からはるかにそれていることにほとんど気がついていなかった。

主がシナイ山上におくだりになった時、その場所は主のご臨在によってきよめられた。モーセは、山のまわりに境界を設けて、そこをきよめるようにと命じられた。そして「あなたがたは注意して、山に上らず、また、その境界に触れないようにしなさい。山に触れる者は必ず殺されるであらう。手をそれに触れてはならない。触れる者は必ず石で打ち殺されるか、射殺されるであらう。獣でも人でも生きることとはできない」という主の警告のことばがきかれた(出エジプト記一九ノ一二、一二三)。このように、神がご臨在をあらわされるところはどこでも、神聖な場所であるという教訓が教えられた。神の宮の境内は神聖なところとみなされるべきだった。ところがつけを争うあまり、すべてこうしたことが忘れられていた。

祭司と役人たちは国民に神を代表する者と呼ばれていた。彼らは宮の庭がこのように悪用されているのを改革すべきであった。彼らは民に正直とあわれみの模範を示すべきであった。自分自身の利益を追い求めないで、彼らは礼拝者たちの事情と必要とを考慮し、また必要ないけにえを買うことのできない人々をいつでも助ける用意がなければならなかった。ところが彼らはそうしたことをしなかった。彼らの心は貪欲に固まっていた。

この祭りには、苦しんでいる者や困っている貧しい人々もやってきた。盲人も足なえもつんぼもきた。寝床にのせてつれてこられる者もあった。貧しいために、主にささげる一番安い献げ物も買えず、自分自身の空腹を満たす食物さえ買うことのできない人たちもたくさんきた。こうした人たちは祭司の言明にひどく当惑した。祭司たちは自分の敬虔さを誇り、民の保護者であると自称した。だが彼らは同情やあわれみの心がなかった。貧しい者や病人や死にかけている者が助けを乞うてもむだだった。彼らの苦しみは祭司たちの心に何の同情も呼び起さなかった。

イエスは宮にはいつてこられると、すべての光景をじつとごらんになった。彼は不正な取り引きをごらんになった。血を流さなければ自分たちの罪はゆるされないと考えて困っている貧しい人たちを彼はごらんになった。彼は、神の宮の外庭がけがれた商売の場所にかわっているのをごらんになった。神聖な境内が一つの大きな取引場となっていた。

キリストは、どうにかしなければならぬとお考えになった。無数の儀式が、その意味について正しい教えもなされないままに民に命じられていた。礼拝者たちは、ただひとりの完全ないけにえであられるキリストを象徴するものであることも理解しないで彼らのいけにえをささげた。しかも彼らの中に、みとめられなければならない、あがめられもしないで、彼らのすべての儀式によって象徴されているおかたが立っておられた。彼は献げ物について指示をお与えになったのだった。彼は献げ物の象徴的価値を理解しておられた。イエスはそうした献げ物がいま悪用され、誤解されているのをごらんになった。霊的な礼拝は急速に影をひそめていた。祭司たちや役人た

ちと神との間のつながりは何もなかった。キリストの働きは、まったく異なった礼拝を確立することであった。

宮の庭の石段に立たれたキリストは、鋭い一べつで、目の前の光景を見抜かれる。預言の目をもって、イエスは未来を、幾年後ばかりでなく幾世紀幾時代後までごらんになる。彼は祭司たちや役人たちが貧しい人々の権利を奪い、彼らに福音が伝えられるのを禁じているのをごらんになる。彼は、神の愛が罪人にかくされ、人々が神の恵みを商品にするのをごらんになると、怒りと権威と力とがその顔にあらわれる。人々の注意は彼にひきつけられる。けがれた取引をやっていた人たちの目が、イエスの顔にくぎづけにされる。彼らは目をそらすことができない。彼らは、この人に自分たちの心の奥底が見抜かれ、かくれた動機がみつけ出されるのを感じる。中には、自分の悪い行為が顔に書かれているのをあの鋭い目にじっとみつめられるかに、顔をかくそうとする者もある。

騒ぎはおさまった。商売とかけひきの声はやんだ。沈黙は苦痛となる。群衆は畏怖の念に圧倒される。彼らは自分たちの行為を弁明するために神のさばきの前に呼び出されたかのである。キリストを見あげて、彼らは、人性という衣から神性がひらめいているのを見る。天の君が、最後の日におけるさばき主のように、その時ご自分に伴う栄光にいまはつつまれておられないが、同じように魂を見抜く力をもって立っておられるのである。彼の目は群衆を見渡して、ひとりひとりを見抜かれる。彼の姿は堂々たる威厳をそなえて彼らの中にそびえているように見え、天来の光がそのみ顔を照している。イエスが話されると、そのはっきりしたひびきたる声は——いま祭司たちや役人たちが犯している律法をかつてシナイ山上で宣言されたのと同じ声は——宮の門に反響して

きこえる。「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」(ヨハネ二ノ一六)。

ゆっくり石段をおりながら、イエスは、境内にはいる時に拾われた縄の鞭をふりあげて、取引をしている連中に宮の境内から立ち去るように命じられる。これまでにあらわされたことのない激しさと厳格さをもって、イエスは両替屋のテーブルをひっくり返される。貨幣は高い音を立てて、大理石の歩道に落ちる。だれひとり彼の権威をあえて問題にしようとしめない。だれひとり不正なもうけの金を拾い集めようとして立ちどまろうとしめない。イエスは彼らを縄の鞭で打ちはなさないが、そのただの鞭が彼の手にあると、燃える剣のように恐ろしいものに見える。宮の役員たちや、投機をしていた祭司たちや、仲買人たちや家畜商人たちは、イエスの目の前にいると心が責められるので、それからまめかれない一心で羊や牛といっしょにその場から逃げ出す。

あわてふためきは群衆全体にひろがり、彼らはイエスの神性に圧倒される感じがする。幾百人の青ざめた唇から、恐怖の叫びがもれる。弟子たちでさえふるえあがる。弟子たちは、イエスのふだんのふるまいとはまったく不似合いなことはと行動におそれをなす。彼らは、イエスのことについて、「あなたの家を思ふ熱心がわたしを食いつくし」と書かれていることを思い出す(詩篇六九ノ九)。まもなくそうぞうしい群衆は商品といっしょに神の宮から遠くへ追いやられる。宮の庭からけがれた取引が姿を消し、深い静寂と荘厳さが混乱の場面をおおう。主のご臨在は昔シナイ山をきよめたが、いまは主のみ栄えのために建てられた宮をきよいものにした。

宮をきよめることによって、イエスはメシヤとしてのご自分の使命を公表し、その働きにはいられたのであ

た。神の住居として建てられたこの宮は、イスラエルと世界のために実物教訓となるように計画されていた。輝く聖なるセラフから人間にいたるまで、すべての被造物が創造主の内住される宮となることが、永遠の昔から神の目的であつた。罪のために人類は神の宮となくなつた。人の心は、悪のために暗くなり、けがれたものとなつたので、もはや聖なる神の栄光をあらわさなくなつた。しかし神のみ子の受肉によって天の神の目的は達成された。神は人類の中にお住みになり、救いの恵みを通して、人の心はふたたび神の宮となる。神はエルサレムの宮が、すべての魂にとって可能な高い運命についてのたえまないあかしとなるように計画された。しかしユダヤ人は彼らが非常な誇りをもって見ていた建物の意義を理解していなかった。彼らは自分自身をみたまの聖なる宮としてささげなかつた。けがれた商売のそうぞうしさにつつまれていたエルサレムの宮の庭は、肉欲やきよくない思いがいりこんでけがれている心の宮をそのままあらわしていた。宮を世俗の売る人、買う人からきよめることによって、イエスは、罪のけがれ、すなわち魂を墮落させる世俗的な望み、利己的な欲望、悪習慣などから心をきよめられるご自分の使命を宣言された。「あなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜び契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のうちに彼らを清める」(マラキ書三ノ一—三)。

「あなたがたは神の宮であつて、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮

を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」(コリント第一・三ノ一六、一七)。だれも心を占領している悪のかたまりを自力で追出すことはできない。キリストだけが魂の宮をきよめることがおできになる。しかし彼ははいることを強制なさらない。主は昔の宮におはいりになったようには心におはいりにならないで、「見よ、わたしは戸の外に立つて、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいる」と言われる(黙示録三ノ二〇)。主は一日だけのためにおはいりになるのではない。「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。……彼らはわたしの民となるであろう」と言われる(コリント第二・六ノ一六)。「われわれの不義を足で踏みつけられる。あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ」られる(ミカ書七ノ一九)。主のご臨在は、魂が主の聖なる宮となり、「霊なる神のすまい」となるように、その魂を洗いきよめる(エペソ二ノ二一、二二)。

恐ろしさに圧倒されて祭司たちと役人たちは宮の庭から逃げ出し、彼らの心を見抜く鋭い目からのがれた。彼らは逃げて行くとき、宮へやって来る他の人たちに出会つと、自分たちの見聞きしたことを語り、ひき返すように命じた。キリストは逃げて行く人たちをごらんになって、彼らの恐怖と、彼らが真の礼拝の本質について無知であることをかわいそうにお思いになった。この光景の中に、イエスは、ユダヤ国民全体が邪悪で悔い改めないために、離散させられることが象徴されているのをごらんになった。

ではなぜ祭司たちは宮から逃げ出したのだろうか。なぜ彼らはその場にふみとどまらなかったのだろうか。彼

らに行ってしまうと命じたのは、この世の地位も権力もない大工の息子、貧しいガリラヤ人だった。なぜ彼らはイエスに抵抗しなかったのか。なぜ彼らは不正にもうけた金を捨てて、外観はまったくみすばらしいこの人の命令で逃げ出したのか。

キリストは王の権威をもって語られたので、彼の様子や声の調子には、人々が抵抗する力をゆるさないものがあった。命令のことばで、彼らはかつてこれまでになかったほど、偽善者やどろぼうとしての自分たちの真の立場をみとめた。人性を通して神性がひらめいた時、彼らはキリストの顔つきに怒りをみとめたばかりでなく、彼のみことばの意味をさとった。彼らは永遠のさばき主のみ座の前で、この世と永遠のために宣告をくだされたかのように感じた。その時だけ、彼らはキリストが預言者であることを確信し、多くの者が彼をメシヤとして信じた。聖霊が彼らの心にキリストに関する預言者のことばをひらめかせた。彼らはこの自覚に従ったであろうか。

彼らは悔い改めようとしなかった。彼らは貧しい者に対してキリストの同情心が呼び起されたことを知っていた。彼らは民に対する自分たちの態度に搾取の罪があることを知っていた。キリストが彼らの思いを見抜かれたので、彼らはキリストを憎んだ。キリストが公衆の面前で彼らを責められたことが彼らの誇りを傷つけた。そして彼らはキリストの勢力が民の中にひろがって行くのをねたんだ。彼らは、キリストが彼らを追い出された力について、まだだがその力を彼に与えたかについて、彼に挑戦しようと決心した。

ゆっくりと用心深く、しかし心に憎しみをいだいて、彼らは宮へもどってきた。だが彼らのいない間に、何とこの変化が起ったことだろう。彼らが逃げた時、貧しい人々があとに残った。そしてこの人たちはいま顔に愛と

同情のあらわれているイエスに見入っていた。目に涙をためて、イエスはまわりのふるえている人たちに、恐れるには及ばない、わたしはあなたがたを救い、あなたがたはわたしをあがめるであろう。そのためにわたしはこの世にきたのだと言われた。

人々は、主よ、祝福してくださいというさし迫った、同情すべき訴えをもってイエスの前におしよせた。主の耳はひとつひとつの叫びをきかれた。やさしい母親にもまさるあわれみをもって、主は病氣の子供たちの上に身をかがめられた。みんなが手当てをしてもらった。どの人もみなどんな病氣もいやされた。**おし**は口を開いて賛美し、盲人は目をあけてくださったおかたの顔を見た。苦しむ者たちの心はよろこばされた。

祭司たちと宮の役人たちがこのすばらしいわざを目に見た時、彼らの耳にきこえた声は彼らにとって何という思いがけないことだったことだろう。人々は自分たちの受けている苦しみや裏切られた望みや、苦悩の日々や眠られない幾夜について語っていた。望みの最後のともしびが消えたようにみえた時、キリストが彼らをいやされたのだった。重荷はとても重かったが、わたしは助けてくださるかたをみつけた。その人は神キリストだ。わたしは一生をキリストの奉仕にささげるとある者は言った。両親は子供たちに、あのかたがあなたのいのちを救ってくださったのだ。あなたの声をあげてあのかたを賛美しなさいと言った。子供たちと若者たち、父親と母親たち、友人たちと見物人たちは、声をあわせて感謝し、賛美した。望みとよろこびが彼らの心を満たした。平安が彼らの心にのぞんだ。彼らは魂とからだを回復し、イエスの比類のない愛をどこでも宣伝しながら家へ帰った。

キリストが十字架につけられた時に、このようにいやされた人たちは、やじ馬連中の「十字架につけよ、十字

架につけよ」との叫びに加わらなかった。彼らの同情はイエスの側にあった。彼らはイエスの大いなる同情とふしぎな力を経験したからである。彼らはイエスが救い主であるとわかつていた。イエスが彼らに肉体と魂の健康をお与えになったからである。彼らは使徒たちの説教を聞き、その心に神のみことばが開けたので知恵が与えられた。彼らは神のめぐみの代理者、神の救いのうつわとなった。

宮の庭から逃げた群衆は、しばらくするとすこしずつ押し返してきた。彼らは自分たちが陥っていたあわてふためきから幾分立ち直ったが、その顔にはまだ決断のつかない臆病さがあらわれていた。彼らはイエスのみわざを見て驚き、イエスを通してメシヤに関する預言が成就されたことを確信した。宮をけがした罪は、大部分祭司たちにあった。宮の庭が市場になってしまったのは、彼らのとりきめによつたのである。人には比較的罪がなかった。彼らはイエスの天来の権威に印象づけられたが、しかし彼らにとっては祭司たちと役人たちの勢力が絶対であった。彼らはキリストの使命を革新的なものに考え、宮の当局者たちから許可されていたことに干渉する権利がイエスにあるかどうかを問題にした。彼らは商売が邪魔されたので腹を立て、聖霊のさとしをうち消した。ほかのだれよりも祭司たちと役人たちは、イエスを、エホバにあぶらそがれたおかたとして見るべきであった。なぜなら、彼らはイエスの使命について書かれた聖なる巻物を手にしており、宮のきよめが人間の力以上のあらわれであることがわかつていたからである。彼らはイエスをひどく憎んだが、イエスが宮の清潔を回復するために神からつかわれた預言者であるかもしれないの思いからのがれることができなかった。この恐れから生じた尊敬をもって、彼らはイエスのところへ行き、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたち

に見せてくれますか」とたずねた(ヨハネ二ノ一八)。

イエスはすでに彼らにしるしを示しておられた。彼らの心に光を照らすことによって、またメシヤのなすべきわざを彼らの前で行なうことによつて、イエスはご自分の本性について確信させる証拠をお与えになっていた。いま彼らがしるしを求めると、イエスはたとえを用いてお答えになり、彼らの悪意を見抜いておられて、彼らの悪意がどこまで発展するかを知っておられることをお示しになった。「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」と主は言われた(ヨハネ二ノ一九)。

イエスのこのことばには二重の意味があつた。イエスはユダヤ人の神殿と礼拝の破壊のことを言われたばかりでなく、ご自分の死すなわちご自身の肉体の宮の破壊について言われた。すでにユダヤ人たちはイエスの死についてばかりごとをめぐらしていた。祭司たちと役人たちが宮へもどつてきたときには、彼らはすでに、イエスを殺すことによつて邪魔者をとり除く相談をしていた。それなのにイエスが彼らの意図を目の前に示されたとき、彼らはイエスの言っておられることがわからなかつた。彼らはイエスのことばがエルサレムの神殿についてだけ言われたものと考え、憤慨して叫んだ。「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それなのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」(ヨハネ二ノ二〇)。彼らは、イエスに対する彼らの不信が正当なものであつたと感じ、イエスを拒否しようとの決心を固めた。

キリストは、ご自分のことばを不信なユダヤ人にも、また当時の弟子たちにさえもわからせるおつもりはなかつた。イエスはこのことばが彼の反対者たちに曲解され、ご自分にとって不利になることをご存じだつた。裁判

の時に、このことばが告発され、カルバリーではこれらのことばが嘲笑となって彼に投げつけられるのであった。だがいまそのことばを説明すれば、弟子たちにご自分の苦難を知らせ、彼らがまだ耐えることのできない苦悩を与えることになる。またそのことばを説明すれば、ユダヤ人に彼らの偏見と不信の結果を早まってばくろすることになる。すでに彼らは、イエスが小羊としてほふり場に引かれるまで、彼らが着々とたどる道にはいつていたのである。

キリストのこのことばが語られたのは、主を信ずる者のためであった。イエスはこのことばが伝えられることをご存じだった。このことばは、過越節に語られたのだから、幾千の人々の耳にはいい、世界の全地に伝えられるであろう。キリストが死からよみがえられてから、このことばの意味が明らかになるのである。多くの者にとって、それはキリストの神性の決定的な証拠となるのである。

霊的に暗かったために、イエスの弟子たちさえ、主の教訓をさとらないことがたびたびあった。しかしそれらの教訓の多くは、次々に起る事件によって明らかになった。キリストがもはや弟子たちといっしよにあられなくなつてから、そのみことばは彼らの心のささえとなった。

「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」との救い主のことばには、エルサレムの宮をさすことばとして、聞いた者たちがみとめたよりもっと深い意味があった(ヨハネ二一九)。キリストは宮の土台であり、いのちであった。宮の儀式は神のみ子の犠牲を象徴していた。祭司職は、キリストの仲保者としての性格と働きをあらわすために設けられていた。いけにえをささげる礼拝の制度全体は、世の人々をあ

がなわれる救い主の死を予表していた。それらの献げ物が幾時代にわたってさし示してきた大事件が完結されると、その献げ物にはもう何の効力もないのだった。

儀式の制度全体はキリストを象徴していたから、キリストを離れては何の価値もなかった。ユダヤ人がキリストを死に渡すことによって、キリストを決定的に捨てた時、彼らは宮とその奉仕に意義を与えていた一切のものを捨てた。宮の神聖さは失われた。宮は破壊される運命にあった。その日から、いけにえの献げ物とそれに関係のある奉仕は無意味となった。カインの献げ物と同じように、それは救い主への信仰を表わさなかった。キリストを殺したことによって、ユダヤ人は実質的に宮を滅ぼした。キリストが十字架につけられたとき、宮の内側の幕が上から下までまっ二つに裂けて、最後の太いなるいけにえがささげられ、いけにえをささげる制度が永遠に終りを告げたことを意味した。

「わたしは三日のうちに、それを起すであろう」(ヨハネ二一九)。救い主が死なれたことによって暗黒の勢力は勝利したように見え、彼らはその勝利をよろこんだ。しかしイエスは、割れたヨセフの墓から勝利者としてあらわれ、「もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあつて凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである」(コロサイ二一五)。キリストは、その死とよみがえりとによって、「人間によらず主によつて設けられた真の幕屋」に奉仕する者となられた(ヘブル八二二)。人間がユダヤ人の幕屋を建て、人間がユダヤ人の宮を建てた。だが地上の聖所の原型である天の聖所は、人間の建築家によつて建てられなかった。「見よ、その名を枝という人がある。彼は自分の場所で成長して、主の宮を建て、すなわち彼は主の宮を建て、

王としての光榮を帯び、その位に座して治める」(ゼカリヤ書六ノ一二、一三)。

キリストをさし示していたいけにえの儀式は過ぎ去った。しかし人間の目は、世の罪のためのまことのいけにえに向けられた。地上の祭司制度はやんだ。だがわれわれは、新しい契約の奉仕者イエスと「アベルの血よりも力強く語るそそがれた血」とに目をそそぐ。「それによって聖霊は、前方の幕屋が存在している限り、聖所にはいる道はまだ開かれていないことを、明らかに示している。……しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく完全な幕屋をとおり、……ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである」(ヘブル一ノ二四、九ノ八一―一二)。

「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル七ノ二五)。奉仕は地上の宮から天上の宮へ移されても、また聖所とわれらの大祭司は人間の目には見えなくても、弟子たちはそのことによって何の損失もこつおらないのであった。救い主があられないからといって、まじわりが中断されたり、力が減少したりするようなことはないのであった。イエスは天の聖所で奉仕しておられる一方では、いまでもみたまによって地上の教会の奉仕者であられる。イエスは人間の目からはとり去られても、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」という別れの約束は成就されている(マタイ二八ノ二〇)。イエスは下位の奉仕者たちにご自分の力を委任されているが、その力づけるご臨在は依然としてご自分の教会とともにある。

「わたしたちには……大祭司なる神の子イエスがいまですのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかつて時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」(ヘブル四ノ一四―一六)。



ユダヤ国民の高官ニコデモは、イエスのメッセージについてもっとよく知るために、夜こっそりとイエスのもとにやってきた。イエスはその機会に、新生の真理を明らかにされた。

ニコデモ

本章はヨハネ三ノ一一七にもとづく

ニコデモはユダヤ国民の中で高い信任の地位を占めていた。彼は高い教育を受け、並々ならぬ才能を持ち、また国民議會の名誉ある議員であつた。他の人たちと同じに、彼もイエスの教えに心を動かされていた。彼は金持ちで、学問があり、尊敬されていたが、ふしぎにこのいやしいナザレ人に心をひかれていた。救い主の口から語られた教訓が、彼に強い印象を与えたので、彼はそうしたすばらしい真理についてもっと学びたいと望んだ。

キリストが宮のきよめに権威を行使されたことから、祭司たちと役人たちの断固とした憎悪心がひき起された。彼らはこの未知の人の力を恐れた。名もない一ガリラヤ人のこのような大胆さをゆるしておけなかった。彼らは何とかしてイエスの働きをやめさせようとした。しかし全部の者がこの目的に賛成したわけではなかった。こんなにはつきり神のみたまによって動かされているおかたに反対することを恐れた者も何人かあつた。彼らは、預言者たちが、イスラエルの指導者たちの罪を責めたために殺されたことを思い起した。ユダヤ人が異教国民に支配されているのは、神からの譴責を頑固にこばんだ結果であることを彼らは知っていた。イエスに対してはかり

ごとをめぐらすことによって、祭司たちと役人たちが父祖たちと同じ道をたどり、国民に新たな災難がもたらされることを彼らは恐れた。ニコデモはこうした気持をいだいていた者の一人であった。サンヒドリンの会議で、イエスに対してどういう方針をとるかが討議されたとき、ニコデモは慎重さと穩健さとを忠告した。もしイエスがほんとうに神から權威をさずけられているものなら、その警告をこばおことは危険であると彼は説いた。祭司たちはあえてこの勧告を無視することもできず、当分は救い主に対して公然たる手段をとらなかつた。

イエスのことをきいてから、ニコデモはメシヤに関する預言を熱心に研究した。調べれば調べるほど、これこそきたるべきおかたであるという確信が強められた。イスラエルの他の多くの人たちといっしょに、彼は宮がけがされていることに非常な困惑を感じていた。イエスが売り買いする人たちを追い出された時、彼はその場の光景を見ていた。彼はそこに天来の力のふしぎなあらわれを見た。彼は救い主が貧しい人々をいたわり、病人をいやしてあられるのを見た。彼は人々のうれしい顔つきを見、賛美の声を聞いた。そしてナザレのイエスが神からつかわれたおかたであることを、彼は疑うことができなかった。

ニコデモはイエスとの面会を非常に望んだが、公然とイエスに会うことをちゅうちよした。ユダヤ人の役人が、まだほとんど名も知られていない一教師に共鳴していることを公然と表明することは不面目なことだった。イエスをたずねたということがもしサンヒドリンに知られたら、彼らの嘲笑と非難とを招くであろう。彼は、自分が公然とたずねるとほかの者たちがまねをするからという理由を口実にして、ひそかにイエスに面会しようと決心した。特別な調査によって、オリブ山にひっこんでおられる救い主の居所を知ると、彼は町が眠りのうちに静ま

るまで待ち、それからイエスをたずねて行った。

キリストの前に出ると、ニコデモは妙な気おくれを感じ、それを平静と威厳の様子によっておしかくそうとつとめた。彼は言った、「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようないしは、だれにもできはしません」(ヨハネ三ノ二)。彼は、教師としてのキリストの非凡な才能について、また奇跡を行われるすばらしい力について語ることによって、面の道ならしをしようと望んだ。彼のことは信頼心をあらわし、また信頼心を起させるように意図されていた。だが実際にはそのことばに不信があらわれていた。彼はイエスをメシヤとしてみとめず、ただ神からつかわされた教師としてみとめた。

このあいさつをみとめないで、イエスは、相手の心の奥底を読んでおられるかのように、語り手にじっと目をそがれた。限らない知恵を持っておられるイエスは、ご自分の目の前に真理を求めているひとりの人間をこちらになった。主はこの来訪の目的をご存じであった。そこで主は、相手の心にすでにめばえている確信を深めようと望んで、まっすぐ中心点にふれ、厳粛に、しかしやさしく言われた、「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ三ノ三)。

ニコデモは、主と議論しようと思ってやってきたのであったが、イエスは真理の根本原則をはっきりと示しになった。主はニコデモにこう言われた、あなたにとって必要なのは、理論的な知識よりもむしろ霊的な生れかわりである。あなたは、好奇心を満足させるより、新しい心を持つ必要がある。あなたは天の事物を理解できる

前に上からの新しいのちを受けなくてはならない。この変化が起って一切のことが新しくなるまでは、わたしの權威やわたしの使命についてわたしと議論しても、その結果は、あなたにとって救いの益とはならないと。

ニコデモは、バプテスマのヨハネが悔い改めとバプテスマについて説き、聖霊をもってバプテスマを授けられるおかたを人々にさし示すのを見聞きしていた。彼自身も、ユダヤ人の間に靈性が欠けており、彼らが頑迷さと世俗的野心に大いに支配されていることを感じていた。彼はメシヤが来臨されるとき、物事の状態がもっとよくなるようにと望んでいた。しかしバプテスマのヨハネの鋭いメッセージは、彼の心のうちに罪の自覺を起さなかった。彼は厳格なパリサイ人で、自分の善行を誇っていた。彼は、慈善心と、宮の奉仕を維持するために惜しまず献金することによって世間から尊敬されていたので、神の恵みは確実であると思っていた。彼はみ国が現在の状態では見ることができないほどきよいものであるという思いに驚かされた。

イエスは、新しく生れるという表現をお用いになったが、それはニコデモにとって全然聞きなれないことばではなかった。異教からイスラエルの信仰に改宗した者は、よく生れたばかりの子供にたとえられた。だから彼はキリストのことばを文字通りの意味に受け取るべきではないことをみとめていたにちがいない。しかし彼は、イスラエル人として生れたおかげで、自分は必ず神のみ国にはいるものと考えていた。彼は自分が変化する必要があると思わなかった。だから救い主のことばに驚いたのである。彼はこのことばがびつたりと自分自身にあてはめられたことにいらだった。パリサイ人としての誇りが真理を求める者としての正直な願いと戦っていた。彼はキリストがイスラエルのつかさとしての彼の立場を尊敬しないで、自分にこんな話し方をされるのをあやしんだ。

驚いて落ち着きを失った彼は、皮肉のこもったことばで、「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか」とキリストに答えた(ヨハネ三ノ四)。彼は、他の多くの人々と同じように、鋭い真理が良心に訴えられ、生れながらの人は神のみたまの賜物を受け入れないということをあらわした。彼のうちには靈的事物に應ずる何ものもない。なぜなら靈的事物は靈的に判断されるからである(コリント第一・二ノ一四参照)。

しかし救い主は議論に議論をもって応じられなかった。キリストは重々しく静かな威厳をもって片手をあげ、一層強い保証をもって、「よくよくあなたに言っておく。だれでも、水と靈とから生れなければ、神の国にはいることはできない」と、真理を強調された(ヨハネ三ノ五)。ニコデモは、キリストがここに言っておられるのは、水のバプテスマのことと神のみたまによって心が新たにされることとであることがわかった。彼はバプテスマのヨハネが預言したおかたの前に自分がいることを確信した。

イエスはことばをつづけて、「肉から生れる者は肉であり、靈から生れる者は靈である」と言われた(ヨハネ三ノ六)。心は生れながらにして悪く、「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができようか、ひとりもない」のである(ヨブ記一四ノ四)。どんな人間の発明によっても、罪を犯している魂を救う道をみいだすことはできない。「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである。」「悪い思い、すなわち、殺人、姦淫(かんいん)、不品行、盗み、偽証、誹(そ)しりは、心の中から出てくるのである」(ローマ八ノ七、マタイ一五ノ一九)。流れが清くなるには、心の泉がきよめられなければならない。自分で律法を守る行為によって天国にはいろいろとする者は不可能なことを試みているのである。律法的な宗教、

敬虔の形だけを持っている者には安全がない。クリスチャンの生活は古いものを修正したり改良したりすることではなくて、性質が生れ変わることである。自我と罪に対する死があり、まったく新しいのちがある。この変化は聖霊の効果的な働きによってのみ行われる。

ニコデモはまだ迷っていたので、イエスは風を例にとつてその意味をお示しになった。「風は思いのままに吹く。あなたはその音をきくが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである」(ヨハネ三ノ八)。

風は木々のこずえに音をたて、葉や草花をさらさらと鳴らせるが、目に見えないので、だれも風がどこからきてどこへ行くかを知らない。心に働く聖霊の働きもこれと同じである。それは、風の動きと同じように、説明することができない。人は自分が信仰にはいった正確な日時と場所を言ったり、入信の過程における事情を始めから終りまで説明したりすることができないかも知れない。だがそのことは、彼が信仰にはいっていないという証拠にはならない。風のように目に見えない力によって、キリストはたえず心に働きかけておられる。すこしずつ、おそらく本人の気がつかないうちに、魂をキリストへひきよせるのに役立つ印象が与えられているのである。こうした印象は、キリストについて瞑想したり、聖書を読んだり、あるいは説教者のことばをきいたりすることによって与えられるかもしれない。そしてみたまがもつと直接に訴えるとき、突然にその魂はよろこんでイエスに屈服する。多くの人はこれを突然の改心と呼ぶが、それは神のみたまが長い間その人を説得した結果、すなわち長期間にわたる忍耐強い作用の結果である。

風自体は目に見えないが、風によって生ずる結果は見たり感じたりすることができる。同じように、魂に対するみたまの働きは、その救いの力を感じた人のすべての行為にあらわれる。神のみたまが心を占領されるとき、それは生活を生れ変らせる。罪の思いはしりぞけられ、悪い行為は放棄され、愛と謙遜と平安が怒りとねたみと争いに入れ代る。よろこびが悲しみに入れ代り、顔には天の光が反映する。だれも重荷を持ちあげる手を見たり、天の宮からくだる光を目に見たりする者はない。祝福は、信仰によって魂が神に屈服するときに与えられる。その時、人間の目で見ることのできない力が、神のかたちにかたどって新しい人間を創造する。

限りある人間の頭脳ではあがないの働きを理解することは不可能である。あがないの奥義は、人間の知識を超越している。それでも、死から生へ移る者は、それが天来の事実であることをみとめる。われわれは、あがないの発端はこの世において個人的な経験を通して知ることができる。しかしその結果は永遠の時代にまで及んでいるのである。

イエスが語っておられる間に、真理のかすかなひらめきがこのつかさの心にさし込んだ。人の心をやわらげ服従させる聖霊の感化が彼の心を動かした。それでも彼は救い主のみことばを完全に理解しなかった。彼は新生の必要よりも、むしろそれが達成される方法に心を動かされた。彼はあやしみながら、「どうして、そんなことがあり得ましようか」と言った(ヨハネ三ノ九)。

「あなたはイスラエルの教師でありながら、これぐらいのことがわからないのか」とイエスはあたずねになつた(ヨハネ三ノ一〇)。たしかに、民の宗教的な教育をまかされている者が、こんな大切な真理について無知であ

るべきではない。イエスのみことばはニコデモが真理の率直なことはにいらだたないで、靈的無知のゆえに自分自身についてへりくだった意見を持つべきであるという教訓を含んでいた。しかしイエスは、厳粛な威厳をもってお語りになり、その顔にも声の調子にも熱心な愛があらわれていたので、ニコデモは自分の不面目な立場をみとめても腹がたたなかった。

しかしイエスが、地上におけるご自分の使命はこの世の王国を建てることではなくて、靈的王国を建てることだと説明されると、相手は困惑した。それをごらんになって、イエスは、「わたしは地上のことを語っているのに、あなたがたが信じないならば、天上のことを語った場合、どうしてそれを信じるだろうか」とつけ加えられた(ヨハネ三ノ一二)。もしニコデモが、人の心に働く恵みを例示したキリストの教えを信じることができないならば、天の栄光の王国がどういうものかをどうして理解することができよう。彼は、地上におけるキリストの働きの性質を認識しないならば、天におけるキリストの働きを理解することはできないのである。

イエスが宮から追い出されたユダヤ人は、アブラハムの子であると主張していたが、彼らは、キリストのうちにあらわされている神の栄光に耐えることができなかったので、救い主の前から逃げ出した。こうして彼らは、神の恵みによって宮の聖なる奉仕にあずかるのにふさわしい者ではないことを立証した。彼らは聖潔の外観を保つのに熱心だったが、心の聖潔をなおざりにした。彼らは律法の文字についてやかましかったが、絶えずその精神を破っていた。彼らの大きな必要は、キリストがニコデモに説明された変化すなわち靈的新生であり、罪からのきよめであり、知識と聖潔とを新たにされることであつた。

生れかわりのわざについてイスラエルが盲目であることには言い訳の余地がなかった。聖霊による靈感の下にイザヤは、「われわれはみな汚れた人のようになり、われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである」と書いた(イザヤ書六四ノ六)。ダビデは、「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」と祈った(詩篇五一ノ一〇)。またエゼキエルを通して、「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わがために歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる」との約束が与えられていた(エゼキエル書三六ノ二六、二七)。

ニコデモはこれらの聖句をくもった心で読んでいた。だが今彼はその意味をさとりはじめた。律法を外面的な生活にあてはめ、どんなに厳格に文字通りこれを守っても、だれも天の王国にはいる資格はないということを彼はさとった。人間の目からみれば、彼の生活は正しく尊敬すべきものであった。だがキリストの前に出ると、彼は、自分の心が清潔でなく、自分の生活が聖潔でないことを感じた。

ニコデモはだんだんキリストにひきつけられた。救い主が新生について説明された時、彼はこの変化が自分のうちに行なわれるようにと切望した。どんな方法によってそれを達成することができるのだろうか。イエスは、口に出されないこの質問に答えて、「ちよつとモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」と言われた(ヨハネ三ノ一四、一五)。ここにニコデモのよく知っている根拠があった。上げられた蛇(へび)の象徴によって、彼は救い主の使命をは

つきりさとした。イスラエルの民が火の蛇のかみ傷のために死にかけていた時、神はモーセに青銅の蛇を作って会衆のまん中に高くかかげるように命じられた。そして蛇を仰ぎ見る者はみな生きられるという布告が陣営中に伝えられた。人々は、蛇そのものには彼らを助ける力がないことをよく知っていた。それはキリストの象徴だった。滅ぼす蛇の形に作られた像が彼らのいやしのためにあげられたように、「罪の肉の様」につくられたおかたが彼らのあがない主となられるのであった(ローマ八ノ三)。イスラエル人の多くは、いけにえの儀式そのものに彼らを罪から解放する力があると思っていた。青銅の蛇に価値がなかったように、いけにえの儀式そのものにも価値がないことを彼らに教えようと神は望まれた。それは彼らの心を救い主に向けさせるのであった。きずをいやされるためであろうと、罪をゆるされるためであろうと、彼らは神の賜物キリストへの信仰をあらわす以外に自分では何もできなかった。彼らは仰いで見て、生きるのであった。

蛇にかまれた人たちは、青銅の蛇を仰いで見るのをおくらせることもできた。こんな青銅の象徴に何の効力があるだろうかと疑うこともできた。彼らはまた科学的な説明を要求することもできた。だが何の説明も与えられなかった。彼らはモーセを通して与えられた神のみことばを信じなければならなかった。仰いで見るのをこばむことは、滅びることであった。

論争や議論によつては、魂に光が与えられない。われわれは仰いで見て生きなければならぬ。ニコデモは教訓を受け入れてそれを持ち帰った。彼は理論について議論するためではなく、魂にいのちを受けるために、新しい方法で聖書を調べた。聖霊のみちびきに身をゆだねた時、彼は天の王国を見はじめた。

あげられた蛇によってニコデモに教えられたのと同じ真理を学ぶ必要のある人が今日も幾千人となくいる。彼らは、神の律法に従うことが神のめぐみを受ける資格であると信じこんでいる。イエスを仰いで見て、イエスがめぐみによってのみ救ってくださることを信じなさいと言われると、彼らは、「どうして、そんなことがあり得ましようか」と叫ぶのである(ヨハネ三ノ九)。

ニコデモのように、われわれも、自ら進んで罪人のかしらと同じ方法でいのちにはいらねばならない。キリストより「以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝四ノ一二)。信仰を通してわれわれは神のめぐみを受ける。だが信仰はわれわれの救い主ではない。信仰そのものには功績がない。信仰は、キリストをしっかりとらえて、彼の功績すなわち罪からの救いをわがものとする手である。またわれわれは神のみたまの助けなしには悔い改めることさえできない。聖書にはキリストについて、「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである」といわれている(使徒行伝五ノ三二)。悔い改めは、罪のゆるしとまったく同じにキリストからくるのである。

では、われわれはどのようにして救われるのだろうか。「ちよつとモーセが荒野でへびを上げたように」人の子イエスもまたあげられた(ヨハネ三ノ一四)。蛇にだまされ、かまれた者はみなこのイエスを仰ぎ見て生きることができるといえる。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ一ノ二九)。十字架から輝いている光は神の愛をあらわしている。神の愛はわれわれをみもとにひきよせている。このひきよせる力にさからわなければ、われわれは

救い主を十字架につけた罪を悔いて十字架の下にみちびかれる。その時神のみたまは、信仰を通して魂に新しいいのちを生じさせる。考えること望むことはキリストのみこころに服従させられる。心と思いは、「万物を自身に従わせ」るためにわれわれのうちに働かれるキリストのみかたちに新しくつくられる(ピリピ三ノ一二)。その時神の律法は心と思いにしるされ、われわれはキリストとともに、「わが神よ、わたしはみこころを行つことを喜びます」と言うことができる(詩篇四〇ノ八)。

ニコデモとの会見において、イエスは救いの計画と世に対するご自分の使命をお示しになった。キリストが、天の王国を継ぎたいと望むすべての者の心のうちになされる必要のある働きを、一步一步、こんなにくわしく説明されたことは、その後の講話にも一度もなかった。キリストは、その公生涯の初めにあたって、サンヒドリンの議員で、最も信じやすい心を持ち、民の教師として任命されている者に、真理を明らかにされた。しかしイスラエルの指導者たちは、光を歓迎しなかった。ニコデモは真理を心の中にかくしていたので、三年の間、表立った結果はみられなかった。

しかしイエスはご自分が種をまかれた土をよく知っておられた。さびしい山の中で、夜たった一人の聞き手に語られたことは失われなかった。しばらくの間ニコデモはキリストを公然とみとめはしなかったが、キリストの生活を注視し、その教えを心に思いめぐらした。サンヒドリンの会議で、彼は、イエスを殺そうとする祭司たちのくわだてに何度も反対した。ついにイエスが十字架に上げられたとき、ニコデモは、「ちようどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を

得るためである」といわれたオリブ山での教えを思い出した(ヨハネ三ノ一四、一五)。あのひそかな会見から出た光がカルバリーの十字架を照し、ニコデモは、イエスが世のあがない主であられることを知った。

主の昇天後、弟子たちが迫害のために離散した時、ニコデモは大胆に前面に現われた。彼は、キリストの死とともに消滅するものとユダヤ人たちが予期していた若い教会をささえるために、自分の富を用いた。かつては用心深く、疑っていた彼が、危機に際して、岩のように固く立ち、弟子たちの信仰をはげまし、福音の働きを前進させる資金を供給した。彼は、かつては彼に尊敬を払っていた人たちからあざけられ、迫害された。彼はこの世の財産には貧しくなったが、イエスとの夜の会見から始まった信仰はゆるがなかった。

ニコデモは、ヨハネにあの会見の話を物語った。そしてヨハネの筆によって、それは幾百万の人々の教えのために記録された。そこに教えられている真理は、ユダヤ人のつかさが身分の低いガリラヤの教師からのちの道を学ぶために木影の深い山へやってきたあの厳粛な夜と同じに、今日もまた重要なのである。

第 18 章

「彼は必ず栄える」

本章はヨハネ三ノ二一―三六にもとづく

国民に対するバプテスマのヨハネの勢力は、一時は役人や祭司やつかさたちの勢力よりも大きかった。もし彼が自分はメシヤであると名のつて、ローマに反乱を起していたら、祭司たちと民は彼の旗の下に集まったであろう。サタンは、この世の征服者たちの野心をそそのめるあらゆる報酬をバプテスマのヨハネに強調しようとしていた。しかしヨハネは自分の勢力の証拠を目の前に見ながら、そのすばらしいわいろを断固としてしりぞけた。彼は自分にそがれる注意を他のおかたに向けた。

いま彼は人気の波が自分から去って、救い主に向かっていていることを知った。日に日に、彼のまわりの群衆が減って行った。イエスがエルサレムからヨルダン付近の地方においでになると、人々はイエスのことばを聞くために集った。イエスの弟子たちの数は日に日にふえた。多くの者がバプテスマを受けに



第 18 章 「彼は必ず栄える」

やってきた。キリストはご自分ではバプテスマをおさずけにならなかったが、弟子たちがこの儀式を行なうのを是認された。こうしてイエスはご自分の先駆者の使命を承認された。しかしヨハネの弟子たちは高まって行くイエスの人気をねたみの目で見た。彼らはイエスの働きを批判しようと待ちかまえていたが、まもなくその機会をみつけた。バプテスマは魂を罪からきよめるのに役立つかどうかということについて、彼らとユダヤ人との間に疑問が起った。彼らはイエスのバプテスマはヨハネのバプテスマと本質的にちがっていると主張した。まもなく彼らはバプテスマの時に用いるのに適当なことはどの形式について、そしてついにはいったいキリストの弟子たちにはバプテスマをさずける権限があるのかどうかということについて、キリストの弟子たちと論争した。



バプテスマのヨハネは幾千の人々が彼の説教を聞くためにむらがり集まってくるのを見てきたが、いまやその人々がイエスに向かうのを見た。ヨハネは、キリストがますます盛んになられることを知った。

ヨハネの弟子たちはヨハネのところへ苦情を訴えてきて、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」と言った(ヨハネ三ノ二六)。こうしたことばによって、サタンはヨハネを試みた。ヨハネの使命はまさに終ろうとしているように見えたが、彼がキリストの働きをさまたげることにはまだ可能だった。もし彼が自分自身に同情し、自分が取りかえられたことに悲しみか失望を表明したら、彼は不和の種をまき、ねたみを助長し、福音の進歩をひどくさまたげたであろう。

ヨハネは人間に共通の欠点や弱点を生れつき持っていたが、神の愛にふれることによって生れ変っていた。彼は利己心と野心にけがされていらない雰囲気の中に住み、ねたみという毒氣にまったく超越していた。彼は自分の弟子たちの不満に同情を示さないで、自分がメシヤに対してどんな関係にあるかをはっきりわきまえていることと、自分がそのために道を備えてきたおかたを歓迎していることを明らかにした。

彼はこう言った、「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。『わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』とやったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立つて彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ」(ヨハネ三ノ二七―二九)。ヨハネは自分のことを、婚約者たちのために結婚への道を準備する使者の役目をつとめる友人であると言っている。花婿が花嫁を受け取った時に、その友人の役目は果される。彼は自分が尽力して縁を結ばせた人々の幸福をよろこぶ。このようにヨハネは、人々をイエスに向けるために召されていたので、救い主の働きの成功を目

に見ることは彼のよろこびであった。彼は、「この喜びはわたしに満ち足りている。彼は必ず栄え、わたしは衰える」と言った(ヨハネ三ノ二九、三〇)。

ヨハネは、信仰をもってあがない主を見たとき、自己否認の高さにまでたかめられた。彼は人々を自分にひきつけようとして、むしろ彼らの思いをだんだん高めて、ついには彼らが神の小羊イエスに目を向けるようにした。彼自身は一つの声、荒野の叫びにすぎなかった。いま彼は、いのちの光であられるおかたにすべての人の目が向けられるために、自分はよろこんで沈黙し、世間から忘れられることに甘んじた。

神の使命者としての召しに忠実な人たちは自分にほまれを求めない。自分を愛する思いは、キリストへの愛によつてなくなる。とうとい福音のみわざをさまたげるような対抗意識は何もない。彼らは、バプテスマのヨハネのように、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」とのべつたえることが自分の働きであることをみとめる(ヨハネ一ノ二九)。彼らはイエスを高め、そしてイエスとともに人間性が高められる。「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心碎けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかす』」(イザヤ書五七ノ一五)。おのれをおなしくした預言者ヨハネの魂は、神からの光に満たされていた。救い主のみ栄えのためにあかししたとき、彼のことは、キリストご自身がニコデモとの会見のときに語られたことばとほとんどそっくりであった。ヨハネは、「上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。……神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。

神は聖霊を限りなく賜うからである」と言った(ヨハネ三ノ三一、三四)。キリストは、「わたしは……わたし自身の考えではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである」と言うことがおできになった(ヨハネ五ノ三〇)。「あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」とキリストに言われている(ヘブル一ノ九)。天父は、「聖霊を限りなく賜うからである」(ヨハネ三ノ三四)。

キリストに従う者たちもこれと同じである。われわれは、よろこんでおのれをおなしくするときのみ天の光を受けることができる。われわれは、すべての思いをとりこにしてキリストに従わせることに同意しないかぎり、神のご品性を認識することも、信仰によってキリストを受け入れることもできない。これをなす者にはすべて、聖霊が無制限に与えられる。「キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあつて、それに満たされているのである」(「ロサイ」一ノ九、一〇)。

ヨハネの弟子たちは、人々がみなキリストのもとに行っていると告げたが、ヨハネはもつとはっきりした見通しをもって、「だれもそのあかしを受けいれない」と言った(ヨハネ三ノ三二)。キリストを罪からの救い主として信じようとする者はほとんどなかった。しかし「そのあかしを受けいれる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである」。「み子を信じる者は永遠の命をもつ」(ヨハネ三ノ三三、三六)。キリストのバプテスマとヨハネのバプテスマのどちらが罪からきよめるかということは議論の必要がない。魂にいのちを与えるのはキリストの恵みである。キリストを離れては、バプテスマは、他の儀式と同じように、無価値な形式である。「御

子に従わない者は、命にあずかることがない」(ヨハネ三ノ三六)。

キリストの働きの成功を、バプテスマのヨハネはこのように喜んで受け取っていたが、その成功はエルサレムの当局者たちにも伝えられた。祭司たちとラビたちは、人々が会堂を去って荒野へ集まって行くのを見て、ヨハネの勢力をねたんでいた。ところがそれよりもっと大きな力で群衆をひきつけるおかたがここにおられるのだった。イスラエルのこれらの指導者たちは、ヨハネのように、「彼は必ず栄え、わたしは衰える」と言いたくなかった(ヨハネ三ノ三〇)。彼らは、民を自分たちから引き離している働きをやめさせるために、新しい決意をもって立ちあがった。

イエスは、彼らがご自分の弟子たちとヨハネの弟子たちとの間にみぞをつくるためには努力を惜しまないことをご存じだった。イエスは、かつてこの世に与えられた最も偉大な預言者の一人を吹き倒すような嵐が迫っていることを知っておられた。誤解と不和のあらゆる機会を避けようと望んで、キリストは静かにご自分の働きをやめてガリラヤに退かれた。われわれもまた、真理に忠実である一方では、不和と誤解にいたるかも知れないようなことはすべて避けるようにすべきである。なぜなら、そうしたことが起るといっても、その結果は魂が失われることになるからである。われわれは、不和を生ずる恐れのある事情が起ったときにはいつでも、イエスとバプテスマのヨハネの模範にならねばならない。

ヨハネは改革者として先頭に立つように召されていた。そのためにヨハネの弟子たちは、働きの成功が彼の骨折りによってきまるかのように思い、ヨハネが神の働きのつつわにすぎないという事実を見落して、注意を彼に

向ける危険があつた。しかしヨハネの働きは、キリスト教会の土台を置くのに十分ではなかつた。彼が自分の使命を果たした時、彼のあかしでは達成できなかったほかの働きがなされるのであつた。彼の弟子たちはこのことを理解していなかつた。キリストがおいでになつて、この働きに着手されたとき、彼らはねたみと不満を感じた。

いまでもこれと同じ危険がある。神はある働きをさせるためにある人を召される。そしてその人がその働きをなす能力があるところまで仕事を進めると、主はこんどは他の人を用いてその働きをさらに進められる。だがヨハネの弟子たちのように、多くの者は、その働きが最初の働き人によつてきまるかのように思つたのである。注意は神よりも人に向けられ、ねたみがいりこみ、こつして神の働きがさまたげられる。このように不当にほまれを受けた当人は、自信をいなくように誘惑を受ける。彼は自分が神に依存していることをみとめない。人々は、人間の指導を信頼するように教えられ、こつして彼らは誤りに陥り、神から離れさせられる。

神の働きには人間の肖像や刻印はおされない。主は時々、別のうつわを持ってこられるが、その人を通して神のみこころは最もよく成就されるのである。おのれを低くして、バプテスマのヨハネのように、「彼は必ず榮え、わたしは衰える」と心から言うことのできる者はさいわいである(ヨハネ三ノ三〇)。

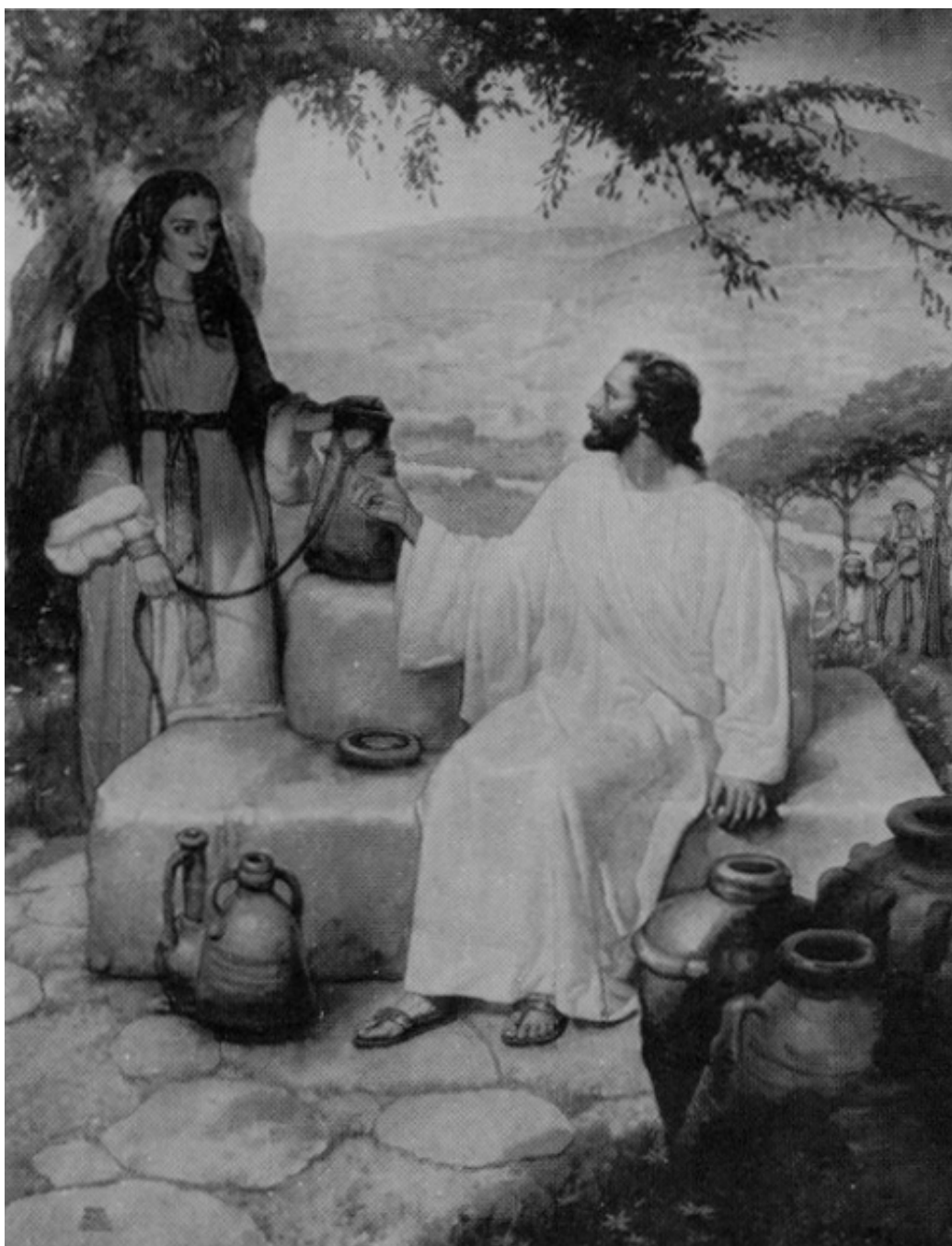
ヤコブの井戸で

本章はヨハネ四ノ一―四二にもとづく

ガリラヤへの途中、イエスはサマリヤをお通りになった。イエスがシケムの美しい谷にお着きになったのは正午だった。この谷の入口に、ヤコブの井戸があった。旅にお疲れになったイエスは、弟子たちが食物を買いに行っている間ここに腰をおろして休まれた。

ユダヤ人とサマリヤ人とは互いに激しい敵意を持ち、できるだけお互いの交渉は一切避けていた。必要な場合にサマリヤ人と取り引きをすることはラビたちから合法的とみなされていたが、彼らとの社交的な交際はすべて非難された。ユダヤ人はサマリヤ人から借りることはもちろん、ひとときのパン、一杯の水でさえもサマリヤ人の親切を受けようとしなかった。弟子たちは、食物を買うのに、ユダヤ人の習慣に従ってふるまい、それ以上深入りしなかった。サマリヤ人にものをたのもうとか、あるいは何かの方法で彼らの益になることをしようなどということは、キリストの弟子たちでさえ思い浮ばなかった。

イエスは、井戸ばたにすわられたとき、飢えとかわきのために弱っておられた。朝からの旅は長かった。そし



イエスは旅の疲れとどのかわきで、ヤコブの井戸のかたわらにすわられた。その時、ひとりの婦人が水くみにやってきた。救い主は彼女に水を求められ、会話をいのちの水というテーマに発展させられた。

ていま真昼の太陽がイエスを照りつけていた。すぐそばにありながら手の届かないつめたい新鮮な水のことを思うと、イエスののかわきは一層つのった。つなもなければ水おけもなく、しかも井戸は深かった。イエスは人間の身であられたので、だれかが水をくみにくるのを待たれた。

サマリヤの女が近づいてきて、イエスがおられるのを意識しない様子で、水さしに水を満たした。彼女が向きをかえて立ち去ろうとしたとき、イエスは水を一杯もらいたいとたのまれた。東洋人には、こんな願いをしりぞける人はいない。東方では、水は「神の賜物」といわれた。のどのかわいた旅人に一杯の水をさし出すことは、神聖な義務と考えられていて、砂漠のアラビヤ人は、その義務を果すためにはまわり道さえするのであった。ユダヤ人とサマリヤ人との間に憎しみがあるために、この女はイエスに親切を申し出ることができなかった。しかし救い主はこの人の心にはいる鍵をみつければよいとしておられたので、神の愛から生じる機知をもって、恩恵を提供するのではなくかえってこれを求められた。親切を提供しようとすれば、ことわられたかもしれない。だが信頼心は信頼心を呼び起す。天の王がこの見捨てられた魂のところにおいでになって、彼女の手の奉仕を求められたのである。大洋を作り、大海を支配し、この地上の泉と水路をお開きになったおかたが、疲れてヤコブの井戸のところで休み、一杯の水をもらうためにさえ見知らぬ人の親切にたよられたのである。

女はイエスがユダヤ人であることに気がついた。彼女は驚きのあまり、イエスの願いをかなえることを忘れて、その理由を知ろうとした。女は、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」と言った(ヨハネ四ノ九)。

イエスは、「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」と答えられた(ヨハネ四ノ一〇)。あなたは、足下のこの井戸から一杯の水をほしいというわたしの小さなたのみをあやしんでいる。もしあなたがわたしにたのんだら、わたしは永遠のいのちという水をあなたに飲ませてあげたのだ。

女はキリストのことを理解しなかったが、その厳肅な意味を感じた。彼女の軽々しい、ひやかすような態度が変化しはじめた。彼女は、イエスが目の前の井戸のことを言われたのだと思って、「主よ、あなたは、くお物をお持ちにならず、その上、井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れるのですか。あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも、偉いかなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが」と言った(ヨハネ四ノ一一、一二)。彼女は、目の前の人を、歩き疲れたほこりだらけの旅人にしか思わなかった。彼女は、心の中で、イエスを尊敬すべき父祖ヤコブとくらべた。彼女の心中には、父祖から与えられたこの井戸にくらべられる井戸はほかにないという感情が宿っていたが、それは当然なことであった。彼女は父祖たちを回顧し、メシヤの来臨を待望していた。ところが父祖たちの望みであったメシヤご自身が彼女のそばにあられるのに、彼女はそのおかたを知らなかった。今日、生きている泉のすぐ近くにいなながら、いのちの泉を求めて遠いところをさがしている魂がどんなに多いことだろう。『あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな』。それは、キリストを引き降ろすことである。また、『だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな』。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。……『言葉はあなたの

近くにある。あなたの口にあり、心にある』。……自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる」(ローマ一〇ノ六―九)。

イエスはご自分のことについてすぐには答えず、厳粛なまじめさで、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と言われた(ヨハネ四ノ一二、一四)。

この世の泉でかわきをいやそうとする者は、飲んでもすぐにまたかわくだけである。どこでも人々は満足していない。彼らは魂の必要を満たすものを求めている。その足りないところを満たすことのできるおかたはひとりしかない。世の必要、「万国の願うところのもの」はキリストである(ハガイ書二ノ七・文語訳)。キリストだけが与えになれる神の恵みこそ、魂をきよめ、清新にし、活気づける生ける水である。

イエスは、一杯のいのちの水を受けるだけで十分であるという意味のことは言われなかった。キリストの愛を味わう者はたえずもっと求める。だがそれ以外のものは何も求めない。彼には世の富も栄えも楽しみも、魅力がない。彼の心は、『もつとあなたを』とたえず叫びつつける。魂に必要をお示しになるおかたが、その飢えとかわきを満たそうと待っておられる。人間的な手段や人間にたよるときにみな失敗する。水槽はからになり、水たまりはかわく。だがあがない主は尽きない泉である。飲んでも飲んでも新しい水がいつでもわいている。キリストを内住させている人は、自分のうちに祝福の泉、永遠のいのちに至る水のわきあがる泉を持っている。この泉から、彼は自分のすべての必要を満たすのに十分な力と恵みとをくむことができる。

イエスが生ける水のことを話されると、女は驚きのまなざしでイエスを見た。イエスは彼女の興味を起し、ご自分が話された賜物をほしいという気持ちをめざめさせられたのだった。彼女は、イエスが言われたのはヤコブの井戸の水のことではないことに気がついた。この井戸の水なら、いつでもくんで飲み、そしてまたのどがかわくからである。そこで彼女は「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしにください」と言った(ヨハネ四ノ一五)。

するとイエスは、突然に話題を変えられた。イエスが与えようと望んでおられる賜物をこの魂が受けることができる前に、彼女は自分の罪と救い主をみつめねばならない。イエスは、「あなたの夫を呼びに行つて、ここに連れてきなさい」と言われる。彼女は、「わたしには夫はありません」と答えた。こうして彼女はその方面の質問を一切封じようとした。だが救い主は続けて、「夫がないと言つたのは、もつともだ。あなたには五人の夫があつたが、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」と言われた(ヨハネ四ノ一七、一八)。

これを聞いた女はふるえた。神秘の手が彼女の経歴のページを開き、永遠にかくしておきたいと望んでいたことを明るみに出そうとしていた。自分の一生の秘密を読むことができるとは一体このおかたはどなただろう。彼女の心には、現在かくされていることがすべて明らかにされる来世すなわち未来のさばきについての考えが浮んだ。その光の中に、良心がめざめた。

彼女は何もこばむことができなかった。だがこの面白くない問題についてふれるのをいっさい避けようとした。深い尊敬の念をもって、彼女は、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます」と言った(ヨハネ四ノ一九)。それ

から、罪の自覚をうち消そうと望んで、彼女は宗教上の論争になっている問題を持ち出した。もしこの人が預言者なら、この人は長年論議されてきたこの問題について教えることができるにちがいない。

イエスはこの女が話題を自分の好む方向に持って行こうとするのを忍耐強くおゆるしになった。そうしている間に、イエスは彼女の心に真理をもう一度うつける機会を注意深く待たれた。女は「わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」と言った(ヨハネ四ノ二〇)。ちょうど目に見えるところにゲリジム山があった。その神殿は破壊されて、祭壇だけが残っていた。礼拝の場所は、ユダヤ人とサマリヤ人との間の論争のまとなっていた。サマリヤ人の先祖の一部はかつてイスラエルに属していたが、罪のために、主は彼らが偶像礼拝の国民に征服されるのをおゆるしになった。幾世代もの間彼らは偶像礼拝者たちにまじったので、後者の宗教が彼ら自身の宗教をだんだん墮落させた。なるほど彼らは、自分たちの偶像は宇宙の支配者であられる生ける神を思い出すためのものにすぎないと主張した。だがそれにもかかわらず、民はきざんだ像をあがめるようになった。

エズラの時代にエルサレムの神殿が再建されたとき、サマリヤ人はユダヤ人といっしょに建築にあたりたいと望んだ。この特権は拒否され、サマリヤ人とユダヤ人との間にはげしい憎しみが生じた。サマリヤ人はユダヤ人に対抗してゲリジム山に神殿を建てた。ここで彼らはモーセの儀式に従って礼拝したが、一方また偶像礼拝もまったく捨ててはいなかった。ところが災難が起って、神殿は敵に破壊され、彼らはのろわれているようにみえた。それでもなお彼らは礼拝について自分たちの伝統と形式とを固守した。彼らはエルサレムの神殿を神の家

としてみとめようとせず、またユダヤ人の宗教が自分たちの宗教にまさっているとみとめようとしなかった。

女に答えてイエスは、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからである」と言われた(ヨハネ四ノ二一、二二)。イエスはサマリヤ人に対してユダヤ人の偏見を持っておられないことをすでにお示しになった。いま彼はユダヤ人に対するサマリヤ人の偏見をうち破ろうとされた。イエスは、サマリヤ人の信仰が偶像礼拝によって墮落したことを指摘される一方では、あがないの大真理がユダヤ人に委託され、ユダヤ人の中からメシヤが現われることを言明された。聖書を通して、彼らは神のご品性と神の統治の原則とについてはつきり示されていた。イエスはご自分を、神がご自身についての知識をお与えになったユダヤ人と同類におかれた。

イエスは、聞き手の思いを、形式や儀式の問題、そしてまた論争の問題から高めようと望んで、こう言われた、「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもつて父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもつて礼拝すべきである」(ヨハネ四ノ二三、二四)。

イエスがニコデモに、「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」と言われたときに示されたのと同じ真理がここに宣言されている(ヨハネ三ノ三)。人は、聖なる山や聖なる宮を求めることによって天とのまじわりにはいれるのではない。宗教は外面的な形式や儀式に限定されるのではない。神から出ている宗教

だけが神へいたる宗教である。神に正しく仕えるためには、神のみたまによって生れなければならない。みたまは心をきよめ、思いを新たにし、神を知り愛する新しい能力をわれわれに与える。それは神のすべてのご要求によろこんで従う心をわれわれに与える。これが真の礼拝である。それは聖霊の働きの実である。みたまによって、すべての真実な祈りはことばとなり、このような祈りは神に受け入れられる。魂が神を追い求めるところにはどこでもみたまの働きがあらわれ、神はその魂にご自身をあらわされる。神はこのような礼拝者を求めておられる。神は彼らを受け入れて、ご自分の息子娘にしようと待っておられる。

女はイエスとお話して、そのみことばに感動した。彼女はサマリヤ人の祭司からもユダヤ人からもこんな意見を聞いたことがなかった。過去の生活が目の前にひろげられたとき、彼女は自分の大きな必要に気づいていた。彼女は自分の魂がかわいているのをみとめた。そのかわきは、スカルの井戸の水では決して満足させることができなかった。これまで接したもので、彼女の心をもっと高い必要にこれほどめざめさせたものは何もなかった。イエスは、彼女の生活の秘密を見抜いたことを彼女に自覚させられた。それでも彼女は、イエスが友として自分をあわれみ、愛してくださることを感じた。純潔なイエスの前にいることによって彼女は自分の罪を責められたが、イエスは譴責のことばをひとこともお語りにならず、ただ魂を新たにすることのできる恵みについて語られた。彼女はイエスがどういうおかたであるかについて、いくらか確信を持ちはじめた。このおかたが長い間待望されていたメシヤではないだろうかという疑問が心の中に起った。彼女は、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせ

て下さるでしょう」とイエスに言った。イエスは、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」と答えられた(ヨハネ四ノ二五、二六)。

女は、このことばをきくと、心の中に信仰がわき起った。彼女は天来の教師イエスの口から出たこのすばらしい宣言を受け入れた。

この女はものごとを感知する心を持っていた。彼女は最もとうとい啓示を受け入れる用意ができていた。それは彼女が聖書に興味を持ち、もっと光を受けられるように聖霊が彼女の心を準備していたからであつた。彼女は、「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであらう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」との旧約の約束を学んでいた(申命記一八ノ一五)。彼女はこの預言をさとりたいと望んだ。光はすでに彼女の心にさし込みはじめていた。いのちの水、すなわちキリストがすべてのかわける魂に与えられる霊的生命は、彼女の心のうちにめばえ始めていた。主のみたまが彼女の上に働いていた。

キリストがこの女にはつきり語られたことばは、自分自身を義とするユダヤ人に向かつては語るこののできなかったことばだった。キリストは、ユダヤ人に向かつて語られるときにはずっとひかえ目だった。ユダヤ人に向かつては言われたことのないこと、そしてあとで弟子たちに秘密にするように命じられたことが、彼女にうち明けられた。イエスは彼女がこの知識を利用して、ほかの人たちにイエスの恵みをわけ与えることをご存じだった。弟子たちは、使いから帰ってきたとき、主が女と話しておられるのを見て驚いた。主はご自分が望まれた清新

な一杯の水をまだ飲んでおられず、また弟子たちが持ってきた食物を食べるために話をやめようともされなかった。女が立ち去ると、弟子たちはイエスに食べてくださるようにと願った。彼らはイエスが深い瞑想のうちにあられるかのように、だまって考えこんでおられるのを見た。イエスのお顔は光に輝いていたので、彼らはイエスの天とのまじわりをさまたげることを恐れた。しかし彼らはイエスが疲れて弱っておられることを知っていたので、イエスの肉体的必要を気づかせる義務があると思った。イエスは彼らのやさしい関心をみとめられたが、「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」と言われた(ヨハネ四ノ三二)。

弟子たちは、だれが主に食物を持ってきたのだろうとあやしんだ。だがイエスは、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」と説明された(ヨハネ四ノ三四)。イエスは、ご自分のことばによって女の良心がめざめたことをよろこばれた。イエスは、女がいのちの水を飲むのをごらんになって、ご自身の飢えとかわきが満足させられた。イエスが天を去って、なしとげるためにこられたその使命の達成が救い主の働きを力づけ、人間の必要を超越させた。真理に飢えかわいている魂に奉仕することは、イエスにとって飲んだり食べたりするよりうれしいことだった。それはイエスを慰めるものであり、元気づけるものであった。博愛がイエスの魂のいのちであった。

あがない主は人々にみとめられることにかわいておられる。主はご自分の血で買われた人々の同情と愛に飢えておられる。主は、言い表わしようのない願いをもって、彼らがみもとにきていのちをいただくことを望んでおられる。小さな子供が母親をみとめてにつこり笑うのは知恵のめばえを告げている。母親がその表現を注意深く

見守っているように、キリストは、魂のうちに霊的な生命が始まった証拠である感謝にみちた愛が表現されるのを見守ってあられる。

女はキリストのみことばに聞き入っている時よろこびに満たされた。そのすばらしい啓示はほとんど圧倒的であつた。彼女は水がめを残して、イエスのことばをほかの人たちに伝えるために町へもどつた。イエスはなぜ彼女が立ち去つたかをご存じだつた。生ける水を手に入れることが彼女の魂の熱心な願いであつた。彼女は井戸へきた用事を忘れ、イエスのかわきをいやしてさしあげるつもりだつたことも忘れた。よろこびにあふれる心をもつて、彼女は自分が受けたとうとい光をほかの人たちに与えるために道を急いだ。

彼女は町の人たちに、「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらん下さい」と言つた。「もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。彼女のことは人々の心を動かした。彼女の顔には新しい表情があらわれ、全体の様子に変化がみられた。彼らはイエスを見たいという興味をそそられた。そこで「人々は町を出て、ぞくぞくとイエスのところへ行つた」(ヨハネ四ノ二九、三〇)。

イエスは、まだ井戸ばたにすわつておられるとき、緑の若葉に黄金の日光を浴びて目の前にひろがっている麦畑をごらんになった。その光景を弟子たちに指さして見せながら、主はそれを一つの象徴としてお用いになった。「あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている」(ヨハネ四ノ三五)。語りながらイエスは、井戸へやってくる人々の群れに目をとめられた。麦の収穫時までには四か月あるが、ここにすでに刈り

手を待っている収穫があった。

イエスは言われた、「刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共に喜ぶためである。そこで、『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととなる」(ヨハネ四ノ三六、三七)。ここにキリストは、福音を受け入れる者が当然神のためにしなければならない聖なる奉仕を指摘してられる。彼らは神の生ける代表者となるのである。神は彼らの個人的な奉仕を求められる。われわれはまこうが刈り入れようが、神のために働いているのである。一人が種をまき、他の者が収穫を集める。そしてまく者も刈る者も賃金をもらい、彼らは共にその働きの報酬をよろこぶのである。

イエスは弟子たちに、「わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたがそのために労苦しなかったものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」と言われた(ヨハネ四ノ三八)。救い主はここでペンテコステの日の大収穫を予見しておられた。弟子たちはこれを自分たちの努力の結果とみなすべきではなかった。彼らは他の人々の働きに加わっているものであった。アダムが墮落してから後ずっとキリストは人の心の中にまくために、選ばれたしもべたちにみことばの種を託してこられた。そして目に見えない作用、しかも全能の力が、収穫を生じさせるために、無言のうちに効果的に働いてきた。真理の種に活力と栄養とを与えるために、神の恵みという露と雨と日光が与えられてきた。キリストはご自身の血でその種に水をそそぐとしておられた。キリストの弟子たちには神と共に働く者となる特権があった。彼らはキリストと共に働く者であり、また古代の聖人たちの共労者であった。ペンテコステの聖霊の降下によって、一日に幾千

の者が改心するのであった。これがキリストの種まきの結果であり、キリストの働きの収穫であった。

井戸のところで女に話されたことばによって、よい種がまかれたが、何とまあ早く収穫が与えられたことだろう。サマリヤ人はやってきてイエスのみことばを聞き、イエスを信じた。彼らは井戸のところにあられるイエスのまわりにおしよせ、イエスを質問攻めにして、これまではつきりわからなかった多くのことについてイエスの説明を熱心に聞いた。聞くにつれて、彼らの疑問が晴れはじめた。彼らはちょうど非常な暗やみの中にあって突然ひとすじの光をさがしあて、ついに真昼に出会った人々のようなだった。しかし彼らはこの短い会見に満足しなかった。彼らはもっと聞きたがり、また友人たちにもこのすばらしい教師の話をきかせたがった。人々はイエスを自分たちの町に招き、彼らのところにとどまってくださるようになつたのだ。二日の間イエスはサマリヤにとどまられたが、さらに多くの人々がイエスを信じた。

パリサイ人はイエスの単純さを軽蔑した。彼らはイエスの奇跡を無視し、イエスが神のみ子であるという証拠を要求した。しかしサマリヤ人はしるしを求めなかった。イエスは、井戸ばたで女に彼女の生活の秘密をあらわされた以外には、サマリヤ人の中で奇跡を行われなかった。それでも多くの者がイエスを信じた。この新しいよろこびの中で、彼らは女に、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」と言った(ヨハネ四ノ四二)。

サマリヤ人は、メシヤがユダヤ人の救い主としてばかりでなく、世の救い主としておいでになることを信じた。聖霊は、モーセを通して、イエスを、神からつかわされた預言者と予告していた。ヤコブを通して民はイエスの

もとに集められることが告げられ、またアブラハムを通して、地の諸国民がイエスのうちにあって祝福されるということが告げられていた。サマリヤの人々はメシヤに対する彼らの信仰をこうした聖書のみことばに置いた。ユダヤ人が後期の預言者たちを誤って解釈し、キリスト再臨の栄光を初臨にあてはめていたので、サマリヤ人はモーセを通して与えられたもの以外は全部聖書をすてていた。しかし救い主がそうしたまちがった解釈を一掃されたので、多くの人々が後期の預言と、神のみ国についてのキリストご自身のみことばとを信じた。

イエスはユダヤ人と異邦人との間をへだてている壁をとりこわし、世界に救いをのべ伝え始めておられた。キリストはユダヤ人であられたが、自由にサマリヤ人とまじわり、ご自分の国民のパリサイ的な習慣を無視された。ユダヤ人の偏見に直面しながら、主はこの軽蔑された民のもてなしを受けられた。主はサマリヤ人の屋根の下に眠り、彼らと同じテーブルで食事をし、彼らの手で料理されて食卓に出された食物を食べ、彼らの町の通りで教え、できるだけの親切と礼儀をつくして彼らに應對された。

エルサレムの宮は、低い壁によって、外庭が神聖な建物のすべての部分から仕切られていた。この壁に各国語で文字がぎざまれている、ユダヤ人以外の者はこの境界内には入ることをゆるさないということが書かれていた。もし異邦人があえて境内の中にはいりこむようなことがあれば、彼は宮をけがしたことになる、その罰としてのちをとられるのだった。しかし宮とその儀式の創始者であられるイエスは、人間的な同情というきずなで異邦人をもとにひきよせ、またユダヤ人のこぼんだ救いはイエスのとうとい恵みによって彼らにもたらされた。

イエスがサマリヤにとどまられたことは、まだユダヤ人的な頑迷さの影響下にあった弟子たちに祝福となるよ

うにくわだてられたのであった。彼らは、自分自身の国に忠誠であるためにはサマリヤ人に対して敵意をもたねばならないと考えていた。彼らはイエスの行為に驚いた。彼らはイエスの模範に従うことを拒絶することができなかった。サマリヤにいた二日間、イエスに対する忠誠心から、彼らの偏見を抑えていたが、心の中にはやはりうちとけないものがあつた。彼らの軽蔑心と憎悪心はあわれみと同情に代えられねばならないことを彼らが学ぶのに時間がかかった。しかし主の昇天後、イエスの教訓は新しい意味をもって彼らの胸によりがえつた。聖霊の降下後、彼らはこの軽蔑された他国人に対する救い主の顔つき、ことば、尊敬のこもったやさしい態度を思い浮べた。ペテロはサマリヤに説教に行つたとき、その働きに主と同じ精神をそそいだ。ヨハネは、エペソとスミルナに招かれたとき、シケムの経験を思い出し、天来の教師イエスが彼らの出会わねばならない困難を予見して、ご自分の模範によって助けをお与えになったことに対する感謝の思いに満たされた。

救い主はサマリヤの女にいのちの水を提供された時と同じ働きを今もなおつづけておられる。キリストの弟子と自称する人たちが、社会から見捨てられた人々をさげすみ、いやがるようなことがあるかもしれない。だが生れや国籍による事情も、社会的な身分も、イエスの愛を人の子らから離れさせることはできない。どんなに罪深くあろうと、ひとりびとりの魂に向かつて、もしわたしに求めたらいのちの水をあげたのにと、イエスは言われる。

福音の招きは、狭い範囲に限定され、相手が受け入れたらこちらの名誉になるような少数のえらばれた人たちだけに与えられるのではない。福音はすべての人に与えられるのである。真理を受け入れるように心の開かれているところならどこでも、キリストは彼らを教えようとしておられる。主は彼らに天父をあらわし、人の心を

お読みになる神に受け入れられる礼拝をお示しになる。こういう人々には、イエスは譬をお用いにならない。イエスは、彼らに向かつて、井戸ばたの女にお語りになったように「あなたと話をしているこのわたしが、それである」と言われる(ヨハネ四ノ二六)。

イエスがヤコブの井戸のそばに腰をおろして休まれた時、彼はこれまで伝道してほとんど実を結んでいないユダヤからおいでになった。彼は祭司たちとラビたちからしりぞけられ、イエスの弟子であることを告白している人たちでさえイエスの神としての性格を認識していなかった。イエスは疲れ、弱っておられた。それでも彼は、他国人であり、イスラエルの異邦人であり、あきらかに罪のうちに生活している一人の女に語りかける機会をのがされなかった。

救い主は会衆が集まるのを待たれなかった。たびたび主はご自分のまわりに集まっているほんの少数の人々に教えはじめられたが、通りかかった人々が一人二人と立ちどまって聞き入り、ついには群衆がこの天から送られた教師イエスを通して、驚嘆と尊敬の念をもって神のみことばを聞くのだった。キリストの働き人は、少数の聴衆に対しては大きな会衆に対するのと同じ熱心さでしゃべることができないと思ってはならない。説教を聞いているのはたった一人であるかもしれないが、しかしその影響がどれほど遠大なものであるかをだれが知ることができる。救い主がサマリヤの女のために時間を費されたことは、弟子たちにとってさえ小さなことに思われた。しかしイエスは、王や議官や大祭司たちに対するよりもっと熱心に、雄弁に論じられた。イエスがその女にお与えになった教訓は、地のはてにいたるまでくりかえされた。

サマリヤの女は、このおかたが救い主であるということがわかるとすぐにほかの人たちをみもとにつれてきた。彼女は、イエスご自身の弟子たちよりも有能な伝道者であることがわかった。弟子たちはサマリヤが有望な伝道地であるというしるしを何も見なかった。彼らの思いは、将来なされる大きな働きに集中されていた。自分たちのすぐまわりに集めるべき収穫があることに彼らは気がついていなかった。ところが彼らの軽蔑していた女によって、町じゅうの人々が救い主のみことを聞きにつれてこられた。彼女は光をすぐに自分の国民に伝えた。

この女は、キリストを信じる実際的な信仰の働きを表わしている。真の弟子はみな伝道者として神の国に生れているのである。生ける水を飲む者はいのちの泉となる。受ける者が与える者となる。魂のうちにあるキリストの恵みは、砂漠の中の泉のようなもので、それはわきあがってすべての人を元気づけ、いまにも死にそうになっている人々にいのちの水を飲みたいと熱望させるのである。

第 20 章

「あなたがたはしるしと奇跡を見ないかぎり」

本章はヨハネ四ノ四三―五四にもとづく

過越節から帰ってきたガリラヤ人たちは、イエスのふしぎなみわざについて知らせを持ってきた。イエスの行動に対するエルサレムの高官たちの意見が決定的となったため、イエスはガリラヤに道を求められた。民の中には宮の悪用と祭司たちの貪欲と尊大さを嘆く者が多かった。彼らは、役人たちを追っばらったこの人が、希望の救世主であるようにと望んだ。そしていま彼らの最も輝かしい予想を裏づけるような知らせが伝わった。この預言者が自らメシヤであると宣言したというのだった。

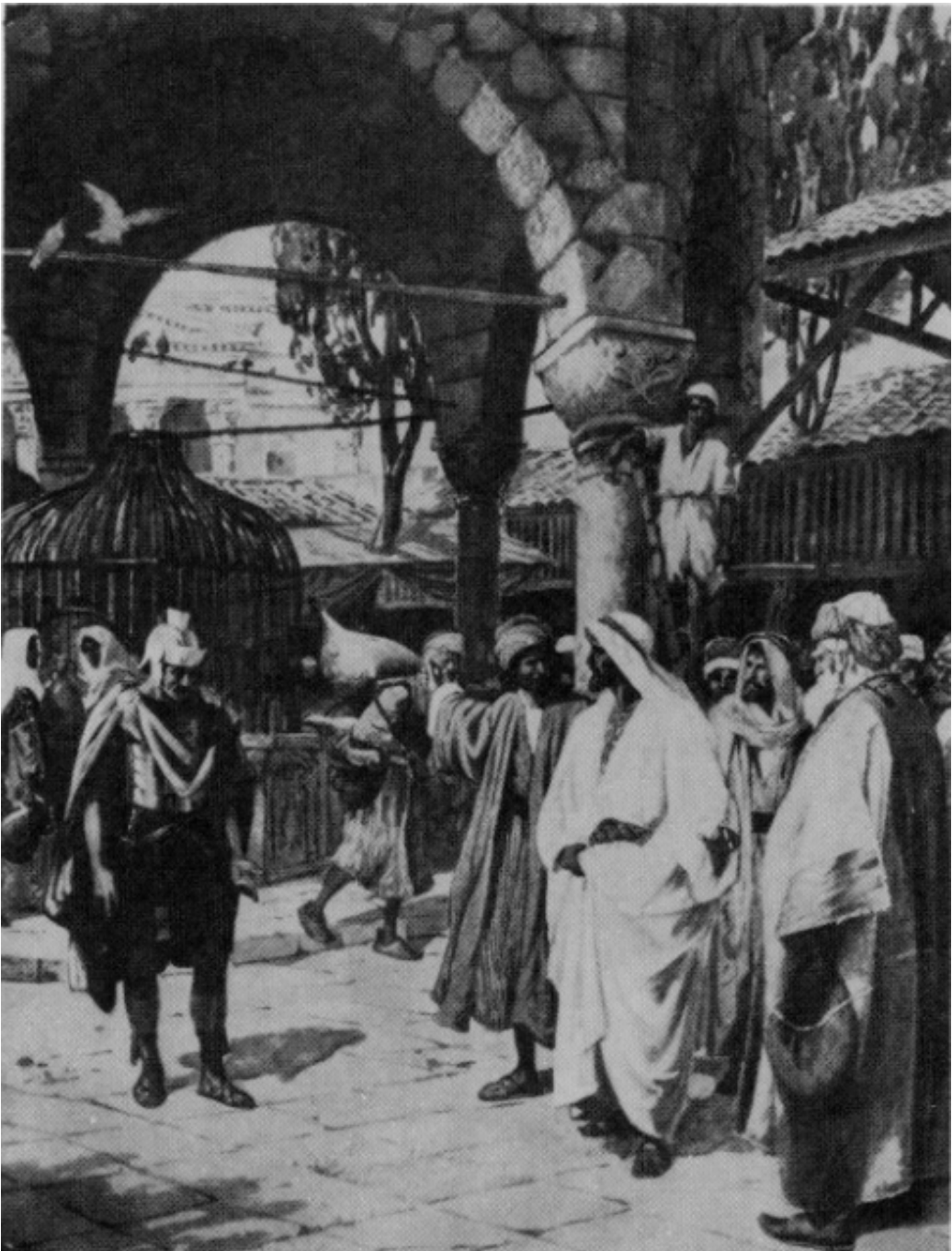
しかしナザレの人たちは、イエスを信じなかった。そのために、イエスはカナへの途中ナザレにおいでにならなかった。救い主は弟子たちに、預言者は自分の故郷ではとうとばれないと言明された。人間は自分の理解できる範囲だけしか人物の評価ができない。世俗的で狭量な心を持った人たちは、キリストの貧しい生れや粗末な衣服や日々の骨折り仕事によってキリストを判断した。彼らは罪のけがれのないキリストの純潔な精神を評価することができなかった。

キリストがカナへ帰られたという知らせは、ガリラヤじゅうにひろがり、困り苦しんでいる人たちに望みを与えた。カペナウムで、王に仕えている役人である、あるユダヤ人貴族がその知らせに注意をひかれた。この役人の息子が不治と思われる病氣にかかっていた。医者たちはその子が死ぬものとあきらめていた。だが父親はイエスのことを耳にしたとき、イエスの助けを求めようと決心した。子供は非常に衰弱していて、父親が帰って来るまでのちはもつまいと心配されたが、父親は病状をイエスに訴えねばならないと思った。彼は父親の祈りが大医者イエスの同情をひきおこすようにと望んだ。

カナに着いてみると、群衆がイエスを取りまいていた。心配な気持で、彼は人々をおしわけて救い主の前へ進んだ。しかしそこに、粗末な衣服をまとい、旅のほこりにまみれて疲れた様子の人だけしか見なかったとき、彼の信仰は動揺した。果してこのおかたが自分をお願いしようと思つてやってきたことをなさることができぬだろうか。彼は疑った。しかしイエスと面会することができると、彼は自分の用事を話し、救い主に自分の家までいっしょにおいでいただきたいと願った。ところが彼の悲しみはすでにイエスに知られていた。この役人が家を出る前から、救い主は彼の苦悩を見ておられたのだった。

しかしイエスは、この父親がイエスに対する信仰について、自分自身の心の中に条件をもっていることもご存じだった。自分の願いがかなえられなければ、彼はイエスをメシヤとして信じないであろう。役人がどっつかずの思いに苦しめられながら待っていると、イエスは、「あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう」と言われた(ヨハネ四ノ四八)。

第 20 章 「あなたがたはしるしと奇跡を見ないかぎり」



ひとりの役人がイエスのところに息子の病気をなおしていただきたいとたのみにきた。この軍人の信仰は大医師キリストの心をうち、息子はいやされた。

イエスがキリストであるというあらゆる証拠があるにもかかわらず、この嘆願者は、自分の願いがきかれるということに条件にして、イエスを信じようと決心していた。救い主はこの疑いの念のまじった不信を、奇跡やしるしを求めなかったサマリヤ人の単純な信仰と比較された。イエスの神性についての証拠をたえず示しているそのみことばには、サマリヤ人の心を動かし、確信させる力があつた。キリストは、神のみことばを託されているご自分の民が、み子を通して彼らに語られる神の声をきかないことを悲しまれた。

しかしこの役人はある程度の信仰を持っていた。なぜなら彼は、あらゆる祝福の中で最もとつと思えるものをたのみにやってきたからである。イエスはもつと大きな賜物を与えようとしておられた。イエスは子供の病気をなおすばかりでなく、この役人とその家族を救いの祝福にあずからせ、まもなくイエスご自身の働きの場所となるうとしていたカペナウムに光をともそうと望まれた。しかしこの役人は、キリストの恵みを望む前に自分の必要をみつめなければならぬ。この宮廷の役人はユダヤ国民の多くの者を代表していた。彼らは利己的な動機からイエスに関心を持っていた。彼らはイエスの力によって何か特別な利益を受けようと望み、その信仰はこの世の恩恵を受けることにかかれていた。しかし彼らは自分たちの霊的な病気について無知であり、神の恵みの必要に気がつかなかった。

この役人に対する救い主のみことばは、光のひらめきのように、彼の心を明るみに出した。彼はイエスを求めている自分の動機が利己的であることがわかった。彼は動揺している自分の信仰の本当の姿を見た。彼は自分の疑いのために息子のいのちが失われるかもしれないことをみとめて深い心配を感じた。彼は自分がいま、人の思

いを読むことがおできになり、どんなことでもおできになるおかたの前にいることを知った。苦悩に満ちた嘆願をもって、彼は「主よ、どうぞ、子供が死なないうちにきて下さい」と叫んだ(ヨハネ四ノ四九)。彼は、ヤコブが天使と格闘して、「わたしを祝福してくださいさらないなら、あなたを去らせません」と叫んだ時のように、信仰をもってキリストにすがりついた(創世記三二ノ二六)。

ヤコブのように、彼は勝利した。救い主は、大きな必要を訴えながらすがりつく魂をしりぞけることがおできにならない。イエスは、「お帰りなさい。あなたのおすこは助かるのだ」と言われた(ヨハネ四ノ五〇)。役人はこれまでかつて経験したことのない平安とよろこびとをもって救い主の前から立ち去った。彼は息子の病気がなおることを信じたばかりでなく、強い確信をもってキリストを救い主として信頼した。

同じ時刻に、カペナウムの家では、死にかけている子供を見守っていた者たちが、急にふしぎな変化を目に見た。死の影が病人の顔から消えた。発熱は、回復しつつある健康のおだやかな顔色にかわった。くもっていた目は理性に輝き、衰弱していたからだに力がよみがえった。病気の面影は子供のどこにもみられなくなった。燃えていた肉体はやわらかくうるおい、子供は静かな眠りに落ちた。熱は日盛りになくなっていた。家族の者たちは驚き、そのよろこびは大きかった。

カナはカペナウムからそんなに遠いところではなく、この役人がイエスと面会したあと、その夜には帰り着けるところだった。だが彼は家路を急がなかった。彼がカペナウムに到着したのは翌朝になってからだった。それは何といううれしい帰宅だったことだろう。イエスに会いに行く時には、彼の心は悲しみで重かった。彼には太

陽の光が残酷に思え、小鳥の鳴き声が嘲笑にきこえた。いまは何という気持のちがいだろう。自然界のすべてが新しい様相を帯びていた。彼は新しい目で見ると、早朝の静けさの中を旅していると、自然の万物が自分といっしょに神を賛美しているようにみえる。彼が自分の家からまだかなり離れたところまで来ると、しもべたちが迎えに出てきている。彼らは主人がきつと心配しているにちがいないから、安心させようと思っている。ところが彼は、しもべたちの知らせをきいても別に驚きをみせず、彼らにはわからない深い関心をもって、子供の病気はいつからよくなりはじめたかとたずねる。彼らは、「きのうの午後一時に熱が引きました」と答える(ヨハネ四ノ五二)。「あなたのむすこは助かるのだ」との保証を、父親が信仰をもって把握した瞬間に、神の愛が死にかけていた子供にふれたのだった。

父親は息子に会いに急ぐ。彼は息子を死からよみがえった者のように胸にだきしめ、このふしぎな回復について何度も何度も神に感謝する。この役人はキリストについてもっと知りたいと熱望した。のちにイエスの説教を聞いて、彼と家族の全部が弟子となった。彼らの苦しみはきよめられて家族全体の改宗となった。この奇跡の知らせはひろがった。そしてキリストの多くの偉大な働きがなされたカペナウムで、キリストがご自分で伝道をされる道が備えられた。

カペナウムで役人を祝福されたおかたは同じようにわれわれを祝福しようと望んでおられる。だがこの苦悩していた父親のように、われわれはしばしば何かこの世の利益を望んでイエスを求める。そして自分の願いがかなえられたら、イエスの愛に信頼しようとする。救い主はわれわれが求めるよりももっと大きな祝福を与えようと

望んでおられる。イエスは、われわれ自身の心の悪と、イエスの恵みの深い必要とを示すために、われわれの願いに対する答えを遅らせられる。イエスはわれわれが、利己的な動機からイエスを求めることをやめるように望んでおられる。自分の無力と大きな必要を告白して、われわれはイエスの愛に自分自身をまったくゆだねるのである。

この役人は、信じる前に自分の祈りの成就を**目に見たい**と望んだ。しかし彼は、彼のたのみがきかれて祝福が与えられたというイエスのみことばを信じなければならなかった。この教訓をわれわれもまた学ばねばならない。われわれは、神がわれわれの願いをきかれるのを見たり感じたりするから、信じるのではない。われわれは、神の約束に信頼するのである。信仰をもって神のみもとに行くとき、願いごとはすべて神のみ心にとめられる。神の祝福を求めたら、それを受けることを信じ、そしてそれを**受けた**ことを感謝すべきである。それからわれわれは、最も必要な時にその祝福が実現されることを確信して、自分の義務をつくすのである。こうすることをわれわれが学んだとき、われわれは祈りが答えられることを知る。神はわれわれのために、「その栄光の富にしたがい」「神の力強い活動によって」「はるかに越えて」なしてくださるのである（エペソ三ノ一六、一ノ一九、三ノ二〇）。

第 21 章

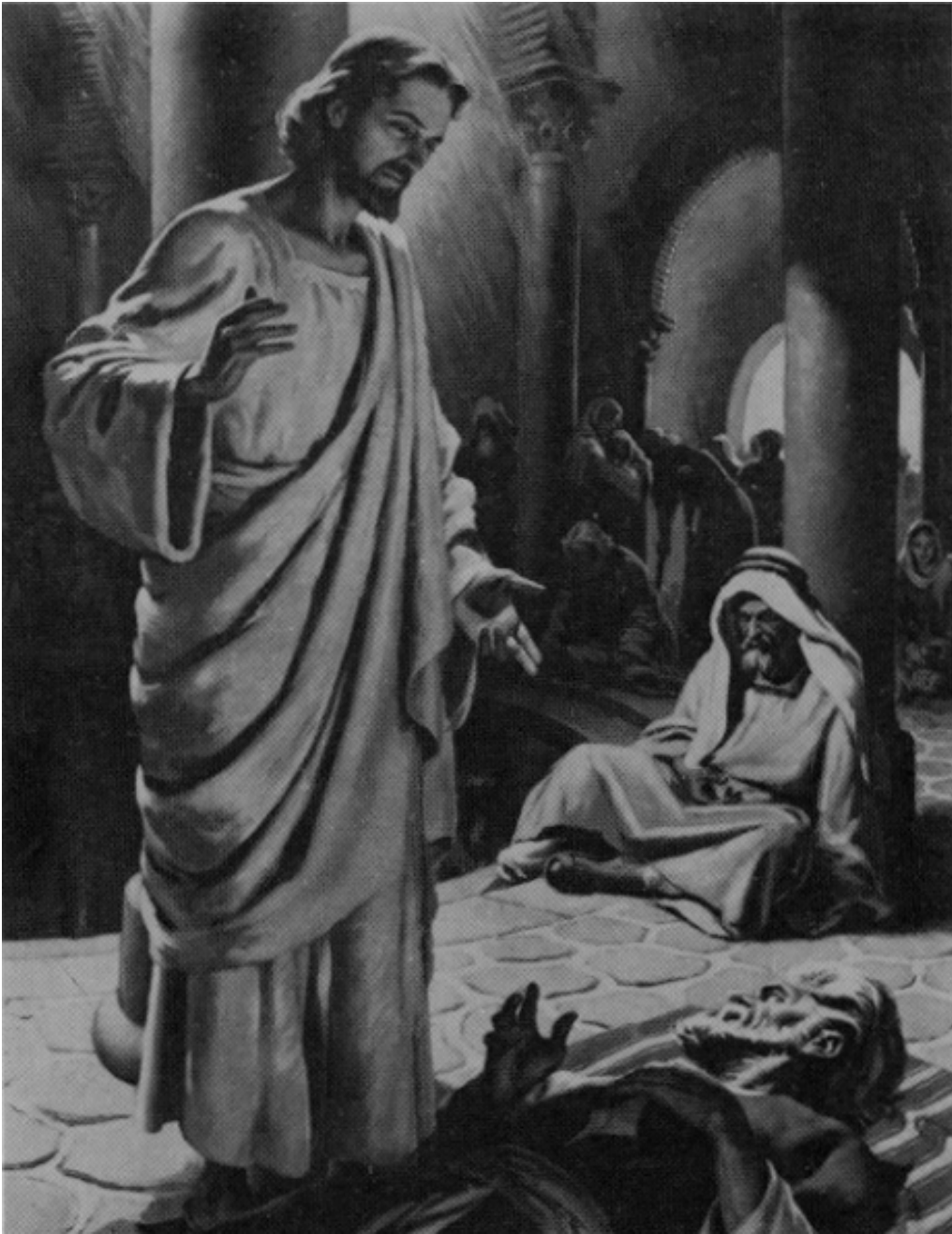
ベテスダとサンゴドリン

本章はヨハネ五章にもとづく

「エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があつた。そこには五つの廊があつた。その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。〔彼らは水の動くのを待っていたのである〕（ヨハネ五ノ二、三）。

ある時期になると、この池の水面が動いた。一般の人たちは、これは超自然の力の結果で、池の水が動いてから、まっ先に水にとび込む者は、だれでも、どんな病氣を持っていたも、いやされると信じていた。何百人という病人たちがこの場所へやってきた。しかし水が動くと、群衆が多いために、人々は、自分より弱い男や女や子供たちを足の下にふみつけて、突進した。池に近づくことができない者が多かつた。うまく池にたどりつくことができた者でも、そのふちで死ぬ者が多かつた。病人たちを昼の暑さと夜の寒さから守るために、その場所には屋根ができていた。病人の中には夜をこの廊の中で過ごし、むなしい回復の望みをもって、来る日も来る日も池のふちまではって行く人たちがいた。

第 21 章 ベテスダとサンヒドリン



イエスは、三十八年のあいだ病気に悩んで、ベテスダの池のそばに横たわっている人をごらんになった。主が愛情をこめて、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と言われると、この人はすぐにいやされた。

イエスはまたエルサレムにきておられた。瞑想と祈りのうちにあられるかのように、イエスはひとり歩いて、この池のところへおいでになった。イエスはかわいそうな病人たちが唯一のいやしの機会と考えているものを守っているのをごらんになった。イエスは、ご自分のいやしの力を働かせて、病人をひとり残らず完全なからだにしてやりたいと熱望された。しかしその日は安息日だった。多くの人々が宮へ礼拝に行くところだったので、そのようなやしの行為がユダヤ人の偏見を刺激し、ご自分の働きが中断されることを、イエスはご存じだった。しかし救い主は特にかわいそうなひとりの病人をごらんになった。それは三十八年間もひとりで動けない不具者だった。彼の病気は大部分自分自身の罪の結果であって、神からの刑罰とみなされていた。友だちもなくひとりぼっちで、この病人は、自分が神の恵みからしめだされていると思いながら、悲惨な長い年月を送ってきた。水が動くころだと思われる時期になると、彼の無力を気の毒に思っている人たちが、彼を廊のところに運んで行ってやるのだった。だがちょうどよい時に、彼を中に入れてくれる人はいなかった。彼は水面が波立っているのを見たが、決して池のふちから先へ進むことができなかった。彼より丈夫な人たちが、先に飛びこんでしまうのであった。彼は、われ勝ちに先を争う群衆とうまく競争することができなかった。一つの目的に向かっての根気のよい努力と、心配と、たえまない失望とのために、彼の残った力は急速に衰えて行った。

この病人は、むしろの上に横たわって、時々頭をあげては池をみつめていた。その時、やさしい、同情にあふれた顔が彼をのぞきこんで、「なりたいのか」とのことばが、彼の注意をひいた(ヨハネ五ノ六)。望みが彼の心にわき起った。何とか助けが得られると彼は感じた。だが燃えあがった望みの焰はすぐ消えた。彼はこれまで

何べんも池にたどりつこうと試みたことを思い出した。そしてもうこんど水が動くまで生きられる見込みはほとんどないのであった。彼は弱々しく顔をそむけて、「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」と言った(ヨハネ五ノ七)。

イエスは、この病人に、わたしを信じる信仰を働かせなさいとは要求なさらない。主はただ「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と言われる(ヨハネ五ノ八)。しかしこの男の信仰はそのことばをしっかりとらえる。どの神経もどの筋肉も新しい生命に躍動し、不具の四肢に健康な動きがあらわれる。何にもたずねないで、彼はキリストのご命令に自分の意思を従わせる。するとすべての筋肉が彼の意思に応ずる。立ちあがってみて、彼は自分が動ける人間になっていることを知る。

イエスは彼に神の助けについて何の保証もお与えになっていなかった。その男はちよつと考えてみて疑い、一度のいやしの機会を失ったかも知れなかった。だが彼は、キリストのみことばを信じ、みことば通りに行動することによって力を受けた。

同じ信仰によって、われわれも霊的ないやしを受けられる。罪のために、われわれは神のいのちから切り離された。われらの魂は麻痺している。ちょうどあの不具の男がひとりで歩くことができなかったように、われわれもひとりではきよい生活を送ることができない。自分の無力をみとめている人、また神に一致するような霊的生活をあこがれ求めている人が多い。彼らはそうした生活を求めておなししい努力をしている。そして絶望のうちに、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろう

か」と叫ぶ(ローマ七ノ二四)。こうした絶望のうちにもがいている人々は、上を見あげるがよい。救い主は、ご自分の血であがなわれた者をのぞきこんで、言い表わしようのないやさしさとおわれみをもつて、「なおりたいのか」と言われる。主はあなたに、健康と平安のうちに立ちあがりなさいとお命じになる。いやされたと感じるのを待つてはならない。キリストのみことばを信じなさい。そうすればみことばは実現する。あなたの意思をキリストの側におきなさい。キリストに仕えようと決心なさい。そうすれば、みことばを行なうことによって、あなたは力を受ける。どんなに悪い習慣であろうと、長い間の放縦によって魂と肉体とをしばりつけてきた支配的な情欲から、キリストはわれわれを救うことがおできになり、また救おうと望んでおられる。彼は「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」にいのちをお与えになる(エペソ二ノ一)。キリストは、弱さと不幸と罪の鎖に繋がれているとりこを解放される。

麻痺したからだをいやされた男は、かがんで敷き物と毛布だけの寢床をとりあげ、よろこびを感じながら、もう一度からだをまっすぐにのびし、救い主をさがしてあたりをみまわした。だがイエスのお姿は群衆の中に消えていた。男は、イエスにもう一度会っても、みわけがつかないのではないかと心配した。彼が神を賛美し、新しく与えられた力をよろこびながら、しっかりと自由な足どりで道を急いでいると、数人のパリサイ人に出会ったので、彼はすぐに自分がいやされたことを彼らに語った。彼は、パリサイ人たちが自分の話を冷淡に聞くのを見て驚いた。

パリサイ人たちはまゆをしかめて彼をとどめ、なぜ安息日に寢床を運んでいるのかときいた。彼らは、主の日

に荷物を運ぶことは律法にかなわないことだときびしく注意した。男は、よろこびのあまり、安息日であることを忘れていた。それでも彼は、神からのこのような力を持っておられるおかたの命令に従っていることに、心のがめを感じなかった。彼は「わたしをなおして下さったかたが、床を取りあげて歩けと、わたしに言われました」と大胆に答えた(ヨハネ五ノ一一)。彼らはそんなことをしたのはだれだとたずねたが、男は答えることができなかった。この役人たちは、この奇跡を行うことができるおかたはひとりしかないとよく知っていた。だが彼らは、イエスを、安息日を犯した者として、非難するためには、それがイエスであったという直接の証拠がほしかった。彼らの判断によれば、イエスは、安息日に病人をいやして、律法を破られたばかりでなく、その男に寝床を運ぶように命ずることによって、安息日の神聖をけがしたというのであった。

ユダヤ人は律法を曲解して、これを束縛のきずなとしていた。彼らの無意味な規則は、他国民の語り草になっていた。特に安息日はあらゆる種類の無意味な制限にとりかこまれていた。安息日は、彼らにとって、喜びの日でもなければ、主の聖日でもなく、とうとぶべき日でもなかった(イザヤ書五八ノ一二参照)。律法学者やパリサイ人たちが、安息日の遵守を耐えがたいほどの重荷にしていた。ユダヤ人は、安息日に火を燃やすことも、ろくそくをつけることもゆるされなかった。その結果、ユダヤ人は、規則に禁じられているために自分にはできない多くの仕事を異邦人にたのんでやってもらった。仕事をするのが罪になるものなら、他人をやとってその仕事をやらせることも、自分がやったのと同じに罪になるということを、彼らは考えてもみなかった。彼らは、救いはユダヤ人にだけ限られたものであって、他のすべての人の状態はすでに絶望的なことから、それ以上悪くなり

ようがないと考えていた。しかし神は、だれかが従うことのできないような戒めをお与えになってはいない。神の律法は、不合理な制限や利己的な制限を是認しない。

宮の中で、イエスは、いやされた男に出会われた。男は、罪祭の献げ物と同時に、自分の受けた大きなあわれみに対する感謝の献げ物をささげるためにきていた。イエスは、その男を参拝者の中にみつけ出されると、顔をお見せになって、「ごらん、あなたはよくなった。もつ罪を犯してはいけない。何かもつ悪いことが、あなたの身にかかるかも知れないから」と戒めのことをお与えになった(ヨハネ五ノ一四)。

いやされた男は、救い主に出会ったことを大よろこびした。彼はイエスに対するパリサイ人たちの敵意を知らなかったで、さきに自分に質問したパリサイ人たちに、これがいやしを行なったあかただと告げた。「そのためユダヤ人たちは、安息日にこのようなことをしたと言って、イエスを責め……イエスを殺そうと計るようになった」(ヨハネ五ノ一六、一八)。

イエスは、安息日を破ったという告発に答えるために、サンヒドリンの前へ出された。もしユダヤ人がこの時独立国民だったら、このような告発は彼を死刑にするという彼らの目的に役立ったであろう。しかしローマの支配下にあつたために、そういうことはできなかった。ユダヤ人は死刑を課する権利を持っていなかったし、またキリストに対するこの告発は、ローマ人の法廷では重視されなかったであろう。しかしながら、そこには彼らが達成しようと望んでいた他の目的があつた。彼らがキリストの働きを妨害しようと努力しているにもかかわらず、民衆に対するキリストの勢力は、エルサレムにおいてさえ、彼らの勢力よりもだんだん大きくなっていった。ラ

びたちのながったらしい大げさな話に興味のない民衆は、キリストの教えにひきつけられた。彼らは、キリストのみことばを理解することができ、彼らの心はあたためられ、慰められた。キリストは、神が刑罰をくだされるさばき主ではなく、やさしい父であられることについて語り、またご自身のうちに反映している神のみかたちをお示しになった。心の傷ついている者に、イエスのみことばは、香油のようであった。みことばとあわれみの行為によって、キリストは古い言い伝えと人間の作った戒めの圧力とをうち破り、尽きることなく満ち満ちている神の愛をお示しになっていた。

キリストについて、最も古い預言の一つに、「つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までには及ぶであろう。もろもろの民は彼に従う」としるされている(創世記四九ノ一〇)。民はキリストに従おうとしていた。共鳴する民衆の心は、祭司たちの要求する厳格な儀式よりも、愛となさけの教訓を受け入れた。もし祭司たちやラビたちが妨害しなかったら、キリストの教えによって、この世界にはかつてみられなかったような改革が行われたであろう。しかしこれらの指導者たちは、自分たちの権力を維持するために、イエスの勢力を打破しようと決心していた。サンヒドリンでキリストを審問し、彼の教えを公然と非難することは、この目的をとげるのに役立つのである。なぜなら民は、自分たちの宗教上の指導者たちに対して、まだ深い尊敬の念を持っていたからである。ラビたちの要求をあえて非難したり、あるいは彼らが民に課した重荷を軽くしようとする者はだれでも、冒涇の罪ばかりでなく、反逆の罪があるものとみなされた。ラビたちは、この点において、キリストについての疑念をひき起そうと望んだ。彼らは、キリストが、一般に認められている慣習

を廃し、そうすることによって、民の間に分裂をひき起し、ローマ人から完全に征服される道を備えているのだと主張した。

しかし、ラビたちがその実現に熱中しているこうした計画は、サンヒドリンの会議よりもほかの会議に始まったのである。サタンは、荒野でキリストに敗れた後、キリストの伝道に反対し、できればその働きを失敗させようとして、自分の軍勢を結集した。彼は直接個人的に働きかけて達成できなかったところを、戦術によって達成しようと決心した。サタンは、荒野の戦いから退去するとすぐに、一味の天使たちとの会議で、ユダヤ人が救い主をみとめないように、彼らの心をもっとくもらせるための計画を練った。サタンは、宗教界においてサタンを代表している人間どもに、この真理の擁護者に対する敵意を吹きこみ、彼らを通して働こうと計画した。彼は、そうした人たちにキリストを排斥させ、その生活をできるだけつらいものにして、キリストがご自分の使命を果すのに落胆されるようにしようと望んだ。こうしてイスラエルの指導者たちは、サタンのうつわとなって、救い主と戦った。

イエスは、律法を「大いなるものとし、かつ光栄あるものとする」ためにおいでになっていた。彼は律法の尊厳を低くしないで、かえって高められるのであった。聖書に、「彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する」と言われている(イザヤ書四二・一二、四)。イエスは、安息日を祝福ではなくてわざわざにしていたやっかいな規則から解放するために、おいでになったのである。

こういう理由から、彼は、ベテスダでいやしの行為をなさるのに安息日をおえらびになったのだった。彼は週

の他の日でもその病人をいやすことがおできになったのである。あるいはただ病気をなおすだけにおいて、寝床を運んで行くことまでお命じにならなくてもよかったのである。しかしそれではイエスのお望みになった機会は与えられないのであった。地上におけるキリストの生涯の一つ一つの行為の底には、賢明な目的があった。キリストのなさったことはすべて、それ自体において、またその教えにおいて、重要であった。イエスは、池のそばの病人たちの中から、最悪の病人をえらんで、その者の上によしの力を働かせ、そこになされた偉大なわざを公表するために、町の中を寝床を運んで行くようにその男にお命じになった。このことによって、安息日に何をするかが律法にかなっているかということについて質問が起り、イエスが主の日に関するユダヤ人の束縛を攻撃され、彼らの言い伝えが無効であることを言明される道が開かれるのであった。

イエスは、苦しんでいる者を救う行為は、安息日の律法にかなっていると彼らにお述べになった。それは、苦しんでいる人間に奉仕するためにいつも天と地との間をのぼりくだりしている神の天使たちの働きに一致していた。イエスは、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」と言明された(ヨハネ五ノ一七)。すべての日は神の日で、人類のための神のご計画を実行すべき日である。律法について、もしユダヤ人の解釈が正しいなら、エホバ神はまちがっておられることになる。神が初めて地の基を置かれてから、神のみわざはすべての生物を生かし、ささえてきた。もしユダヤ人の言う通りなら、みわざを見て良しとされ、その完成を記念するために安息日を制定された神は、ご自分の働きをおしまいにして、やむことのない宇宙の運行をとめたまわねばならないことになる。

神は、太陽が安息日にその職務を遂行するのを禁じ、その温和な光線が地上をあたため、植物を繁茂させるのをとめたまわねばならないだろうか。もろもろの世界は、この聖日の間じゅう静止しなければならぬだろうか。神は小川に野や森をうるおさないように命じ、海の波にそのたえない干満を停止するように命じたまわねばならないだろうか。麦や穀物は生長をやめ、ぶどうの房は紫色に熟するのを延ばさなくてはならないだろうか。木や草花は、安息日につぼみをつけることも花を咲かせることもしてはならないのだろうか。

そうなったら、人は、地の果実と、生活を豊かにしてくれるいろいろな祝福を失うであろう。自然はその変ることのない営みをつづけなければならない。神は一瞬間もみ手を休めるわけにいかない。もしそうされたら、人は衰え、死んでしまう。人間にもまた、この日になすべき働きがある。生活上の必要に備え、病人を世話し、困っている人々の欠乏を満たさねばならない。安息日に、苦しみをやわらげることをおこたる者は罪をまぬかれない。神の聖なる休み日は、人のためにつくられたもので、あわれみの行為は、安息日の意図に完全に一致している。神は、ご自分の被造物が安息日でもほかの日でも、苦しみをやわらげられるものなら、一時間でも苦しむことをお望みにならない。

安息日には、神に対する要求は、ほかの日よりも大きい。この日には、神の民は、いつもの仕事をやめて、瞑想と礼拝に時を過ごすのである。彼らは、安息日にはほかの日よりもっと多くの恵みを神に求める。彼らは神の特別な関心を要求する。彼らは神の最上の祝福を切望する。神は、安息日が過ぎるのを待たないで、こつした願いにお答えになる。天の神の働きは決してやむときがない。人間もよいことをするのを休んではならない。安息

日は何の活動もしない無益な日として与えられているのではない。律法には、主の休み日に世俗の仕事をするのを禁じてある。生活費を得るための働きはやめなければならない。世俗的なたのしみや金もうけのための働きをこの日にすることは、律法にかなわない。だが神が創造の働きをおやめになって、安息日に休み、これを祝福されたように、人間も日常生活の仕事を離れて、この日の聖なる時間をもつぱら健康的な休みや礼拝や聖なる行為に用いるべきである。病人をいやされたキリストの働きは、律法に完全に一致していた。それは安息日をとうとぶことになった。

イエスは、天父がなしておられるのと同じく神聖で、そして同じ性格をもった働きをすることによって、神と等しい権利を主張された。ところがパリサイ人たちはますます怒った。彼らの判断によれば、イエスは律法を破られたばかりでなく、神を「自分の父」と呼ぶことによって、自分を神と等しい者であると言明されたというのである(ヨハネ五ノ一八)。

ユダヤ国民はみな、神を父と呼んでいたのだから、キリストが神に対して同じ関係にあると言われても、そんなに怒る理由はなかった。しかし彼らは、キリストのこの主張が、最高の意味においてなされたものと判断されると言って、キリストを冒涇だと非難した。

このようなキリストの敵どもは、キリストが彼らの良心に感じさせられる真理に議論をもって対抗することができなかった。彼らは自分たちの慣習や言い伝えをひき合いに出すことしかできなかった。だがそうしたものは、イエスが神のみことばと休むことのない自然の営みから引用される議論にくらべたときに、無力で、間の抜けた

ものように思えた。光を受けたいという気持ちがラビたちにあつたら、彼らは、イエスが真理を語っておられることをさとしたのである。だが彼らは、イエスが安息日について言われた大事な点を避けて、イエスがご自分は神と等しい者だと主張されたといつて、彼に対する怒りをあおりたてようとした。役人たちの怒りはとどまることを知らなかった。祭司たちとラビたちは、民を恐れなかったら、イエスをその場で殺してしまつたであろう。しかしイエスに対する民衆の好意的な感情は強かつた。多くの者は、自分たちの病気をいやし、悲しみを慰めてくださったイエスに親しみを感じ、ベテスダでイエスが病人をいやされたことを并護した。そのため、当分の間指導者たちはやむを得ずその憎しみをおさえなければならなかった。

イエスは冒流の告発をはねつけられた。あなたがたが非難している働きをなす権威がわたしにあるのは、わたくしが神の子であり、性質においても、意思においても、目的においても、神と一つであるからだ、と、イエスは言われた。創造と摂理におけるすべての神の働きに、わたしは神と協力しているのだ。「子は父のなさることを見ている以外に、自分からは何事もすることができない」(ヨハネ五ノ一九)。祭司たちとラビたちは、神のみ子がこの世においてなすためになつた働きについて、神のみ子を非難していた。彼らは、罪のために神から離れてしまい、高慢な心をもって、神とは無関係に行動していた。彼らは、すべてのことに自己満足を感じ、彼らの行動をみちびく一層高い知恵の必要をみとめなかった。しかし神のみ子は、天父のみこころに従い、天父の力をあてにされた。キリストは、ご自分をまったくおなしくされたので、ご自分で計画をおたてにならなかった。主はご自分のために神のご計画を受け入れられたので、天父は日ごとにそのご計画をお示しになった。同じよう

にわれわれも、自分の生活が神のみこころのはっきりしたあらわれであるように、神に依存すべきである。

モーセは、神の住居として聖所を建てようとした時、すべてのものを山で示された型に従ってつくるように命じられた。モーセは、神の働きをする熱意に満ちていた。そしてモーセの案を実行するために、最も才能のある、腕のいい人たちが手ぢかにいた。だが彼は、示された型通りのものでなければ、鈴、ざくろ、ふさ、幕、その他聖所のどんな器具も作ってはならなかった。神はモーセを山に呼び、天の事物を彼にお示しになった。主は、モーセが型を見るように、ご自分の栄光をもって彼をおわれ、その型に従ってすべてのものがつくられた。同じように神は、ご自分の住居にしようと望まれたイスラエルに、神の輝かしい品性の理想をお示しになった。その型は、シナイ山で律法が与えられた時に、彼らに山で示された。その時主は、モーセの前を通りすぎて、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」と宣言された(出エジプト記三四ノ六、七)。

イスラエルは自分自身の道をえらんでいた。彼らは型に従って築いていなかった。だが神の内住される真の宮であられるキリストは、ご自分の地上生涯をこまかい点にいたるまで、神の理想に一致して形づくられた。キリストは、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と言われた(詩篇四〇ノ八)。同じようにわれわれの品性も、「霊なる神のすまい」として築かれるのである(エペソ二ノ二二)。われわれは、「示された型どおり」すなわち「あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残された」キリストにならって「いっさいを作」るのである(ヘブル八ノ五、ペテロ第

一・二ノ二一）。

キリストのみことは、われわれが自分自身を、天の神に結びついて離れることのできない者とみなすように教えている。われわれの立場がどんなものであろうと、われわれは、すべてのものの運命を自身のみ手ににぎっておられる神に依存しているのである。神はわれわれを働きに任命し、その働きに必要な才能や手段をお与えになった。われわれが意志を神に服従させ、神の力と知恵に信頼するがぎり、われわれは安全な道にみちびかれ、神のたいなる計画の中に定められているわれわれの立場を果すのである。しかし自分自身の知恵と力とをあてにする者は、自分を神からひき離れているのである。彼はキリストと一致して働かないで、神と人との敵であるサタンの目的を果しているのである。

救い主はつづけて、「父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。……父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのころにかなう人々に命を与えるであろう」と言われた（ヨハネ五ノ一九、二一）。サドカイ人は、肉体のよみがえりはないと主張した。しかしイエスは、天父の最高のみわざの一つは、死人をよみがえらせることであって、イエスご自身も同じわざをなす力を持っていると彼らに言っておられる。「死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう」（ヨハネ五ノ二五）。パリサイ人は、死人のよみがえりを信じた。キリストは、死人にいのちを与える力はいままでさえ彼らの間にあって、彼らはその力のあらわれを見ると断言しておられる。この同じよみがえりの力は、「自分の罪過と罪とによって死んでいた」魂にいのちを与える力である（エペソ二ノ一）。イエス・キリストにあるいのち

のみたま、すなわち「復活の力」は、人を「罪と死との法則から……解放」する(ピリピ三ノ一〇、ローマ八ノ二)。悪の主権はうち破られ、信仰によって魂は罪から守られる。キリストのみたまに心を開く者は、肉体を墓からよみがえらせるその大いなる力にあずかる者となる。

このいやしいナザレ人は、ご自分のまことの高貴な身分を主張される。彼は人性を超越し、罪と恥のよそおいを捨てて、天使たちにあがめられるおかた、神のみ子、宇宙の創造主と一つであられるおかたとして、ご自身をお示しになる。聞いている者たちは、魅せられたようにじっときいている。だれもキリストのようなことを語ったり、このようにどうたる威厳をもってふるまったりした者はなかった。イエスの話しぶりははっきりしっていて、率直で、その中にはキリストの使命と世の人々の義務とがあますところなく宣言されている。「父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。……それは、父がご自分のうちに生命をお持ちになっていると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許しになったからである。そして子は人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった」(ヨハネ五ノ二二、二三、二六、二七)。

祭司たちと役人たちは、自らをキリストのみわざに罪を宣告する裁判官の立場に置いていたが、キリストは、ご自身が彼らのさばき主であり、また全地のさばき主であると宣言された。世はキリストにまかされ、キリストを通して、神からのすべての祝福が墮落した人類に与えられた。キリストは受肉の後と同じように、受肉の前に

もあがない主であられた。罪が生じると同時に、救い主があられた。彼はすべての者に光といのちをお与えになったので、各人は、与えられた光の量に従ってさばかれる。光をお与えになったおかた、最もやさしい懇願をもって魂を追いかけ、その魂を罪から聖潔へみちびこうとされたおかたが、魂の助け主であると同時にまたさばき主である。天で大争闘が始まって以来、サタンは自分の働きを欺瞞によって維持してきた。そこでキリストは、サタンの計画をばくろし、その力をうち破るために働いてこられた。欺瞞者サタンに対抗されたおかた、各時代にわたってサタンの手中からとりこをもぎ取るために努力してこられたおかた、すべての魂にさばきをくだされるおかた、それはキリストである。

また神は、キリストが「人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった」(ヨハネ五ノ二七)。キリストは、人間のあらゆる苦悩と試みとを経験し、人の弱さと罪とを理解されるので、また主はわれわれのためにサタンの試みに抵抗して勝利し、救うためにご自身の血を流された魂を正しく、やさしくとり扱われるので、このゆえに、人の子イエスは、さばきを行なうように任命されているのである。

しかしキリストの使命は、さばきではなくて救いであつた。「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである」(ヨハネ三ノ一七)。そこでイエスは、サンヒドリンの前で、「わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである」と言明された(ヨハネ五ノ二四)。

キリストは、聞いている人たちに、驚くに及ばないと命じておいて、彼らの前に将来の秘密をもっと広い視野

からお示しになった。「墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」とイエスは言われた(ヨハネ五ノ二八、二九)。

未来のいのちについてのこの保証は、イスラエルが長い間待ち望んでいたもので、彼らはメシヤの来臨の時にそれを受けることを望んでいた。墓の暗黒を照すことのできる唯一の光が彼らの上に輝いていた。しかし強情は盲目にする。イエスがラビの言い伝えを破り、彼らの権威を無視されたので、彼らはイエスを信じようとしなかった。

その時、その場所、その機会、会衆の中にひろがっていた緊張感などがみな一つになって、サンヒドリンの前におけるキリストのみことばを一層印象的にした。国家の最高の宗教当局者たちは、自らイスラエルの回復者となるイエスのいのちをねらっていた。安息日の律法を破ったという告発に答えるために、安息日の主が地上の法廷に訴えられた。イエスが恐れることなくご自身の使命を宣言されると、裁判官たちは驚きと怒りをこめてイエスを見た。だがイエスのことばに答えることができなかった。彼らはイエスを有罪とすることができなかった。イエスは、祭司たちとラビたちとがイエスに疑いをかけ、その働きに口を出す権利を拒否された。彼らは、そのような権威をさづけられていなかった。彼らの主張は高慢心と尊大な心に根ざしていた。イエスは彼らの告発している罪に服したり、彼らから問いただされたりすることを拒絶された。

イエスは、彼らが文句をつけている行為について、弁解したり、どういう目的でそのようなことをしたかを説

明したりなさらず、役人たちに向き直って、被告から告発者になられた。イエスは彼らの無慈悲な心と聖書についての無知とを責められた。彼らは神からつかわれたおかたをこぼんだのだから、神のみことばをこぼんだことになるのだと、イエスは断言された。「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである」(ヨハネ五ノ三九)。

旧約聖書は、歴史であろうと、律法であろうと、預言であろうと、どのページにも、神のみ子の栄光が輝いている。ユダヤ教の制度全体は、それが神の制度であるかぎり、福音のぎつしりつまった預言であつた。キリストについて、「預言者たちもみな……あかしをしています」と言われている(使徒行伝一〇ノ四三)。アダムに与えられた約束から、父祖の家系と律法の制度とを通じて、天の輝かしい光はあがない主の足跡を明らかにした。預言者たちは、未来の事ながら神秘的な行列をなして目の前を通りすぎたときに、ベツレヘムの星、きたるべきシロアを見た。すべてのいけにえにキリストの死が示された。香煙の一すじ一すじにキリストの義がのびた。ヨベルのラッパの鳴るたびにキリストのみ名がひびき渡った。至聖所のおそれ多い神秘の中に、キリストの栄光がとどまっていた。

ユダヤ人は聖書を所有していて、みことばを外面的に知ることだけで永遠のいのちが与えられると思っていた。しかしイエスは、「神の御言(みことば)はあなたがたのうちにとどまっていない」と言われた。彼らはみことばの中のキリストをこぼんだので、人となられたキリストをこぼんだ。「あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこようとしなさい」とイエスは言われた(ヨハネ五ノ三八、四〇)。

ユダヤ人の指導者たちは、メシヤの王国に関する預言者たちの教えを学んでいたが、それは真理を知ろうとする真剣な願いからではなく、彼らの野心的な望みを支持する証拠をさがし出すのが目的だった。キリストが彼らの期待に反する様子でこられたとき、彼らは、キリストを受け入れようとしなかった。そして彼らは、自分自身を正当づけるために、キリストが欺瞞者であることを証拠だてようとした。彼らがこの道にひとたび足を踏み入れたとき、サタンがキリストに対する彼らの反対を強めることは容易だった。キリストの神性の証拠として受けとられるはずのことが、キリストに不利なように解釈された。こうして彼らは、神の真理を虚偽に変え、救い主があわれみのみわざを通して彼らに直接語りかけられるたびに、ますます頑強に光に反抗した。

イエスは、「わたしは人からの誉を受けることはしない」と言われた(ヨハネ五ノ四一)。イエスがお望みになったのは、サンヒドリンの権力でもなければ、サンヒドリンからみとめられることでもなかった。イエスがサンヒドリンからは認められたとしても、イエスにとっては誉とならなかった。イエスは天の神の誉と権威とをさずかってあられた。イエスがお望みになれば、天使たちがやってきて尊敬をささげ、天父はもう一度イエスの神性を証明されたであろう。だがユダヤ人の指導者たち自身のために、また彼らが指導している国民のために、イエスは、彼らがイエスの品性をみとめ、イエスが彼らに与えるためになったその祝福を彼らが受けることを望まれた。

「わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受けいれない。もし、ほかの人が彼自身の名によって来るならば、その人を受けいれるであろう」(ヨハネ五ノ四三)。イエスは、神のみかたちをそなえ、神のみ

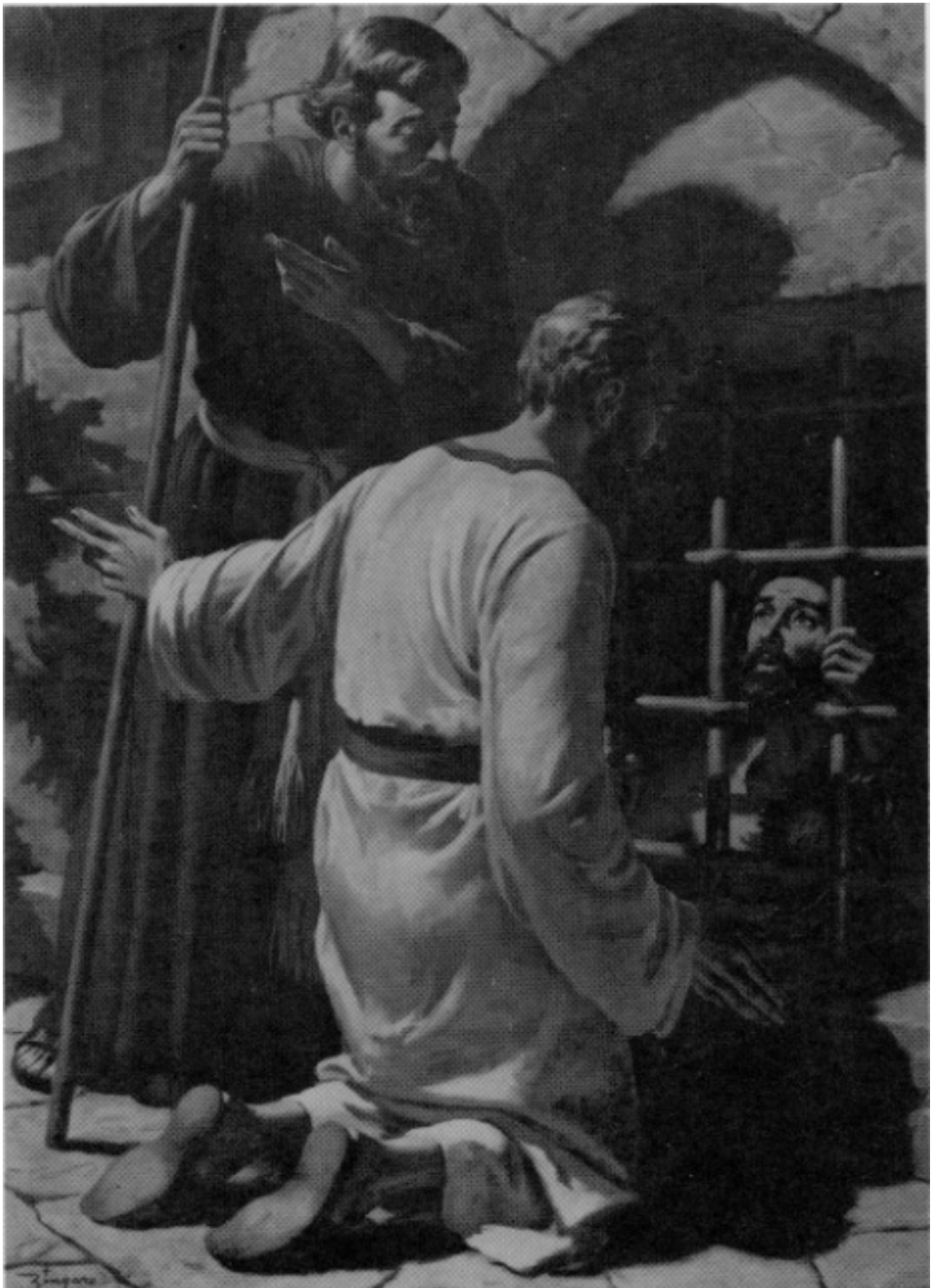
ことを成就し、神のみ栄えを求め、神の権威によっておいでになった。それでもイエスは、イスラエルの指導者たちから受け入れられなかった。しかしほかの人たちがキリストの品性をよそおいながら、自分自身の意思にもとづいて行動し、自分自身の栄えを求めてやってくるなら、彼らは受け入れられるであろう。それはなぜだろうか。自分自身の栄えを求める者は、ほかの人たちのうちにある高慢心に訴えるからである。このような訴えならば、ユダヤ人はこれに応ずることができるのである。偽りの教師は、ユダヤ人の宿望や言い伝えを是認することによって、彼らの誇りにへつらうので、彼らはそうしたにせ教師を受け入れるのである。だがキリストの教えは、彼らの考えに一致しなかった。キリストの教えは、霊的で、自我を犠牲にすることを要求した。そのため彼らは、キリストの教えを受け入れようとしなかった。彼らは、神を親しく知っていなかったので、キリストを通して語られる神のみ声は、彼らにとって見知らぬ人の声であった。

「もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについて書いたのである。しかし、モーセの書いたものを信じないならば、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか」(ヨハネ五ノ四六、四七)。モーセを通してイスラエルに語られたのはキリストであった。もし彼らが偉大な指導者モーセを通して語られた神のみ声を聞いていたら、彼らはそれをキリストの教えのうちにみとめたのである。もし彼らがモーセを信じていたら、彼らはモーセが書いたおかたを信じたのである。

イエスは、祭司たちとラビたちが、イエスのいのちをとろうと決心していることをご存じだった。それでもイエスは、ご自分と天父との一致について、またご自分と世との関係について、彼らにはっきり説明された。彼ら

はイエスに対する自分たちの反対が言いわけの余地のないものであることがわかったが、それでも彼らの殺人的な憎しみは消えなかった。イエスの伝道には人を心服させる力が伴っていることを目にみたとき、彼らは恐怖にとりつかれた。しかし彼らはイエスの訴えに抵抗し、自らを暗やみの中にとじこめた。

彼らは、イエスの権威をくつがえすことに、またみことばによって自らの罪をさとした多くの人々の尊敬と注意とをイエスからひき離すことに大失敗した。役人たちでさえ、イエスが彼らのとがを良心に感じさせられるときに、深く罪を自覚していた。しかしこのことは、彼らをますますイエスに対して苛酷にしたにすぎなかった。彼らはイエスのいのちをとる決心をしていた。彼らは国じゅうに使者を送って、イエスは詐欺師だと民に警告した。スパイが送られてイエスを見張り、イエスの言われたこと、されたことを報告した。とうとい救い主は、いまやまったく十字架の影に立っておられた。



荒野の自由な生活から、バプテスマのヨハネはいまや暗い牢獄の壁の中にとじこめられた。弟子たちは彼を見捨てないで、キリストについての知らせを伝えた。

第 22 章

ヨハネの投獄と死

本章はマタイー一ノー一、一四ノー一、
マルコ六ノ一七―二八、ルカ七ノ一九―二八にもとづく

バプテスマのヨハネは、キリストの王国について一番先に告げ知らせたが、彼はまた苦難を受けることにおいても最初であった。荒野の自由な空気と、彼のことばを熱心にきいた大群衆から離れて、彼はいま獄舎の壁の中にとじこめられていた。彼はヘロデ・アンテパスの城の中に囚人となっていた。ヨハネの伝道の大部分は、アンテパスの支配下にあったヨルダンの東の領地でなされてきた。ヘロデ自身ヨハネの説教をきいていた。放蕩な王は悔い改めを促す叫びにふるえあがった。「それはヘロデが、ヨハネは正しくて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、またその教を聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで聞いていたからである」(マルコ六ノ二〇)。ヨハネはヘロデに対して誠実にふるまい、彼が兄弟の妻ヘロデヤと不義の結婚をしたことを公然と非難した。一時ヘロデは自分の身をしばりつけている情欲の鎖をたち切ろうとかすかな努力をした。しかしヘロデヤは彼を自分の網にますます強くとらえ、ヨハネを投獄するようにそそのかすことによってヨハネに報復した。

ヨハネは活動的な仕事に日を送ってきた人だったので、することもない、陰気な獄舎の生活が彼の心を重くした。何の変化もなく一週また一週と過ぎて行くにつれて、落胆と疑惑が彼の心にしのびこんだ。彼の弟子たちは彼を捨てなかった。彼らは牢獄(ろうごく)に出入りすることをゆるされていたので、イエスのみわざについて消息をつたえ、人々がイエスのもとにおしをかけていることをヨハネに話した。しかし彼らは、もしこの新しい教師がメシヤなら、なぜヨハネの釈放に努力しないのかと質問した。メシヤだったら、自分の忠実な先駆者が自由とおそらく生命まで奪われることをどうしてゆるすことができるだろうか。

こうした質問は効果がないわけではなかった。そうでなければ決して起らないような疑問がヨハネの前に持ち出された。サタンは、この弟子たちのことをきき、そのことが主の使者の魂を傷つけるのを見てよろこんだ。ああ、自分は親しい人の友であると考え、その人への忠誠心をあらわすのに熱心な人たちが、かえってその人の最も危険な敵となる場合がどんなに多いことだろう。どんなにしばしば彼らのことばはその人の信仰を強めないで、かえって失望落胆させることだろう。

救い主の弟子たちと同じように、バプテスマのヨハネは、キリストの王国の性質を理解していなかった。彼はイエスがダビデの位につかれるものと期待した。ところが、時が過ぎてても、救い主が王の權威を主張されないで、ヨハネは困惑し、心配した。ヨハネは、主の前に道が備えられるためには、イザヤの預言が成就しなければならぬと民に宣言していた。すなわち、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地とされねばならない(イザヤ書四〇ノ四参照)。彼は人間の誇りと権力という高い所が倒されるのを期

待していた。彼はメシヤを、「箕(み)を手にとって、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てる」おかたとしてさし示していた(マタイ三ノ一二)。ヨハネは預言者エリヤの霊と力とをもってイスラエルにあらわれたのであったが、そのエリヤのように彼は、主が火によって答えられる神としてご自身をあらわされるものと期待した。

バプテスマのヨハネは、その使命において、高いところでも低いところでも、恐れることなく不義を責める者であった。彼はあえてヘロデ王に対面して率直に罪を責めた。彼は自分が任命された働きをなしとげるためには、生命を惜しまなかった。そしていま彼は、ユダ族の獅子(しし)が圧制者の誇りを打ち倒し、貧しい者と泣き悲しむ者とを救われるのを獄屋の中から期待した。だがイエスは、まわりに弟子たちを集めることと、人々をいやしたり人々に教えたりすることに満足しておられるようにみえた。ローマのくびきが毎日イスラエルの上にますます重くのしかかり、またヘロデ王とその邪悪な情婦は好き勝手にふるまい、貧しい者たちと苦しむ者たちとの叫びが天にのぼっているのに、イエスは取税人たちの食卓で食べておられるのだった。

荒野の預言者にとって、こうしたことがみなはかり知ることのできないなぞにみえた。悪魔のささやきが彼の心を苦しめ、非常な不安の影が彼にしのびよる時があった。長い間待ち望んでいた救い主がまだ現われておられないということがあり得るだろうか。すると自分がこれまで叫ばされたメッセージはどういうことなのだろうか。ヨハネは自分の使命の結果にひどく失望していた。彼は神からの使命が、ヨシヤの時代やエズラの時代に律法が読まれた時と同じような効果を生み、悔い改めて神に立ちかえる根強い働きが伴なうものと期待していた(歴代

志下三四章、ネヘミヤ記八、九章参照）。この使命の成功のために、彼は一生をささげたのだった。それはむだだったのだろうか。

ヨハネは、彼自身の弟子たちが、彼に対する愛から、イエスについて不信の念をいだいているのを見て、心を痛めた。彼らのために働いたことは何の実も結ばなかったのだろうか。彼がいまこうして働きから切り離されているのは、使命に忠実でなかったためだろうか。もし約束された救い主が現われて、ヨハネが召しに忠実であったことがわかったら、イエスはいま压制者の権力を倒し、ご自分の先駆者を解放しようとお思いにならないだろうか。

しかしバプテスマのヨハネは、キリストへの信仰を捨てなかった。天から声がきこえ、はとがぐだっと思ひ出、イエスのけがれない純潔さ、救い主の前に出たときヨハネにのぞんだ聖霊の力、聖書の預言のことばのあかし、——すべては、ナザレのイエスが約束のおかたであることをあかししていた。

ヨハネは、自分の疑いや心配について友人たちと議論しようとしなかった。彼は、イエスにメッセージを送って質問しようと決心した。彼は、この役目を弟子たちのうちの二人にまかせ、救い主を訪問することによって彼らの信仰が強められ、兄弟たちに確信が与えられるようにと望んだ。また彼は、自分のためにキリストが直接に何か言ってくださるようにと心から望んだ。

弟子たちは、イエスのところへやってきて『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか」とのことばを伝えた(マタイ一ノ三)。

バプテスマのヨハネが、イエスを指さして、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」「それがわたしのあとにおいでになる方である」と宣言してから、まだいくらかも日はたっていないかった(ヨハネ一ノ二九、一二七)。それなのにいま「『きたるべきかた』はあなたなのですか」とたずねている。それは人間の性質にとって、まことににがい、失望させられる経験であった。忠実な先駆者ヨハネが、キリストの使命を認識しないなら、利己的な大衆に何を期待できようか。

救い主は、弟子たちの質問にすぐにはお答えにならなかった。彼らがイエスの沈黙をあやしみながら立っていると、病気の者や苦しんでいる者たちが、いやしてもらったために、イエスのところへやってきた。盲人たちは、手さぐりで、群衆をわけて進んできた。あらゆる階級の病人たちが、ある者は自分で道を急ぎ、ある者は友だちにかつがれて、熱心にイエスの前へおしかけてきた。偉大な医者イエスのみ声は、つんぼの耳をつらぬいた。イエスのひとことは、み手のひとふれが、盲人の目を開いて、昼の光、自然の景色、友人たちの顔、救い主の顔が見えた。イエスは、病気がなあるように命じ、熱を追いつき出された。イエスのみ声がかかっている者の耳にとどくと、彼らは、健康と力を与えられて立ち上がった。悪鬼につかれて無能力になっていた者たちが、イエスのみことばに従って、その狂気がなくなり、イエスを拝した。イエスは、人々の病気をなおす一方では、彼らに教えになった。ラビたちから不潔なものとして避けられていた貧しい百姓や労働者たちが、イエスのそばに集まり、イエスは、彼らに永遠のいのちのことばを語られた。

こうしてヨハネの弟子たちが、すべてのことを見たり聞いたりしているうちに、一日が過ぎて行った。最後に

イエスは、彼らをみもとに呼んで、あなたがたが見たままのことを、行ってヨハネに告げなさいと命じ、「わたしにつまづかない者は、さいわいである」とつけ加えられた(ルカ七ノ二三)。イエスの神性の証拠は、悩んでいる人間の必要にそれが適用されることに見られた。イエスの栄光は、彼がわれわれのいやしい身分にまで身をひくくされたことに示された。

弟子たちは、メッセージを伝えたが、それで十分だった。ヨハネは、メシヤについて、「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年とわれわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め」と言われている預言を思い浮べた(イザヤ書六一ノ一、二)。キリストのみわざは、彼がメシヤであることを宣言しているばかりでなく、彼の王国がどのような形で建てられるかを示した。エリヤが荒野にいたとき、「主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後に地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった」(列王記上一九ノ一、二)。その火の後で、神は、「細い声」で預言者にお語りになったが、これと同じ真理がヨハネに示された。イエスは、武器の音をたてたり、王位や王国をくつがえしたりすることによってではなく、あわれみと自己犠牲の生活を通して、人々の心に語ることによって、その働きをされるのだった。

バプテスマのヨハネ自身の克己の生活の原則は、メシヤの王国の原則であった。ヨハネは、そうしたことのす

べてが、イスラエルの指導者たちの原則や望みとまったく異なったものであることを知っていた。ヨハネにとって、キリストの神性についての有力な証拠となるものが、彼らには何の証拠にもならないのであった。彼らは約束されていないメシヤを求めていた。救い主の使命は、彼らの憎しみと非難とを招くにすぎないことを、ヨハネは知った。ヨハネは、先駆者として、キリストが自ら最後の一滴まで飲みほさなければならないさかずきから飲んでいたにすぎなかった。

救い主が、「わたしにつまずかない者は、さいわいである」と言われたことは、ヨハネに対するやさしい譴責であった(マタイ一ノ六)。それはヨハネにとっておだではなかった。いまヨハネは、キリストの使命の性質をもっとはつきりさとしたので、生きるにも死ぬにも、愛する働きのために最もよく役立つように、神に献身した。

使者たちが去ったあとで、イエスは、ヨハネについて人々にお語りになった。救い主の心は、いまヘロデの下牢の中で世にうずもれている忠実な証人への同情となつてそそがれた。イエスは、人々が神はヨハネを捨てられたのだとか、ヨハネの信仰は試練の日にくじけたのだというような結論をくだすままにしてはおかれなかった。「あなたがたは、何を見に荒野に出てきたのか。風に揺らぐ葦(あし)であるか」とイエスは言われた(ルカ七ノ二四)。

ヨルダン川のほとりにはえていて、風のまにまにゆらぐ脊の高いあしは、バプテスマのヨハネの使命を批判し、非難するうぶたちをあらわすのにふさわしかった。彼らは民衆の世論という風であちらこちらへゆれた。彼らは

へりくだってバプテスマのヨハネの鋭いことばを受け入れようとはしなかったが、民衆を恐れたので、あえて彼の働きに公然と反対しようとしなかった。しかし神の使者は、こんな臆病な精神ではなかった。キリストのまわりに集まった群衆はヨハネの働きの証人だった。彼らはヨハネが恐れるところなく罪を責めるのを聞いた。自らを義とするパリサイ人にも、祭司のサドカイ人にも、ヘロデ王とその廷臣にも、つかさたちや兵士たちにも、取税人や百姓にも、ヨハネは、同じように率直に語った。彼は人の称賛や偏見という風に動かされる揺れるあしではなかった。牢獄の中にあっても、神に対する彼の忠誠心と義への熱意は、荒野で神のみことばを説いていた時と同じにかわらなかった。主義に対する彼の忠実さは岩のように固かった。

イエスはつづけて、「では、何を見に出てきたのか。柔らかい着物をまとった人か。きらびやかに着かざって、ぜいたくに暮している人々なら、宮殿にいる」と言われた(ルカ七ノ二五)。ヨハネは、当時の罪と不節制とを責めるために召しを受けていて、彼の質素な衣服と克己の生活は、その使命の性格に一致していた。はでな衣服とこの世のぜいたくは神のしもべの受けるべき分ではなく、それは「宮殿」に住む人々、すなわちこの世の支配者たちの受けるべき分で、世の権力と富とは彼らに属しているのである。イエスは、ヨハネの着ているものと、祭司たちや役人たちの着ているものとの相違に人々の注意を向けようと望まれた。こうした役人たちは、はでな衣服を着、高価な飾り物を身につけていた。彼らは、みえを好み、人々の目をくらませて、もっと高い尊敬を受けようと望んでいた。彼らは、神に承認される心の純潔さを獲得するよりも人間の称賛を受けることに熱心だった。こうして彼らは、神に忠誠を尽くさないで、この世の王国に忠誠を尽くしていることをあらわした。

イエスは言われた、「では、何を見に出てきたのか。預言者か。そうだ、あなたがたに言うが、預言者以上の者である。

『見よ、わたしは使をあなたの先につかし、

あなたの前に、道を整えさせるであろう』

と書いてあるのは、この人のことである。あなたがたに言うておく。女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない」(ルカ七ノ二六―二八)。ヨハネが生れる前に、天使は、ザカリヤへのお告げの中で、「彼は主のみまえに大いなる者となり」と言った(ルカ一ノ一五)。天の神の評価で、大いなるものとは何だろうか。世の人々が大いなるものとみなしているもの、すなわち富や階級や名門や知的な才能自体ではない。もし神を考慮に入れない知的な偉大さに尊敬の価値があるとしたら、われわれの尊敬は、どんな人間もくらべることでできない知力をもっているサタンに当然ささげられる。だが自我に奉仕するために悪用されるとき、知力は、その才能が大きければ大きいほど、一層大きなわざわいとなる。神がとうとばれるのは道德的価値である。愛と純潔とは、神が最もとうとばれる特性である。ヨハネがサンヒドリンの使者たちの前で、人々の前で、自分の弟子たちの前で、自分自身の誉を求めようとしないで、イエスを約束のおかたとしてすべての人にさし示した時、彼は、イエスの目に大いなる者となった。キリストの働きにおける彼の無我のよろこびは、人間のうちにあらわされた最高級の気高さをあらわしている。

イエスについてのヨハネのあかしを聞いた人々が、ヨハネの死後、彼についてあかししたことは、「ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」ということばであった(ヨハネ一〇ノ四一)。エリヤのように、天から火を呼びおろしたり、死人をよみがえらせたり、モーセのように、神の名によって権力の杖を使うことは、ヨハネにゆるされなかった。彼は、救い主の来臨をさきぶれし、その現われに対して備えるように民に呼びかけるためにつかわされた。彼は、その使命を忠実に果たしたので、彼がイエスについて教えたことを人々が思い出したときに、彼らは、「ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」と言うことができた(ヨハネ一〇ノ四一)。主の弟子たちはみな、キリストについて、このようなあかしをたてるために召されているのである。

メシヤの先駆者として、ヨハネは、「預言者以上の者」であった(ルカ七ノ二六)。なぜなら預言者たちは、キリストの来臨を遠くからながめただけであったが、ヨハネはキリストを目に見、キリストがメシヤであられることについて、天からの証言を耳に聞き、キリストを、神からつかわされたおかたとして、イスラエルに紹介することをゆるされたからである。しかしイエスは、「神の国で最も小さい者も、彼よりは大きい」と言われた(ルカ七ノ二八)。

預言者ヨハネは、二つの時代をつなぐ環(わ)であった。神の代表者として、彼は、キリスト教時代に対する律法と預言者の関係を示していた。彼は小さな光で、そのあとには大きな光がつづくのであった。ヨハネが彼の民に光を放つように、彼の心は聖霊に照されていた。しかしイエスの教えと模範から出ている光ほど墮落した人類

を明るく照す光は、これまでほかになかったし、またこれからもない。影としての犠牲制度に象徴されているキリストとその使命は、かすかにしか理解されていなかった。ヨハネでさえ、救い主を通して与えられる未来の永遠のいのちを十分に理解していなかった。

ヨハネが自分の使命に感じていたよろこびは別として、彼の一生は悲しみの一生であった。彼の声は荒野よりほかのところではめったにきかれなかった。彼は孤独な身分であった。彼は自分自身の働きの結果を見ることをゆるされなかった。キリストといっしょにいて、大きな光に伴う神の力のあらわれを見る特権は彼になかった。盲人が見えるようになり、病人がいやされ、死人がよみがえらせられるのを、彼は見なかった。彼は、キリストのすべてのことを通して光が輝き、預言の約束が栄光に照されるのを目に見なかった。キリストの大いなるみわざを目に見、キリストのみことを耳に聞いた最も小さい弟子でさえ、この意味において、バプテスマのヨハネよりも大きな特権があった。したがってヨハネよりも大きい者といわれているのである。

ヨハネの説教を聞いた多くの群衆によって、彼の評判は国じゅうにひろがっていた。彼の投獄の結果について深い関心がよせられていた。しかし非難すべき点のない彼の生活と、彼に味方する民衆の強い感情から考えて、暴力手段はとられないものと信じられていた。

ヘロデは、ヨハネを神の預言者と信じていたので、彼を自由の身にする意志が十分あった。だが彼は、ヘロデヤを恐れて、その意図を果すことを遅らせた。

ヘロデヤは、公然たる手段では、ヨハネを殺すことにヘロデの同意を得ることができないことがわかっていた

ので、策略を用いてその目的を果そうと決心した。王の誕生日に、国の役人たちと宮廷の貴族たちのために宴会が催されることになっていた。ごちそうを食べ、酒を飲むのであった。ヘロデは、こうして油断し、彼女の意のままに動かされるのであった。

その祝いの日になって、王が貴族たちと飲み食いしていると、ヘロデは客への余興として踊りをおどらせるために娘を宴会場にやった。サロメは青春の盛りで、その肉感的な美しさは酒に酔った貴族たちの官能をとりこにした。こうした宴会の席に宮廷の婦人たちが現われるのは習慣ではなかったが、このイスラエルの祭司たちと君たちの娘が、客を楽しませるために踊ったとき、へつらいのお世辞がヘロデによせられた。

王は酒のためにもうろうとなっていた。情欲が支配し、理性が失われていた。彼の目には浮かれている客と、ごちそうのテーブルと、きらめく酒と、輝いているあかりと、目の前で踊っている若い娘のいる享樂の広間しか見えなかった。一瞬間向こう見ずな気持ちになった王は、自分の領地の高官たちの前でいばれるような見せびらかしを何かやってみたいと思った。彼は、ヘロデヤの娘に向かって、願うものはどんなものでも、たとえ国の半分でもやろうと、誓いをもって約束した。

サロメは何を願ったらよいかをきくために、母親のところへ急いで行った。返事は用意されていた。それはバプテスマのヨハネの首であった。サロメは母親の心が復讐(ふくしゅう)に飢えているのを知らなかったもので、この願いをもち出すことをためらった。だがヘロデヤの決心が勝った。若い娘はひき返して、「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆にのせて、それをいただきとうございます」という恐ろしい願いをだした(マルコ六ノ二

五)。

ヘロデはびっくりし、ろうばいした。飲めや歌えの騒ぎはやみ、歡樂の場は不吉な沈黙に支配された。王は、ヨハネの生命をとることを考えると、恐怖にうたれた。しかし誓いのことばを出した以上、気まぐれや軽率に思われたくなかった。誓いは客のためになされたのだから、もし客の一人が約束を果す必要はないと言ったら、彼は、よるこんで預言者のいのちを助けたであろう。ヘロデは、客たちが囚人のために口をきく機会を与えた。彼らは、ヨハネの説教を聞くために遠い道を行ったことがあった。そしてヨハネが犯罪のない人間であり、神のしもべであることを知っていた。彼らは、少女の要求に肝をつぶしたが、酔っぱらっていたので、抗議をさしはさむ者もなかった。天の使者の生命を助けるために声をあげた者はなかった。この人たちは国家の高い信任の地位を占め、重大な責任を負っていたが、ごちそうと酒におぼれて、ついには感覚が麻痺していた。彼らは音楽とダンスの目のくらむような光景に頭がおかしくなり、良心は眠っていた。彼らは沈黙することによって、神の預言者に死の宣告をくだし、ひとりの恥知らずな女の復讐心を満足させた。

ヘロデは、自分の誓いから解放されるのを待ったがむだだった。そこで彼はしぶしぶ預言者の処刑を命じた。すぐにヨハネの首が、王と客の前に持ってこられた。ヘロデに罪の生活を離れるように忠実に警告した唇は永遠にとじられた。人々に悔い改めを呼びかけるその声は二度ときかれないのであった。一夜の歡樂は、最も偉大な預言者の一人の生命を代価とした。

ああ、正義の守護者であるべき人々の飲酒によって、何の罪もない人間の生命がどんなにしばしば犠牲にされ

たことだろう。酔わせるさかずきを唇にあてる者は、正気を失わせる酒の力によって犯すかも知れないあらゆる不正に対して責任がある。感覚を麻痺させることによって、彼は冷静に判断することも、善悪のはっきりした識別力も持つこともできない。彼は、サタンが彼を通して罪のない者をしいたげ、滅ぼすために働く道を開くのである。「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、これに迷わされる者は無知である」(箴言二〇ノ一)。こうして「公平はつしるに退けられ、……悪を離れる者はかすめ奪われる」(イザヤ書五九ノ一四、一五)。同胞の生命の支配権を持っている人々は、飲酒に身をまかせるときに罪に問われる。法律を執行する者はみな法律を守る者でなければならない。彼らは自制のできる人間でなければならない。彼らは活発な知力と高い正義感を持つために、知的靈的肉体的な能力を完全に統御する必要がある。

バプテスマのヨハネの首がヘロデヤのところへ持つてこられると、彼女は悪魔的な満足をもってそれを受け取った。彼女はこの復讐を喜び、これでヘロデの良心はもう苦しめられないとうぬぼれた。だが彼女の罪からは何の幸福も生じなかった。彼女の悪名は高くなっていきまわれ、一方ヘロデは、預言者の警告に悩まされたときよりもっとひどい後悔に苦しめられた。ヨハネの教えの影響は沈黙させられなかった。それは世の終りにいたるまで、各時代にわたってひろがるのであった。

ヘロデの罪は、いつも彼につきまとった。彼は罪を犯した良心の責めからのがれようとたえず努力していた。ヨハネについての彼の確信はゆるがなかった。ヨハネの自己犠牲的な生活と、その厳粛で熱心な訴えと、健全な判断にもとづく勧告とを思い浮べ、そして彼の死のいきさつを思い出すと、ヘロデは心が安まらなかった。国務

に従事し、人々から尊敬を受けるときに、彼は笑顔と威厳のある態度とを保っていたが、一方には、わざわざ自分の上にのぞんでいるという心配で、いつも重い不安な心がかくされていた。

ヘロデは、神には何一つかくすことができないというヨハネのことに深い感銘を受けていた。神がどこにでも臨在しておられること、宴会場の浮れ騒ぎをざらんになったこと、ヨハネの首を切るようにとの命令を聞かれたこと、ヘロデヤの狂喜と彼女を譴責した者の切られた首に彼女があげせた侮辱をざらんになったことなどを、ヘロデはさとった。ヘロデが預言者ヨハネの口からきいていた多くのことが、いま荒野の説教のときよりもっとはつきり彼の良心に語りかけた。

ヘロデは、キリストのみわざについて聞いたとき、非常に心配した。彼は、神がヨハネを死人の中からよみがえらせ、罪を責めるために、もっと大きな力をもってつかわれたのだと思った。彼は、ヨハネが自分と自分の家に罪の宣告をくだすことによって、彼の死刑に復讐するのではないかとたえず心配していた。ヘロデは、神が罪の行為の結果として宣言しておられる通りのものを自ら刈り取っていた。すなわち「その国々の民のうちあなたは安きを得ず、また足の裏を休める所も得られないであろう。主はその所で、あなたの心をおのかせ、目を衰えさせ、精神を打ちしおれさせられるであろう。あなたの命は細い糸にかかっているようになり、夜昼恐れおののいて、その命もおぼつかなく思うであろう。あなたが心にいだく恐れと、目に見るものによって、朝には『ああ夕であればよいのに』といい、夕には『ああ朝であればよいのに』と言うであろう」と宣告されている(申命記二八ノ六五―六七)。罪人自身の思いが彼の告発者であって、やましい良心のとがめという針ほど鋭い痛みは

ない。それは彼に夜も昼も休みを与えないのである。

多くの人々の心にとって、バプテスマのヨハネの運命は、深い神秘につつまれている。なぜヨハネは牢獄の中で衰弱し、死ぬがままに放っておかれたのかと彼らは質問する。われわれ人間の目では、この暗い摂理の神秘を見通すことはできない。しかしヨハネはキリストと苦難を共にしたにすぎないのだということをおぼえているとき、神に対するわれわれの信頼は決して動揺させられることがない。キリストに従う者はみな犠牲の冠をかぶるのである。彼らは、かならず利己的な人々から誤解され、サタンの激しい攻撃のまとなる。サタンの王国は、この自己犠牲の原則を滅ぼすために建てられているのであって、彼はどこでもこの原則があらわされると戦つのである。

ヨハネの子供時代にも、青年時代にも、おとなになってからも、堅固な志操と道徳的な力が特に目立っていた。「主の道を備えよ。その道筋をまつすぐにせよ」と叫ぶヨハネの声が荒野に聞こえたとき、サタンは自分の王国の安全を心配した(マタイ三ノ三)。罪の深さが、人々がふるえあがるような調子でばくろされた。サタンの支配下にあつた多くの人々に対する彼の権力はうち破られた。サタンは、バプテスマのヨハネを、神に対する完全な献身の生活からひき離そうと根気よく努力したが、失敗だった。サタンはまたイエスにうち勝つことにも失敗した。荒野の試みで、サタンは敗北したので、その怒りは大きかった。いま彼は、ヨハネを打つことによってキリストに悲しみを与えようと決心した。彼は、自分が罪にひき入れることのできなかったおかたを苦しめようと思つたのである。

イエスはご自分のしもべを救い出すために手をお出しにならなかった。イエスはヨハネが試練に耐えることをご存じだった。救い主は、よるこんでヨハネのもとに行き、ご自分がそこにおられることによって暗い牢獄を明るくしようと思われたことだろう。だがイエスは、ご自分を敵の手に渡して、その使命を危険にさらすようなことをなさらなかった。イエスはよるこんでご自分の忠実なしもべをお救いになりたかった。だが後年牢獄から死へ移らねばならない幾千の人々のために、ヨハネは、殉教のさかずきを飲むのであった。イエスに従う者たちが、神と人とに捨てられたようにみえながらひとりさびしく獄舎の中で弱りはてたり、剣やごうもんや火あぶりの刑で殺されたりするとき、キリストご自身がその忠実さについてあかしされたバプテスマのヨハネが同じ経験を味わったことを思って、彼らの心は、どんなにかささえられることだろう。

サタンは、神の使者の地上生活を中断することをゆるされた。だがこの滅ぼす者も、「キリストと共に神のうちに隠されている」生命には手をつけることができなかった(コロサイ三ノ三)。サタンは、キリストに悲しみを与えたことに狂喜したが、ヨハネを征服することに失敗した。死そのものはヨハネを永遠に誘惑の力のとどかないところにやってしまったにすぎなかった。この戦いで、サタンは自分自身の性格をばくろしていた。宇宙の目の前で、彼は神と人とに対する敵意をはっきりあらわした。

ヨハネに奇跡的な救助は与えられなかったが、彼は捨てられなかった。彼は、いつも天からの天使たちを友とし、天使たちがキリストについての預言と聖書のとうとい約束を彼の目の前に開いた。それが彼の心のささえとなり、それはまたその後の時代の神の民の心のささえとなるのであった。バプテスマのヨハネに、その後につづ

く者たちと同じように、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」との保証が与えられた(マタイ二八ノ二〇)。

もし神の子らが始めから終りを見通すことができ、神の共労者として自分の果している栄光ある目的をみとめることができたなら、彼らは、神がみちびかれる以外の道を決して選ばないであろう。天に移されたエノクも、火の車で天へのぼったエリヤも、ただひとり牢獄の中で殺されたバプテスマのヨハネより偉大であつたのでもなければ、彼よりとうとばれたのでもない。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わっている」(ペリピ一ノ二九)。天が人に与えることのできるすべての賜物の中で、キリストと共にその苦難にあずかることは、最も重い信任であり、最高の榮譽である。

「神の国は近づいた」

「イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、『時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ』」（マルコ一四、一五）。

メシヤの来臨は最初にユダヤで発表された。エルサレムの宮で、先駆者の誕生が、祭壇の前で奉仕していたザカリヤに予告された。ベツレヘムの丘の上で、天使たちがイエスの誕生をふれ知らせた。エルサレムへは博士たちがメシヤをさがしにきた。宮の中で、シメオンとアンナが、イエスが神のみ子であることをあかしした。「エルサレムとユダヤ全国」は、バプテスマのヨハネの説教を聞いた。サンヒドリンの代表者たちは、群衆といっしょに、イエスについてのヨハネのあかしを聞いた。ユダヤで、キリストは、最初の弟子たちを受け入れられた。イエスの公生涯の初めの大部分は、ここで送られた。宮のきよめにあらわれた神性のひらめき、いやしの奇跡、その口から出た天来の真理の教え、そうしたことのすべては、ベテスタでのいやしののちに、イエスがサンヒドリンの前で宣言されたこと、すなわちイエスが永遠の神のみ子であることを告げていた。



イエスはみ国について、群衆にはのみこめないようないることを弟子たちに語られた。救い主は、教えたりいやしたりしながら、ガリラヤを旅行されたが、うえかわいている人々はいのちのことばを食べた。

もしイスラエルの指導者たちが、キリストを受け入れていたら、イエスは、世に福音を伝える使者となる栄誉を彼らにお与えになったのである。神の国と恩恵とを告げ知らせる者となる機会は、最初に彼らに与えられた。しかしイスラエルはおとずれの時を知らなかった。ユダヤ人の指導者たちのねたみと不信は、公然たる憎悪心へ発展し、民の心はイエスから離れた。

サンヒドリンは、キリストの使命を拒否し、イエスの死刑を決心していた。そこでイエスは、エルサレムから、祭司たちから、宮から、宗教界の指導者たちから、また律法によって教育された民から離れて、使命を宣伝するため、万国の民に福音を伝える者たちを集めるために、ほかの階級に向かわれた。

キリストの時代に人類の光と生命が、教会当局によって拒否されたように、それはつづく各時代においても拒否された。キリストがユダヤからしりぞかれた歴史は、幾度もくりかえされた。宗教改革者たちが神のみことばを説いたとき、彼らは、国教会から分離する考えはなかった。しかし宗教界の指導者たちが、光に対して寛容な態度を示そうとしなかったので、光を持った人たちは、真理にあこがれている他の階級の人たちをさがさねばならなかった。今日宗教改革者たちに従う者であることを自称している人々の中には、彼らの精神に生きている者が少ない。神のみ声をもとめて耳をかたむけ、真理がどんな形で示されようと、それを受け入れる用意のできている人は少ない。宗教改革者たちの足跡に従う者たちは、神のみことばのはっきりした教えを宣言するために、愛する教会から離れなければならない場合がたびたびある。また光を求めている人たちは、神に服従するために、この同じ教えによってやむなく父祖たちの教会から離れなければならないことが幾度もある。

ガリラヤの人たちは、エルサレムのラビたちから、無作法で、無教育だといって軽蔑されたが、救い主にとっては、はるかに有望な働き場であった。彼らは、ラビたちよりも熱心で、誠実で、頑迷さに支配されていなかった。彼らの心は、真理を受け入れるのにもっと広く開かれていた。イエスがガリラヤに行かれたのは、世間から離れたり、ひとりでいたりするためではなかった。当時この地方は、人口の多い土地で、ユダヤよりもずっと多くの他国人がまざっていた。

イエスが教えたり病人をいやしたりしながらガリラヤを旅行されると、町や村から、群衆がみもとに集まってきた。ユダヤや隣接の地方からさえ多くの人々がやってきた。たびたびイエスは、人々から身をかくされねばならなかった。民の熱心が高まってきたので、ローマ当局に反乱の不安を感じさせないように用心する必要がある。この世界にとって、このような時代はこれまでかつてなかった。天の神が、人々のもとにくだられたのである。イスラエルの救いを長い間待って、飢えかわいていた魂は、いま恵み深い救い主の恩恵のふるまいにあずかった。

キリストの説教の主旨は、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」であった(マルコ一ノ一五)。このように、救い主ご自身によって与えられた福音の使命は、預言に基づいていた。イエスが「時は満ちた」と宣言されたその「時」は、天使ガブリエルによってダニエルに知らされた期間のことであった。「あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められています。これはとがを終らせ、罪に終りを告げ、不義をあがない、永遠の義をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なる者に油を注ぐためです」と天使は言った

(ダニエル書九ノ二四)。預言の一日は一年を表わしている(民数記一四ノ三四、エゼキエル書四ノ六参照)。七十週すなわち四百九十日は、四百九十年を表わす。この期間の起算点が与えられている。「エルサレムを建て直せ」という命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい」つまり六十九週、すなわち四百八十三年である(ダニエル書九ノ二五)。エルサレム再建の命令は、アルタシャスタ・ロンギマナスの布告によって完結されたが、それは紀元前四五七年の秋に発効した(エズラ記六ノ一四、七ノ一英訳聖書注、九参照)。この時からかぞえて、四百八十三年は、紀元二七七年に当る。預言によれば、この期間には、あぶらそそがれたあかたメシヤに及ぶことになっていた。紀元二七七年に、イエスは、バプテスマの時、聖霊のあぶらを受け、その後すぐに公生涯におはいりになった。そのとき、「時は満ちた」とのメッセージが宣伝されたのであった。

それから天使は、「彼は一週の間(七年間)多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう」と言った(ダニエル書九ノ二七)。救い主が公生涯におはいりになってから七年の間、福音は、特にユダヤ人に伝えられるのであった。すなわち三年半はキリストご自身によって、その後は使徒たちによって、福音が伝えられるのであった。「彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう」(ダニエル書九ノ二七)。紀元三一年の春、まことのいけにえであられるキリストは、カルバリーでささげられた。その時神殿の幕がまっ二つに裂けて、犠牲制度の神聖さと意義とが失われたことを示した。地上のいけにえと供え物とが廃される時がきたのであった。

一週―七年―は紀元三四年に終った。その時、ユダヤ人は、ステパノを石で打ち殺したことによって福音の拒

否を決定的なものにした。迫害されたために国外に離散した弟子たちは、「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」(使徒行伝八ノ四)。それからまもなく、迫害者サウロが改心して、異邦人への使徒パウロとなった。

キリストの来臨、キリストが聖霊によってあぶらをそがれること、キリストの死、異邦人に福音が伝えられることなどについて、その時期がはっきり示されていた。こうした預言をさとり、それがイエスの使命の中に成就されているのをみとめることは、ユダヤ民族の特権であった。キリストは弟子たちに、預言の研究が重要であることを強調された。イエスは、彼らの時代についてダニエルに与えられた預言にふれ、「読者よ、悟れ」と言われた(マタイ二四ノ一五)。復活後キリストは、「聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを」弟子たちに説明された(ルカ二四ノ二七)。救い主は、すべての預言者たちを通してお語りになっていた。「彼ら……のうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした」のであった(ペテロ第一・一ノ一一)。

ダニエルのところへ神からのみことばをもってきたのは、神のみ子に次ぐ位にある天使ガブリエルであった。愛するヨハネに将来のことを示すために、キリストからつかわれたのも、「彼の天使」ガブリエルであった。そしてこの預言のことばを朗読し、聞き、そこに書かれていることを守る者に、祝福が宣告されている(黙示録一ノ三参照)。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」「隠れた事はわれわれの神、主に属する」が、「表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属」するのである

(アモス書三ノ七、申命記二九ノ二九)。神はこれらのことをわれわれにお与えになっており、神の祝福は、預言の書を祈りのうちに、敬虔な思いで研究する者に伴うのである。

キリスト初臨の使命が、キリストの恩恵の王国を宣言したように、キリスト再臨の使命は、キリストの栄光の王国を宣言している。そして第二の使命は、第一の使命と同じに、預言に基づいている。末の世についてダニエルに言われた天使のことばは、終りの時に理解されるのであった。その時になると、「多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」「悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう」と言われている(ダニエル書一二ノ四、一〇)。救い主は、自ら来臨のしるしをお与えになって、こう言うておられる。「このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい」「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい」「これらの起るうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」(ルカ二一ノ三一、三四、三六)。

われわれは、これらの聖句に予告されている時期に達した。終りの時はき、預言者たちのまぼろしは解明され、彼らの厳粛な警告は、主が栄光のうちにこられるのが迫っていることを、われわれにさし示している。

ユダヤ人は、神のみことばの解釈とその適用とを誤り、彼らはおとずれの時がわからなかった。キリストと使徒たちによる伝道の幾年間、——選民にとって恩恵のとうとい最後の幾年間を——彼らは、主の使者たちを殺

す計画のうちにすごした。彼らは、この世の野望に熱中していたので、彼らに靈的王国が提供されてもむだだった。同じように今日も、人々の思いは、この世の王国のことに奪われ、彼らは急速に成就しつつある預言と、すみやかにやってくる神の王国のしるしについて何の注意も払っていない。

「しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲つことはないであろう。あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない」(テサロニケ第一・五ノ四、五)。主の再臨の時日を知ることとはできないが、その日が近いことはわかる。「だから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう」(テサロニケ第一・五ノ六)。

「この人は大工の子ではないか」

本章はルカ四ノ一六―三〇にもとづく

ガリラヤでのキリストの公生涯の明るい日々、ひとすじの影がさした。ナザレの人々が、キリストをこぼんだのである。「この人は大工の子ではないか」と彼らは言った(マタイ一三ノ五五)。

イエスは、子供の時にも青年時代にも、ご自分の兄弟たちといっしょに、ナザレの会堂で礼拝された。公生涯が始まってから、イエスは、ナザレの人々から離れておられたが、彼らは、イエスの身に起った出来事について知らなかったわけではなかった。イエスがふたたび彼らの中に姿を現わされたとき、彼らの興味と期待とは最高潮に達した。そこにはイエスが幼児の時からおられる親しい姿や顔がみられた。そこにはイエスの母や兄弟たちや姉妹たちがいた。イエスが安息日に会堂にはいつて行かれて、礼拝者たちの中に座を占められると、すべての人々の目が、彼に向けられた。

その日のきまった礼拝に、長老は、預言者の書を読み、栄光ある統治をもたらし、一切の圧制をとり除いてくださるきたるべきおかたを依然として待望するようにと、民にすすめた。長老は、メシヤの来臨が近いという証

拠をくりかえして述べ、聴衆を励まそうとつとめた。彼は、キリスト来臨の栄光を説き、キリストがイスラエルを救うために軍の首長としておいでになるという思想を強調した。

ラビが会堂に出席している時には、そのラビが説教をするようになっており、またイスラエルの人ならだれでも、預言者の書を朗読してよかった。この安息日に、イエスは礼拝の役割をたのまれた。彼は、「聖書を朗読しよつとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡された」(ルカ四ノ一六、一七)。イエスの読まれた聖句は、メシヤについて言われたことばとして知られているものであった。

「『主の御霊がわたしに宿っている。』

貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、

わたしを聖別してくださいましたからである。

主はわたしをつかわして、

囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、

打ちひしがれている者に自由を得させ、

主のめぐみの年を告げ知らせるのである』

イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。…
…彼らはみなイエスをほめ、またその口から出てくるめぐみの言葉に感嘆し」た(ルカ四ノ一八―二二)。

イエスは、ご自身についての預言の生きた解説者として、人々の前にお立ちになった。イエスはいま読まれたことばを説明するにあたって、メシヤはしいたげられる者を救う者、とりこを解放する者、苦しんでいる者をいやす者、盲人に視力を回復する者、世に真理の光をあらわす者であるとお語りになった。イエスの印象的な態度と、そのみことばのすばらしい意味とは、聴衆がこれまでかつて感じたことのなかった力をもって、彼らを感じさせた。神の力の波があらゆる障壁をうちこわした。モーセのように、彼らは目に見えないおかたを見た。彼らは、心が聖霊に動かされるままに、熱烈なアーメンと賛美とをもって主に答えた。

しかしイエスが、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と宣言されたとき、彼らは急にわれに返って、自分たちのことと、いままで語りかけておられたイエスの主張とについて考えた(ルカ四ノ二二)。アブラハムの子であるイスラエル人が、とりこの状態にある者として、表わされた。彼らは悪の力から救い出されなければならない囚人、くらやみの中にあって真理の光を要している者として、話しかけられた。彼らの誇りは傷つけられ、不安が生じた。イエスのみことばは、イスラエル人のためのイエスの働きが、彼らの望んでいたものとはまったく異なったものであることを示した。彼らの行為はあまりにもきびしく調べられるかも知れなかった。彼らは、外面的な儀式を厳格に守っていたにもかかわらず、はつきりした鋭い目によって吟味されることをしりごみした。

このイエスは何者だと、彼らはたずねた。メシヤの栄光をご自分のものとして主張されたこのおかたは、大工の息子で、父親のヨセフといっしょに、大工仕事をしておられた。人々は、イエスが骨折って丘をのぼりくだり

されたのを見、イエスの兄弟姉妹たちと知り合いであり、イエスの生活と労働を知っていた。彼らは、イエスが子供から青年へ、青年からおとなへと成長されるのを見てきた。イエスの生活にけがれはなかったが、彼らはイエスが約束のおかたであることを信じようとしなかった。

新しい王国についてのイエスの教えと、長老からきいた話とは何という相違があることだろう。イエスは、彼らをローマ人から救い出すことについてはひとことも言われなかった。彼らは、イエスの奇跡について聞き、その力が彼らの利益のために用いられるように望んでいたが、そのような目的に用いられる気配はみられなかった。

彼らは、疑いに対してとびらを開いたので、彼らの心をさしあたってやわらげることはますます困難になった。サタンは、盲人の目がその日に開かれたり、とりこになっている魂が自由になったりするようなことはさせないと決心していた。彼は非常な努力をもって、人々を不信の中につないでおくために働いた。彼らは、自分たちに話しかけられたのが救い主であるという確信に動かされていたのに、すでに与えられたしを重視しようとしなかった。

しかしイエスは、いま彼らの心の奥底の秘密をばくろすることによって、ご自身の神性の証拠を彼らに示された。「そこで彼らに言われた、『あなたがたは、きっと「医者よ、自分自身をいやせ」ということわざを引いて、カペナウムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであらう』。それから言われた、『よく言うておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである。よく聞いておきなさい。エリヤ

の時代に、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大きな闇があった際、そこには多くのやもめがいたのに、エリヤはそのうちのだれにもつかわされないで、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわれた。また預言者エリシャの時代に、イスラエルには多くのらい病人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリアのナアマンだけがきよめられた」（ルカ四ノ二三―二七）。

預言者たちの生涯の出来事をこのようにのべることによって、イエスは、聴衆の疑問に応じられた。神が特別な働きのためにお選びになったしもべたちは、心のかたくなな、不信な民のために働くことをゆるされなかった。しかし感ずる心と信ずる信仰とを持った者たちは、預言者たちを通しての神の力の証拠によって特別に恵まれた。エリヤの時代に、イスラエルは神から離れた。彼らは、罪から離れず、主の使者たちを通して与えられるみたまの警告をこぼんだ。こうして彼らは、神の祝福が与えられる通路を自らたちきった。主は、イスラエルの家々をみすごして、選民に属していないひとりの婦人のいる異教の地をご自分のしもべの避難所とされた。この女は、受けた光に従い、神がご自分の預言者を通して送られたもつと大きな光に心を開いていたために恵まれた。

エリシャの時代に、イスラエルのらい病人たちがみすごされたのも同じ理由からであった。しかし異教国の貴族ナアマンは、正義の信念に忠実であって、助けが非常に必要であることを感じていた。彼は、神の恩恵の賜物を受ける状態にあった。彼は、らい病からきよめられたばかりでなく、真の神を知る特権に恵まれた。

神の前におけるわれわれの立場は、われわれが受けた光の量によってきまるのではなく、われわれが持っているものをどう用いるかによってきまるのである。だからたとえ異教徒であっても、みとめることができるかぎ

り正しいことをえらぶとき、彼らは、大きな光を与えられて、神に仕えると公言しながらその光を軽視し、その日常生活が告白と矛盾しているような人たちよりも、好ましい状態にあるのである。

会堂の聴衆に対するイエスのみことは、おのれを義とする彼らの思いをうちくだき、彼らが神から離れ、神の民としての資格を失っているという苦々しい事実を、彼らの心にきざみつけた。彼らの真の状態が目の前に示されたとき、すべてのことはが刀のように切れた。彼らは、イエスが最初彼らのうちに起された信仰を、こんどはあざけた。彼らは、貧乏といやしい身分の出であるおかたを普通の人間以上のおかたとしてみとめようとしなかった。

彼らの不信は、悪意をはらんだ。サタンが彼らを支配した。彼らは怒って、救い主に反対の声をあげた。いやし、回復することを使命としておられるおかたから、彼らは離れてしまった。そしていま彼らは、滅ぼす者であるサタンの特性をあらわした。

イエスが、異邦人に祝福が与えられることについて言われると、聴衆の激しい国民的な誇りが呼びさまされ、イエスのみことは、騒然たる声にかき消された。この人々は、律法を守っていることを誇っていた。しかしいま彼らの偏見が傷つけられると、彼らは、いまにも殺人を犯そうとした。集会は中止され、人々は、イエスに手をかけて会堂から突き出し、町の外へつれ出した。みな何とかしてイエスを殺そうとしているようにみえた。彼らはイエスをまっさかさまに突き落すつもりで、絶壁のいただきに追いたてた。叫び声とのろいのが大気を満たした。イエスに石を投げつけている者もあった。そのとき突然イエスの姿が、彼らの中から消えた。会堂の中

でイエスのそばにいた天の使者たちは、この狂気した群衆のまん中であっても、イエスとともにいた。彼らはイエスを敵からおおいかくし、安全な場所へ案内した。

同じように天使たちは、ロトを保護して、ソドムのまん中から無事につれだした。同じように天使たちは、山の小さな町で、エリシャを守った。まわりの山々がシリヤ王の軍馬と戦車と兵士の大軍でいっぱいになったとき、エリシャは、近くの山々の斜面が神の軍勢、——主のしもべをとりまいて火の軍馬と戦車であわれているのを見た。

このように、どの時代にも、天使たちは、キリストに忠実に従う人たちの近くにいた。勝利したいと望むすべての人に対して、おびただしき悪の同盟軍が勢ぞろいするが、キリストは、目に見えないもの、すなわち神を愛するすべての人を救うためにそのまわりに天の軍勢が陣を張っているのを見せたいとお思いになる。天使たちの守りによって、われわれがどんなに目に見える危険や目に見えない危険から守られたかということは、永遠の光のうちに神の摂理が明らかにされるときまで、決してわからない。その時になってわれわれは、天の全家族が地上の家族に関心をもっていたこと、また神のみ座からの使者たちが、日々われわれの歩みにつきそっていたことを知るのである。

イエスが会堂で預言者の書から読まれたとき、彼は、メシヤの働きについて描写されている最後のことをお読みにならなかった。イエスは、「主の恵みの年……を告げさせ」と読まれて、「われわれの神の報復の日」ということばを省略された（イザヤ書六一ノ二）。この預言のあとの部分は、初めの部分と同じに、事実なのである。

イエスは沈黙することによって、この事実を否定されたのではなかった。この最後のことは、聴衆がよるこんで強調し、その成就を望んでいることばだった。彼らは、異教徒に刑罰を宣言したが、彼ら自身の不義がほかの人たちの不義よりもっと大きいことをみとめていなかった。彼らは、異教徒にあわれみをかけることをこばみがちであつたが、その彼ら自身が最も深いあわれみを必要としていた。イエスが会堂で彼らの中にお立ちになったその日は、彼らが天の神の呼びかけを受け入れる機会だった。「神はいつくしみを喜ばれるので、」彼らが罪のために招きつつあつた破滅から、彼らをよるこんでお救いになつたであらう（ミカ書七ノ一八）。

もう一度悔い改めを促さないうちは、イエスは、彼らをあきらめることがおできにならなかった。ガリラヤでの公生涯の終りごろ、イエスは、子供時代のふるさとをもう一度おたずねになつた。ガリラヤで拒否されて以来、イエスの説教と奇跡についての評判は、国じゅうにゆきわたっていた。イエスが人間の力以上のものを持っておられることを、いまはだれも、否定することができなかった。ナザレの人たちは、イエスがよい働きをしながら、また悪魔に押さえつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されたことを知っていた。彼らの周囲には、村じゅうこの家にも病人のうめき声のない村々があつた。イエスがそれらの村々を通りすぎて、病気を全部なおしてくださつたからである。イエスの生活の一つ一つの行為にあらわされたあわれみは、イエスが神からあぶらをそがれたおかたであることを証明した。

ナザレ人は、もう一度イエスのみことばを聞いて、神のみたまに動かされた。しかしいまになつてもなお彼らは、自分たちの間で育てられたこの人が、自分たちとはちがつたおかたであり、自分たちよりもすぐれたおかたで

あることを、みとめようとしなかった。イエスが、ご自分は約束のメシヤであると主張しながら、実際にはイスラエルの立場を拒否されたことについて、すなわちイスラエルが異教の男女よりも神の恩恵を受ける価値がないことを示されたことについて、にがにがしい記憶がまだ彼らの心を苦しめていた。だから彼らは、「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか」とたずねても、イエスを、神からつかわれたキリストとして受け入れようとはしなかった(マタイ一三ノ五四)。彼らが不信仰だったために、救い主は、彼らの中で多くの奇跡を行うことがあできにならなかった。イエスの祝福に心を開いていたのは、少数の人々にすぎなかった。イエスはしぶしぶ立ち去り、ふたたびもどられなかった。

不信の念が一度いだかれると、それはいつまでもナザレの人々を支配した。それはまたサンヒドリンと国民とを支配した。祭司たちと民にとって、聖霊の力のあらわれに対する最初の拒否は、破滅のはじまりであった。自分たちの最初の抵抗が正しかったことを証明するために、彼らはその後もずっとキリストのみことばのあら探しをつづけた。彼らがみたまをこぼんだことは、カルバリーの十字架からエルサレムの滅亡となり、さらに天の風に吹かれるままに、国民の離散となってその頂点に達した。

ああ、キリストはどんなにかイスラエルに真理のとうとい宝を開いてみせようと熱望されたことだろう。しかし彼らの霊的盲目はひどかったので、キリストの王国についての真理を彼らに示すことは、不可能だった。天の神の真理が彼らに受け入れられるのを待っているのに、彼らは、自分たちの教義と無益な儀式とを固守した。いのちのパンが彼らの手の届くところにあるのに、彼らは、もみぐらやいなごまめに金銭を費やした。なぜ彼らは、

神のみことばを開いて、自分たちがまちがっていないかどうかを知るために熱心に調べなかったであろうか。旧約聖書には、キリストの公生涯について、こまかい点まではつきり書かれており、イエスは何度も何度も預言者たちの書から引用して、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と宣告された（ルカ四ノ二一）。もし彼らが正直に聖書を調べ、自分たちの理論を神のみことばに照していたら、イエスは、彼らのかたくなな心にお泣きになる必要はなかったのである。「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまつ」と宣言される必要はなかったのである（ルカ一三ノ三五）。彼らは、イエスがメシヤであられる証拠を知り、また彼らの誇りとしていた都、エルサレムの滅亡というわざわいをまぬかれることができたのである。しかしユダヤ人の心は、道理をわきまえない頑迷さのために小さくなっていた。キリストの教訓は、彼らの品性の欠点をばくろし、悔い改めを要求した。もし彼らがイエスの教えを受け入れるなら、彼らの行為は変化し、彼らの宿望は放棄されなければならない。神からの栄誉を受けるためには、人間の栄誉を犠牲にしなければならない。もしこの新しいラビのこゝとばに従うなら、当時の偉大な思想家や教師たちの意見と反対にならねばならない。

真理は、キリストの時代に人気がなかった。それはわれわれの時代にも人気がない。サタンが、人を高慢にするような作り話をきかせて、真理をいやがる気持を初めて人間のうちにうえつけて以来、真理はいつも不人気であった。われわれは、今日、神のみことばに根拠をもっていない学説や教理に直面しないであろうか。ユダヤ人がその言い伝えを固守したように、人々は、そうした学説や教理を根強く守っているのである。

ユダヤ人の指導者たちは、霊的な誇りに満たされていた。自分があがめられたいという彼らの願望は、聖所の

奉仕にさえあらわれた。彼らは会堂の中の最高の座席を好んだ。彼らは市場であいさつされることをよろこび、人々の口から尊称をたてまつられるのを聞いて満足した。真の敬神の念がうすれるにつれて、彼らはますます言い伝えと儀式とを守ることに熱心になった。

彼らの理解力は、利己的な偏見のために暗くなっていたので、彼らは、罪をさとらせるキリストのみことばの力とキリストのけんそんな生活とを調和させることができなかった。真の偉大さは、外面的な見せびらかしを必要としないということを、彼らは理解しなかった。この人の貧しさは、ご自分がメシヤであるという主張とまったく矛盾しているようにみえた。もしこの人が自ら主張される通りのおかただったら、なぜあんなに気取らないのだろうか、彼らは疑った。もし彼が武力がないことに満足しているのだったら、自分たちの国はどうなるのだろう。長い間期待されていた権力と栄光とによって、諸国民をユダヤ人の都の臣民にすることがどうしてできるのか。祭司たちは、イスラエルが全地を統治するようになると教えたではないか。偉大な宗教家たちがまちがうということがあり得るだろうか。

しかしユダヤ人がイエスを拒否したのは、彼の生活に外面的な栄光がみられなかったからだけではなかった。イエスは純潔そのものであり、彼らは不潔であった。イエスは、非のうちよのない正直の模範として人々の中にお住みになった。欠点のないイエスの生活が、彼らの心を光に照した。イエスの正直さによって彼らの不正直がばくろされた。そのために、彼らのうわべだけのおなししい信心が、明るみに出され、不義の憎むべき性質がばくろされた。このような光は歓迎されなかった。

もしキリストが、人々の注意をパリサイ人に向け、彼らの学問と信心とを称賛されたら、彼らはイエスをよこんで歓迎したのである。しかしキリストが、天の王国は全人類に対する恩恵の賜物だと語られたとき、彼は、ユダヤ人の容認できない宗教の一面を示しておられた。彼ら自身の模範と教えとは決して神への奉仕を好ましいものとするようなものではなかった。彼らが憎みいやがっている者たちにイエスの注意が向けられているのを見て、彼らの高慢な心は激しい怒りに燃えあがった。「ユダ族のしし」のもとに、イスラエルは全世界の国々に高く抜きん出た地位を占めるのだと彼らは自慢していたにもかかわらず、キリストから自分たちの罪を譴責されたり、純潔なキリストの前にいることだけで心のとがめを感じたりするのをがまんするよりは、むしろそつした野心的な望みが裏切られるのをしのぶ方がよいのだった(黙示録五ノ五)。

海べでの召し

本章はマタイ四ノ一八―二二、マルコノ一六―二〇、
ルカ五ノ一―二にもとづく

ガリラヤの海に夜が明けようとしていた。弟子たちは、収穫のなかった一晩の骨折り仕事に疲れて、まだ湖上の漁船にいた。イエスは水ぎわで静かな時間を過ごすためにきておられた。イエスは毎日ご自分のあとについてくる群衆からのがれて、朝早くしばらく休む時間を取りたいと望まれた。しかしまもなく人々が彼のまわりに集まりはじめた。その数はたちまちふえて、イエスは四方から押された。そうしているうちに、弟子たちは陸へあがってきていた。群衆の殺到からのがれるために、イエスはペテロの舟にとび乗られて、岸からすこしひっぱり出すようにと彼に命じられた。これでイエスのお顔はもっとよく見え、みんなに声がきこえるので、イエスは舟から波打ちぎわの群衆にお教えになった。

天使たちは、彼らの光栄ある司令官イエスが漁師の舟にすわられて、波のまにまにあちこちゆられながら、水ぎわまで押しよせてきている群衆に救いのよいおとずれを述べ伝えておられるこの光景をじっと見ていた。天であがめられているおかたが、み国の重要な事ながらを戸外で一般の民衆に告げ知らせておられるのであった。しか



若い者も年よりも、金持ちも貧乏人も、大教師イエスのそばにいようとして、海辺にむらがり集まった。イエスは漁船に腰かけて、み国と救いのよきおとずれについて群衆に語られた。

しイエスの働きにとってこれ以上ふさわしい場面はなかった。湖、山々、ひろがっている畑、地にふりそそぐ日光など、すべてはイエスの教訓を例示し、それを彼らの心に印象づけるための材料となった。だからキリストのどんな教訓もむだにはならなかった。イエスの口から出るひとことひとことが、ある人々にとっては永遠のいのちのことばとなった。

刻一刻と岸べの群衆は数を増した。つえにすぎた老人たち、丘からやってきたがんじょうな百姓たち、湖の骨折り仕事からやってきた漁師たち、商人たちやラビたち、金持ちで教育のある人たち、年よりや若い人たちなど、病気で苦しんでいる者たちをつれて、この天来の教師のみことばをきくためにおしよせた。預言者たちは、このような光景を予見してこう書いた。

「ゼブルンの地、ナフタリの地、

海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、

異邦人のガリラヤ、

暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、

死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」(マタイ四ノ一五、一六)。

イエスが海べで説教されたとき、彼の心の中には、このゲネサレの海べの群衆のほかには他の聴衆があつた。イエスは、後の世まで見渡して、牢獄や裁判所に、あるいは試みや孤独や苦悩の中にいるご自分の忠実な者たちを

ごらんになった。よろこびも戦いも困窮も、すべての光景がイエスの前に示された。まわりに集まった者たちに語られたみことばを通して、イエスはまたこうしたほかの魂にとって、試みの中で望みとなり、悲しみの中で慰めとなり、暗黒の中で天の光となるみことばを語っておられた。ガリラヤの海で漁師の舟の上から語られたその声は、聖霊を通して、世の終りまで人々の心に平安を語っているのがきかれるのであった。

説教が終ると、イエスはペテロに向かって、海へ乗り出してひとあみあげるために網をおろすように命じられた。しかしペテロは落胆していた。一晩じゅうかかって何もとれなかったのである。そのひとりぼっちの時間の間じゅう、彼は牢獄の中でただひとり苦悩しているバプテスマのヨハネの運命について考えていた。彼はイエスと弟子たちの前途や、ユダヤに対する使命の不成功や、祭司たちとラビたちの敵意などについて考えていた。彼自身の商売さえ思わしくなかったので、からっぽの網のそばで見つめていると、落胆のために将来は暗く見えただった。「先生」と彼は言った、「わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみしよう」(ルカ五ノ五)。

水のきれいな湖で、魚を網でとるのに適している時間は夜しかなかった。一晩じゅう骨折ってもうまくいかなかったのだから、昼間網をおろしても望みはないように思えた。しかしイエスが命令されたのだから、弟子たちは、主を愛する気持から、従う気になった。シモンとその兄弟がいっしょに網をおろした。彼らが網をひきあげようとすると、大量の魚が中にはいつていて、網が破れはじめた。彼らはヤコブとヨハネを助けに呼ばねばならなかった。とれた魚を舟にあげてみると、それは舟が二そうともあぶなく沈みそうになるほどいっぱい荷とな

った。

しかしペテロは、いま舟や積荷のことなど頭になかった。彼にとってこの奇跡は、これまで見たほかのどんな奇跡にもまさって神の力のあらわれであった。彼はイエスが自然界のすべてを支配されるおかたであることを知った。神の前にいることによって、彼自身のけがれがあらわされた。彼は、主に対する愛、自分の不信仰の恥ずかしさ、キリストがいやしい人間の肉体をとられたことに対するありがたさ、特に限りなく純潔であられるイエスの前にあつて感じさせられる自分自身のけがれに圧倒された。仲間の者たちが網の中のえものをとりいれている時、ペテロは、救い主の足下にひれ伏して「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」と叫んだ（ルカ五ノ八）。

預言者ダニエルが神の天使の前に死んだようになって倒れたのは、同じように神の聖潔の前に出た時であった。彼は、「わが顔の輝きは恐ろしく変つて、全く力がなくなった」と言った（ダニエル書一〇ノ八）。同じようにイザヤも主の栄光を見たとき、「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」と叫んだ（イザヤ書六ノ五）。欠点と罪をもっている人性が、完全な神性と対照されたとき、彼は自分がまったく足りない、けがれた者であることを感じた。神の偉大さと尊厳を見ることをゆるされた者はみなこのようであった。

ペテロは「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」と叫んだが、それでもイエスから離れることができない気持で、その足下にすがりついた。救い主は「恐れることはない。今からあなたは人間をとる

漁師になるのだ」とお答えになった（ルカ五ノ一〇）。イザヤに神からのメッセージがゆだねられたのは、彼が神の聖潔と自分自身の無価値とをみとめてからであった。ペテロがキリストの働きに召しを受けたのは、彼が自我を放棄し、神の力によりたのびようになってからであった。

この時まで、弟子たちはだれも、イエスの共労者として完全に一致していなかった。彼らはキリストの奇跡の多くを目に見、キリストの教えを耳にきいていたが、これまでの職業をまったく捨てていなかった。バプテスマのヨハネの投獄は彼らの全部にとって苦い失望であった。もしこうしたことがヨハネの使命の結果であるならば、宗教界の全部の指導者たちが一つになってイエスに反対するとき、彼らは主についてほとんど望みを持つことができないであろう。こういう事情だったので、彼らはしばらくの間魚とりの仕事にもどる方が安心だった。ところがいまイエスは、これまでの生活をすててイエスと利害を共にするようにと彼らを召された。ペテロはすでに召しを受け入れていた。岸べにお着きになると、イエスはほかの三人に「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」とお命じになった（マタイ四ノ一九）。すぐに彼らはすべてをすててイエスに従った。

彼らに網と漁船をすてるように求める前に、イエスは、神が彼らの必要を満たしてくださるという保証をお与えになった。ペテロの舟を福音の働きのために用いたことは豊かに報いられた。「彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さる」主は、「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」と言われた（ローマー〇

ノ一二、ルカ六ノ三八）。このはかりをもって、主は弟子たちの奉仕に報いられた。主の奉仕に払われたすべての犠牲は「神の恵みの絶大な富」にしたがってつぐなわれるのである（エペソ二七）。

キリストから離れて湖ですごしたあの悲しい夜の間に、弟子たちは不信仰に苦しめられ、収穫のない骨折り仕事に疲れた。しかしイエスがそばにおられるときに彼らの信仰は燃え、よろこびと成功とが与えられた。われわれの場合も同じである。キリストを離れるとき、われわれの働きには収穫がなく、不信と不満におちいりがちである。しかしイエスがそばにおられ、イエスのさしずの下に働くとき、われわれはイエスの力の証拠を見てよろこぶのである。魂を落胆させるのがサタンの働きであり、信仰と望みを起させるのがキリストの働きである。この奇跡によって弟子たちに与えられたもっと深い教訓は、われわれにとってもまた一つの教訓である。すなわち、みことばによって海から魚を集めることがおできになったおかたは、またご自分のしもべたちが「人間をとる漁師」となることができるように、人々の心を感動させ、これをご自分の愛のきずなでみもとにひきよせることがおできになるのである（マタイ四一九）。

このガリラヤの漁師たちは、いやしい、無学な人たちであつた。しかし世の光であられるキリストは、彼らを選ばれた立場にふさわしい資格のある者となさることが十分おできになった。救い主は教育を軽んじられなかった。なぜなら神の愛に支配され、神の奉仕に献身するとき、知的な教養は一つの祝福であるからだ。しかしイエスは当時の賢人たちをみすごされた。それは彼らが自信が強すぎて、悩んでいる人類に同情することができず、ナザレの人イエスの共労者となることができなかったからである。偏狭な彼らはキリストから教えられるこ

とを輕蔑した。主イエスは、主の恵みを伝えるのにさまたげるものがない水路となる人々の協力をお求めになる。神と共に働く者になりたいと思う者がだれでも学ばねばならない第一のことは、自分にたよらないという教訓である。その時彼らはキリストの品性を与えられる用意ができる。これはどんなに科学的な学校の教育によっても得られないものである。それは天来の教師イエスからのみ得られる知恵の実である。

イエスは無学な漁師たちをお選びになったが、それは彼らが当時の言い伝えやまちがった慣習によって教育されていなかったからである。彼らは生れつき才能を持った人たちで、謙遜で教えやすく、キリストがご自分の働きのために教育なさることのできる人たちであった。世の一般の人たちの中には、もしその能力が呼びさまされて活動するならば、世の中の最も尊敬されている人々と同等の立場まで高められるのに、そうした能力を持っていることに気がつかないで、日々の骨折り仕事を根気よくくりかえしている人々がたくさんいる。このような眠っている才能をめざめさせるにはじょうずな手がふれなければならない。イエスがご自分の共労者とするために召されたのはこういう人たちであった。こうしてイエスは、彼らにご自分とまじわる特権をお与えになった。世のえらい人たちは決してこのような教師をもたなかった。弟子たちが救い主の訓練を受けたとき、彼らはもはや無知でも無教養でもなかった。彼らは頭も品性もイエスのようになり、世の人々は彼らがイエスと共にいた者であることを知った。

教育の最高の働きは知識だけを与えることではなくて、それは心と心、魂と魂とがふれ合うことによって受けられる生きた力をさずけることである。いのちを生ずることができるのはいのちだけである。だから神のいのち

に三年の間日々接触していた彼らの特権はどんなに大きかったことだろう。この神のいのちからのいのちを与えるあらゆる衝動が流れ出て世の祝福となったのである。愛された弟子ヨハネはほかのすべての仲間たちにまさって、このすばらしいのちの力に屈服した。彼はこう言っている。「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告知知らせるのである」「わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」(ヨハネ第一・一ノ二、ヨハネ一ノ一六)。

主の使徒たちの中には、彼らにとって誇りとなるようなものは何もなくあった。彼らの働きの成功はただ神のおかげであつたことは明らかであつた。この人たちの生涯、彼らの築いた品性、彼らを通して神が達成された偉大なみわざは、すなおで従順なすべての者に神がどういうことをしてくださるかということについてのあかしである。

キリストを最も多く愛する者は最も多くよいことをする。自我を捨てて、聖霊が心に働かれる余地をつくり、神にまったく献身した生涯を送る者の有用さには限りがない。もし人々が、不平を言ったり、途中で弱つたりしないで、必要な訓練に耐えるなら、神は日々に、時々刻々に彼らを教えてくださる。神はご自分の恵みをあらわそうと熱望しておられる。もし神の民が障害をとり除くなら、神は人間という水路を通して救いの水の豊かな流れをそそがれる。もしいやしい身分の人たちを励まして彼らのできるよいことをさせるならば、またもし彼らの上にその熱意をおさえるような抑制の手がおかれないならば、いまキリストの働き人が一人しかいないところに百人の働き人がいるであろう。

もし人々が神に屈服するならば、神は彼らをそのままに受け入れて、ご自分の奉仕のために彼らを教育される。神のみたまが魂に受け入れられるとき、その魂のあらゆる才能がめざめさせられる。あますところなく神にささげられた心は、聖霊のみちびきのもとに、調和のとれた発達をとげ、神のご要求を理解しこれを果すように力づけられる。動揺しがちな弱い性格は、力強い、しっかりした性格に変えられる。ふだんの献身によって、イエスと弟子との間に密接な関係が結ばれ、そのクリスチャンは心と品性がキリストのようになる。キリストとつながることによって、彼はもつとはつきりした、もつと広い見解を持つようになる。彼の判断力はますます鋭くなり、その意見は一層つりあいのとれたものとなる。キリストのために役立ちたいと熱望する者は、義の太陽キリストのいのちを与える力によって活気づけられ、神の栄えのために豊かな実を結ぶことができる。

科学や芸術において最高の教育を受けた人々が、世の人々から無学のレッテルをはられているようないやしい身分のクリスチャンからとうとい教訓を学んできた。しかしこれらの無名の弟子たちは、すべての学校の中の最高の学校で教育を受けたのであった。彼らは、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」といわれているキリストの足下にすわったのであった(ヨハネ七ノ四六)。

カペナウムで

イエスは、あちろちろへ旅行されるあいまにはカペナウムに住まれたので、この町はイエスご自身の町として知られるようになった(マタイ九ノ一参照)。この町はガリラヤの海の沿岸にあつて、ゲネサレの美しい平野にまたがっているとはまではいえないが、その境界の近くにあつた。

ガリラヤ湖は深くほみにあるので、その岸に沿った平野は南国のようなあだやかな気候である。キリストの時代には、ここにしゆるの木やオリーブの木が茂っていた。ここにはまた果樹園やぶどう園や緑の野や、はなやかに咲きほこる美しい花々がみられ、それらはすべてがけから吹き出してくる新鮮な水によってうるおされていた。湖の沿岸や、すこし離れて湖をとりまいている丘には、町や村が点々とあつた。湖は漁船でいっぱいだった。どこでも多忙で活動的な生活の動きがみられた。

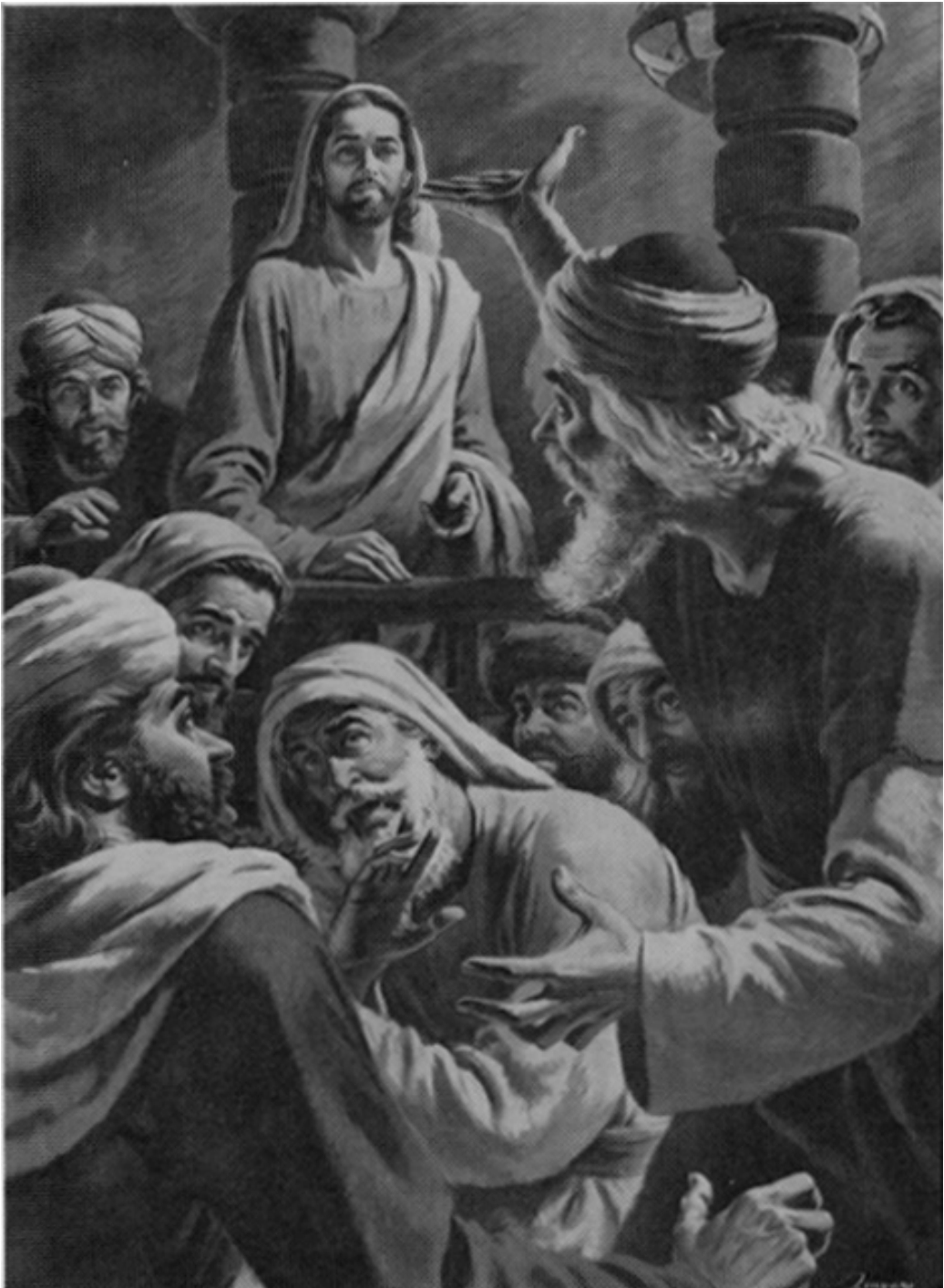
カペナウムそのものは救い主の働きの中心地となるのに非常に適していた。この町は、ダマスコからエルサレム、エジプト、地中海へ通じる街道に沿っていたので、旅の往来のはげしいところであつた。多くの国々からや

ってきた人たちはこの町を通り、あるいはあちらこちらへの旅の途中休息のために滞在した。ここでイエスはあらゆる国民とあらゆる階級の人々、貧しくていやしい人々にも、金持でえらい人々にもお会いになることができたので、その教訓はほかの国々や多くの家庭に伝えられるのであった。こうして預言の研究が刺激され、人々の注意が救い主に向けられ、イエスの使命が世の人々の前に示されるのであった。

サンヒドリンがイエスに反対する決議をしたにもかかわらず、民衆はイエスの使命の発展を熱心に待っていた。全天は関心をもって活動していた。天使たちは、人々の心に働きかけ、彼らを救い主にひきよせて、イエスの伝道に道を備えていた。

カペナウムでは、キリストが病気をなおしておやりになった貴族の息子が、キリストの力の証人であった。またこの宮廷の役人とその家族は、彼らの信仰をよるこんであかしした。先生自身が自分たちの中におられるということがわかった、全市はわきたった。群衆がイエスの前へ集まってきた。安息日には、会堂が人でいっぱいになり、ついには大勢の人々がはいりきれないでひき返さねばならなかった。

救い主の話をきいた人々はみな「その言葉に権威があったので、彼らはその教に驚いた。」「それは律法学者たちのようではなく、権威ある者のように、教えられたからである」（ルカ四ノ三一、マタイ七ノ二九）。律法学者たちと長老たちの教えは、つめたくて形式的で、丸暗記した教えのようであった。彼らにとって神のみことは生命力がなかった。彼ら自身の考えと言い伝えとが神のみことばの教えと入れ代っていた。習慣的にくりかえされる儀式を通して、彼らは律法を説明すると公言したが、しかし彼ら自身の心も聴衆の心も神からの靈感に動



イエスがカペナウムの会堂で語っておられると、ひとりの狂人がとび出してきて、「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです」と叫んだ。救い主はその人をいやしておやりになった。

かされていなかった。

イエスは、ユダヤ人の間でいろいろ意見の異なっている問題には関係されなかった。真理を示すことがイエスの働きであった。イエスのみことばは、父祖たちと預言者たちの教えを豊かな光で照し、聖書は人々にとって新しい啓示となった。イエスの聴衆は、これまでにかつてなかったほど神のみことばに深い意味をみとめた。

イエスは人々の困難をよく知っている者として、彼ら自身の立場に立って人々に応対された。彼は真理を最も率直で単純な方法で示すことによって、それを美しいものとされた。イエスのことばは純潔で、洗練されていて、流れる川のように澄んでいた。イエスのお声はラビたちの単調な調子にききなれた人たちにとって音楽のようだった。しかし、教えは単純であつたが、イエスは権威を持つ者として語られた。この特徴のために、イエスの教えはほかのすべての人たちの教えと対照的だった。ラビたちは、聖書のみことばがある意味にも解釈され、またはそれと全然正反対の意味にも解釈されるかのように、疑いとためらいをもつて語った。聞く者たちは毎日ますますわからなくなった。しかしイエスは聖書を疑問の余地のない権威のあるものとして教えられた。どんな問題であっても、イエスのみことばに反ばくする余地がないかのように、それは力づくよく語られた。

しかしイエスは、激しいというよりも熱心だった。イエスは達成すべきはつきりした目的を持っているおかたとして語られた。イエスは永遠の世界の事実を示しておられた。どのテーマにも神があらわされた。イエスは、人々が地上の事物に心を奪われてのぼせている状態を打破しようとされた。彼はこの世の事物を、永遠の利害関係に従属するものとして、その正しい関係に置かれた。しかしイエスはこの世の事物の重要さを無視されなかつ

た。イエスは、天と地がつながっているということ、また神の真理を知ることによって、人は日常生活の義務を一層よく果すことができるようになることをお教えになった。彼は天をよく知っているおかたとして語り、神とご自分との関係を意識しておられたが、同時にまたご自分が人類家族のひとりびとりとつながっていることをみとめておられた。

イエスのめぐみのみことばは聴衆に向くようにいろいろ変えられた。彼は「疲れた者を言葉をもって助けることを知」っておられた（イザヤ書五〇ノ四）。それは人々を最もよくひきつける方法で真理の宝を彼らに伝えることができるように、イエスのくちびるに恵みがそがれていたからであつた。彼は、心に偏見をもっている人たちに接して、彼らの注意をとらえるような実例によって彼らを驚かせる気転をもっておられた。想像力を通してイエスは心にふれられた。イエスの例話は日常生活の事物からとられた。それは単純な例であつたが、驚くほど深い意味をもっていた。空の鳥、野のゆり、種、羊飼と羊——こつした事物によってキリストは永遠の真理を例示された。聴衆は、その後いつでもそうした自然界の事物を見るたびに、イエスのみことばを思い出した。キリストの例話はたえずその教訓をくりかえした。

キリストは決して人々にうれしがらせを言われなかつた。彼らの空想と想像とを高慢にするようなことを語ったり、彼らのじょうずな作り話をほめたりするようなことをされなかつた。しかし偏見にとらわれないで深く物事を考える人たちは、イエスの教えを受け入れ、その教えによって自分たちの知恵がためされることを知った。彼らはどんな単純なことばにも霊的な真理があらわされているのに驚嘆した。最高の教育を受けた人たちも、イ

イエスのみことばに魅力を感じ、教育のない人たちもいつも益を受けた。イエスは読み書きのできない人たちのためにメッセージをもってあられた。イエスはまた異教徒にさえ、彼らのためのメッセージをもってあられることをおわからせになった。

イエスのやさしいあわれみはいやしのを伴って、疲れ悩んでいる心にそそがれた。怒った敵の狂乱の中にあつてさえ、主は平和の雰囲気にかこまれてあられた。イエスのお顔の美しさ、品性の美しさ、とりわけその顔つきと口調にあらわれている愛は、不信のために心のかたくなになっていないすべての人々をみもとへひきつけた。イエスの顔つきとことばの一つ一つからやさしい同情的な精神が輝き出ていなかったら、イエスはあのように多くの会衆をひきつけられなかったであろう。イエスのみもとにやってきた苦しんでいる人々は、イエスが忠実なやさしい友として自分たちと利害を一つにされていることを感じ、イエスの教えられる真理をもっと知りたいと望んだ。天は近くにあつた。彼らは、イエスの愛の慰めがたえず自分たちの上にあるように、いつまでもイエスの前にいたいと望んだ。

イエスは聴衆の顔にあらわれる変化を非常に熱心に見守られた。興味とよろこびをあらわしている顔はイエスに大きな満足を与えた。真理の矢が魂にささり、利己主義という壁をつらぬき、悔い改めとそしてついには感謝の思いをひき起すとき、救い主はよろこばれた。イエスの目が聴衆の群れを見渡して、その中に以前見えた顔を見とめられると、そのお顔はよろこびに輝いた。イエスは彼らのうちにご自分の王国の有望な民をのぞきこんだ。真理がはつきりと語られて、それが何か大事な偶像にふれると、イエスは彼らの顔色が冷たく、きびしい顔

つきに変わるのをみとめられた。それはその光が歓迎されないことを物語っていた。人々が平和のメッセージを拒否するのをごらんになると、イエスの心はその奥底まで突き刺された。

イエスは、会堂で、ご自分が建設するためになった王国について、またサタンのとりこを解放されるご自分の使命について語られた。イエスは鋭い恐怖の叫び声にまたげられた。ひとりの狂人が人々の中からとび出してきて、「ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」と大声で叫んだ(ルカ四ノ三四)。

たちまち混乱と恐れが生じた。人々の注意はイエスからそれて、みことばをきかなかった。サタンが自分のとりこを会堂に入れた目的はここにあった。しかしイエスは悪鬼をいましめて、「黙れ、この人から出ていけ」と言われた。「すると悪霊は彼を人なかに投げ倒し、傷は負わずに、その人から出て行った」(ルカ四ノ三五)。

このあわれな苦しんでいる者は、サタンのために心が暗くなっていたが、救い主の前に出たときに、一すじの光がその暗黒をつらぬいた。彼はサタンの支配から自由になりたいという願いにめざめた。だが悪鬼はキリストの力に抵抗した。その男がイエスに助けを求めて訴えようとすると、悪霊が彼の口にことばを入れ、彼は恐怖に苦しみながら叫んだ。悪鬼につかれた男は、自分を自由にしてくださいとできるおかたの前に自分がいることをある程度理解した。しかし彼がその偉大なみ手のとどくところに行こうとすると、ほかの者の意志が彼をひきとめ、ほかの者のことばが彼の口から語られた。サタンの力と、自由を求める彼自身の願いとの間の戦いは激

しかった。

試みの荒野でサタンを征服されたおかたはふたたび敵と顔をあわされた。悪鬼は自分のとりこに対する支配力を保つために全力をつくした。ここで退いたら、イエスを勝利させることになるだろう。苦しめられているその男は、自分の人間性を破壊した敵との戦いにいのちを失わねばならないかのようにみえた。しかし救い主は権威をもつて語り、とりこを解放された。さつきまで悪鬼にとりつかれていた男は驚きあやしむ人々の前に落ちついた自由な人間としてうれしそうに立った。悪鬼さえも救い主の神の力を証拠だてたのであった。

男は自分が救われたことについて神を賛美した。最近まで狂気の炎に燃えていた目は、いま知性に輝き、感謝の涙にあふれた。人々は驚いておしのようにだまっていた。口がきけるようになったとたんに、彼らはお互いに叫び合った。「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」(マルコ一ノ二七)。

この男が友人たちの前に恐ろしいみせものになり、自分で自分をもてあましていた苦悩のかくれた原因は、彼自身の生活の中にあった。彼は罪の快楽に魅惑され、人生をすばらしい謝肉祭にしようと考えた。彼は自分が世間の人から恐れられる者となり、家族の恥さらしになろうなどは夢にも思わなかった。彼は罪のない道楽に時を過ごすことができると思った。しかし一度くだり坂になると、彼の足は非常な勢いでくだって行った。不節制と道楽は、彼の性質のとうとい特性を墮落させ、サタンが完全に彼を支配した。

後悔したときはすでに遅かった。失われた人間性をとり戻すためには富も快楽も犠牲にしたいと思ったときに

は、彼は悪魔の手ににぎられていてどうにもならなかった。彼は敵の側に身をおいたので、サタンが彼の才能を全部手に入れた。誘惑者は多くの魅力的なものをみせて彼を誘惑したが、いったんこのあわれな男が自分の手中におちいると、悪魔は容赦なく残酷になり、恐ろしい怒りをもつてのぞんだ。悪に負ける者はみなそうなるのである。彼らの若いころの魅力的な快楽の結果は、絶望の暗黒が破滅した魂の狂気である。

荒野でキリストを試み、カペナウムの狂人を支配した同じ悪霊が不信のユダヤ人を支配した。しかし悪霊は、ユダヤ人の前では敬虔さをよそおい、救い主をこばむ動機について彼らをあざむこうとつとめた。彼らの状態はあの狂人の状態よりも絶望的だった。なぜなら彼らはキリストの必要を感じないために、サタンの力に固くとらえられていたからであった。

キリストが人々の中で個人的に伝道された期間は、暗黒の王国の勢力が最も活動していた時であった。各時代にわたってサタンと悪天使たちは、人間の肉体と精神とを支配して罪と苦難とを生じさせようと努力してきた。そして彼はそうしたすべての悲惨な状態を神のせいにした。イエスは神のご品性を人々にお示しになっていた。彼はサタンの力をうち破り、そのとりこを解放しておられた。天からの新しいのちと愛と力が人々の心に働きかけていたので、悪の君は自分の王国の主権を守るために戦いに立ちあがった。サタンは全軍を召集して一步キリストの働きと争った。

義と罪との間における最後の大争闘もまた同じである。天から新しいのちと光と力がキリストの弟子たちの上にくだる一方では、一つの新しいのちが地から生じてサタンの働きを活気づける。地上のあらゆる要素は

緊張につつまれる。何世紀もの争闘を通して身につけた狡猾(こうかつ)さをもって、悪の君は変装して働く。彼は光の天使の装いをしてあらわれ、多くの人々が「惑わす霊と悪霊の教とに氣をとられ」る(テモテ第一・四ノ一)。

キリストの時代にはイスラエルの指導者や教師たちはサタンの働きに抵抗するのに無力だった。彼らは悪霊をおさえることのできる唯一の方法をおろそかにしていた。キリストが悪魔を征服されたのは神のみことばによってであった。イスラエルの指導者たちは、神のみことばの解説者であると自称していたが、彼らは自分たちの言い伝えを支持し、人間のつくった慣習を強制するただけにみことばを研究していた。彼らは自分たちの解釈によつて、みことばを神が決して意図されなかった感情の表現として教えた。彼らの神秘的な解釈は、神が明らかに示しておられることを不明瞭(ふめいりよう)にした。彼らはつまらない専門用語について論争し、最も本質的な真理を事実上否定した。こうして不信仰の種が広くまかれた。神のみことばはその力を奪われ、悪霊は思いのままに働いた。

歴史はくりかえされている。聖書を目の前に開いて、その教えをとうとぶと告白しながら、今日多くの宗教家たちは、聖書を神のみことばとして信じる信仰を破壊している。彼らはみことばを批評するのに忙しく、みことばにはつきり言われていることよりも自分自身の意見を第一にする。彼らの手によって、神のみことばは人を生れかわらせる力を失う。不信仰がはびこり、不義が盛んな理由はここにある。

サタンは、聖書に対する信仰をひそかに破壊してしまうと、人々を他の光と力のみなもとにみちびく。こうし

て彼は巧妙にはいりこむ。聖書の明らかな教えと、罪についてさとらせてくださる神の聖霊の力から離れる者は、悪鬼の支配を招いているのである。聖書についての批評と空論とは、古代の異教が近代化されたものである降神術と接神論とが、われらの主イエス・キリストの教会と自称している教会の中にさえ足場を獲得する道を開いた。福音の教えと並んで、偽りの霊の仲介にすぎない力が働いている。多くの人々はただの好奇心からこうしたものに手を出す、人間の力以上のものが働いている証拠をみて、だんだんおびきよせられ、ついには自分の意志よりも力の強い意志に支配されるようになる。彼はその神秘的な力からのがれることができない。

魂の防備はうち破られる。彼には罪に対する防壁がない。神のみことばとみたまの抑制がひとたび拒否されると、人はどこまで墮落の深みに落ちるかわからない。秘密な罪や支配的な情欲のために、彼はカペナウムの悪鬼につかれた男と同じように無力なとりことなる。それでもなお彼の状態には望みがないのではない。

われわれが悪魔にうち勝つことができる方法は、キリストが勝たれた方法、すなわちみことばの力によってである。神はわれわれの同意なしには心を支配なさらない。しかし神のみことを知り、これを行おうと望むとき、次の神の約束はわれらのものである。「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」。「神のみことばを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」(ヨハネ八ノ三二、七ノ一七)。これらの約束を信ずることによって、だれでもみな誤謬のわなと罪の支配から救われるのである。

人はみなどんな力によって支配されようと自由である。キリストのうちに救いをみいだすことができないほど

どん底まで墮落した者はなく、またそれほど悪い人間はいない。悪鬼につかれたあの男は、祈りの代りに、サタンのことばしかしゃべることができなかった。それでも彼の心の中にある無言の訴えはきかれた。困っている魂の叫びは、たとえそれがことばにならなくても、決してみすごされることはない。天の神との契約関係にはいることに同意する者は、サタンの力や自分自身の弱い性質のままにうちすてられることはない。彼らは救い主から、「むしろわが力にたよって我とやわらぎを結べ、われと平和をおすべし」と招かれている(イザヤ書二七ノ五・文語訳)。暗黒の悪霊たちはかつて自分たちの支配下にあつた魂を求めて戦う。しかし神の天使たちがすぐれた力をもってその魂のために戦うのである。主はこう言われる、「勇士が奪った獲物をどうして取り返すことができようか。暴君がかすめた捕虜をどうして救い出すことができようか。しかし主はこう言われる、『勇士がかすめた捕虜も取り返され、暴君が奪った獲物も救い出される。わたしはあなたと争う者と争い、あなたの子らを救うからである』(イザヤ書四九ノ二四、二五)。

会堂の中の会衆がまだ畏敬の念にわれを忘れている間に、イエスはしばらく休むためにペテロの家へ退かれた。だがここにもまた暗い影が落ちていた。ペテロの妻の母親が高い熱のために病床に横たわっていたのである。イエスは病気を責められた。すると病人は起きあがって主と弟子たちの必要に奉仕した。

キリストのみわざについてのうわさはたちまちパナウムじゅうにひろがった。ラビたちを恐れたために、人は安息日に病気をなおしてもらうためにやってこようとはしなかった。だが太陽が地平線にかくれたとたんに大さわぎが始まった。家から、商店から、市場から、町の住民がイエスの泊まっておられるそまつな住居へおし

かけた。病人は寝いすにのせてつれてこられた。つえにすがってやってくる者もあれば、友人たちにささえられて力なくよるめきながら、救い主の前に出る者もあった。

何時間にもわたって、人々は出たりはいったりした。なぜなら翌日になればこのいやし主がまだ自分たちの中におられるかどうかだれにもわからなかったからである。カペナウムでこのような日がみられたことはかつてなかった。大気は勝利の声と救いの叫びに満たされた。救い主はご自分がひき起された歓喜をおよこびになった。イエスは、ご自分のところにやってきた人々の苦難をごらんになって、同情に心を動かされたが、彼らに健康と幸福を回復しておやりになる力があることをよろこばれた。

イエスは最後の病人がなあるまで働きをやめられなかった。群衆が立ち去り、シモンの家が静けさにつつまれたのは夜あそくになってからだだった。長いさわぎの一日が過ぎ去って、イエスは休まれた。しかし町がまだ眠りにつつまれているころ、救い主は「朝はやく、夜の明けるよほど前に、……起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」(マルコ一ノ三五)。

こうしてイエスの地上生活の日々が明け暮れた。イエスはたびたび弟子たちにひまをおやりになって自分の家をたずねさせたり、休息させたりされた。だがご自分は、弟子たちがイエスを働きからひき離そうとする努力を静かにおしとどめられた。イエスは無知な人々に教え、病人をなおし、盲人に視力を与え、群衆を養うために、一日じゅう働かれた。そして夕方や早朝に天父とまじわるために山のかくれ場に行かれた。たびたびイエスは一晩じゅう祈りと瞑想にすごして、夜明けに、人々の中で働くために帰られた。

朝早く、ペテロと仲間たちがイエスのところにやってきて、カペナウムの人たちがもうイエスに面会したがっていると言った。弟子たちは、キリストに対するこれまでの世間の人たちの態度にひどく失望していた。エルサレムの当局者たちはイエスを殺そうと求めていた。故郷の町の人たちでさえイエスのいのちをとろうとした。だがカペナウムでは、イエスは人々からよこんで熱心に歓迎されたので、弟子たちの望みは新たに燃えた。自由を愛するガリラヤの人々の中から新しい王国の支持者が出るかも知れないと思われた。しかし、彼らはイエスが「わたしは、ほかの町々にも神の国の福音を宣べ伝えねばならない。自分はそのためにつかわされたのである」と言われた」のをきいて驚いた(ルカ四ノ四三)。

当時カペナウムにみなぎっていた興奮の中にあつて、イエスの使命の目的が見落される恐れがあつた。イエスはただふしぎなことをされる人、あるいは肉体の病気をなおされる人として、人々の注意をご自分にひきつけることで満足されなかつた。彼は人々を彼らの救い主としてのご自分にひきよせようとしておられた。人々はイエスが王として地上の統治権を確立するためにおいになつたと信じたが、イエスは人々の心を世俗的なものからはなれて霊的なものへ向けようと望まれた。単なる世俗的な成功はイエスの働きを邪魔するのであつた。

軽はずみな群衆の驚嘆はイエスの心をいらだたせた。イエスの生活には自分を主張するということがすこしもなかつた。世間の人たちが地位や富や才能にささげる尊敬は、人の子イエスには無関係だつた。人々から忠節をつくされたり、人々の尊敬をあつめたりするために一般に用いられる手段を、イエスは用いられなかつた。イエスがお生れになる何世紀も前に、そのことがイエスについて預言されていた。「彼は叫ぶことなく、声をあげる

ことなく、その声をちまたに聞えさせず、また傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する」(イザヤ書四二ノ二―四)。

パリサイ人はきちょうめんな儀式主義や、これ見よがしの礼拝と慈善行為などによって、世間からえらい者に見られたいと望んだ。彼らは宗教を討論の主題とすることによって、宗教への熱心さを示した。反対派の間で長時間にわたって大声で論争がつづけられ、学問のある律法学者たちの怒った論争の声が街頭できかれることが珍らしくなかった。

イエスの生活は、こうしたすべてのことと著しい対照をなしていた。その生活には、さわがしい論争やこれ見よがしの礼拝や称賛を受けんがための行為はまったく見られなかった。キリストは神のうちにかくされ、神はみ子の品性のうちに啓示されていた。イエスはこの啓示に人々の心を向け、これに彼らの尊敬をささげさせたいと望まれた。

義の太陽キリストは、さんぜんと輝く光を世に放って、その栄光で人々の感覚をくらませるようなことをなさらなかった。「主はあしたの光のように必ず現れいで」と、キリストについて書かれている(ホセア書六ノ三)。朝の光は静かにやさしく地を照して、暗い影を追いやり、世人をいのちに目ざめさせる。そのように、義の太陽キリストは「その翼には、いやす力を備えて」のぼられるのである(マラキ書四ノ二)。

第 27 章

「きよめていただけるのですが」

本章はマタイ八ノ二―四、九ノ一―八、三二―三四、マルコ一ノ四〇―四五、二ノ一―一二、ルカ五ノ一二―二八にもとづく

東洋で知られているすべての病気の中でらい病が一番恐れられていた。この病気は伝染してなおりにくいという特性がある上に、病人に恐ろしい結果を及ぼすので、どんなに勇敢な人でも恐怖に満たされるのであった。ユダヤ人の間では、それは罪を犯した罰とみなされ、そのために「打撃」とか「神の指」などと呼ばれていた。この病気は根深くて、根絶することができず、致命的であるために、罪の象徴とみなされた。らい病人は、儀式の規則によって、けがれた者と宣告された。彼はすでに死んでしまった者のように、人々が住んでいるところからしめ出された。彼のさわったものはみなけがれた。空気も彼の呼吸によってけがれた。この病気の疑いのある者は、祭司にみてもらい、祭司が調べてみて病気かどうかを決定するのであった。もしらい病人であると宣告されたら、彼は家族から隔離され、イスラエルの会衆から絶たれ、同じようにこの病気にかかっている者とだけしかまじわれない運命に定められた。律法の要求は曲げることができなかった。王や役人たちでさえ例外ではなかった。この恐るべき病気に襲われた君主は、王位を捨てて、社会から逃げ出さねばならなかった。

らい病人は友人や肉親から離れて、自分の病気ののろいを負わねばならない。彼は自分のわざわざを公表し、衣を裂き、警戒の声をあげて、不潔な自分の前から逃げるようにみんなに警告しなければならなかった。人々は、孤独な追放人が悲しい調子で「けがれた者、けがれた者」と叫ぶ声を、一つの合図として恐怖と嫌悪の念をもつて聞いた。

キリストが伝道しておられた地方には、このような病人がたくさんいた。イエスの働きのうわさは彼らの耳にもきこえ、かすかな望みの光をともした。しかし預言者エリシヤの時代からこのかた、この病気にとりつかれた人がきよめられたという例がなかった。彼らはイエスがまだだれのためにもされたことのないことを自分たちのためにしてくださるとは期待しなかった。しかしながら、心に信仰の芽ばえはじめた人がひとりいた。それでもその男は、イエスにどうやって近づいていかわからなかった。ほかの人たちとの接触を禁じられているのだから、どうやっていやし主の前に出ることができよう。それにキリストが彼のような者をなおしてくださるかどうかが疑問だった。神の刑罰のもとに苦しんでいる者、イエスが身をかがめてみとめてくださるだろうか。パリサイ人や、医者たちと同じように、イエスも自分にわざわざいを宣告して、人々の出入りするところから離れるように警告されるのではないだろうか。彼はイエスについて聞かされていたことをみな思い浮べてみた。イエスに助けを求めて追い返されたものはひとりもなかった。このあわれな男は救い主をさがしだそうと決心した。自分は町から隔離されているが、イエスがわき道をとって山道を通られるのに会つかも知れないし、あるいは町のそとで教えておられるのをみかけるかも知れない。困難は大きかったが、しかしそれだけが彼の唯

一の望みであつた。

らい病人は救い主のみもとへみちびかれる。イエスは湖のほとりで教えておられ、人々がそのまわりに集まっている。遠くに離れて立ちながら、らい病人は救い主の口から出ることをいくつかとらえる。彼はイエスが病人の上に手をおかれるのを見る。びっこや、盲や、中風の者や、いろいろな病気で死にかかっている者たちが、健康を与えられて立ちあがり、救いを神に感謝するのが見える。信仰が彼の心の中で強まる。彼は集まっている群衆の方へ一歩また一歩と近づいて行く。自分が拘束されていることや、人々の安全や、みんなが恐怖の念をもつて自分を見ることなど忘れている。彼はいやされるというありがたい望みのことしか考えない。

彼はいまわしいみせものである。病気はびっくりするほど深く食いこみ、そのくさっていく肉体は見るも恐ろしいほどである。彼を見ると、人々は恐れてあとずさりする。人々は彼にふれまいとしてお互いにぶつかり合つて逃げる。彼がイエスに近づかないように、とめようとする人々がいるがおどである。彼は彼らを見もしなければ、彼らの言うことを聞きもしない。彼は人々の嫌悪の表情など見向きもしない。彼は神のみ子しか見ない。彼は死にかけている者にいのちを語る声しか聞かない。イエスのそばまで押しわけて進むと、彼は「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と叫んで、イエスの足もとに身を投げる。

イエスは「そうしてあげよう、きよくなれ」とお答えになって、彼の上に手をおかれた(マタイ八ノ二、三)。たちまち、らい病人に変化があらわれた。彼の肉体は健康になり、神経は鋭敏になり、筋肉がひきしまった。らい病特有のざらざらしたうるこ状の皮膚が消えて、そのかわりに健康な子供のはだにみられるような、なめら

第 27 章 「きよめていただけるのですが」



イエスが一群の人々と一しょに湖のそばに立っておられると、ひとりの癩病人が近づいてきて、救っていただきたいと嘆願した。主は彼をいやされた。

かな赤みがあらわれた。

イエスはその男に、いまなされた働きをだれにも知らせずに、ささげ物を持ってまっすぐ宮に行くようにとお命じになった。このようなささげ物は、祭司たちがその男を診察して、病気がすっかりなっていると宣告するまでは、受け入れられなかった。祭司たちは、この役目を行うことがどんなにいやでも、診察して病状を決定しなければならなかった。

聖書のみことばには、キリストがその男に沈黙と敏速な行動の必要を非常にせきたてて命じられたことが示されている。「イエスは彼をきびしく戒めて、すべてそこを去らせ、こつ言い聞かせられた、『何も人に話さないように、注意なさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた物をあなたのきよめのためにささげて、人々に証明しなさい』」(マルコ一ノ四三、四四)。もし祭司たちがそのらい病人のいやしの実情を知ったら、彼らはキリストへの憎しみから不正直な宣告をくだすかも知れなかった。この奇跡についてのうわさが彼らの耳にはいる前に、その男が宮に出頭するようにイエスは望まれた。こうして公平な決定がくだされ、らい病をいやされたこの男はもう一度家族や友人たちの間で暮すことをゆるされるのであった。

イエスがその男に沈黙を命じられたとき、イエスのお考えにはほかの目的もあった。救い主は敵どもがいつもイエスの働きを制限したり、人々をイエスから離れさせようとしていたりしているのを知っておられた。もしこのらい病人のいやしがうわさにのぼったら、この恐ろしい病気にかかっているほかの者たちがイエスのまわりにおしよせ、そのために彼らとの接触から人々が伝染させられるという叫びがあげられるだろうということを、イエス

は知っておられた。らい病人の多くは、健康の賜物を自分自身や他人の祝福となるように用いようとしなかった。またらい病人たちをまわりにひきよせると、イエスが儀式の規則に禁じられていることを破っておられるという非難の機会を与えるのであった。こうして福音をのべつたえるイエスの働きが妨害されるのだった。

このできごとは、キリストの警告が正しかったことを証明した。群衆はらい病人がいやされたのを目撃していたので、祭司たちの決定を知りたがった。その男が友人たちのところへもどつてくると、大さわぎとなった。イエスの注意があつたにもかかわらず、その男は自分の病気がなおつた事実をもはやかくそつと努力しなかった。実際それはかくしきれるものではなかったが、らい病人はこのできごとを広く公表した。自分を口止めたのはイエスの遠慮にすぎないと考えて、彼はこの大医者 of 力を宣伝して歩いた。彼はこうして発表するたびに祭司たちや長老たちがイエスを殺そうという決意をますます固めることを理解していなかった。いやされた男は健康の恵みが非常にとうといものであることを知った。彼は人間としての力を与えられ、家族と社会へ復帰できたことをよるこび、自分を完全なからだにしてくださった医者であるイエスに栄光を帰さないではいられない気持だった。しかしこの出来事を言いふらした彼の行為は、結果においては救い主の働きをさまたげることになった。そのため、おびただしい群衆がイエスのもとに殺到し、イエスはしばらく働きをおやめにならねばならなかった。キリストの公生涯における行為の一つ一つには遠大な目的があつた。そこには行為自体にあらわれているよりもっと深い意味が含まれていた。らい病人のいやしの場合もそうである。イエスはみもとにやってきたすべての者に奉仕される一方では、こなかった人々を祝福したいと心から望まれた。イエスは取税人、異教徒、サマリ

や人などをひきよせられる一方では、偏見と言ひ伝えの中にとじこめられている祭司たちや教師たちの心に訴えたいと熱望された。彼らの心を動かすためにはどんな方法も試みられないものはなかった。らい病をいやされた男を祭司たちのもとへつかわすことによって、イエスは、一つのあかしを与えて彼らの偏見をとり除くおつもりだった。

キリストの教えは神がモーセを通してお与えになった律法に反すると、パリサイ人たちは主張していた。しかしらい病からきよめられた男に律法に従ってささげ物をささげるようにイエスが命じられたことは、この非難が不当であることを証明した。それは、さとうとする気のあるすべての人にとって、十分な証拠であった。

エルサレムの指導者たちは、キリストを死刑にする口実をさがし出すためにスパイを送り出していた。イエスは人類に対するご自分の愛と、律法に対するご自分の尊敬と、罪と死から救うご自分の力との証拠を彼らに与えてこれに応じられた。こうしてイエスは、彼らについて、「彼らは悪をもってわが善に報い、恨みをもってわが愛に報いるのです」とあかしをたてられた(詩篇一〇九ノ五)。「敵を愛し」なさいとの戒めを山でお与えになったイエスは、自らこの原則を実行し、「悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報い」られた(マタイ五ノ四四、ペテロ第一・三ノ九)。

このらい病人に追放を宣告した同じ祭司たちが、彼のいやしを証明した。この宣告は、公に発表され、記録されるので、それはいつまでもキリストをあかしするものであった。そしてこのいやされた男が、病気の跡さえないという祭司たち自身の保証によって、イスラエルの会衆の中へ復帰したとき、彼自身が恩人であられるイエス

の生きた証人となった。彼はよろこびにあふれてささげ物をささげ、イエスのみ名をあがめた。祭司たちは救い主の天来の力について確信させられた。真理を知り、光によって益を受けるように、彼らに機会が与えられた。もしりぞけられたら、その機会は過ぎ去ってふたたび返ってこないものであった。多くの人々は光をしりぞけた。それでも光が与えられたことはむだではなかった。一時何のしるしもみえなかった多くの人々の心が動かされた。救い主の在世中には、その使命は祭司たちや教師たちの中に愛の反応をすこしも呼び起さないようにみえた。しかしキリストの昇天後、「祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった」（使徒行伝六ノ七）。

らい病人をその恐るべき病気からきよめられたキリストの働きは、魂を罪からきよめられるキリストの働きの実例である。イエスのみもとにきた男は、「全身らい病」であつた（ルカ五ノ一二）。その致命的な病毒は彼の全身にひろがっていた。弟子たちは主が彼にさわられないようにしようとした。らい病人にさわるとその人もけがれた者となるからであつた。しかしイエスはらい病人に手をあいても、けがれを受けられなかった。イエスの手がふれたことによって、いのちを与える力がさづけられた。らい病はきよめられた。罪というらい病もこれと同じである、——それは根強く、致命的で、人間の力できよめることはできない。「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりだ」（イザヤ書一ノ五・六）。しかしイエスは、人類の中に住むためにあいになつて、何のけがれもお受けにならない。イエスの前に出ることに罪人にとつていやしの力がある。信仰をもつて「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と言いながらイエスの足もとにひれ伏す者はだれでも、「そつしてあげよう、きよくなれ」と

の答えを聞くのである(マタイ八ノ二、三)。

イエスは、あるいやしの場合には、求められた祝福をすぐにはお与えにならなかった。ところがこのらい病人の場合には、訴えがなされたとたんに祝福が与えられた。この世の祝福を祈り求めるときに、われわれの祈りに対する答えは遅れるかも知れない。あるいは神はわれわれの求めるものよりもほかのものをお与えになるかも知れない。しかし罪からの救いをもとめるときにはそうではない。われわれを罪からきよめて神の子とし、聖なる生活を送ることができるようになってくださるのが神のみこころである。「キリストは、わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである」(ガラテヤ一ノ四)。「わたしたちが神に対して信じている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである」(ヨハネ第一・五ノ一四)。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(ヨハネ第一・一ノ九)。

カペナウムの中風患者のいやしを通して、キリストはもう一度この同じ真理をお教えになった。この奇跡が行われたのは、罪をゆるすキリストの力をあらわすためであった。中風患者のいやしもまたほかのとうとい幾つかの真理を例示している。それは望みと励ましに満ちており、またあら探しをするパリサイ人と関連していたことから、警告の教訓も含んでいる。

あのらい病人と同じように、この中風患者の回復の望みはすっかり失われていた。彼の病氣は罪の生活の結果

であって、その後悔のために苦しみは一層ひどかった。彼は心の苦しみと肉体の苦痛から救われたいと望んで、ずっと前からパリサイ人たちや医者たちに訴えていた。しかし彼らは彼の病気はなおらないと冷淡に宣告し、彼を神の怒りにまかせた。パリサイ人は苦悩を神の不快のしるしとみなし、病人や困っている人たちから遠ざかっていた。ところが自分たちはきよい者だといばっている当人たちが、実は彼らが罪人呼ばわりしている苦しむ者たちよりもっと罪が重い場合がしばしばあった。

中風の男はまったく無力であった。そしてどこからも助けを受ける見込みがないことを知って、彼は絶望に沈んでいた。その時彼はイエスのすばらしいみわざについて聞いた。彼は自分と同じに罪深くて無力なほかの人たちがいやされたことを聞いた。らい病人たちさえきよめられたということだった。そこでこうした話を伝えた友人たちは、イエスのところへつれて行ってもらえたら自分もまたいやされるかもしれないと信じるように、彼を上げました。しかし彼は自分がどうして病気になったかを思い出すと、望みが消えた。純潔な医者であられるイエスは自分がみ前に出ることをおゆるしにならないだろうと、彼は恐れた。

しかし彼が熱望したのは肉体的な回復よりもむしろ罪の重荷からの解放だった。もしイエスにお会いすることができて、罪のゆるしと天とのやわらぎの保証が与えられるなら、神のみこころにしたがって死のうが生きようが満足だった。死にかけている男の叫びは、ああ、あのかたのみ前に出られますようにということだった。ぐずぐずしている時間はなかった。すでに彼の衰えた肉体には死の徴候が見えはじめていた。彼が友人たちに、寝台にのせてイエスのところにつれて行ってくれるようにたのむと、彼らはよろこんでそうすることを引受けた。だ

が救い主のおられる家の内外には人々が密集していて、病人とその友人たちがイエスのそばに近づくことも、あるいはみ声のきこえるところまで行くことさえできなかった。

イエスはペテロの家で教えておられた。いつもの習慣通り、弟子たちはイエスのそば近くにすわっており、「ガリラヤやユダヤの方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者たちが、そこにすわっていた」（ルカ五ノ一七）。この人たちはスパイとしてやってきて、イエスを訴えることがをみつけようとしていた。この役人たちの外側に、熱心な者、敬虔な者、好奇心の者など、雑多な群衆がおらがついていた。彼らはいろいろな国籍や、社会のあらゆる階層を代表していた。「主の力が働いて、イエスは人々をいやされた」（ルカ五ノ一七）。いのちのみたまは会衆をおおっていたが、パリサイ人と学者たちはその臨在をみとめなかった。彼らは必要を感じなかったので、いやしは彼らのためではなかった。イエスは「飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせ」になった（ルカ一ノ五三）。

中風患者をはこんできた人たちは何度も何度も群衆の中を押しわけて進もうとしたがむだだった。病人は言いようのない苦痛のうちにあたりをみまわした。待ち望んだ助けを目の前にしながら、どうして望みをすてることのできよう。病人の思いつきで、友人たちは彼を屋上にはこびあげ、屋根を破ってイエスの足もとに病人をおろした。講話は中断された。救い主はその悲しげな顔つきをがらんになり、訴える目がじっとご自分にそそがれているのをがらんになった。イエスは事情を理解された。イエスがその困り疑っている魂をみもとにひきよせられたのであった。この中風患者がまだ家にいたときに、救い主は彼の良心に自覚をお与えになった。彼が罪を悔い

改め、自分を健康にしてください。さるイエスの力を信じたとき、救い主のいのちを与えるあわれみは、まずその切望する心を祝福した。イエスは、最初のかすかな信仰の光が、イエスを罪人の唯一の助け手として信じる信仰に育って行くのを見守り、それが救い主のみもとに行きたいと努力するたびにだんだん強くなって行くのをごらんになっていた。

いま救い主は、苦しむ者の耳に音楽のようにひびくことばで、「子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われた(マタイ九ノ二)。

絶望の重荷は病人の魂からころがり落ちる。ゆるしの平安が彼の心に宿り、彼の顔の輝きにあらわれる。彼の肉体の苦痛は去り、身も心も一変する。無力の中風患者がいやされ、不義の罪人がゆるされたのだ。

単純な信仰をもって、彼はイエスのみことばを新しいいのちの賜物として受け入れた。彼はもうこれ以上何も願わないで、うれしさのあまりことばもなくただ幸福な沈黙のうちに横たわっていた。天の光は彼の顔にかがやき、人々は畏敬の思いをもってその光景をながめた。

ラビたちはイエスがこの病人をどう処置されるかを見ようと熱心に待っていた。彼らは、この病人から助けを求められたとき、望みや同情を与えることを拒絶したことを思い出した。それだけで満足しないで、彼らはこの男が罪のために神からわざわいを受けているのだと宣告した。目の前にこの病人を見たとき、そうしたことが彼らの心に新たによみがえった。人々がみなその光景を興味深く見守っているのを見て、彼らは人々に対する自分たちの影響力が失われるのではないかと、恐ろしい不安を感じた。

これらの偉い人たちはことばこそかわさなかったが、お互に顔を見合わせることによって、人々の感動の波を防ぎとめるために何かしなければならぬという同じ思いをお互の胸から読みとった。イエスは中風患者の罪がゆるされたと宣告された。パリサイ人はこのことばをとらえて、それを神への冒瀆とし、死刑に値する罪として示すことができるかと思いついた。彼らは心の中で「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」と言った(マルコ二ノ七)。

イエスがじっと目をそがれると、彼らは小さくなってあとずさりした。するとイエスは、「なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか」と言われた。そして「しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言われて、中風の者に向かい、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた(マタイ九ノ四―六)。

すると担架にのせられてイエスのところへつれてこられたその男は、若者のようなはずむ力で立ちあがる。いのちを与える血潮が彼の血管に脈うつ。彼のからだの器官がどれも急に活動をはじめ。近づいていた死の青白さが消えて、健康の輝きがあらわれる。「すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、『こんな事は、まだ一度も見たことがない』と行った」(マルコ二ノ一二)。

ああ、罪のある者と苦しんでいる者とをいやすために身をかがめられた驚くべきキリストの愛。悩んでいる人

類の苦難を悲しみ、これをやわらげてくださる神。ああ、このように人の子らに示された驚くべき力。だれが救いのメッセージを疑うことができよう。だれがあわれみ深い救い主のいつくしみを軽んじることができよう。

あの朽ちかけていた肉体に健康を回復するのに要したのは、創造力以外の何ものでもなかった。地のちりから造られた人間にいのちを宣告した同じ声が、死にかけていた中風患者にいのちを告げた。しかも肉体にいのちを与えたのと同じ力が心を新たにしたのであった。創造のときに、「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立った」が、その主が罪とがのうちに死んだ魂にいのちを語られたのであった(詩篇三三ノ九)。肉体のいやしは、心を新たにした力の証拠であった。キリストは中風患者に「人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」起きて歩めとお命じになった(マルコ二ノ一〇)。

この中風患者は、キリストのうちに魂と肉体のいやしをみいだした。霊的ないやしに肉体的な回復がつづいた。この教訓をみのがしてはならない。今日肉体の病気にかかりながら、この中風患者のように、「あなたの罪はゆるされた」とのことはをきくのを待ち望んでいる者が幾千人となくいる。とどまるところを知らず、満たされることのない欲望をもった罪の重荷こそ、彼らの病気の根源である。彼らは魂をいやしてくださいさるかたのもとに行くまでは安心が得られない。イエスだけが与えになることのできる平安によって、心に活力が与えられ、肉体に健康が与えられる。

イエスは「悪魔のわざを滅ぼしてしまったため」においてになった(ヨハネ第一・三ノ八)。「この言に命があった」。イエスは「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」と言われる。イエスは「命を

与える霊」である(ヨハネ一ノ四、一〇ノ一〇、コリント第一・一五ノ四五)。イエスは、この地上において病人をいやし、罪人にゆるしをお告げになったときと同じに、いまもなおいのちを与える力を持っておられる。主は「あなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいや」される(詩篇一〇三ノ三)。

中風患者のいやしが人々に与えた効果は、ちょうど天が開いて天国の栄光があらわされたようなものだった。病気をいやされたこの男が一步ごとに神を賛美し、荷物を羽毛のように軽々とかついで群衆の間を通って行くと、人々はうしろへさがって道をあけ、畏敬の念にうたれた顔つきで彼をじっとみつめ、「きようは驚くべきことを見た」とそっとささやき合った(ルカ五ノ二六)。

パリサイ人は驚きのあまりおしのようにだまりこみ、敗北感に圧倒された。彼らは、彼らのねたみを群衆にたきつける機会がここにはないことを知った。彼らが神の怒りにまかせてしまった男のためになされた不思議なわざが、人々に強い印象を与えたので、ラビたちは一時忘れられてしまった。彼らが神にだけあると言っていた力をイエスが持つておられることを人々は知った。だがイエスのやさしくて威厳のある態度は、ラビたち自身のごうまんな態度といちじるしい対照をなしていた。彼らは口にこそ出さないが、自分たちよりもすぐれたおかたが目の前におられることをみとめて、まごつき、赤面した。イエスがこの地上で罪をゆるす権威を持つておられるという証拠が強ければ強いほど、彼らはますます固く不信のからにとじこもった。彼らは、中風患者がイエスのみことばによっていやされるのを見たペテロの家から、神のみ子を沈黙させる新しい計略を考え出すために出て行った。

肉体の病気は、それがどんなに悪質で、根深いものであっても、キリストの力によっていやされた。しかし魂の病気は、光に目をとじた人々をもっと固くとらえていた。らい病や中風は、頑迷さや不信ほど恐ろしくはなかった。

中風をいやされた男の家では、ほんのちよつと前に寢床にのせられたまま静かに家からかつぎ出されて行った彼が、寢床をらくらくとかついで帰ってきたとき、大きなよろこびがあった。彼らはよろこびの涙を浮かべてまわりに集まり、自分の目を信じられない風だった。彼は元気に満ちた一人前の男として彼らの前に立った。以前にはいのちがかよっているようには見えなかった彼の両腕が、すぐに彼の意志に従った。ちぢかんで鉛色をしていた彼の肉体が、いまは若々しく赤味をおびていた。彼はしっかりした足どりで自由に歩いた。彼の顔つきの一つ一つにはよろこびと望みが書かれ、罪と苦難のしるしに代って純潔と平和の表情が見られた。よろこびと感謝のことばがその家からのぼって行き、神は、望みのない者に望みを回復し、傷ついた者に力をお与えになったみ子を通して栄光を受けられた。この男とその家族は、イエスのためならいつでもいのちをささげようと思った。彼らの信仰をくもらせる疑いはなく、彼らの暗い家庭に光をお与えになったイエスへの忠誠心をさまたげる不信はなかった。

第 28 章

レビ・マタイ

本章はマタイ九ノ九一―七、マルコ二ノ一四―二二、
ルカ五ノ二七―三九にもとづく

パレスチナのローマ官吏の中で、取税人ほど憎まれた者はなかった。外国の権力によって税を課せられるということが、自国の独立権が失われたことをユダヤ人に思い出させ、たえず彼らを怒らせた。取税人はローマの圧制の手先であつたばかりではなかった。彼らはまた自分自身のために強奪者となり、民を犠牲にして私腹を肥やした。ローマ人の手からこの任命を受けた者は、国民の名譽を裏切る者とみなされた。彼は変節者として輕蔑され、社会の最も下等な階層に入れられた。

レビ・マタイはこの階級に属していたが、彼はグネサレでの四人の弟子たちの次に、キリストの奉仕に召された。パリサイ人はマタイをその職業から判断していたが、イエスはこの男のうちに真理を受け入れるために心が開かれているのをごらんになった。マタイは救い主の教えを聞いていた。罪をさとらせる神のみたまが彼の罪深さを示したとき、彼はキリストの助けを求めたいと熱望した。だが彼は、ラビたちの排他心になれていたので、この大教師イエスが自分に注目されるだろうとは思えていなかった。

ある日、この取税人が収税所にすわっていると、イエスが近づいてこられるのが見えた。「わたしに従ってください」ということが自分に向かって語られるのを聞いた時の彼の驚きは大きかった。

マタイは、「いっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた」（ルカ五ノ二七、二八）。ちゅうちょもなく、質問もせず、金もうけの商売が貧乏と苦勞にとり代えられるという考えもなかった。イエスといっしょにいるということ、イエスのみことをきき、イエスの働きに加われるということだけで彼は十分だった。

これより前に召された弟子たちも同じだった。イエスがペテロとその仲間に「わたしに従ってください」とお命じになったとき、彼らはすぐに舟と網を捨てた。これらの弟子たちの中には、生活の面倒をみなければならぬ友人たちをかかえている者もあった。しかし彼らは救い主の招きを受けた時、ちゅうちょして、わたしはどうして生活し家族を養えるでしょうかとたずねなかった。彼らは召しに従順だった。後になってイエスが、「わたしが財布も袋もくつも持たせずにあなたがたをつかわしたとき、何かこまったことがあったか」とおたずねになったとき、彼らは、「いいえ、何もありませんでした」と答えることができた（ルカ二二ノ三五）。

金持だったマタイにも、貧乏だったアンデレとピリポにも、同じ試みが与えられたが、彼らはそれぞれ同じように献身した。成功の瞬間に、すなわち、網が魚でいっぱいになり、これまで通りの生活をつづけたいという気持が最も強かったときに、イエスは、海辺で、弟子たちに福音の働きのために一切を捨てるように求められた。同じようにひとりびとりの魂は、この世の幸福を望む心と、キリストとのまじわりを望む心と、そのどちらが最も強いかを試みられるのである。

原則はいつでもきびしい。全心全霊を働きにうちこみ、「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思」うようでなければ、だれも神への奉仕に成功することはできない（ピリピ三ノ八）。自分のために少しでも取って置く者はキリストの弟子になることはできないし、ましてや共労者となることはできない。人々がたいなる救いの真価を知るとき、キリストの生活にみられた自己犠牲が彼らの生活の中にみられる。キリストがどこへみちびかれようと、彼らはよろこんで従うのである。

マタイがキリストの弟子のひとりとして召されたことから非常な憤慨がひき起された。宗教教師が、直弟子の一人として取税人をえらぶということは、宗教的社会的国民的な慣例に反していた。パリサイ人は、人々の偏見に訴えることによって、イエスに対する人気の流れを反対の方向に変えようと望んだ。

取税人たちの間に、広く行きわたる興味が起った。彼らの心は天来の教師イエスへひきつけられた。マタイはこんど弟子にもらったことをよろこんで、以前の仲間をイエスにみちびきたいと熱望した。そこで彼は自分の家にふるまいの席を設けて、親戚や友人たちをいっしょに呼んだ。そこには取税人たちばかりでなく、いかがわしい評判の人たちや用心深い隣人たちから排斥されているような人々がたくさんきていた。

もてなしはイエスを主賓としてなされたが、イエスはその心づくしを受け入れるのにちゅうちょされなかった。イエスはこのことがパリサイ党を怒らせ、また民の目に自分の信用を落すことをよくご存じだった。しかし方針の問題はイエスの行動を左右することができなかった。イエスにとって外面的なえらさはすこしも重要でなかった。イエスの心に訴えたものはいのちの水をかわき求めている魂であった。



ユダヤ人から軽蔑されている職業の取税人マタイは、イエスのことばを聞き、すべてを捨ててイエスに従った。この男は感謝の気持ちから、イエスを食事に招いた。

イエスは取税人たちの食卓に主賓としてあつきになり、同情心と社交的な親切とによって、ご自分が人間性の尊厳をみとめておられることをお示しになった。そこで人々は、イエスの信頼に値する者になりたいと心から願った。彼らのかわいた心に、イエスのみことばは、いのちを与える祝福の力となつてのぞんだ。社会からのけ者にされていたこの人たちに、新しい衝動がめざめ、新しい生活の可能性が開かれた。

このような集りで救い主の

教えに深い感銘を受け、キリストが昇天されてからはじめてキリストを認めた者が少なくなかった。聖霊が豊かにそそがれ、一日に三千人が悔い改めた時、その中には、取税人たちの食卓で初めて真理を聞いた人たちが多くまじっていて、彼らのうちのある者は福音の使者となった。マタイ自身にとっても、ふるまいの席でのイエスの模範はいつも教訓となっていた。軽蔑されていたこの取税人は最も献身的な伝道者の一人となり、彼自身の伝道において主のみ足跡に忠実に従った。

ラビたちは、イエスがマタイのごちそうに出席されたことを知ると、イエスを非難する機会をとらえた。しかし彼らは、弟子たちを通して働きかけようと望んだ。ラビたちは、弟子たちの偏見をひき起すことによって、彼らを主からひき離そうと望んだ。弟子たちにはキリストのことを非難し、キリストには弟子たちのことを悪く言うて、一番傷つきやすいところに矢のねらいをつけるのがラビたちの手段だった。これは、サタンが天で不満を感じて以来、いつも働いてきた方法である。不和と離反をひき起そうとする者はみな彼の精神に動かされているのである。

ねたみ深いラビたちは、「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」とたずねた(マタイ九ノ一)。

イエスは、弟子たちがその非難に答えるのを待たないで、自らお答えになった。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ九ノ一二、一

三。パリサイ人たちは、自分たちは靈的に健康であるから、医者が必要はないと主張し、一方では、取税人や異邦人を魂の病気で死にかけている者とみなしていた。だから、イエスの助けを要している階級へ医者として行かれるのが、イエスの働きではなかっただろうか。

しかしパリサイ人たちは、自分をえらいものに思っていたが、実際には彼らは彼らが輕蔑している人たちよりも悪い状態にあった。取税人たちは彼らよりも頑迷さや自己満足の念がなく、したがって真理の感化に対してもっと心が開かれていた。イエスはラビたちに、『わたしが好きなのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい」と言われた(マタイ九ノ一二)。このようにイエスは、彼らが神のみことばを説明すると主張しながら、その精神については全く無知であることをお示しになった。

パリサイ人たちはその時はだまっていたが、しかし彼らの敵意は一層固くなっただけであつた。彼らは次にバプテスマのヨハネの弟子たちをさがし出して、救い主に反対させようと試みた。このパリサイ人たちは、バプテスマのヨハネの使命を信じていなかった。彼らはヨハネの節制生活、彼の單純な習慣、彼の粗末な衣服などを嘲笑的に指さして、彼を狂信者だと断言していた。ヨハネが彼らの偽善を攻撃したので、彼らはヨハネのことばに抵抗し、人々がヨハネに反対するようにはたてていた。神のみたまはこのような嘲笑者たちの心に働いて、彼らに罪をさとせられたが、彼らは神の勧告をしりぞけ、ヨハネは悪鬼につかれていると断言していた。

いまイエスが人々の中にまじって、彼らの食卓で飲み食いされると、彼らはイエスのことを大食家だとか大酒飲みだとか言つて攻撃した。このような攻撃をする彼ら自身こそやましいのであつた。神についてまちがった解

釈がなされ、サタン自身の特性が神に着せられるように、主の使者たちもこうした悪人たちによって曲解された。パリサイ人たちは、イエスが暗黒の中にある人々に天の光を与えるために取税人や罪人たちといっしょに食事をしておられるのだということを考慮しようとしなかった。天来の教師のまかれる一つ一つのみことばが生きた種であって、それは発芽して神の栄えのために実を結ぶのだということを、彼らはみとめようとしなかった。彼らは光を受け入れまいと決心していた。彼らは、バプテスマのヨハネの使命に反対してきていたのに、イエスに対する反対に彼らの協力を得ようと望んで、いまヨハネの弟子たちの友情を求めようとした。彼らは、イエスが昔からの言い伝えを廃しようとしておられると言った。また彼らはバプテスマのヨハネの厳格な敬虔さと、取税人や罪人といっしょに食事をされたイエスの行動とを比較した。

ヨハネの弟子たちはこの時非常な悲しみのうちにあった。それは彼らがヨハネの伝言をもってイエスに会いに行く前だった。彼らの愛する教師は牢獄の中におり、彼らは悲嘆のうちに日をすごしていた。しかもイエスは、ヨハネを釈放するために、何の努力もされず、むしろヨハネの教えに不信を表明しておられるかのようにさえみえた。もしヨハネが神からつかわれたのなら、なぜイエスとその弟子たちはこんなにまったく異なった道を歩まれるだろう。

ヨハネの弟子たちはキリストの働きをはっきり理解していなかった。パリサイ人たちの非難には何か根拠があるかも知れないと、彼らは思った。彼らはラビたちが規定した規則の多くを守り、律法のわざによって義とされることを望んでさえいた。ユダヤ人は断食を功績の行為として実行し、彼らの中で最も厳格な者は毎週二日間断

食した。ヨハネの弟子たちが、イエスのもとにやってきて、「わたしたちとパリサイ人たちが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」とたずねたとき、彼らもパリサイ人たちも断食していた（マタイ九ノ一四）。

イエスは非常にやさしく彼らにお答えになった。イエスは、断食について彼らのまちがった観念をなおそうとはされず、ご自分の使命について彼らが正しい見方をするようにされただけだった。しかもイエスは、バプテスマのヨハネ自身がイエスについてのあかしに用いたのと同じ譬を使ってこのことを説明された。ヨハネは「花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている」と言った（ヨハネ三ノ二九）。イエスがこの例をとりあげて「あなたがたは、花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食をさせることができるであろうか」と言われたとき、ヨハネの弟子たちは彼らの教師のことはを思い出さずにはいられなかった（ルカ五ノ三四）。

天の大君がご自分の民の中におられた。神の最高の賜物が世に与えられていた。貧しい者によるこびあれ。キリストが彼らをみ国の世継ぎとするためにおいでになったからである。富める者によるこびあれ。キリストは永遠の富を手に入れる方法を彼らにお教えるからである。無知な者によるこびあれ。キリストは彼らを救いについて賢明な者とされるからである。知識のある者によるこびあれ。キリストは彼らがこれまできわめたところよりももっと深い神秘をお開きになるからである。世の基がおかれた時からかくされていた真理は、救い主の使命によって人々に開かれるのであった。

バプテスマのヨハネは救い主を見てよろこんだ。天の大君と共に歩み、共に語る特権にあずかっていた弟子たちには何という大きなよろこびの機会があったことだろう。いまは彼らが嘆いたり断食をしたりする時ではなかった。暗黒と死の影にすわっている人々に光を照すために、彼らは心を開いてキリストの栄光を受けねばならない。

キリストのみことは明るい光景をえがき出したが、その向こうには濃い影が落ちていて、イエスの御目だけがそれをみとめていた。「しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」とイエスは言われた(ルカ五ノ二五)。主が売り渡され、十字架につけられるのを見る時に、弟子たちは嘆き断食するであろう。あの二階の広間で弟子たちに語られた最後のことはの中に、イエスは、「しばらくすればわたしを見なくなる、またしばらくすればわたしに会えるであろう……よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたは泣き悲しむが、この世は喜ぶであろう。あなたがたは憂えているが、その憂いは喜びに変わるであろう」と言われた(ヨハネ一六ノ一九、二〇)。

イエスが墓から出ておいでになるとき、彼らの悲しみはよろこびに変わるのであった。イエスの昇天後そのお姿はみえなくなるが、慰め主を通してイエスはなお彼らとともにおられるので、彼らは悲嘆のうちに時をすごさないのであった。彼らが悲嘆のうちに時をすごすことは、サタンの望むところだった。サタンは、彼らがあざむかれ、失望したという印象を世に与えたいと望んだ。しかし信仰によって、彼らは、イエスが彼らのために奉仕しておられる天の聖所をながめるのであった。彼らはキリストの代表者であられる聖霊に心を開き、そのご臨在の

光をよろこぶのであった。しかし誘惑と試練の日がくるのであった。その時彼らは、この世の支配者たちや暗黒の王国の指導者たちと衝突するのであった。その時キリストは、自ら彼らのそばにおられず、彼らは慰め主をみとめなかった。その時こそ彼らが断食することは一層ふさわしいのであった。

パリサイ人は、形式を厳格に守ることによって自分をえらそうにみせようとつとめたが、一方その心はねたみと争いに満ちていた。聖書にこう言われている、「見よ、あなたがたの断食するのは、ただ争いと、いさかいのため、また悪のこぶしをもって人を打つためだ。きょう、あなたがたのなす断食は、その声を上に聞えさせるものではない。このようなものは、わたしの選ぶ断食であろうか。人がおのれを苦しめる日であろうか。そのこうべを葦のように伏せ、荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。あなたは、これを断食となえ、主に受けいれられる日と、となえるであろうか」(イザヤ書五八ノ四、五)。

真の断食は単なる形式的な行事ではない。神がおえらびになつた断食は、「悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折るなどの事……飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせる」ことであると聖書に書かれている(イザヤ書五八ノ六、一〇)。ここにキリストの働きの精神と性格が示されている。キリストの一生は世の救いのためにご自身を犠牲にされることであった。試みの荒野で断食されても、マタイのふるまいの席で取税人たちといっしょに食事をされても、イエスは、失われた者の救いのためにご自身のいのちを与えておられた。ただ嘆き悲しんだり、肉体を痛めつけたり、おびただしい犠牲を払ったりすることなどの中に真の信心の精神があらわされるのではなく、それは神と人に対する心か

らの奉仕に自分をささげること示されるのである。

イエスは、ヨハネの弟子たちへの答をつづけ、譬を用いてこう言われた、「だれも、新しい着物から布ぎれを切り取って、古い着物につぎを当てるものはない。もしそんなことをしたら、新しい着物を裂くことになるし、新しいのから取った布ぎれも古いのに合わないであろう」(ルカ五ノ三六)。バプテスマのヨハネのメッセージを、言い伝えや迷信に織り込んでではならなかった。パリサイ人の見せかけとヨハネの信心とをまぜ合わせようとする試みは、両者の不一致をますます明らかにするだけであった。

キリストの教えの原則をパリサイ主義の形式に一致させることもまたできなかった。キリストは、ヨハネの教えによって生じた破れをふさがれるのではなかった。キリストは古いものと新しいものとの分離をますます明らかにされるのであった。イエスはこの事実をさらに次のような例をもって示された「まだだれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなことをしたら、新しいぶどう酒は皮袋をはり裂き、そしてぶどう酒は流れ出るし、皮袋もむだになるであろう」(ルカ五ノ三七)。新しい酒を入れる容器として用いられた皮袋は、しばらくすると乾いてもろくなり、同じ目的のためにはもう役立たなくなった。このよく知られた例を用いて、イエスはユダヤ人の指導者たちの状態をお示しになった。祭司たち、律法学者たち、役人たちは、型にはまった儀式と言い伝えにこり固まっていた。彼らの心は、イエスがひからびた皮の酒袋にたとえられたように、ちぢまっていた。律法的な宗教に満足しているかぎり、彼らが天の生きた真理の保管者となることは不可能だった。彼らは、自分自身の義は十分であると思っていたので、自分たちの宗教に新しい要素がはいりこむことを望まなかつ

た。彼らは、人類に対する神の恵みを彼ら自身と関係のないものとして受け入れることをしなかった。彼らはそれを自分たちの善行のせいにして、彼ら自身の功績に結びつけた。愛によって働き、魂をきよめる信仰が、儀式と人の命令から成り立っているパリサイ人の宗教と結合する余地はなかった。イエスの教えを既成宗教と結びつけようと努力してもむだであった。神の重要な真理は、発酵するぶどう酒のように、パリサイ的言い伝えという古い朽ちた袋を破るのであった。

パリサイ人は、自分たちは賢いから教えを受ける必要はない、義人だから救いの必要はない、高い誉を受けているからキリストから栄えを受ける必要はないと考えていた。救い主は彼らから離れ、天の使命を受け入れるようなほかの人々をさがされた。イエスは、教育のない漁夫たち、市場の取税人、サマリヤの女、よろこんでみことばをきく一般の人々などを新しい酒を入れる新しい袋としてごらんになった。福音の働きにうつわとして用いられる者は、神が彼らに送られる光をよろこんで受け入れる魂である。こういう人々は真理の知識を世に与えるための神の代理者である。もし神の民が、キリストの恵みによって新しい袋となるならば、神はそれに新しいぶどう酒を満たされるのである。

キリストの教えは、新しい酒として表現されているが、それは新しい教理ではなくて、世の初めから教えられていたことを啓示したものであった。しかしパリサイ人たちには、神の真理の本来の意義と美しさがわからなかった。彼らにとって、キリストの教えはほとんどすべての点において新しく、したがって、それを認識することも、承認することもできなかった。

イエスは、真理を求める心と理解力とを破壊する偽りの教えの力を指摘された。「まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはいしない。『古いのが良い』と考えているからである」(ルカ五ノ三九)。父祖たちと預言者たちを通して世に与えられてきたすべての真理は、キリストのみことばのうちに新しい美しさを放って輝いた。しかし律法学者たちとパリサイ人たちは、とうとい新しい酒を望まなかった。古い言い伝え、慣例、習慣をあけてしまうまでは、彼らは、頭や心にキリストの教えを入れる余地がなかった。彼らはいのちのない形式に執着し、生きた真理と神の力から離れた。

このことが結局はユダヤ人を滅亡させたが、それはまたわれわれの時代にも多くの魂を滅亡させるであろう。マタイのふるまいの席でキリストから非難されたパリサイ人たちのように、幾千の者が同じあやまちを犯している。多くの者は心にいだいている何かの考えを放棄したり、何か大事な意見を捨てたりするよりは、むしろ光の父から与えられる真理をこぼむのである。彼らは自分に信頼し、自分自身の知恵にたよっていて、自分の霊的な貧しさをみとめない。彼らは何かの方法である重要な働きをすることによって救われることを強調する。そしてその働きに自我を織り込む方法がないことを知ると、備えられた救いをこぼむのである。

律法的な宗教は決して魂をキリストにみちびくことができない。なぜならそれは愛のない宗教、キリストのない宗教だからである。自分を義とする精神に動かされての断食や祈りは、神の御目に憎むべきものである。荘厳な礼拝の集り、宗教的儀式のくりかえし、外面的な苦行、強制的な犠牲などは、こうしたことを行なう人が自分を義とし、天国にはいる資格があるとみなしていることを公告している。しかしそれはまったくの欺瞞であ



イエスは人々の中にまじり、一しょに食事をするのが好きだったので、パリサイ人はイエスのことを、食をむさぼる者、大酒を飲む者と言った。救い主は、失われた者をたずねて救うためにおいでになったのである。

る。われわれは自分自身のわざによって救いを買うことは決してできない。

キリストの時代にそうであつたように、今日も同じである。パリサイ人たちは自分の霊的欠乏がわからない。彼らに次のような警告が与えられている、「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買う、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買うなさい。また、見えるようになるため、目にめる目薬を買いなさい」(黙示録三ノ一七、一八)。信仰と愛は火で練られた金である。しかし多くの者にとって、金は光沢を失い、とうとい宝は失われた。キリストの義は、彼らにとっては、着たことのない衣、ふれたことのない泉である。彼らに向かつてこう言われている、「しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい。もし、そうしないで悔い改めなければ、わたしはあなたのところにきて、あなたの燭台をその場所から取りのけよう」(黙示録二ノ四、五)。

「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかるしめられません」(詩篇五一ノ一七)。人は、最高の意味において、イエスを信じる者となることができる前に、自分自身をむなしくしなければならぬ。自我が放棄されるとき、主はその人を新しい人間にすることがおできになる。新しい袋は新しいぶどう酒を入れることができる。キリストの愛は新しいいのちをもって信者を生かす。われわれの信仰の創始者

でありまた完成者であるおかたを見つめる人のうちに、キリストの品性があらわされるのである。

第 29 章

安息日

安息日は創造の時に聖とされた。それは人のために定められたのだから、その起源は「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」時にあった(ヨブ記三八ノ七)。平和が世界をおおっていた。地が天と調和していたからであった。「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」(創世記一ノ三一)。そこで神は、みわざを完成されたよろこびのうちに休息された。

神は安息日に休息されたので「神はその第七日を祝福して、これを聖別された」——すなわちこの日を聖なるご用のためにとりわけられた(創世記二ノ三)。神はこの日を休息の日としてアダムにお与えになった。それは創造のみわざの記念で、神の力と愛のしるしとなった。「主はそのくすしきみわざを記念させられた」と聖書に書かれている(詩篇一一ノ四)。「被造物」は「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性」とを「天地創造このかた」宣言している(ローマーノ二〇)。

万物は神のみ子によって造られた。「初めに言があった。言は神と共にあった。……すべてのものは、これによ

ってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」(ヨハネ一ノ一二三)。安息日は創造のみわざの記念であるから、それはキリストの愛と力のしるしである。

安息日はわれわれの思いを自然に向けさせ、われわれを創造主とのまじわりにはいらせる。鳥の歌に、木々のささやきに、海の調べに、われわれは日の涼しいころエデンの園でアダムとお語りになった神のみ声をいまもきくことができる。こうしてわれわれは、自然界の中に神の力を見るとき、そこに慰めを見いだすのである。なぜなら、万物をおつくりになったみことばは、魂にいのちを語ることはだからである。『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである」(コリント第二・四ノ六)。

歌を呼び起したのはこの思いであつた。――

「主よ、あなたはみわざをもつて

わたしを楽しませられました。

わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。

主よ、あなたのみわざは

いかに大いなることでしょう。

あなたのもろもろの思いは、いとも深く」(詩篇九二ノ四、五)。

聖霊は、預言者イザヤを通して、こう宣言しておられる。「それで、あなたがたは神をだれとくらべ、どんな像と比較しようとするのか。偶像は細工人が鑄て造り、鍛冶が、金をもって、それをおおい、また、これがために銀の鎖を造る。貧しい者は、ささげ物として朽ちることのない木を選び、巧みな細工人を求めて、動くことのない像を立たせる。あなたがたは知らなかったか。あなたがたは聞かなかったか。初めから、あなたがたに伝えられなかったか。地の基をおいた時から、あなたがたは悟らなかったか。主は地球のはるか上に座して、地に住む者をいなごのように見られる。主は天を幕のようにひろげ、これを住むべき天幕のように張り、また、もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、おなくされる。彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、その幹がかろうじて地に根をおろしたとき、神がその上を吹かれると、彼らは枯れて、わらのように、つむじ風にまき去られる。聖者は言われる、『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか』。目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきだし、おのをおの名で呼ばれる。その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない。ヤコブよ、何ゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手を

もって、あなたをささえる。「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ」(イザヤ書四〇ノ一八―一九、四一ノ一〇、四五ノ二二)。これが自然の中に書かれているメッセージで、安息日はこのメッセージを記憶にとどめるために定められているのである。主は、イスラエルに安息日をあがめるようにお命じになったとき、こう言われた。「わが安息日を聖別せよ。これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである」(エゼキエル書二〇ノ二〇)。

安息日は、シナイで与えられた律法の中に具体的に表現されたが、しかしその時はじめて休みの日として知らされたものではなかった。イスラエルの民はシナイへ来る前に安息日についての知識をもっていた。そこへ行く道中、安息日は守られた。安息日をけがす者があると、主は彼らを責めて、「あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか」と言われた(出エジプト記一六ノ二八)。

安息日はイスラエルのためだけでなく、世界のためであつた。それはエデンで人に知らされ、十戒の中の他の戒めと同じに、不滅の義務である。この第四条が一部となっている律法について、キリストは、「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはな」と宣言しておられる(マタイ五ノ一八)。天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄えるときに、神の聖なる休日、天下のすべての者によってあがめられるのである。安息日ごとに、輝く新天地の住民は「わが前に来て礼拝する」と主は言われる(イザヤ書六六ノ二三)。

ユダヤ人に与えられた制度の中で彼らを周囲の国民から区別するのに安息日ほど役立ったものはなかった。神は、安息日を守ることが神の礼拝者である証拠となるように計画された。それは、彼らが偶像礼拝から離れ、真の神とつながっていることの証拠となるのであった。しかし安息日を聖とするためには、人は自ら聖でなければならぬ。信仰によって彼らはキリストの義にあずかる者とならねばならない。「安息日を覚えて、これを聖とせよ」との命令がイスラエルに与えられたとき、主はまた彼らに、「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならねばならない」と言われた(出エジプト記二〇ノ八、二二ノ三二)。このようにしてのみ、安息日は、イスラエルを神の礼拝者として区別することができた。

ユダヤ人が神から離れ、信仰によってキリストの義を自分の義としなかったとき、安息日は彼らにとって、その意義が失われた。サタンは自分自身を高め、人々をキリストからひき離そうとつとめていた。そして彼は、安息日がキリストの力のしるしなので、これをゆがめるために働いた。ユダヤ人の指導者たちは、神の休みの日をやっかいな規則づくめにすることによって、サタンの意図を達成した。キリストの時代に、安息日はまったくゆがめられていたので、安息日を守ることは、愛に富まれる天父のご品性よりはむしろ利己的でわがままな人間の品性を反映していた。ラビたちは、神が、人の守ることのできない律法をお与えになっていると事実上言っているのも同然だった。彼らは、人々に、神を暴君としてみさせ、神のご要求通りに安息日を守るときに、人は無情になり残酷になると考えさせた。このような誤った観念をとり去ることがキリストの働きであった。ラビたちは冷酷な敵意をいだいてキリストについてまわったが、キリストは彼らの規則に一致しようとする様子さえお見せ

にならないで、神の律法に従って安息日を守りながらまっすぐ進まれた。

ある安息日に、救い主は、弟子たちと礼拝の場所から帰りながら、みのった麦畑を通りかかられた。イエスが遅い時間まで働きをつづけられたので、弟子たちは、畑を通りながら麦の穂をつみ、手でもんで、中の穀粒を食べ始めた。ほかの日だったら、この行為について人から何も言われることはなかった。麦畑や果樹園やぶどう園などを通りすぎる人は、食べたいものを自由にとってもよかったからである(申命記二三ノ二四、二五参照)。しかし安息日にそうすることは、安息日をけがす行為とみられた。麦をつむことが一種の収穫であるばかりでなく、それを手でもむことも一種の脱穀であった。こうして、ラビたちの意見によれば、二重の罪となるのであった。

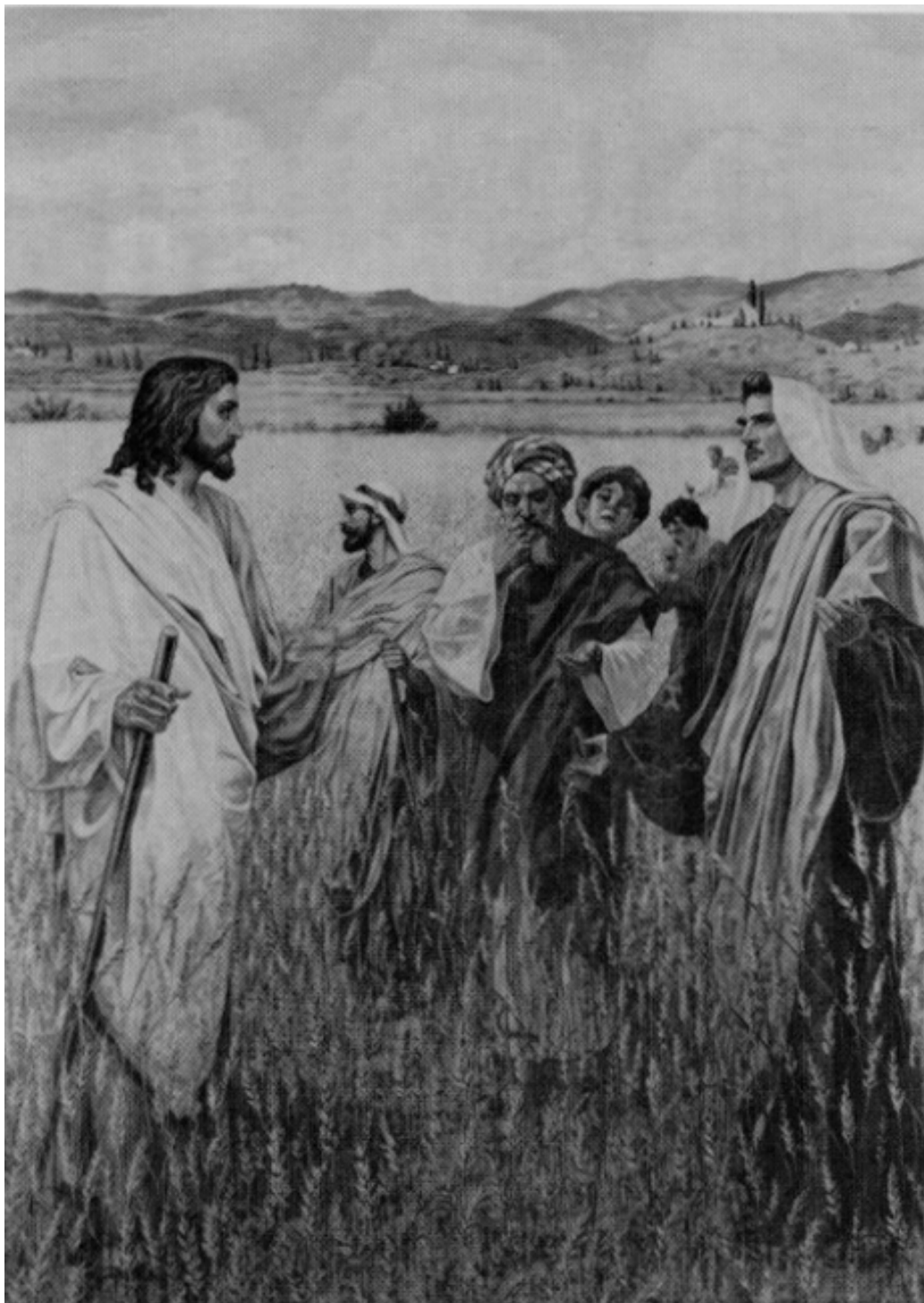
スパイどもはすべイエスに、「ごらんなさい、あなたの弟子たちが、安息日にはならないことをしています」と文句を言った(マタイ一ノ二)。

イエスは、ベテスダで、安息日を犯されたとの非難を受けられたとき、ご自分が神のみ子であることを主張され、ご自分が天父と一致して働いておられることを宣言して、ご自分を弁護された。いま弟子たちが攻撃されたので、イエスは、旧約聖書から神の奉仕にたずさわっている人たちによって安息日になされた行為を例として引用し、それを非難者たちにお示しになる。

ユダヤの教師たちは、彼らの聖書の知識について誇っていたが、救い主の答えには、彼らが聖書を知らないことについて、暗黙の譴責があつた。イエスは言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。すなわち、神の家にはいつて、祭司たちのほかだれ

も食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、また供の者たちにも与えたではないか。」「また彼らに言われた、『安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである』。」「また、安息日に宮仕えをしている祭司たちは安息日を破っても罪にはならないことを、律法で読んだことがないのか。あなたがたに言っておく。宮よりも大いなる者がここにいる」(ルカ六ノ三、四、マルコ二ノ二七、二八、マタイ一二ノ五、六)。

ダビデが、聖なる用にとっておかれたパンを食べて空腹を満たしたことが正しかったならば、弟子たちが安息日の聖なる時間に麦をつんで、彼らの必要を満たしたことは正しかった。また宮の祭司たちは、安息日にはほかの日よりも大きな働きをした。世俗の働きを同じようにすれば罪となるのであるが、祭司の働きは神の奉仕であった。彼らはキリストのあがないの力をさし示す儀式を行っているのであって、その働きは安息日の目的と一致していた。しかしいま、キリストご自身がおいでになっていた。弟子たちは、キリストの働きをすることによって、神の奉仕にたずさわっていた。そしてこの働きを遂行するのに必要なことを安息日に行うことは正しかった。キリストは、弟子たちにも敵にも、神の奉仕が何よりも第一であることを教えようとお思いになった。この世における神の働きの目的は、人のあがないである。したがって、この働きをなしとげるために安息日にしなければならないことは、安息日の律法と一致している。イエスは次にご自分の議論のしめくりとして、ご自身のことを、「安息日の主である」——すなわちご自分があらゆる問題、あらゆる律法を超越するおかたであることを宣言された。この無限の審判者であられるおかたは、弟子たちが犯しているといつて非難されたその戒めに照して、



安息日に、イエスが弟子たちと麦畑を通りかかれた時、弟子たちが麦の穂を手でもんで食べた。弟子たちは安息日を破ったと言って非難された。

彼らの非難が不当であることを宣言された。

イエスは反对者たちに譴責を加えただけでこの問題をすまされなかった。イエスは、彼らが盲目になっているために、安息日の目的を誤解しているのだと宣言された。『わたしが好きなのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者とがめなかったであろう」と主は言われた(マタイ二一ノ七)。彼らの熱意のない多くの儀式は、神の真の礼拝者たちの特徴であるまごころとやさしい愛に欠けているところを埋め合わせることができなかった。

ふたたびイエスは、いけにえそのものには何の価値もないという事実をくりかえされた。それは手段であって目的ではない。その目的は人を救い主にみちびくことで、そうすることによって人を神と一致させるのである。

神がとうとばれるのは愛の奉仕である。これが欠けているときに、単なる儀式のくりかえしは、神にとって不快なものとなる。安息日も同じである。安息日は人を神とまじわらせるために計画された。しかしあきあきするような儀式に人の心が奪われたとき、安息日の目的はさまたげられた。単にうわべだけの安息日遵守は徒勞であった。

またほかの安息日に、イエスは会堂におはいりになって、そこに手のなえた男をもらんになった。パリサイ人は、イエスがどうされるか熱心に見守っていた。救い主は安息日に人をいやせば律法を破る者とみなされることをよくご存じだったが、安息日のまわりにバリケードを築いていた言い伝えの規則という壁を打破するのにちゅうちよされなかった。イエスは、病気の男に立ちあがるようにお命じになり、それから「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」とおたずねになった(マルコ三ノ四)。善をなす機会が

あるのにそれをしないのは、悪をなすことであるというのが、ユダヤ人の格言であった。いのちを救うことを無視するのは殺すことであった。このようにイエスはラビたちの立場に立って、彼らに應對された。「彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に『手を伸ばしなさい』と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった」(マルコ三ノ四、五)。

イエスは、「安息日に人をいやしても、さしつかえないか」と質問されたとき、「あなたがたのうちに、一匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだら、手をかけて引き上げてやらないだろうか。人は羊よりも、はるかにすぐれているではないか。だから、安息日に良いことをするのは、正しいことである」とお答えになった(マタイ一二ノ一〇—一二)。

スパイたちは自分たちが困難な立場におちいることを恐れて、群衆の前ではあえてキリストに答えなかった。彼らはイエスが事実をお語りになったことがわかっていた。動物の場合にはほおっておくと所有者の損失になるので、彼らはその動物を救おうと思うのであるが、人間の場合には、言い伝えを犯すよりはむしろその人間を苦しめままだにほおっておくのだった。このように、神のみかたちにつくられた人間よりも口のきけない動物に対してずっと深い注意が払われた。このことはすべてのまちがった宗教の働きを例示している。そうした宗教は、神よりも自分を高めたいという人間の欲望から出発しているが、その結果は人間を動物よりも低いところへ墮落させる。神の主権にさからって戦う宗教は、すべて創造のとき人のものであった栄光、またキリストを通して人に回復される栄光を、人間からだましとるのである。まちがった宗教は人間の貧困、苦難、権利などを気にかけな

いようにと信者に教える。福音は、キリストの血によって買われた者として人間を高く評価し、人間の必要と苦悩をやさしくかえりみるようにと教える。主は「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりもとうとくする」と言われる(イザヤ書一三ノ二・英語訳)。

安息日に善をなすのと悪をなすのと、またいのちを救うのと殺すのと、どちらが律法にかなっているかという質問で、イエスがパリサイ人に迫られたとき、彼はパリサイ人を彼ら自身の邪悪な目的に直面させられた。彼らは、激しい憎しみをもって、イエスのいのちをねらっていたが、イエスはいのちを救い、民衆に幸福をもたらしてあられた。キリストがされたように、苦しんでいる者を安息日にいやすよりは、彼らが計画していたように安息日に殺す方がよかつただろうか。神の聖なる日にすべての人に対する愛を心にもち、その愛があわれみの行為となつてあらわれるよりは、心の中で殺人をする方が正しかつただろうか。

イエスは手のなえた人をいやすことによつて、ユダヤ人の慣習を責め、第四条の戒めを、神がお与えになったままの立場におかれた。「安息日に良いことをするのは、正しいことである」とイエスは宣言された(マタイ二ノ一二)。イエスについて文句をいっている人々が神の聖日をけかしていたときに、イエスは、ユダヤ人の無意味な制限を一掃することによつて、安息日をとうとばれた。

キリストは律法を廃されたと主張する人々は、キリストが安息日を破り、また弟子たちが同じことをしてもこれを正しいとされたと教える。このようにして彼らは、あらさがしをしたユダヤ人と事実上同じ立場をとっている。この点において彼らは、「わたしがわたしの父のいましめを守つたので、その愛のうちにいる」と宣言され

たキリストご自身のあかしと矛盾している(ヨハネ一五ノ一〇)。救い主も弟子たちも安息日の律法を破られたのではなかった。キリストは律法の生きた代表者であられた。キリストは一生の間律法の聖なる戒めを一つも破れなかった。あかしの国民でありながら、イエスを罪に定める機会をねらっていた彼らをごらんになって、イエスは、「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか」と言われたが、これに挑戦できる者はいなかった(ヨハネ八ノ四六)。

救い主は、父祖たちと預言者たちの語ったことを廃するためにおいになったのではなかった。なぜなら、これらの代表者たちを通してお語りになったのは、キリストご自身であつたからである。神のみことばのすべての真理は、キリストから与えられた。しかしこのようなはかり知ることのできない価値をもった宝石が、まちがった台にはめられていた。そのとうとい光は、誤謬に奉仕させられていた。神はそれらの宝石が誤謬という台からとりはずされて、真理のわくにはめなおされるように望まれた。この働きをなしとげることができるのは、神のみ手だけだった。真理は誤謬とむすびつくことによって、神と人との敵の働きに役立っていた。キリストは真理を、神の栄えをあらわし、人類の救いに役立つような位置におくためにおいになったのだった。

「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」とイエスは言われた。神がお定めになった制度は人類のためである。「すべてのことは、あなたがたの益」である。「パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、現在のもものも、将来のもものも、ことごとく、あなたがたのものである。そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである」(コリント第二・四ノ一五、コリント第一・三ノ二二、二三)。神

は安息日の戒めがその一部となっている十戒の律法を祝福として民にお与えになった。「そして主はこのすべての定めを行えと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われわれが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわれを守って命を保たせるためである」とモーセは言った(申命記六ノ二四)。また詩篇記者を通してイスラエルに次のようなメッセージが与えられた。「喜びをもって主に仕えよ。歌いつつ、そのみ前にきたれ。主こそ神であることを知れ。われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。われらはその民、その牧の羊である。感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入れ。主に感謝し、そのみ名をほめまつれ」(詩篇一〇〇ノ二―四)。「安息日を守って、これを汚さ」ないすべての人について、主は、「わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる」と宣言しておられる(イザヤ書五六ノ六、七)。

「それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」(マルコ二ノ二八)。このことばは教えと慰めとに満ちている。安息日は人のためにつくられたのだから、それは主の日である。それはキリストのものである。なぜなら「すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」からである(ヨハネ一ノ二三)。キリストは万物をおつくりになったのだから、キリストが安息日をつくられた。キリストによって、安息日は創造のみわざの記念として聖別された。安息日は、キリストを創造主またきよめるおかたとしてさし示す。安息日は、天地の万物をおつくりになって、すべてのものを保っておられるキリストが、教会の首長であられるということ、またキリストの力によってわれわれは神と和解させられるということを宣言

している。なぜならキリストは、イスラエルについて語って、「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである」と言われたからである(エゼキエル書二〇ノ一二)。だから安息日は、われわれを聖としてくださるキリストの力のしるしである。そしてそれは、キリストが聖とされるすべての人に与えられているのである。キリストのきよめの力のしるしとして、安息日は、キリストを通して神のイスラエルの一部となるすべての人に与えられているのである。

主はまたこう言われる、「もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ」るならば、「その時あなたは主によって喜びを得」る(イザヤ書五八ノ一三、一四)。安息日をキリストの創造とあがないの力のしるしとして受け入れるすべての人にとって、この日は楽しみとなる。彼らはその中にキリストをみだし、キリストのうちにあつてよろこぶ。安息日は創造のみわざをあがないにおけるキリストの大いなる力の証拠として彼らにさし示す。それはエデンの失われた平和を心に呼びもどすとともに、救い主を通して回復された平和を告げている。こうして自然界の事物の一つ一つは、「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」とのキリストの招きをくりかえしている(マタイ一ノ二八)。

第 30 章

十二弟子の任命

本章はマルコ三ノ一三―一九、ルカ六ノ二一―二六にもとづく

「さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで十二人をあ立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわ」すためであつた(マルコ三ノ一三、一四)。

使徒としての務めに十二人が召され、山上の垂訓が与えられたのは、ガリラヤの海から少し離れた山の中腹の木蔭においてであつた。野原や山は、イエスが好んで行かれた場所で、イエスの教えの多くは、宮や会堂の中よりもむしろ青空の下でなされた。イエスについてくる群衆を収容しきれぬ会堂はなかつた。イエスが野や森で教える方がよいとお思ひになった理由は、それだけではなかつた。イエスは自然の景色が好きだつた。静かなひっこんだ場所は、みなイエスにとって聖なる宮であつた。

地上の最初の住民が彼らの聖所としてえらんだのはエデンの木の下であつた。そこでキリストは、人類の父祖とまじわられた。楽園から追放された時も、アダムとエバは、やはり野や森の中で礼拝し、キリストは、そこで、

彼らに恵みの福音をもってお会いになった。マムレのかしの木の下で、アブラハムと語られたのは、キリストであつた。キリストはまた、夕暮れに野で祈るために出てきたイサクと語り、ベテルの丘でヤコブと語り、ミデアンの山でモーセと語り、羊の群れの番をしていた少年ダビデと語られた。十五世紀にわたって、ヘブル人が毎年一週間家を離れ、「美しい木……なつめやしの枝と、茂つた木の枝と、谷のはこやなぎの枝」などの緑の小枝でつくられた仮小屋に住んだのは、キリストのさしずによつてであつた(レビ記二三ノ四〇)。

弟子たちを訓練するにあたって、イエスは都会の混雑から離れて、ご自分が彼らに教えようと望んでおられる克己の教訓にもっとよく調和している静かな野と丘をおえらびになつた。またイエスは、その公生涯の間、青空の下のごか草の茂つた山腹や、湖の岸边に人々を集めるのが好きだつた。ここでイエスは、ご自分の創造のみわざにかこまれて、聴衆の思いを人工的なものから自然界の事物へ向けることがおできになつた。自然界の事物の成長と発展の中に、キリストのみ国の原則があらわされていた。人々が目をあげて神の山を見、神の手の不思議なみわざをながめるときに、彼らは、神の真理についてとうとい教訓を学ぶことができた。キリストの教えは、自然界の事物を通して、彼らにくりかえされるのであつた。心の中にキリストを宿して野に行く人はみな、これと同じ経験をするのである。彼らは、自分たちが聖なる感化にかこまれているのを感じる。自然界の事物は、われらの主の譬をとりあげ、また主の勧告をくりかえしている。自然界の中で神とまじわるることによつて、人はその思いが高められ、心が休まるのである。

キリストがこの世を去られた後に、地上におけるキリストの代表者となる教会を組織するのに、いまその第一

歩がふみ出されるのであった。弟子たちはぜいたくな聖所を自由に使うことはできなかったが、救い主は、彼らをご自分の好きなくれ場へつれて行かれたので、その日の経験は、彼らの心の中で山や谷や海の美しさと永遠にむすびついた。

イエスは、弟子たちを証人としてつかわし、イエスについて見聞きしたことを世にのべたえさせるために、彼らを召されたのであった。彼らの任務は、人類がこれまでに受けた任務の中で最も重要なものであって、ただキリストご自身の任務に次ぐものであった。彼らは、世の救いのために神と共に働く者となるのであった。旧約聖書の中で、十二人の父祖たちがイスラエルの代表者となっているように、十二人の使徒たちは、福音教会の代表者となるのであった。

救い主は、ご自分が選ばれた人々の性格をご存じだった。彼らの弱点やまちがいはみな、イエスにはつきりわかっていて。イエスは、彼らが経験しなければならない危険や、彼らの上に負わされる責任を知ってあられた。だからイエスのお心は、この選ばれた人々の上にそがれていた。ガリラヤの海に近い山の上で、イエスはただひとり、一晩じゅう彼らのためにお祈りになったのに、弟子たちは、山のふもとで眠っていた。夜明けの光がさしてくると、イエスは、彼らを呼んでこちらにくるようにと招かれた。彼らに伝えなければならない何か重大なことがあったからである。

これらの弟子たちは、ある期間イエスといっしょに活動的な働きにたずさわった。ヨハネとヤコブ、アンデレとペテロは、ピリポ、ナタナエル、マタイといっしょに、ほかのだれよりも親しく、イエスとまじわり、イエス

の奇跡を、だれよりも多く目に見てきた。中でもペテロとヤコブとヨハネは、一層イエスと親しい関係にあった。彼らは、ほとんどたえまなくイエスといっしょにいて、その奇跡を見、そのみことばを聞いてきた。特にヨハネは、イエスと親しかったので、イエスから愛される者として目立っている。救い主は、彼らをみな愛されたが、ヨハネが最も感受性の強い心を持っていた。彼はほかの人たちよりも年が若く、ほかのだれよりも子供のようにつつみかくしのない信頼をもって、イエスに心を開いた。このようにヨハネは、イエスに対してだれよりも心をよせていたので、彼を通して、救い主の最も深い霊的な教えが、イエスの民に伝えられた。

使徒たちが分けられているグループの一つの最初に、ピリポの名前がある。彼は、イエスが「わたしについてきなさい」とはつきり命令をお与えになった最初の弟子であった。ピリポは、アンデレとペテロの町であるベテスタの出身だった。彼は、バプテスマのヨハネの教えを聞き、ヨハネがキリストを神の小羊として宣言するのを聞いた。ピリポは真理のまじめな探求者だったが、心に信じるのが遅かった。彼はキリストに加わったが、彼がナタナエルにキリストのことを知らせたことには、イエスの神性について完全な確信をもっていなかったことがあらわれている。キリストは、天からの声によって神のみ子として宣言されたのであったが、ピリポにとっては、彼は「ヨセフの子、ナザレのイエス」であった(ヨハネ一ノ四五)。また五千人に食物が与えられたとき、ピリポの信仰の足りなさがあらわれた。イエスが、「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか」とおたずねになったのは、ピリポをためすためであった。ピリポの答えは不信に傾き、彼は、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りませんまい」と言った(ヨハネ六ノ五、七)。イエスは悲しまれた。

ピリポは、イエスのみわざを見、イエスの力を感じていたにもかかわらず、彼は信仰がなかった。ギリシャ人が、イエスについてピリポにたずねたときにも、彼は、救い主を彼らに紹介する機会をとらえずに、アンデレに行つて告げた(ヨハネ一十二二〇―二二参照)。またキリストの十字架を前にした最後の時にも、ピリポのことは、信仰をくじくようなことばであつた。トマスガイエスに、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」と言つたとき、救い主は「わたしは道であり、真理であり、命である。……もしあなたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知つたであらう」とお答えになつた。するとピリポの口から、「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下さいれば、わたしたちは満足します」とこの不信の答が出た(ヨハネ一四ノ五―八)。三年間イエスといっしょにいたこの弟子は、このように心がにぶく、信仰が弱かつた。

ピリポの不信にくらべてよろこばしいのは、ナタナエルの子供のような信頼であつた。彼は非常に熱心な性質の男で、目に見えない実体を信仰によつてとらえていた。しかしピリポは、キリストの学校の生徒だったので、天来の教師イエスは、彼の不信と愚かさを忍耐強く忍ばれた。聖霊が弟子たちの上にそそがれたとき、ピリポは、天の命令に従つて教師となつた。彼は、自分が何について語っているかを知っていて、確信をもつて教えたので聴衆を心服させた。

イエスが弟子たちを按手礼のために準備しておられたとき、召されていないのに仲間に加わりたいと強要した者があつた。それはイスカリオテのユダという男で、自らキリストの弟子と名乗つていた。いま彼はやってきて、

弟子たちの仲間に入れてもらいたいとたのんだ。彼は非常な熱心さと、見たところ真実な様子で、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従ってまいります」と断言した。イエスは彼をことわることも歓迎することなさらず、「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」と悲しいことを言われただけだった(マタイ八ノ一九、二〇)。ユダは、イエスがメシヤであると信じた。そして使徒たちに加わることによって、新しい王国の高い地位を占めようと望んだ。イエスは、ご自分の貧しさを語ることによって、この望みをたち切ろうと考えられた。

弟子たちは、ぜひユダに仲間の一人になってももらいたいと望んだ。ユダは、堂々たる外見をそなえ、鋭い洞察力と実行力を持った男だったので、弟子たちは、イエスの働きに大きな助けになる人物として、彼をイエスに推薦した。彼らは、イエスがこんなに冷淡にユダに対応されるのを見て驚いた。

弟子たちは、イエスがイスラエルの指導者たちの協力を求めようとされないのも、非常に失望していた。こうした有力な人たちの支持を得て、キリストの働きを強化しようとしないうちはまちがっていると、彼らは思った。もしイエスがユダを拒絶されたら、弟子たちは、心の中で、主の知恵を疑ったことだろう。その後のユダの経歴は、神の働きに適する人物かどうかを決定するのに世俗的な考慮を重ねることが、危険であることを弟子たちに示すことになった。弟子たちが熱心に望んだような人々に協力してもらうことは、その働きを最悪の敵の手に売り渡すことになったであろう。

しかしユダは、弟子たちに加わったとき、キリストの品性の美しさに気がつかなかったわけではなかった。彼

は、魂を救い主にひきよせている神の力の感化力を感じた。「いためられた輩を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともない」ためにおいでになったイエスは、たった一つの思いでも光に向けられている間は、この魂を拒絶しようとされなかった(マタイ一ノ二〇)。救い主はユダの心をお読みになり、ユダが神の恵みによって救われなければ不義の深みに沈んでしまうことをご存じだった。この男をご自分に結びつけることによって、イエスは、ご自身のわきあふれる無我の愛に日々ふれることができるところに彼を置かれた。もしユダが心をキリストに向かって開くなら、神の恵みは利己主義という悪鬼を追い出し、たとえユダでも神のみ国の住民となるかもしれない。

もし人々が訓練され、神について学ぶなら、神は彼らを人間的な要素のある品性のままに受け入れて、神の用のために彼らを養成される。彼らは完全な人間だから選ばれるのではなくて、不完全な人間であるにもかかわらず、真理を知りこれを実行することにより、またキリストの恵みによって、神のみかたちに変えられる者となるために選ばれるのである。

ユダは、ほかの弟子たちと同じように機会があった。彼は、同じとうい教訓を聞いた。しかしキリストが要求された真理の実行は、ユダの心の思いや目的とくいちがっていたので、彼は、神からの知恵をつけるために、自分の考えを放棄しようとしなかった。

救い主は、ご自分を売り渡す者となるこの男を、どんなにやさしくとり扱われたことだろう。イエスは、ご自分の教えを通して、貪欲な心を根絶する慈善の原則についてこんこんとさとされた。イエスは、ユダの前に貪欲

という憎むべき性格をお示しになった。この弟子は自分の性格が描写され、自分の罪が指摘されているのを幾度もみとめたが、自分の不義を告白してこれを捨てようとしなかった。彼は自分に満足していたので、誘惑に抵抗しないで、その不正な行為をつづけた。キリストは、彼の目の前にあって生きた模範となり、もし彼が天来の仲保と奉仕による益を受けるなら、どんな者になり得るかをお示しになったが、どの教訓もどの教訓もユダの耳には無関心に聞き流された。

イエスは、ユダの貪欲を鋭いことばで譴責されないで、開かれた本を読むようにユダの心を読んでおられる証拠を示されたときでも、天来の忍耐力をもって、このあやまちを犯している男を忍ばれた。イエスは、彼の前に正しい行為の最高の動機をお示しになった。ユダが天の神の光をしりぞけるなら、彼はもはや弁解の余地がないのである。

ユダは、光の中を歩まないで、自分の欠点を持ちつづけることをえらんだ。悪い欲望、復讐の熱情、暗いきげんな思いが宿り、ついにはサタンがこの男を全面的に支配した。ユダはキリストの敵の代表者となった。

ユダがイエスとまじわるようになったとき、彼のうちには、教会にとって祝福となることのできたかもしれないというとい品性の特徴がいくつかあった。もし彼が喜んでキリストのくびきを負っていたら、使徒たちの中の主だった者となったかも知れなかった。だが彼は、自分の欠点が指摘されると、心をかたくなにし、高慢心と反抗心のままに、自分自身の利己的な野望をえらび、神が彼にさせようと望まれた働きにふさわしくない者となった。イエスが弟子たちをご自分の奉仕に召されたとき、彼らは全部ひどい欠点を持っていた。柔和で心のへりくだ

ったおかたと最も親密にまじわったヨハネでさえ、生れつき柔和で従順な人間ではなかった。彼とその兄弟は、「雷の子」と呼ばれた。彼らがイエスといっしょにいた時に、イエスに対してだれかが軽蔑でも示そうものなら、彼らは憤慨してけんか腰になるのだった。短気、復讐心、批判の精神といったものがすべてこの愛された弟子のうちにあつた。彼は高慢で、神の国では第一位の者になりたいという野心をもっていた。しかし一日一日、自身自身の激しい気性と対照的に、彼は、イエスの柔和と寛容とを見、謙遜と忍耐についてイエスの教訓を聞いた。彼は天来の感化に向かつて心を開き、救い主のみことばをきく者となるばかりでなく、これを行つ者となつた。自我はキリストのうちにかくれた。彼はキリストのくびきを負い、キリストの重荷を負うことを学んだ。

イエスは弟子たちをしかり、彼らに警告し、また注意された。しかしヨハネとその兄弟たちは、イエスから離れなかつた。彼らは、しかられたにもかかわらず、イエスをえらんだ。救い主は、彼らに欠点とまちがいがあるからといって、彼らから離れるようなことをなさらなかつた。彼らは、終りまでイエスと試練を共にし、イエスの生活から教訓を学んだ。キリストを見ることによって、彼らの品性が一変した。

使徒たちは習慣も気質もまったくちがっていた。取税人のレビ・マタイと、ローマの権威を徹底的に憎んでいた激しい熱心党のシモンがいたし、気前がよくて直情的なペテロと、卑劣な精神の持ち主ユダがいたし、まごころはあるが内気で心配性のトマスと、心の動きがにぶくて疑い深いピリポ、また野心的で率直なゼベダイの子たちとその兄弟たちとともにいた。この人たちは、いろいろな欠点と、みな先天的後天的な悪への傾向を持ったまま集められた。しかしキリストのうちにあって、またキリストを通して、彼らは、神の家族のうちに住み、信仰

において、教理において、精神において一つとなることを学ぶのであった。彼らは、試練も、苦情も、意見の相違もあつたが、しかしキリストが彼らの心に住んでおられるかぎり、不和があるはずはなかった。キリストの愛がお互の愛となり、主の教訓がすべての不和を一致へみちびき、弟子たちは一体となって、ついには一つの心、一つの意見となるのであった。キリストが大中心であり、彼らはその中心に近づくにしたがつて、お互に接近するのであった。

イエスは、弟子たちへの教えを終えられたとき、この小さな一団をまわりに集めて、その中心にひざまずき、ご自分の手を彼らの頭の上におき、彼らを聖なる働きにささげる祈りをささげられた。こうして、主の弟子たちは、福音の働きに任命された。

人々の中にあつてキリストを代表する者として、キリストは、全然墮落したことはない天使たちをおえらびにならず、救おうとする相手の人間と同じ情を持った人間をおえらびになる。キリストは、人性に触れるためにご自分も人性をおとりになった。神性は人性を必要とした。なぜなら、救いを世に伝えるためには、神と人間とが必要だったからである。人性が神と人との間の伝達のチャネルとなるように、神性は人性を必要とした。キリストのしもべたちと使者たちも同様である。人は、自分のうちに神のみかたちを回復し、神の働きをなすことができるようになるためには、自分以外のそして自分以上の力が必要である。だからといって、人間の力が不要だということにはならない。人性は神の力をとらえ、信仰によって、キリストが心のうちにお住みになる。こうして神との協力によって、人の力は善をなすのに効果的となる。

ガリラヤの漁師をお召しになったイエスは、いまもなお人々をご自分の奉仕に召しておられる。しかもイエスは、最初の弟子たちを通して力をあらわされたのと同じに、われわれを通してよろこんで力をあらわされる。われわれがどんなに不完全で罪深い者であらうと、主はわれわれに、キリストとの共同者、キリストに見習う者となるようにとの招きを提供しておられる。キリストと一つになって神のみわざに働くことができるように、神の教えを受けなさいと、主はわれわれを招いておられる。

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことがあらわれるためである」(コリント第二・四ノ七)。福音の宣伝が、天使にまかされないで、あやまちな多い人間にまかされた理由はここにある。人間の弱さを通して働く力は神の力であることが明らかである。こうしてわれわれは、われわれと同じように弱いほかの人を助けることのできる力が、われわれを助けることができるということを信じなくなる。自分自身「弱さを身に負っている」者は、「無知な迷っている人々を、思いやることができる」(ヘブル五ノ二)。自分自身が危険の中にあつたために、彼らは道中の危険と困難をよく知っており、そのために彼らは、同じような危険のうちにあるほかの人々に手をさしのべるために召されているのである。疑いに悩み、弱さに苦しみ、信仰弱く、目に見えない神をとらえることのできない魂がいる。しかし彼らの目に見える友人がキリストの代りに彼らのところにやってきて、彼らのふるえている信仰をキリストに固くつなぐ環とすることができる。

われわれは、キリストを世に紹介するのに、天使たちと共に働く者となるのである。ほとんどじっとしてい

れないような熱心さで、天使たちは、われわれの協力を待っている。なぜなら人間が、人間と通信するチャンネルとならねばならないからである。だからわれわれが全心全霊をもってキリストに献身するときに、天使たちは、神の愛をあらわすのにわれわれの声を通して語ることができることをよろこぶのである。

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)**
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

N D C 194/398P/22cm

転載複製を禁ず

1977年8月1日 発行

著者	エレン・G・ホワイト
訳者	左近 充 公
発行者	岡 藤 米 蔵
印刷所	福 音 社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発 行 所 福 音 社

電話 (045) 921-1414 振替横浜 599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発 売 所 三 育 協 会

電話 (045) 921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN

☆ご愛読下さいましてありがとうございます。当社出版物は直販制
です。書店には出しておりません。お問合せ、ご用命、出版目
録のご請求等は、直接発売所へお申し越し頂きたく存じます。